明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
明治四十年四月五日發行
毎月一回五日發行

女學世界

第七巻
第五號



博文館發行


四月一日より
第十三回新柄陳列會
寄せ切れ見切り反物大賣出し
懸賞裾模様圖案展覧
營業科目
新柄呉服太物類
歐米流行洋服類
鞄及旅行用具類
舶來小間物化粧品類
帽子洋傘履物類
室內裝飾品類
食堂及び寫眞場の設けも有之候
越
三越呉服店
日本ばし
駿河町

女學世界 第七卷第五號 目次

名譽總裁博恭王妃經子殿下　會長侯爵夫人鍋島榮子

大日本女學會

本會は女學通信教授に從事すること玆に拾參年此度第七回の學期を開きて新に會員を募集す●本會講義錄を女學講義と稱し其學科并に講義囑托講師左の如し

○修身(後閑菊野)○禮法(佐方鎭子)○國文(同人)○作文(今泉定介)○漢文(菊池晩香、杵渕鄰)○歷史(大森文學士)○地理(喜田文學士)○地文(脇水理學士)○數學(藤野了祐)○博物(脇水理學士)○理化(同人)○生理衞生(三宅博士)○家事(後閑菊野)○家庭敎育(三輪田眞佐子)○割烹(石井泰次郎)○裁縫(渡邊辰五郎)○習字(坂正臣)○讀學(武村千佐子)○史傳(下田歌子)其他附錄數欄あり

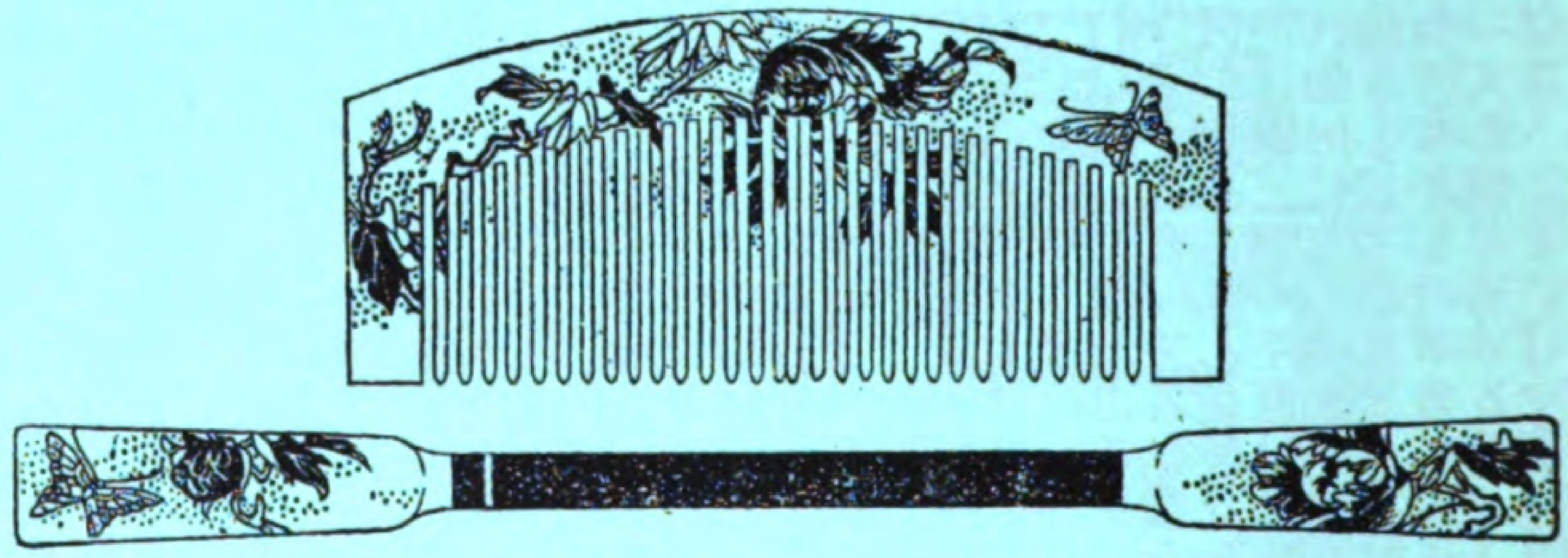
學期終了は貳ケ年にして一個月の紙數約百五十頁以上之に對する會費は僅かに一個月貳拾五錢にて別に入會金を要せず●講義は其文章極めて平易にて總かな附なれば高等小學を卒へざる人々にても講習することを得べし高等女學校に入學し難き事情ある女子達は此書の配布を受けて女の道を辨へられよ●詳細なる會則希望の向はハガキにて申込あれば直に進呈すべし(尚此外に高等科もあり入學を許す)

新學期開始會員募集

東京市麹町區下二番町三七　大日本女學會(電話番町一三三〇)

東京市南傳馬町　大西白牡丹　電話本局三十番

美術蒔繪櫛笄



春の姿の御髪かざりにふさはしき櫛笄の新しき蒔繪の種類は御若向にて新橋形へ牡丹の彫刻、丁貝入の蝶づくし、金銀象嵌の吉野立田、など各々名匠の丹誠に成りて品格の宜しきもの一組の正價

甲貳拾五圓　乙貳拾圓
丙拾　五圓　丁拾　圓

御じみ向は都形へ平目地の研出しまき繪又は金地へ小模樣の彫刻など奥床しきもの一組の正價

甲拾五圓　乙拾貳圓
丙八　圓　丁六　圓

紀念帶留



東京博覧會の紀念として賣出したる新製の帶留は圖の如く金色の櫻へ鹽瀬の紐を附けたる優美なるものにて價は高からずとも其製作に品位あり

正價六拾五錢

此外紀念品各種　出來

女(いの二)

醫學士 佐々木多聞著 ●定價四拾錢▲郵稅六錢

新刊 **新化粧**

歐米化粧術の粹を參酌し日本古來の化粧を折衷し拾四章に別ちて最も進歩せる化粧を說く通俗文章趣味ある研究美術的化粧を欲する者は此書を讀め化粧臺の飾本として必ず一冊を備へよ世にありふれたる俗悪淺薄なる化粧書と同視する勿れ

醫學士 佐藤得齋著 ●定價五拾錢▲郵稅六錢

新刊 **美的衛生**

著者一種の詩眼ありて有ゆる天然人事の美を捉へ、專門の衛生學に配合調和し、熟錬十二分、極めて美的なる衛生の新方則を唱導せり、一面より見れば、美的衛生は人間の生活を美的ならしめんと試みたるもの一種の美的生活論也、論旨の美、文章の美相俟つて、之を醫學界の珍とすべく、又文壇の奇とすべし

景山英子女史著 ●定價參拾五錢▲郵稅六錢

好評 **妾の半生涯**

大井憲太郎等と共に有名なる大阪事件に與せし女傑景山英子は即ち本書の著者也彼女の幼少が郷里の才媛として如何に學高かりしか彼女如何にして大阪國事犯に與せしか在獄三年の生涯は如何なりしか如何にして情人と離れ如何にして良人を得たるか更に夫婦として赤貧なる慈母として悲哀なる寡婦として多恨なる彼女の生活は如何なりしか本書は實に其典折波瀾錯節纏綿せる一篇の大悲劇を描ける也

發行元 東京本郷區千駄木林町 **日高有倫堂**

賣捌 東京堂、前川、北隆館、至誠堂、大阪寶文館、筑後菊竹



袴地見本にて製作せる兒島高德の像博覽會第三號館に出品しあり御一覽を乞ふ

袴乃親玉

卸 (み) 部

東京日本橋長谷川町 **美濃磯本店** (電話浪花二八五九番)

本郷五丁目 美濃磯支店(電話下谷一四一五番)
淺草區諏訪町 美濃磯支店
日本橋佐内町 美濃磯支店
深川區高橋際 美濃磯支店
神田區小川町 美濃磯支店
芝區新櫻田町 小田商店
牛込區神樂坂 伊澤商店
四谷傳馬町一丁目 伊澤支店

女(いの二)

此日進月歩の競走場裡に一日早く新智識を得たる者は一日の勝利を得たる者なり

松岡農相題字
大隈伯爵序文
臺灣總督府事務官
圖師庄一郎君著

賜天覽

家

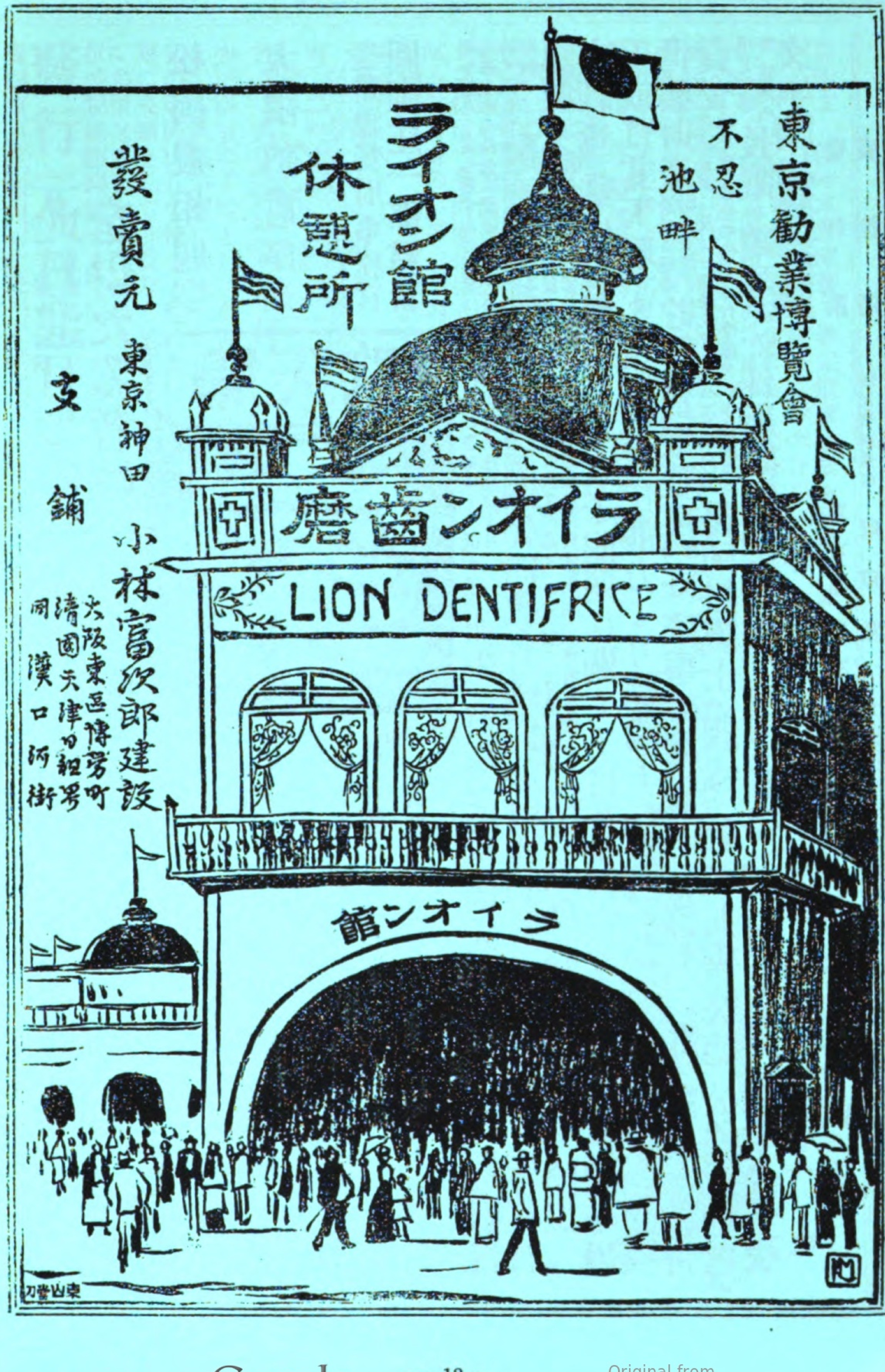
第三版

上製　定價壹圓五拾錢
並製　同　壹圓貳拾錢
郵税　八錢　新領土　拾四錢
（實價ハ貨幣ノ如ク何地ニテ購求セラルヽモ低減セス）
五部以上本社　申込に限り　税不要前金御送付ナキ分ハ引換小包ニテ送本す
爲替は本社申込は谷中三崎町郵便局振込の事

家を重んし家を愛するの慣習は吾建國以來の國風にして武士道の淵源も全く此重家愛家の慣習に胚胎せり本書は此見解より（一）**祖先、墳墓、宗教、儀式**を說きて一家の由來、信仰、崇遠の觀念を喚ひ（二）家長、配偶者、尊卑親屬婢僕の責任本分を說きて一家の**要素**を**純潔**ならしめ**親族關係同族會議、同族財產制**に其一族枝葉の連結を計り（三）**家憲、家政、豫算收支**に據るへき典範準則を示し（四）**一家道德**に於ては品性、忠實、慰安、修養の根本思想は勿論元氣、細心、謙儉、勞働等**致富立身**の秘訣より嗜好娛樂の改善に及ひ以て**大國民**の將來**方針**を說き**殊に近年喧しき女子問題に關しては著者は燃るか如き熱精を以て或は其天職より或は責任能力より痛論し**（五）日誌、年中行事、家事記錄、書翰、衞生、災害豫防、食事、服裝には實驗典例より保身整家の要道を擧け（六）**世襲財產**及ひ各種の財產管理、**貯蓄、負債整理**等の問題には**家事經濟**の**眞髓**を發揮して一々明細の表を挿み（七）**教育**子弟教育は一家繼嗣の必要より**資金**の積立表に及ひ一切餘すなく（八）官職公職、準公職、其他の營業には準據すへき法則より**醫師辯護士**の時弊に及ひ（九）進んで**社交、慈善、公德、公共設備**に入りて現下の積弊、富豪の**長眠**を**鐘醒**し（一〇）**住所**は居間、書齋、庭園、運動場の趣味より便所塵所の設備迄を切論し（一一）**圖書**は讀書の嗜好より其整理に及ひ（一二）富豪の遺產處分には**破天荒の快文字**を埋め趣味、津々全篇何れも警世の金言なり

發行所　東京谷中本村　**經營社**
賣捌所　神田表神保町　東京堂　大賣捌所　神田一つ橋通　有斐閣

女（いの三）



東京勧業博覧會
不忍池畔
ライオン館
休憩所
ライオン齒磨
LION DENTIFRICE
ライオン館
發賣元 東京神田 小林富次郎建設
支舖
大阪東區博労町
清國天津日租界
同漢口河街

女(いの四)

長閑



杉浦朝武筆

實用に適する文字の早く上手になる　通信教授顧問正二位伯爵
東久世通禧君◎何人にても六才以上六十才迄何時にても入會を許します

帝國習字速成學會

◉本會の速成練習帖は農商務省の實用新案特許を得たるものなり
◉疑ふ人は見よ伊藤明瑞は本會速成法六ケ月卒業にて東洋の奇童と稱せられたり
◉廣島市の荻野鐵嶺女史は六歳のとき六ケ月卒業にて關西を漫遊して各地新聞にて神童と稱せられたり、楷行草假名共六ケ月卒業、月謝一ケ月三十錢會員には毎月機關雜誌硯之友一部無代進呈す、寫眞數葉入見本付會則並に雜誌一部とも往復ハガキにて申込次第直に送る

女（ろの二）

▲見よ▽
是迄ありきたりの教へ方とは全く異なつて居るので早く上手になると云ふ證明のため農商務省から實用新案特許の文字を許したのでもお疑ひはありますまいどんな人でも箸さへにぎり得れば上手になれます

東京赤阪中町
帝國習字速成學會

大阪高等醫學校校長兼同病院長醫學博士佐多愛彥序
元大阪高等醫學校病院小兒科醫長心得　長濱宗佶著

增訂再版

小兒養育の心得

全一冊　正價金八十錢　郵税金八錢　郵券代用一割增

初版千部は發行後直に賣切れ久敷缺本の處今般增訂再版發行す紙數は初版に倍し大に內容を改善せり本書は小兒の健康時と疾病時とに於ける育兒上の心得を懇切叮嚀に說明したるものなれば何づれの家庭にも缺くべからざる良書なり

○本書は進物として最も適當なるものなり
○本書は結婚の祝物として最も適當なるものなり
○本書は出產の祝物として最も適當なるものなり

發賣所　東京日本橋通り三丁目　丸善株式會社
大阪東區博勞町四丁目　丸善株式會社支店
◉全國有名書肆販賣

女界世界 此處切取りお送への方へは一割引 切取線

最新 美顔秘法

●皮膚は如何に美しくすべきか●

色の白きは七難かくすと申す位で男女共にはだえの奇麗な程よき者はなし、其はだえを奇麗にするとは平素の食物と衛生に依るはとは云へ彼の歐米人がつやの美はしくしはの少なきは、歐米美顔施術所にて使用する處の騎兵ブリアンチンを、缺くべからざる化粧品として使用しつゝあるに依るものにして、騎兵ブリアンチンが又東洋人種にも適當なるとは其道博士方々の證明其他各位の實驗上明かで有ます、それで騎兵ブリアンチンは色を白くキメを細くする許りでなく、每朝顔を洗ふた後若しくは入浴の後に是を塗ることを怠らないと、冬季になつても顔手足のあれ(ヒビ)(シモヤケ)等に冒さることなく、尙夏季中は(日ヤケ)(アセモ)(ニキビ)(ソバカス)の發生を防ぐのみならず、種々の皮膚病を豫防する効がある、故に老年に至るも小皺のよることなく、其花の如き若き姿を永く保ち得るのであります、御婦人は總て白粉を付る前に騎兵ブリアンチンをぬつて置くと、白粉の付がよくする許りでなく、鉛毒白粉燒等を防ぐ効があるから、化粧上一日も缺く可からざる品にて、交際界の美人と呼ばるゝ婦人は本品より外の化粧料を用ることが有りません、騎兵ブリアンチンを初めて御使用の方は或は皮膚にしみることが有ます、それは皮膚のあれて居る證據で每日怠らず御用るになれば、自然としみることなく天性の美顔になることと受け合ひます、論より證據お使の上鏡をご覽あれ。毛髮用ブリアンチンも着荷仕候に付御注文下され度候

化粧用騎兵ブリアンチン
毛髮用騎兵ブリアンチン

定價 特二圓 大一圓 中七十錢 小卅錢 送料十錢 郵券代用一割增

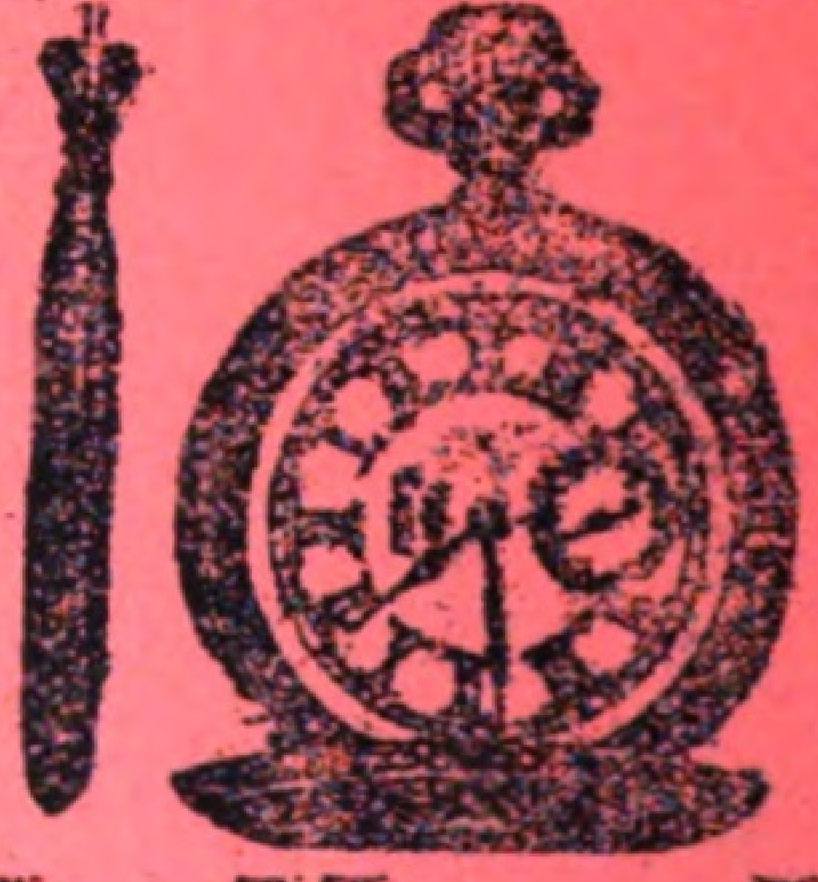
東京蠣殻町二丁目十四番地 岡本政吉商店

輸入元

特約東京大阪神戸名古屋靜岡仙臺函館其他全國至る處小間物化粧品店に販賣す若し品切の節は本舗へ直接御注文を乞ふ

優美高尚極薄手形

米國形銀時計



本品は小店特約東洋一手販賣の時計にして價は頗る廉價なるも機械の精確なると形狀の優美高尚にして而も側の銀質等總て米國ウォールサム製に遜色なき良品なり

價拾三圓半 銀側兩蓋中蓋附16 17 18形機械金鍍金子地寶石入二枚車別爪石巻上向アンクル龍頭引出針廻し
價拾貳圓半 右同品乙號
價拾圓半 銀側兩蓋機械ニッケル總寶石入別爪巻上向アンクル
價九圓半 右同品乙號
極薄手形 太文字 鐵針

◉保險三十ヶ年
◉送料内地拾錢 臺、清、韓參拾錢
◉代金引替は卅錢前金 〇振替爲替口座百七十三番

注意 大景品附 注意 此廣告を切抜き御注文書同封の御方には銀磁石、一切の附屬を添へ景品として進呈す

東京銀座壹 伊勢伊時計店

男女 ちゞれ くせ 毛

は何程の難毛にても直に根本的全治するの奇術を郵券封入申込の同患者に無料教示し誓て美髮にして差上げます

東京 本郷區丸山福山町 岩阪澄子

女(その三)

女(ろの四)

古都ノ春



眞正無毒

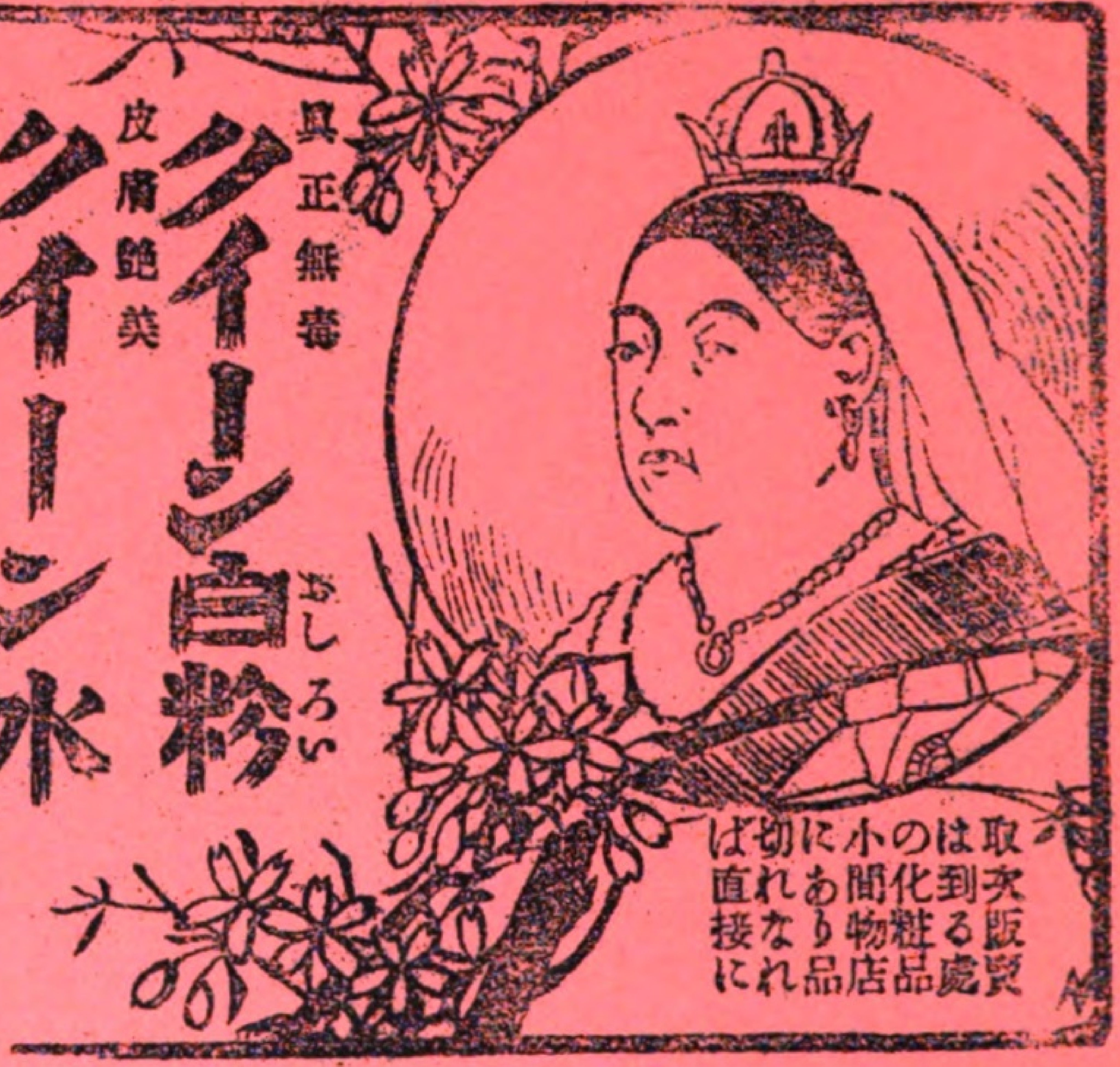
皮膚艶美

クイーン白粉(おしろい)

クイーン水

本品は我同盟國より輸入せる最新最優の原料に貴重なる芳香を加へ精製したる他に比類なき化粧料なり

本舗 東京日本橋新和泉町 三井花陽堂



取次販賣は到る處の化粧品小間物店にあり品切なれば直接に

五大軍醫合議製劑

藥價 五週分壹円、三週分六十五錢、二週分四十五錢、一週分二十五錢、二日半分十錢

本舗 東京銀座壹丁目 大阪南久寶寺町

山田安民



全國各藥店ニて取次販賣す

醫科大學病院を辭職專門的治療院を開設 院長 平田章之丞

◎男子婦人生殖器科 睪丸、卵巢、子宮の其他の疾病

◎梅毒、痳毒、痔疾、科

◎殊に神經衰弱、陰萎、遺精、早漏、包莖、不姙症、月經障害、ヒステリー、夜尿症

(入院隨意)

明治療院

東京市淺草區七軒町二番地

女(はの一)

東洋女藝學校生徒募集

（入學希望者ハ四月十日迄ニ申込アルベシ）

注意 四月十一日第一學期始業入學者ハ此際申込アルベシ

目的 本校ハ我國固有ノ婦德ヲ涵養シ學識技藝兼備ノ女子ヲ養成ス

教科 刺繡科。造花科。裁縫科ニ分チ更ニ豫科本科高等科專修科及速成科ニ分ツ

科目 豫科本科ハ高等女學校同樣ノ學科ヲ授ケ技藝ハ補習科卒業以上ニ熟達ス高等科ハ中等教員受驗者及高等研究者ノ爲メニ之ヲ設ク專修科及速成科ハ專ラ技藝ニ熟達セシム

生徒募集

授業時間 豫科本科高等科每週農科十七時間技術十六時間專修科及速成科ハ技術三十二時間トス

入學程度 豫科ハ高等小學二年卒業本科ハ高等小學卒業高等科ハ高等女學校卒業專修科及速成科ハ年齡十五歲以上ニシテ高等小學二年卒業ノ程度トス

卒業年限 豫科高等科速成科各一ヶ年本科及專修科各々二ヶ年

位置 東京神田仲猿樂町十五番地

注意 四月上旬入學試驗ヲ行フ 規則書入用者ハ郵券二錢送附次第直ニ發呈ス

家庭必須書類

● **實用裁縫全書** 飯田吳服店裁縫部小岩井主任 副主任合著（大判二六六頁）正價五拾錢 郵税八錢

● **實用刺繡術** 刺繡術專門 [illegible]村大次郎君著（大判一二四頁）正價貳拾五錢 郵税四錢

● **實用造花術指南** 山田興松君著（大判一〇〇頁）正價貳拾五錢 郵税四錢

● **裁縫と編物** 吉田調子君著（大判二六二頁）正價貳拾五錢 郵税六錢

● **最新家計簿記** 曾我部純一君著（大判一三四頁）正價貳拾五錢 郵税六錢

東京 **博文館** 本町

妾事小供の時より薄毛にて種々の藥を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇藥を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし

三錢郵券を添へ御照會あれ

東京市京橋區越前堀 河村愛子



女（はの二）

（はの三）

女(けの四)

春の日



河崎

あたゝか



柴崎美方筆


各女學校御用
美術造花材料
附屬品ニ製造器械類一式
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話（長）浪花一六四三番
振替貯金口座 四九七〇番
營業目錄御入用ナレバ此切取リ添ヘ御申越被下度候
（切取線）
縣 郡 町（村）
女學世界第七卷第五號

(にの二)



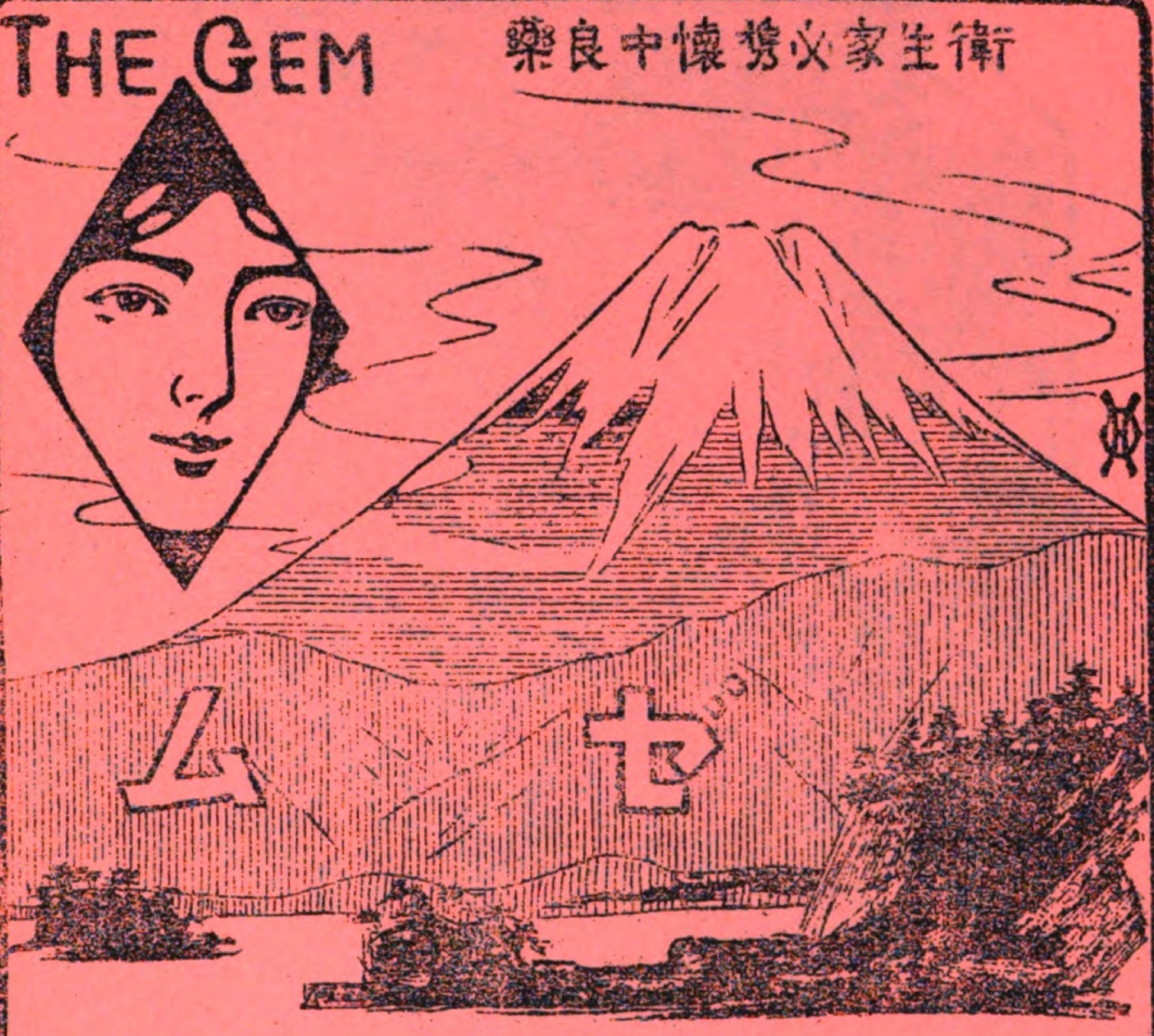
造花用材料一式
刺繍用材料一式
摘細工用材料一式

東京市本郷區眞砂町十五番地

百花堂

地方御注文ノ節ハ代金引替
小包郵便ニテ御送リ申上候

(たの三)



ゼム一粒の 馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる

ゼム二粒は 煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渇を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる

ゼム三粒は 音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる

ゼム五粒を 食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衞生を重んずる士の常用劑として愛用せらる

ゼム十粒は 異境に於ける風土病疾病食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる

ゼム定價

七十五粒入	十錢
百六十粒入	廿錢
四百粒入	五十錢
九百粒入	一圓
容器入ゼム	二十錢

日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎

支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會

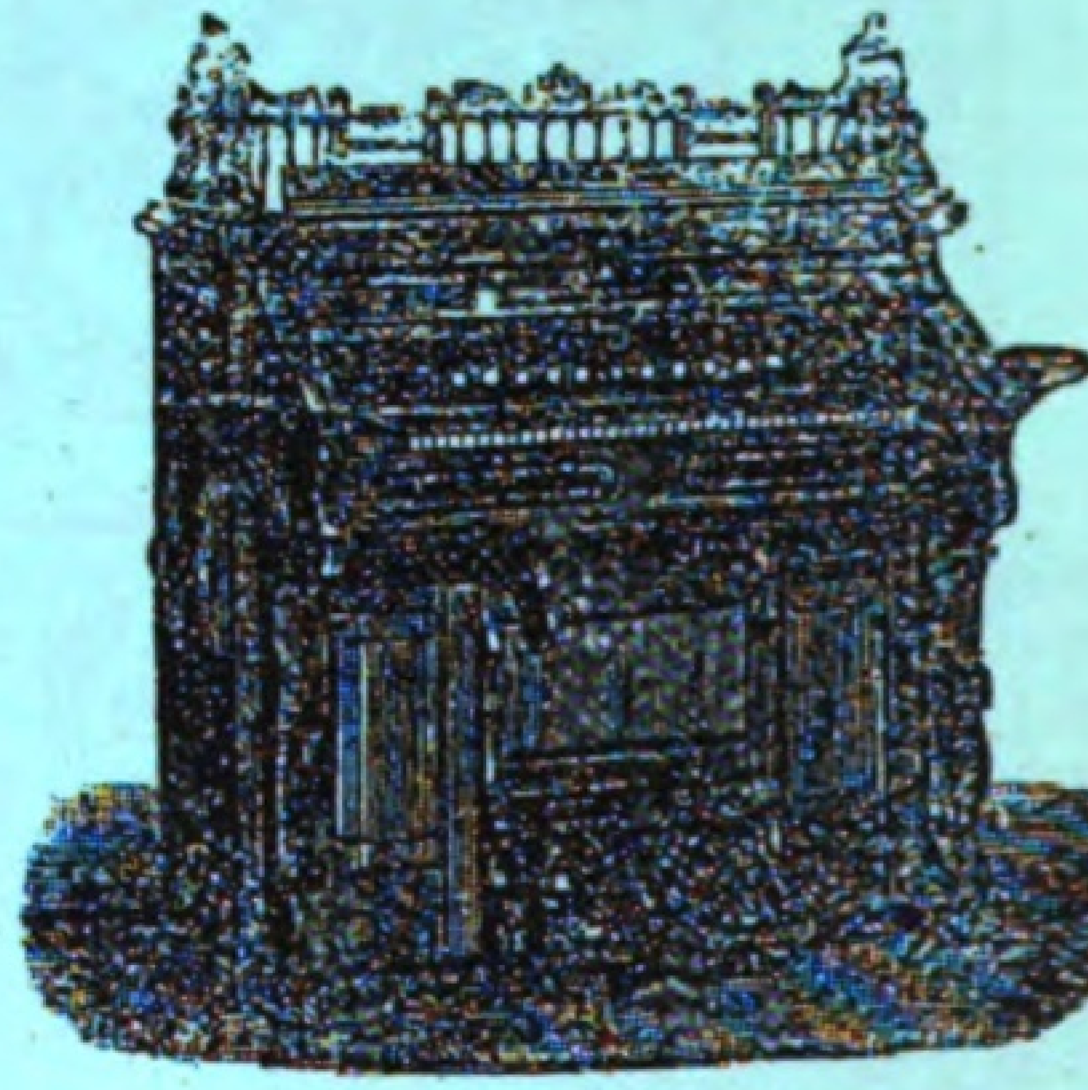
其他發賣所は全國各地賣藥化粧品店にあり

春　暮



戸田玉秀筆

風琴ヴアイオリン運動具販賣



一號	二號	三號	四號	五號	六號	七號	八號	九號	拾號	拾一號	拾二號	拾三號	拾四號	拾五號
拾八圓	貳拾八圓	貳拾圓	參拾圓	貳拾七圓	參拾八圓	四拾五圓	五拾圓	五拾八圓	六拾八圓	八拾圓	壹百圓	百貳拾五圓	百五拾圓	貳百圓

◎舶來ヴアイオリン

及各種附屬品 新着荷



和製 貳圓以上各種

舶來 拾圓以上各種

(郵税二錢ニテ詳細目録進呈)

東京市本郷區湯島切通町廿七番地

南江堂教育品販賣部

電話(下谷一三三〇番)

登録商標 高木

近來同名類似之品數多相見へ候に付御愛求の節は人魚の商標と高木與兵衛の名義に御注意被下度候



定價

箱入 金一圓

同 金五十錢

ニツケルカン入 金三十錢

同 金十五錢

紙包 金二十錢

同 金十錢

同 金五錢

(ほの一)

此券御持參の方は
一割引「女學」(第五號)
(切取線)

本品は
宮内省御買上
の光榮を辱す

高等化粧料
日ノ出クリーム

●何故に美は人生の最大幸福なるか？美は愉快を感じ心を爽然とす、愉快の感覺は精神の滋養となり、精神の滋養は追次に肉體の滋養となり、血は增し、肉は肥えて、體健全となり益々色艶美はしくなる●其初めに美人となるは日ノ出クリームを朝夕使用するにあり

美人トナル秘密？
歐文ハウツービーピフチフル參照

色の白きは七難かくすと申し御婦人は勿論男子にても皮膚の奇麗な程快きものはなし此皮膚を奇麗にすると云ふことは平素の食物と衛生に依ると云へ彼の歐米人が艶の美はしく皺の少なきは日ノ出クリームを缺くべからざる化粧品として使用しつゝある所以にして日ノ出クリームが又東洋の御方にも適當なることは衛生試驗所の證明其他各位の實驗上明かであります色を白くしキメを細かに美麗ならしむることは勿論日ノ出クリームは電氣乳劑なれば皮膚を摩擦する時は脂肪が一面に普及し柔軟ならしむる故老年に至るも皺の寄ることなく如何に其花の如き姿を永く保ち得るでしようか又皮膚のあれ性の方は必ず朝夕御使用あれひゞしもやけ等にかゝることなく又全治する特効を有す彼の恐るべき白粉の鉛毒を防ぐには無類日本流の薄化粧白粉や白粉下を用ゆるの要なく。又つき悪き眞の無鉛毒の白粉を使用前日ノ出クリームを用ゆれば極めて美くしくつき。眞正の美人となることは獨逸國醫學博士エエボーン氏の證明する所さて如何に日ノ出クリームを使用すべきか「初め微温湯を浸したるタオルの切れにて面部を數分間温蒸し自然と顔の毛孔に吸取られたる塵と垢を發出さしめ其後日ノ出クリームの極少量を指先きに付け充分(マッサージ)擦り込たる後はハンカチーフ或は紙にてふき取らるべし」尚厚化粧を望まるゝ方は前記の如く拭ひ去りたる後無鉛毒の粉白粉を使用さるゝ時は衛生上有効なるのみならず櫻花の滿開せし如く實に美麗を極むべし

尚毛髪用日ノ出クリームはコスメチックと水香油を合せし如くにて適度に亂毛を止め毛髪を保護養成する煉香油なり化粧用毛髪用共に佳香馥郁の佳品にして衛生的に完備せり

化粧用美人劑は
毛髪用煉香油は
日ノ出クリーム

價定

特製	二圓
大瓶	一圓
中瓶	五十錢
小瓶	三十錢
見本瓶	十五錢
郵税	(十錢)(四錢)

本品發賣三ヶ月有餘にして賣上數三十萬個に達したり此上御愛顧に報ひん爲め壹千個中へ一個純金紀念指輪引替券を瓶のソコへ入れあれば御使用中少さき金物あれば本舗へ御持參或は御郵送相成度引合の上速時進呈すべし

各宮妃殿下御用

高等水香油(フクトリ)
日ノ出オイル
大一圓。中五十錢。小廿五錢。

香水香油
日ノ出ブリ、アンチン
壹瓶三十五錢

右は何れも衛生に適する佳品なり郵税各十錢

東京日本橋區村松町廿二番地
日本一手販賣元
舶來化粧品商
須原啓三郎商店
(振替貯金口座七〇五七番)

特約店

大阪市博勞町二
ライオン歯磨本舗
小林支店

名古屋末廣町
村瀬谷三郎

市内

通り三 順天堂
銀座壹町 佐々木
小川町 信盛堂
傳馬町 大西白牡丹
本郷 兼康
須田町 三ツ井屋
神樂坂通 山城屋

全國到所有名勉強なる和洋化粧品販賣店にあり必ず日ノ出印御注意御買求乞不正偽品あり

女(ほの二)



山葉風琴

《保險附》

第壹號	一八、〇〇〇
第貳號	二八、〇〇〇
第參號	二五、〇〇〇
第四號	三五、〇〇〇
第五號	二七、〇〇〇
第六號	三八、〇〇〇
第七號	四五、〇〇〇
第八號	五〇、〇〇〇
第九號	五八、〇〇〇
第拾號	六八、〇〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇〇
第拾參號	一二五、〇〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇〇
同貳號	八五、〇〇〇
座敷用オルガン壹號	二一〇、〇〇〇
同貳號	二七〇、〇〇〇





○山葉洋琴・・・・金參百參拾圓以上 金壹千參百圓迄各種

●舶來洋琴 三百圓以上三千圓迄各種

●舶來風琴 百圓以上千五百圓迄各種

○鈴木ヴアイオリン 金貳圓以上百貳拾圓迄各種 弓金七十錢以上 箱金壹圓五十錢以上各種



●舶來ヴアイオリン及弓箱等各種

●樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種

●戰捷紀念國旗印銀笛數種

●八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓

右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジヨレーツト各樂器附屬品、和洋音樂書

各種郵劵貳錢御送附あらば美麗なる目錄進呈す

楠美恩三郎先生編

デュエット トリヲ 唱歌集

伴奏附

（久しく品切れの處彌々再版出來）

大形美本全一册

定價金六十五錢　郵税金八錢

近時音樂書の發刊漸く其多きを加ふるは洵に樂界の爲め欣喜の至りに不堪然れども中等敎育以上に適する完全なる唱歌集の如きは恰も曉星の寥々たるが如し編者楠美先生夙に之を憂ひ今回本書を公刊せらる書中收むる處の貳拾五の歌曲はグルック、メンデルソン、アブト、モツアルト、ルビンスタイン、ウェーベル等の歐洲諸樂聖の作に係る歌曲中精を取り粹を拔きたるものにして殊に配するに本邦名家の作歌を以てせらる、されば其曲節と歌詞の調和の美妙に到ては一度試唱するものの感嘆措く能はざるべきことと信ず又伴奏部のみ彈奏するも、ピアノ、オルガンの曲譜として實に趣味津々たるものの多し希くは大方諸賢の御愛唱あらんことを

ピアノオルガン

調律修繕

（振替貯金口座壹五八〇番）

東京市京橋區竹川町三十番地 合資會社

共益商社樂器店

電話新橋五二九 電報略號キヨ

（ほの四）

四十雀



加藤南山筆

桃の林



福田麥僊筆

（一〇）

文藝倶樂部 第十六卷第三號 定期增刊

豫告

現代の落語家中錚々の聞え高きもの、東西に亘りて十八名を選び、おの〳〵其得意とする落語十八編を收む。世の中に讀んで此の書ほど面白きものなけむ、讀者は今より腮の掛金に御用鎮あれと云爾

落語十八番

全一册洋裝菊判
正價貳拾五錢
郵稅貳錢五厘
四月十五日發行

目次

東京 博文館 本町

商業講義　早稻田中學講義

[illegible]實業の名譽となりて列強の班に入り、[illegible]國民の活動に俟て[illegible]の實力と實業の發達とに俟たざるべからず。而して中等教育の普及と商業教育の擴張とは實に是が根抵たり。我『早稻田中學講義』は[illegible]俗を旨として**商業全般**に關する必須の學課を數へ、『早稻田中學**講義**』は平易多趣の講義を以て容易に**中學課程**の學力を養成せしむ。本部は既往の經驗に徵し、內容に多大の刷新を加へ、茲に**新學年**を開始せんとす。志を實業界に懷き或は中等普通學を修めて他日の成業を期せんとする青年は本講義錄を以て其良師友とせよ。

商業科課目

- 道德之要旨　文學博士　坪內雄藏
- 商業道德　講師　杉山重義
- 通論、賣買、保險　講師　石川文吾
- 鐵道商業經濟　講師　關一
- 倉庫、稅關　商學士　小林行昌
- 銀行法　法學士　村田俊彥
- 海運　講師　山本邦之助
- 取引所　講師　星野太郎
- 最近內外商業史　文學士　平沼淑郎
- 經濟學原理　法學博士　添田壽一
- 貨幣、貿易政策　法學士　井上辰九郎
- 外國爲替法　法學士　河津暹
- 商品學日本地理　商學士　池本純吉
- 東洋商業地理　講師　矢津昌永
- 西洋商業地理　商學士　松村吉則
- 法學通論、民法　法學博士　山田三良
- 商法　法學士　和仁貞吉
- 簿記　商學士　吉田良三
- 商業算術　講師　大阪榮
- 實用速算法　講師　神尾銈吉
- 會話初步　講師　岸本能武太
- 英語商業會話　講師　マッグレガー
- 英語商業作文　講師　和泉爛六
- 清語　早稻田大學政學士　青柳篤恒
- 　　　講師　宮島大八（?）
- 商業經營法　講師　十屋[illegible]吉
- 實業家修養法　講師　石井勇
- 海外商業實務　講師　今井友次郎
- カード、システム　講師　土屋長吉
- 化學工業大意　理學士　加藤與五郎
- 機械工業大意　工業博士　阪田貞一
- 　　　講師　關口八重吉

◎經濟時評、新聞記事說明、海外商業事情、取引市場之波瀾記、社交術、殖產案內、明治四十年企業發展史、[illegible]明界實戰、商法問答

中學科課目

- 倫理　文學博士　坪內雄藏
- 國語　講師　浮田和民
- 漢文　講師　永井一孝
- 國文法　講師　五十嵐力
- 英語（文學）　文學士　丸井圭治郎
- 　　　講師　牧野謙次郎
- 英文法　文學士　橫地清次郎
- 英語（發音讀方會話）講師　岸本能武太
- 　　（譯解）講師　增田藤之助
- 　　（文法作文）講師　宮井安吉
- 　　（文法）講師　二木千年
- 漢語　早稻田大學政學士　青柳篤恒
- 日本歷史　文學博士　原勝郎
- 東洋歷史　文學士　高桑駒吉
- 西洋歷史　文學士　本多淺次郎
- 經濟　法學士　添田壽一
- 日本地理　農學士　志賀重昂
- 外國地理（附圖）理學士　山上萬次郎
- 地文學　講師　野口保興
- 算術　理學士　石川成章
- 幾何、三角法　理學士　吉田好九郎
- 代數　理學士　遠藤又藏
- 動物（圖解）講師　安東伊三次郎
- 植物（圖解）理學士　帝野俊之助
- 礦物（圖解）理學士　瀧本鐙三
- 生理衞生（圖解）講師　糸左近
- 物理（圖解）理學士　田中三四郎
- 化學（解圖）理學士　池田清
- 法制　法學博士　高田早苗
- 　　　法學博士　有賀長雄
- 　　　文學博士　[illegible]
- 商學記　商學士　吉田良三
- 文學入門　文學博士　坪內雄藏
- 繪畫の栞（插畫）講師　川端玉章
- 美術工藝談　講師　島村[illegible]
- 天界談　理學博士　橫山又次郎
- 農業大意　農學博士　橫井時敬
- 商業大意　講師　石川文吾
- 工業大意　工學博士　阪田貞一
- 自修法
- 世界諸宗教　講師　土屋詮教
- 各國學生生活　講師　中島半次郎
- 軍事談　陸軍中尉　櫻井忠溫
- 體育談　講師　安部磯雄
- 音樂談　講師　東儀季治
- 各種講演法　講師　山口[illegible]

◎兩講義錄は每月二回發行し一ヶ年卒業の制度とす。來四月初旬各第壹號を發行す。◎月謝各四拾錢、三ヶ月前納金壹圓拾五錢、六ヶ月金貳圓貳拾錢。猶ほ詳細の事項は規則書にあり請ふ知次第送呈す

振替貯金口座一一二三
電話番町三七四

東京牛込早稻田

早稻田大學出版部

女（への三）

花の公園



（金澤兼六公園）

目賀田種太郎氏の家庭



女（その一）

（その二）

尤も高評ある繪葉書は日本葉書會製博文館發賣品也

學生唯一の獨習所、普通室、特別室、婦人室に分つ

毎日開館

東京麹町區上六番町四七（三番町電車停留場傍）

大橋圖書館

藏書六萬部、內外古今を網羅し閲覧者日々二百人餘

●衛生無害御試驗濟 東京本町三 玉屋支店

衣服洗淨 玉川 一名ジャボンイラズ

手もあれず、さゝくれもできません

生徒募集

◎本科一、三學年
◎技藝科一學年 各六拾名

◎本科二、四、五學年
◎技藝科二、三學年 各數名補欠募集

本科は五ヶ年の高等女學校程度にして高等小學二學年修業のもの若くは之に相當せる學力を有するものを一學年に編入し他之に準ず。技藝科は修業年限三ヶ年とし高等小學校卒業のもの若くは之れに相當せる學力を有するものを一學年に編入し他は之れに準ず。技藝科は裁縫を主とし編物、刺繍、修身、國語、圖書、音樂、外國語等を課す。右兩科とも課外に挿花、點茶を置く。

東京市神田橋外 神田共立女學校

○奏効確實 器械不要 簡易複寫インキ

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械藥品等を要せず此インキ一品にて簡便迅速座上立ところに同一の文書圖書數十百枚を印刷し得べし○即ち此インキを以て書したる原稿より直接他の白紙へ字跡を透徹するものにして一枚の原稿より凡七八十枚宛を寫し一瓶のインキにて原稿百數十枚を作り複寫一萬餘枚を得るものなり

定價 二オンス 裝鑵入 送料共金參拾錢 為替神田局 郵券一割増

發賣元 神田錦町二丁目四番地 中村屋商店

肺病患者に告ぐ

肺病

私儀多年肺病に罹り九死の難に際し偶々新發明の一奇藥に依て全治せるを以て治く世の同病者を救ひ度素志に付望の方は郵券二錢封入御照會ありたし

東京府下大森入新井 川名助次郎

婦人諸病治療法

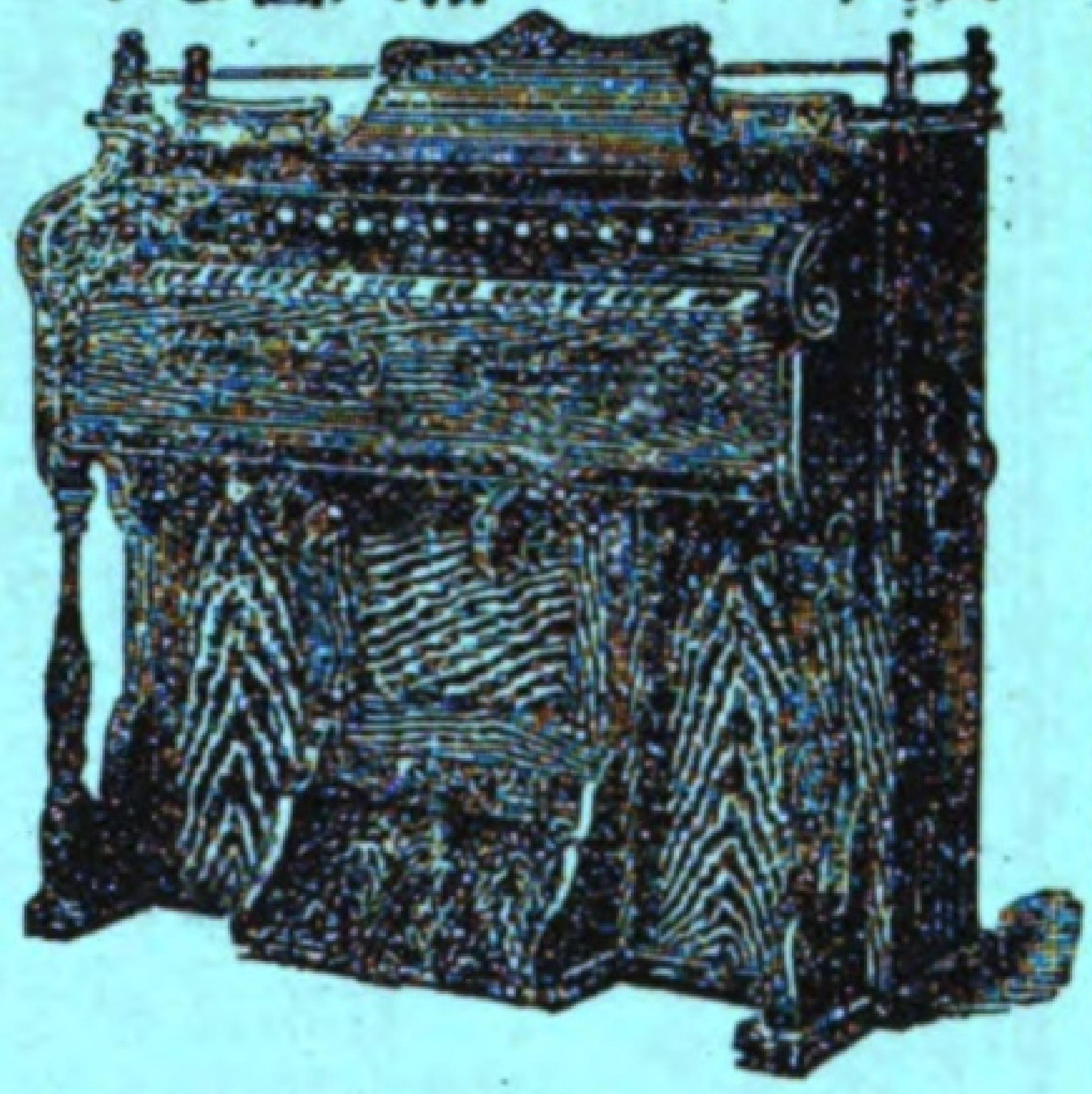
子宮病血の道月經不順産前産後長血白血其他總て婦人諸病を全治する新療法を詳記せる書冊を無代進呈 望の人は往復葉書にて大阪高麗橋長命堂宛申込あれ

女（へとの三）

宮內省御用

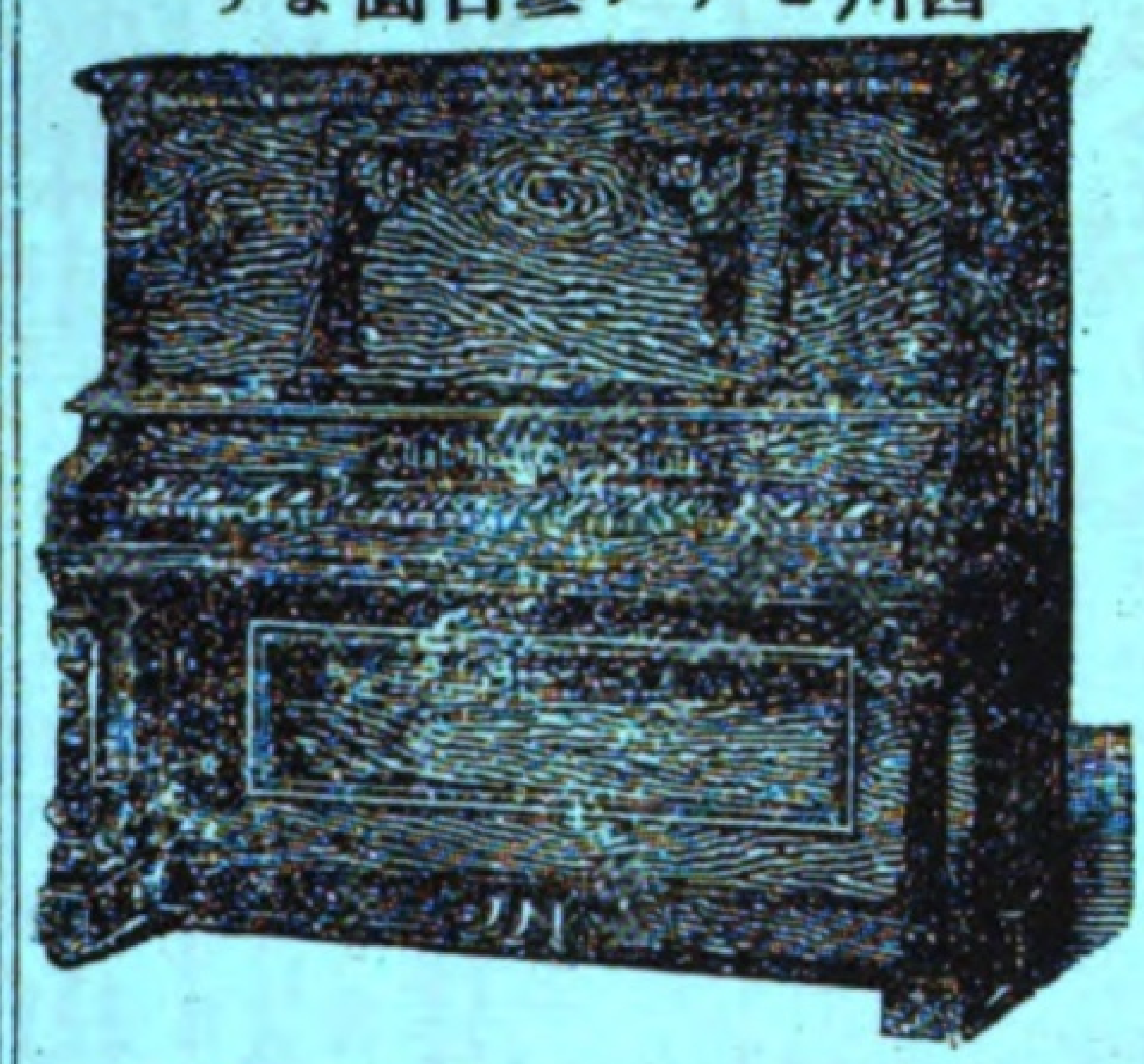
HIGH-GRADE ORGANS & PIANOS
Manufactured by
"NISHIKAWA & SONS"
HINODECHO YOKOHAMA

西川オルガン拾八圓より



高尚なる音樂の嗜好は家庭の和樂を增進す……

西川ピアノ參百圓より



東京代理店銀座三丁目　十字屋樂器店

號	價格	仕様
壹號	金拾八圓	三十九鍵
貳號	金拾九圓	三十九鍵
參號	金貳拾壹圓	三十九鍵
四號	金貳拾八圓	三十九鍵二列笛
五號	金參拾參圓	四十九鍵
六號	金參拾八圓	四十九鍵
七號	金四拾五圓	四十九鍵二列笛
八號	金五拾圓	六十一鍵
九號	金五拾八圓	六十一鍵二列笛
十號	金六拾八圓	六十一鍵二列 四個ストップ笛
十一號	金八拾圓	六十一鍵二列 七個ストップ笛
十二號	金百圓	六十一鍵二列 九個ストップ笛
十三號	金百拾五圓	六十一鍵五列 十一個ストップ笛
十四號	金百參拾五圓	六十一鍵五列 十一個ストップ笛
十五號	金百六拾五圓	六十一鍵三列 十五個ストップ笛
十六號	金貳百參拾圓	六十一鍵五列 十五個ストップ笛
十七號	金百貳拾圓	六十一鍵二列 九個ストップ笛
十八號	金百參拾圓	六十一鍵三列 十一個ストップ笛
十九號	金貳百拾圓	六十鍵三列 十三個ストップ笛
二十號	金貳百七拾圓	六十一鍵五列 十五個ストップ笛

大阪代理店南區順慶町四丁目　武內樂器店

（その四）

日本元祖

西川オルガン及ピアノ製造所

橫濱市日之出町二丁目
電話八百四十一番

（定價表ハ御申込次第進呈ス）

新婚の大橋進一君及同夫人



是れ三月十七日華燭の典を擧げられたる博文館副館主大橋進一君(二十二歳)同夫人れん子(二十歳)が自邸に於ける最近の撮影なり。



（江木博士夫人）



（小早川男爵夫人）

亞米利加合衆國特許局 第六〇、二六二號
千九百七年二月五日登錄濟

商標

天下一品

最上醤油

本商標の外樽毎に貼付しあるペーパの全形も既に帝國政府の特許局に於て登錄濟の上專用許可相成居候儀併而御披露仕候

謹告

本印釀造之儀年々增石致居候にも不拘尙ほ御需用を充す能ざる段全く御愛顧厚き賜と奉感謝候然るに本印の盛譽を妬み奸商輩類似僞造の商標を附し販賣せるやに聞及び嘗て亞米利加合衆國政府へ本商標登錄出願中の處今回**登錄濟認可證**下附相成候に付き以後類似僞造の商標あるものは同政府の法律の下に相當の制裁を加へらるべく候間輸出販賣及需用者諸君は此儀御安心の上益々倍舊の御愛顧を蒙り度右御披露旁此段謹告候也

千葉縣野田町
釀造元 茂木佐平治 敬白

女(ちの一)



寫眞畫報 第二卷第五編 臨時增刊

東京みやげ

四月十五日發行 定價廿錢 郵稅貳錢

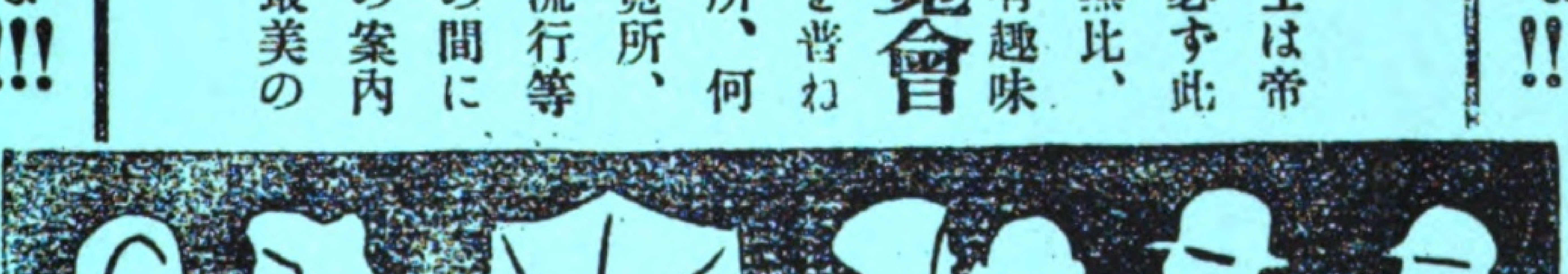
東京博覽會を知らんとする人は必ず見よ!!!

百花爛熳の好時節

東京大博覽會は開設され、數百萬の人士は帝都に雲來す何を最も先に求むべきか、必ず此『東京みやげ』ならん、彩色石版は華麗無比、四十頁の鮮明なる寫眞版と、八十頁の有趣味なる記事とは**宏大なる博覽會の百方面**を現はし、東京市中を普ねく廻つて、有名なる場所、愉快なる場所、何人も見逃すべからざる會社、商店、遊覽所、名所名物等は云ふ迄もなく最近の風俗流行等に至る迄で、**東京市中を一眸**の間に睹る如く、東都に於ては以て最上最便の案内者となすべく地方に至つては以て最好最美の

東京みやげたるべし

最も輕便巧妙に東京全部を知らんとする人は必ず見よ!!!



東京 博文館 本町

(ちの二)

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑（即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさへムチスカシ的蓄式實藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる斬新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓って根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

（藥價）壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵劵代用貳割増し

新輸入 美容料 肉體色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

世界無比 最新發明藥

あざ

入墨は廿日ほくろそばかす、なまづ、いぼは拾日目に必らず美麗に除去すること

保險附 新發明藥にして患部の大小輕重を問はず容易に根治し假令顔面たりとも毫も**痕跡**を殘さず無痛にて除去し得らるゝこと確證す故に之を用ゆべき患ひある人は速に用ひて天然の**美質**を完ふせよ來館者へは山の如き全治者の**感謝狀**及び除去したるあざ、ほくろ、そばかすいぼ等の實物を示すべし實に**世界唯一**の新藥價は壹劑分壹圓參劑半分三圓六劑分五圓拾貳劑分拾圓送料各拾錢宛必ず添送の事郵劵代用貳割増し（患部の面積大なる人は大劑を求むるを徳用とす）着金即刻小包郵送す

わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療實藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢 頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵劵代用必ず二割増のこと

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町十九番地 **日新館藥房**（電話下谷五四六番）

女（ちの三）

女(ち四)



池田侯爵令嬢　たか子



安川繁成氏令嬢

定價

袋入	二錢五厘
大袋入	十錢
小鑵入	七錢
大鑵入	十五錢

ブレスト洗粉は最も皮膚に適する特殊の原料を主として精製したるものなれば能く肌を清め精神に爽快を覺ゆる特長を有し一度使用すれば香氣は馥郁として永く身邊に薫りて去らず誠に衛生無比の佳品なれば常に社交を重じ且衛生に注意せらるゝ貴紳淑女の欠べからざる化粧料なり



東京牛込
山本玉川堂



美術 漆器 蒔繪

御茶道具 ぜんわん 家具 其他 ぶんぐ 各種 製造

ぬりもの陳列場設置有之候間御随意に御縦覧多少ニ不拘御用向被仰付被度偏ニ奉希上候敬白

東京市日本橋區室町貳丁目

木屋本店

林九兵衛

電話本局(九百九十五番 千七百十五番)
電信略名(キ、九)

(りの一)

醫科大學藥學專攻　藥學得業士金澤毅著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學說に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本

東京市下谷區上根岸町　衞生書院

農商務省實用新案登錄允許

新案美顏器

英國醫學博士新發見●大流行の美容具

顏の美くなる器械

本器は近來上流社會及花柳界に於て大流行せる最新式美顏具にして發賣以來各新聞紙及實驗者の賞讚を博せる事は爰に喋々を要せず使用法頗る簡易輕便にして婦女子兒童と雖も隨意に即席に應用し得て如何ほど色黑く醜き人にても忽ちに艶美白晢驚くべき佳麗の美顏に變化す所謂烏が鷺に變ずとは本器の効能ならん論より證據一度試用せば奏効の奇絕瞬速なる眞に驚嘆の外なし

器械　美顏コップ（壹組壹圓）　美顏ロール（貳拾錢）

附屬化粧　美顏クリーム美顏ポーター、ホワイ　五拾錢

送料拾錢代金引替は拾錢增

本器には使用方法美顏術秘傳書添呈

製造專賣元　大阪市東區両替町一丁目　錦花堂

化學的大發明　旭印

人造金の完成



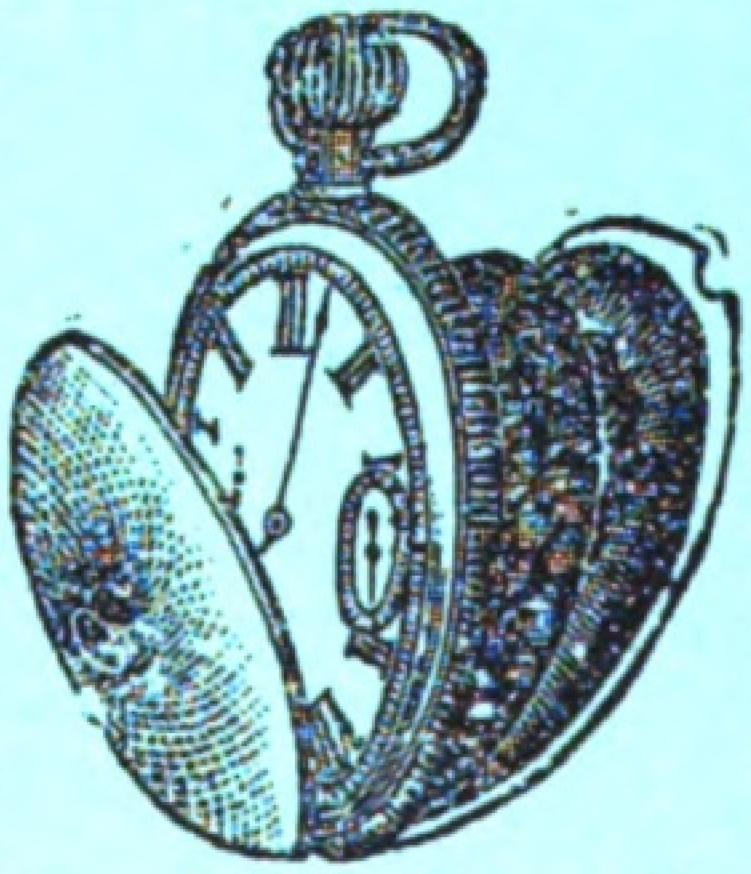
印臺指輪　平打指輪　石入指輪　養生眼鏡　メタル　帶止金具　時計鎖　新式磁石　羽織紐鐶　襟止　以上拾種　取揃箱入壹組特別大減價金

壹圓

とは實に驚くべき安價にあらずや

小包料拾錢代金引替料拾錢

弊堂專賣の旭印人造金は在來の延金消金細工の如き無責任なる僞品と異り學理と實驗とに依り發明したる最進步せる名譽的美術金色品且品質純良高雅且燦爛として麗々たる光彩を放ち遙に眞正の純金を凌駕す故に上流社會殊に華族の御用を蒙る其他實驗者の礎山の如且本品に就ては永久無限の保險を附正確保證す



合成金側懷中時計

三枚蓋斜子刻薄形寶石入アンクル龍頭卷引出針廻

價金　甲拾參圓　乙八圓　（送料拾錢）

2116より　まで

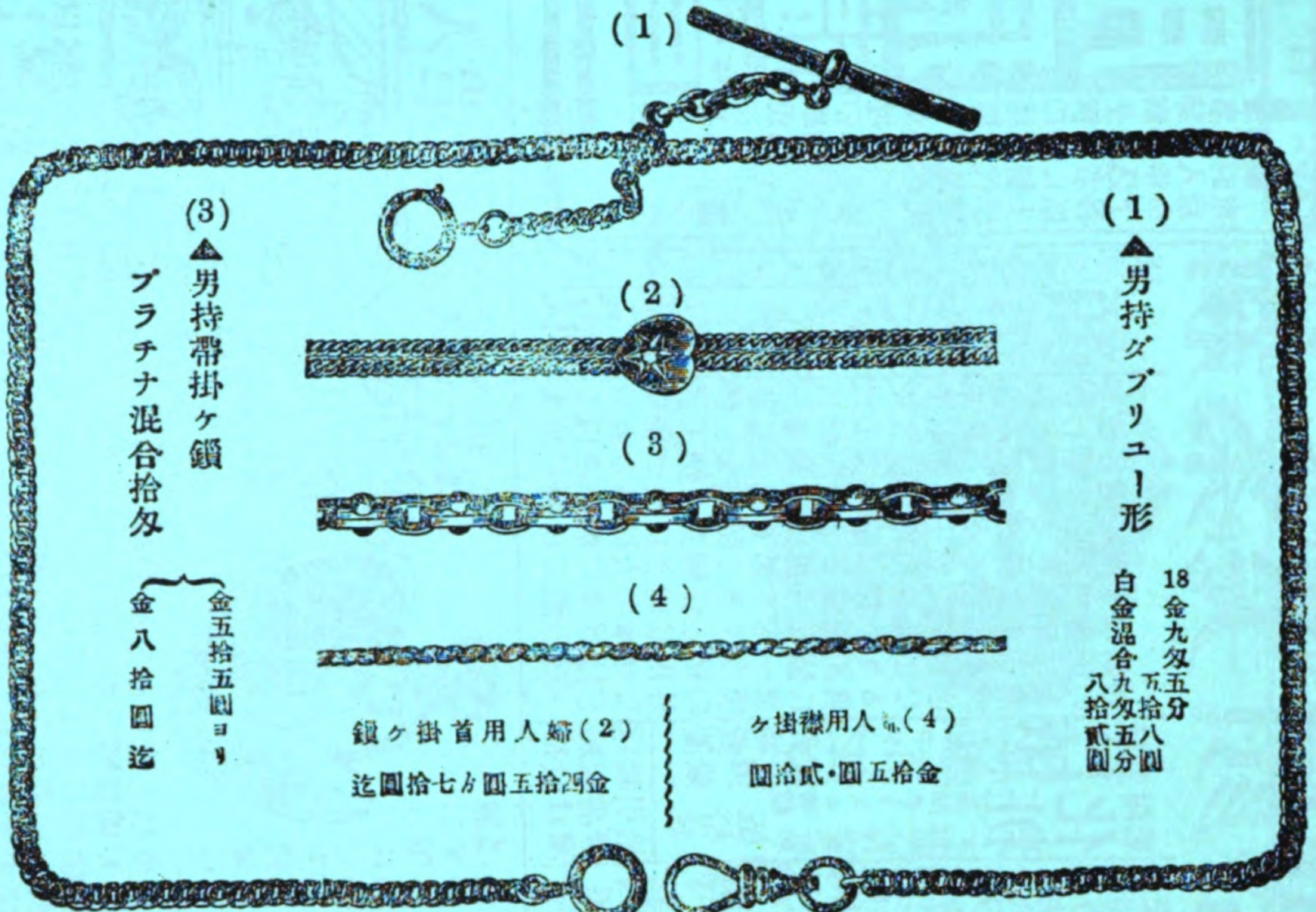
本品は英米商人の間に於て非常なる苦心慘憺の結果遂に大成功を來したるもの即ち機械は世界に冠だる瑞西タバン會社製側は米國ウオルサム時計商店に結託し茲に完成したる無缺の品なれば機械の堅牢正確なる申すに及ばず側は毫も純金に一步も讓らず金色光々たるを以て貴紳の御持用として決して遜色なし

保險證添付

大阪東區和泉町　（無限責任）金賞堂

女（りの三）

金プラチナ製各種



(1) ▲男持ダブリユー形
18金九匁五分 五拾八圓
白金混合九匁五分 八拾貳圓

(3) ▲男持帯掛ケ鎖
プラチナ混合拾匁
金五拾五圓ヨリ
金八拾圓迄

(2) 婦人用首掛ケ鎖
金四拾五圓ヨリ七拾圓迄

(4) 紳士用襟掛ケ
金拾五圓・貳拾圓

(四〇二)

繪畫と造花





高等花文美術女學校の教室

（牛込市ケ谷河田町）

見よ!!!大發展大刷新せる本誌を!!!

ハガキ文學

毎月一日發行 郵税不要

第四巻第四號

一冊金十錢 八冊前金七十五錢

口繪

表紙 和田三造
繪葉書 跡見泰
曉の神女（口繪色刷寫眞） フハンタンラツール
俗謠十二題（その四） 太田三郎
パンとサイケ（口繪寫眞） バーンジョーンス
木版挿繪十面 岡野榮 太田三郎 丸山晩霞 佐藤生巣
繪葉書圖案、スケッチ畫、漫畫投稿十數回

要目

○エドワード・バーン・ジョーンス 木暮理太郎
○散文的大勢 深山岩雄
○外濠線 小川未明
○花ぐもり 與謝野寛
○成功と生活 法學士K・O生
○趣味に就いて 國木田獨歩
○バーンジョーンス、と其作品 文學士渡邊江風
○メキシコ炭鑛を逃走してテキサスに入りし實談 天涯浩々生
○精力養成法 醫士佐賀氏
其他全靑年文士懸賞文如山

發行所 東京小石川 日本葉書會

發賣所 東京堂 東海堂 全國各書林

適切安直なる博覽會みやけは此所に!!!

新式葉書帖 既成發賣

A 中村不折先生案
B 橋本邦助先生案
C 武内桂舟先生案
D 丸山晩霞先生案
定價ABD各九拾錢C價八拾錢送料各拾錢各百廿枚挿

以上の四氏各獨特の想を構へて得意の圖案に意を凝すること月餘其表裝の美なると裝釘の完きとは本會の大に誇とする所なり蓋し裝飾用として床上に置べく紀念用として机上の珍たるべし

逗子名所葉書
石版彩色 コロタイプ 六枚組 價拾五錢

葉山名所葉書
石版彩色 コロタイプ 六枚組 價拾五錢

鎌倉名所葉書
石版彩色 コロタイプ 六枚組 價拾五錢

名所葉書 東京名所葉書
自壹輯至六輯 各五枚組 價各拾錢

甲信名勝
太谷庸裝畫 六枚組 金十五錢

ハンドブック
總革優美堅牢 用紙上質舶來上等紙 定價金三十五錢郵送四錢

簡單にして委曲を盡す通信は此所に!!!

發賣元 東京本町 博文館 發兌元 東京小石川 日本葉書會

女（わの二）

讀め!!女學雜誌界の覇王よ!!見

第五卷第四號四月一日發行

女學雜誌 日本の家庭

一册金拾貳錢　郵稅金壹錢
六册金七拾錢
十二册金壹圓參拾五錢

▲學者と家庭……紫英堂主人
▲兒童研究と婦人の地位……朱鷺子
▲子供の教育に就て……田中樂春
●幼兒の歌（日本女子大學教授 鹽井雨江）
●春の歌（三宅花圃撰）
▲被勞の恢復　沼田笠峯
▲家庭と園藝　木村小舟
▲子供の特質と其教育（東洋大學講師）高島平三郎
▲家庭と掃除（醫學博士）遠山椿吉
▲高尚遠大な理想（東洋大學講師）中島德藏
▲通俗教育問答（獨乙協會校長）大村仁太郎
▲家庭と神經衰弱と（精神病院々長）門脇眞枝
▲社交上の贈答　岸田菊伴
▲家庭教育　蛭田育英
●挿花（日本女子大學教授 兒島晩翠）
▲家庭小說（瘦歸病客）
▲手輕西洋料理……ゆふづき
▲惡まる丶由緣……幡幽泉
▲春の家庭……朱鷺子

東京神田　同文館　表神保町

女（ぬの三）

東京博覽會第二號館の內

臺灣館





イルミ子ーション



外國館

大和田建樹君著
小野鵞堂君書
●明治女子書翰文
全一册大判和紙木版　紙數百枚
正價四拾錢　郵税四錢

大和田建樹君著
巖谷一六居士書
●明治書翰文
全一册　大判和紙木版　紙數壹百枚
正價參拾錢　郵税四錢

發兌元　博文館

●婦人科
●小兒科
專門　午前宅診　午后往診
東京市麴町區飯田町四丁目九番地
女醫　鷲山彌生

私立東京女醫學校生徒募集○規則書は郵券參錢を要す
戰後女子教育の發展は女醫志望者益增加するに至れるを以て本校は此趨勢に應じ校舍を增築し來る五月一日より開始の新學年に際し左記人員の入學を許す
◎前期生貳百名　後期生五拾名
◎入學試驗期日　四月二十五日
但し高等女學校卒業者は無試驗入學を許す○入學願書は四月廿日迄に東京市麴町區飯田町四丁目九番地東京女醫學校事務所へ提出すべし

わきが

必ず全治し決して再發或は他病に變せず速に用ゐて苦惱を脫せよ
價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢
本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を深清驅逐し惡臭を根底より全滅せしむ作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何頑固劇烈の難癒症も甲價特別製を用いよ

毛のはへる

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人早く試みられよ●わけ毛落毛を止めはへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまわたりのはげ●わるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

色の白くなる

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女紳士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして土性本[illegible]すれば分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

梅毒

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこれかんそ骨うづき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す
輕症は半劑惡症重症も二劑用ひて奏效す世間種々雜多の無效なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

電話下谷二五三五
專賣　東京本郷湯島四丁目十四　オリエンタル藥舘

女(ろの一)

女(ろの三)

製本發賣

女子懸賞文集

第二

洋装美本
紙數五百頁餘

正價金三拾五錢

郵税六錢（郵券代用一割増）

本書第一輯は曩に大好評忽ち數萬部發賣の盛況を呈せしが、今又第二輯成る、滿卷實に奬學五百金餘の重賞を懸けて募れる天下女秀才の金篇玉什明治文壇の珍品なり

（最寄書店になくば發兌元へ直接注文を乞ふ）

東京京橋大鋸町十一　女子文壇社發兌

（振替口座第壹七二九番）

特約賣捌○東京堂　北隆館　文榮閣　東梅堂　上田屋

女子文壇

毎號無類大懸賞の投稿滿載

●第三卷五號　四月一日發行

本誌内容見本に限　金六錢にて送る

東京京橋大鋸町　振替口座一七二九番

▲壹號より增刷取揃あり最寄になくば本社へ申込を乞

女子文壇社發行

價　送共一冊拾壹錢○壹年分壹圓六拾錢

毎月一日發行　外年四回増刊

紙數一冊大判百三拾頁

口繪　水彩畫、繪端書、繪手本、寫眞數葉入

女(ろの四)

木彫人物





（伊企儺の像　山崎朝雲氏作）

女（その一）

（その二）

●毎月一回十日發行

洋裝菊判紙數百六十餘頁
正價拾錢　郵稅壹錢

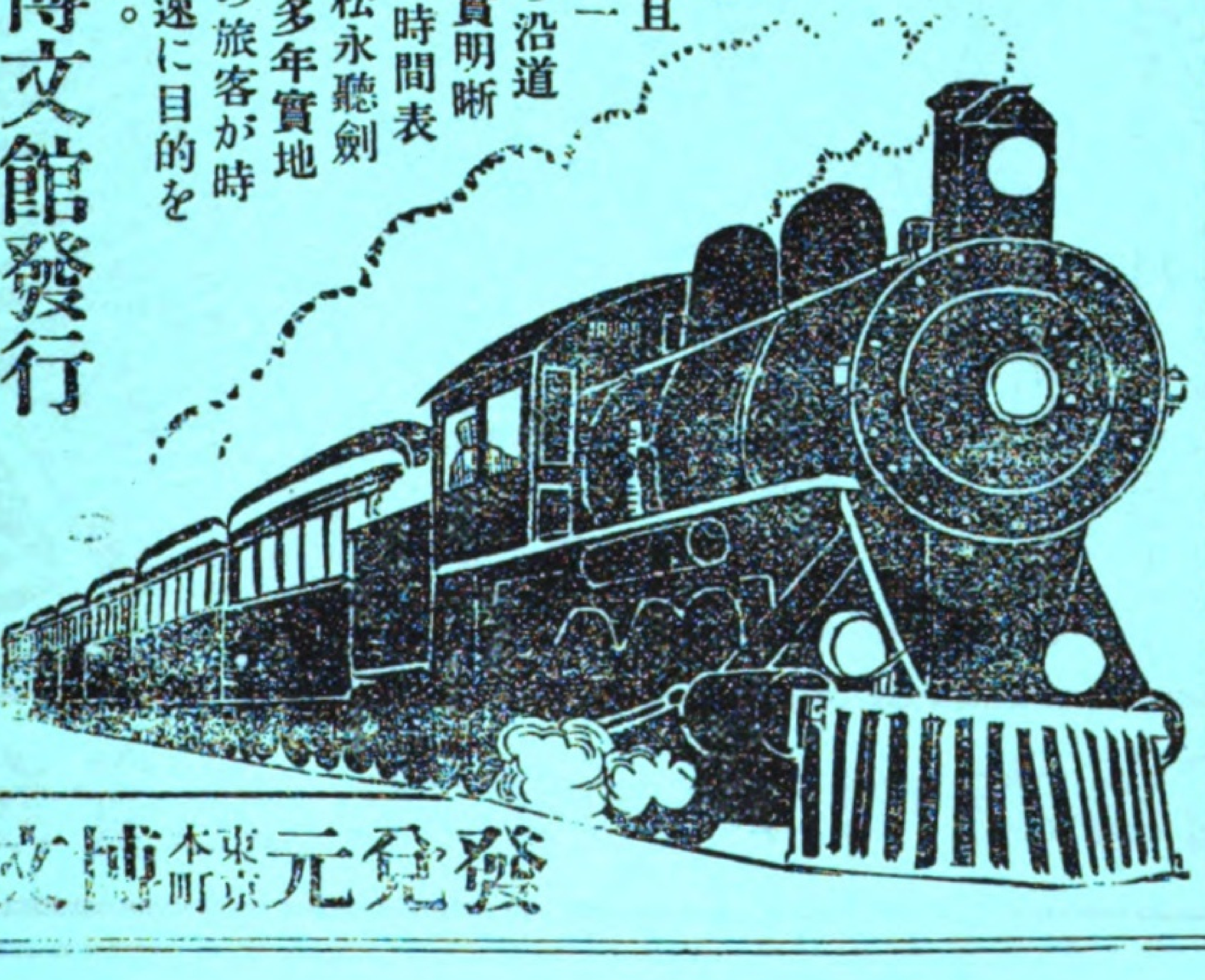
五月上旬創刊

鐵道滊船 旅行案内

東には東京博覽會開け、西には關西府縣聯合共進會もまた開け、官私各鐵道は皆々發着時間を改正して旅客の便を計り、各滊船會社また競ふて運輸の改良を計りつゝあり。

我が戰勝帝國民は、今や花紅柳綠の樂天地に、探勝遊覽の日もまた足らざらんとす。本誌は此等旅客が陸海交通の機關を遺憾なく利用せんが爲に、今後毎月發刊せらる。其の體裁には最も新機軸を出して、携帶に便にし、且つ必要なる鐵道又は航路の發着時間は、一見忽ち見出し得べく、また其等の鐵道の沿道案内は、最新最正の資料に因て最も確實明晰に之を編纂す。統計家の伊藤祐穀氏は時間表の編製に從ひ、旅行家の坪谷水哉、松永聽劍の諸氏は、案内記に筆を執り、皆な多年實地の經驗に依て成る直ちに是れ總ての旅客が時間を誤らず、經費を省き、最も迅速に目的を達する爲に唯一無二の案内記なり。

從來同種類の雜誌あり冀くは**博文館發行**の**旅行案内**に注意を乞ふ。



發兌元　東京本町　博文館

携帶至便

東京市編纂

價格至廉

東京遊覽案內

本年三月より東京勸業博覽會を開設せらるゝに當り東京市役所にては此際普く東京市の名所舊蹟娛樂場遊覽地より諸官衙公署銀行會社等を首とし凡そ商業百般の機關とを網羅し且つ最も詳密なる地圖を添ひ帝都の事は此一冊を袖中に携ふれば案內者を要せずして全市の事情に精通すべき遊覽案內を編述せられ僅かに印刷の實費を以て數十萬部を頒ち以て博覽會來觀者に便し兼ねて將來永遠に東京市に遊ぶ人々の指導者たらんと期せられ發賣を弊館に命ぜらる實に最も廉價にして最も携帶に便に最も巧みに編述せられて最も趣味多く殊に最も多くの部數を發行せらるゝは本書に及ぶものなし博覽會來觀の方は勿論東京遊覽の案內者としても無比の好書なり

全一冊

正價金四拾錢

郵稅金六錢

●縱五寸橫三寸（ポッケット入）

●紙數三百頁（名所寫眞版五拾頁刷込）

●東京市及郡部詳細地圖（町名、主要の建物名稱明細記入）大判壹枚

●既成……………發賣

●總クロース美裝上製

●全國交通略圖（本文中に挿入）

●東京市へ上納部數壹萬壹千部

發賣元 博文館 東京本町

（その三）

大日本淑女學會

會員募集
規則書進呈す

第四回新學期開始

本會の講義錄

▲大版三百頁優麗なる冊子
▲講義平易にして興味多し
▲各科講義の程度一定せり
▲各科皆聯絡し組織的なり
▲講師は專門女子敎育家也
▲科外講師は博士學士卅家
▲每號科外講話を附錄とす
▲純潔高雅の家庭小說あり
▲會員の質問は直に解答す
▲學期每に修業證書を與ふ
▲講義錄は貳ヶ年完結とす

◉博覽會開會中入會金**全免**す

御自分のお宅に居つて高等女學校の課程を講習しやうとする人は本會においでなさい本會は文部省令に據り正則完全なる女學講義錄を發行します講義の親切丁寧な事は固より新式の敎授法によつて獨習に最も便利な方法を計ります卒業は貳箇年會費も低廉であります

本會機關雜誌 **姫百合** を發行し會員に限り**進呈**す

◉東京神田南甲賀町（電話本局三千四百番）

大日本淑女學會

▲報知新聞評　本講義錄は高等女學校の全學科を知名の專門女子敎育家が講述せる者也平易懇切を主とせるものなれば何人も難解の虞なかるべく各科皆聯絡を保ちて其程度を一にせるなど講述者の苦心を見るに足る且つ有益なる科外講話の外に雜錄五十頁の附錄あり博士學士等の婦人に關する評論史傳衛生家庭等の文字を滿載し卷末更に純潔高雅の小說あり凡そ天下講義錄多しと雖も實益と趣味と併せ有する事斯くの如きは稀也

女(その四)



女學世界

—{四月}—

第七卷第五號

▲滿城の春色

春雨細々として膏のごとく、屋檐に濺ぎて音なく、輕塵浥々として柳色翠なり。池塘春にして艸は生意を含み、日永くして鷄漸やく倦む、既にして紅紫芳を闘はし、鳥歌ひ、蝶舞ふ。麥は青く、菜は黄に、五彩爛然として一幅の錦繡を織り出すもの、嗚呼これ三春の光景にあらすや。

霞靉靆として天地幕に入り山は笑ふがごとく眠るがごとし、風やわらかにして塵をたてす、日あたゝかにして艸萌ゆ、此時櫻花一世に誇りて滿城の人皆花に狂ふ、嗚呼これ春の女神の降臨にあらすや、一年四季の中人を惱殺するものはげに春なり。

博覽會を見る心得

東京博覽會美術部長　正木直彦



△婦人の爲に有益なる所以

婦人は男子と違ひ一の専門の職業を選んで世に立つ場合は甚だ稀である、多くは一家の主婦と爲つて家庭を治め子女を教育するとの任務を執るべき運命であるからその任務を全うするには、經濟上の智識、交際上の智識、又美術に關する智識、教育に關する智識、衛生に關する智識等種々様々の智識が要る事は勿論である。即ち女子は奥行は淺くとも間口の廣い、世の中の凡ゆる事柄に渉つて居なければならぬ。つまり女子には百科全書的の智識が必要である。此點から考へると目下開催中の東京博覽會の如きは女子の爲には最も有用なる一大教育機關である。蓋し博覽會は雑然と種々なる物品を列べて販賣する勸工場の如きものとは大に目的を異にしたもので世のあらゆる方面の智識、技能を實物を以て示すもので、恰かも百科全書の實物教示の如きものであるから、女子に最も大切なる常識修養の機關と言はねばならぬ、即ち博覽會は現時の教育學術、美術より工藝、建築、水產、運輸、交通等凡そ人間生活に必要なる一切の事物と現象とを一場の下に集めて觀せる趣向のものであるから、婦人の必要とす

る智識は殆んど總て此の中に網羅されてあるのである即ち家事を取る婦人の爲めには有益なる一大學校とも見なければならぬ。

△耳の學問と目の學問

そこで常識修養の爲には或は書を讀むとも一つの手段であらう、又人の談話を聞くとも一つの方便であらう。然れ共斯る方法に依て得た智識は迚も、實地目のあたりその物を見て得た智識程には適切で無い。去ればこそ諸方の學校などではいろ〳〵多數の標本を蒐めて實物敎示に力めてゐるのであるが、而かも凡ゆる方面の事物を一々標本で示すと云ふことは却て困難な話で、迚も實行されるものではない、そこへ行くと博覽會である、その見る所は一々實物であるが上に又其の材料は非常に豐富である。特に近來は其の內容も追々進歩して、多くの出品には一々製造法も掲げてあれば使用法も記してある。或は其の製造法の進歩の有樣を歷史的沿革的に實物を以て面倒なる手數を加へて說明がしてあるから、若し之を觀る人が學校の標本に對するやうな考で一々仔細に觀察したならば中々趣味ある學問を得て一方ならぬ智識を得る譯である。

△有益なる出品物

博覽會の出品は孰れも敎育的の意義を有するから何を見ても有益であるに相違無いが、就中有益なるは、各種專門學校の出品、農務局、水產局の出品、農產水產物の培養法或は飼養法に關する出品、山林局の材木の標本其他蟲類の標本、運輸交通に關する各種の標本類、織物に關する各種の機類、金屬の標本類或は鑛山の模型等の類ひであるから、觀覽者は此の種の出品に對しては特に注目せられたい。然るに從來の博覽會の例で見ると、多くの婦人は斯かる有益なる出品には目も與れずして兎角美しい出來のもの例へば染色刺繡等の絢爛たるものにのみ眼を眩ましてゐる傾がある。これ等は決して博覽會を活かして見る方法ではない。

斯の如きは博覽會に依て得らるべき利益を殆んど全

く沒却するものと言つてよい、蓋し右に列擧した類ひの出品は博覽會に於てのみ觀られるもので平常は容易に觀られるもので無い。のみならず此の種の出品を觀て置くことは女子が自身の修養として現在又は將來家庭に於て子供を敎育し家事を取る上に於ても甚だ大切なことであるから、今日の機會に於て十分此等を觀十分此等を利用せられんことを希望する。博覽會の當事者も其の考からして陳列品を一見すれば大抵會得の出來得るやうに仕組んでゐるが、尙ほ觀覽者の利便を計つて夫々專門家を附けて一々說明を爲させるやうにしてゐるから、若し出品を觀たのみで解り兼ぬる所があれば遠慮無く說明を求めて仔細に觀察し十二分に智識を弘められん事を希望するのである。

△裁縫器械の增加

近年各地の裁縫屋をはじめ普通の家庭にも外國製のシンガーミシンを使用する者が著しく殖えて十年前まで僅か八百圓内外に過ぎなかつた輸入額が昨年末には六十八萬餘圓に上つたとの事。

女學生を完全にする方法（上）

寺田勇吉

女學生風紀の頽廢は、年一年益々其の程度を高め其の區域を擴め、近來に至て一層甚だしきを加へたるもの丶如し、其の實況如何は日々の新聞紙上に報道せられて、世人の皆熟知する所なるを以て、吾輩は茲に之を引證するを略し、直に此の悲むべき病的狀態に對し二三の卑見を開陳して大方の敎を乞はんとす。

●女學校の分配

女學生風紀の頽廢は都鄙一般の傾向なりと雖も、大都會に於て特に一層の甚だしきを觀るは、妙齡の女子の地方より留學するもの未だ世の辛酸を解せず、直に大都會の誘惑に魅せらる丶を以て最大原因とせざるを得ず。故に吾輩は先づ女子敎育機關を全國の要處に分配して、全國の女學生を東京に輻湊集中するの必要なからしむるを以て今日の急務と信ずるなり。

敎育機關を全國の各處に分配するときは、大都會の華奢淫靡の風に感染せしめざるの利あり、大都會の誘惑に陷ゐり魔道に入らしめざるの益あり、遠く家庭の離るゝを要せざるを以て父兄の監視自ら周到なるの便あり、學資を要すること亦大都會に遊學せしむるに比し幾分を減少するを得べし、地方の繁榮を助くるの益あり、故に地方にその機關を分配するは獨り女子風紀の維持上に於て便益あるのみにあらざるなり。

然らば其の方法　如何吾輩の卑見に依れば、現今の府縣立高等女學校の如きは元來都市の經營に屬すべきものなるが故に、東京、京都、大阪、仙臺、金澤、熊本、岡山等の如き大都會に於ては速に之を市の經營に移し、更に土地の狀況に應じ、府縣費を以て專門の女子敎育機關を設立するを便とす、即ち美術工藝、家庭、音樂、英語、醫學、產婆及、看護婦學校等の專門女學校を設立せば庶幾くは地方の女子をして四方より大都會の魔窟に輻湊するの弊を免れしむことを得ん。此等高等女學校は必ずしも府縣立たるを要せず、否寧ろ公立たらんよりは私立の方種々の便利あるべきを以て、吾輩は華族、富豪、宗敎家が此等の設立に其の資を捐て其の力を盡さんことを切望するものなり、華族諸公に在りては其の舊藩臣及舊領民の女子をして高潔の敎育を受けしめんが爲に、其の舊藩地の繁榮を增さんが爲に、宜しく舊藩地に女學校を設立して、舊藩公の遺德を不朽に傳へ、以て舊士民に無上の恩澤を施すべし、富豪諸氏に在りては宜しく一夕盛宴の資を投じて敎育の爲に富の能力を發揮せんことは吾輩の勸告する所なり、若し之を以て放資と見做さば其の未來に於て直接間接に富豪を利すること彼の株式會社の株主たり債主たるに比して劣るものにあらざるは吾輩の保證する所なり、若し之を以て慈善と視做さば其の効果の多き世間豈に之に勝るの慈善事業あらんや、若し之を以て一種の快樂とせば、其の高尙健全なる聖人の快樂と雖も之に加ふるものなかるべし。曩に大倉氏が五十萬圓の私財を投じて商業學校を設立し、能く獨力を以て其の經營に任ずるが如き、近くは古河氏が東北

九州、北海道の分科大學建築費として百萬圓を寄附したるが如きは吾輩の窃に感服する所なり。近來富豪諸氏漸く資を公共事業に捐つるの風を生じ、安田氏の東京慈恵醫院に於ける施療の如き、三井一家の百萬圓を投じて慈善病院を設立せんとせるが如き、皆能く富の力を善用するものにして、當代の富豪たるに負かず、吾輩は當世の富豪が自今更に女子教育の改良に向て其の力を盡し其の財を分たんことを切望するものなり。

宗教家に至ては其の宗教の宣布上より之を觀るも、其の世道人心の救濟上より之を觀るも、女子教育の爲め最善の力を盡すは最も効果多き方法なりとす、基督教の各國に弘布を務むるや、其の宗派の如何を問はず必ず先づ女子教育機關を設立し、熱心に女子教育に從事するを常とす、是れ女子教育は實に宗教宣布の秘訣にして、其効果の多大なるを認むるに由らずんばあらず。我國佛教各宗各派に在りては布教の爲に、傳道の爲に敢て其の勞を致さゞるにあらずと雖も、未だ女子教育機關を設立して根本的に布教の基礎を据え、遠大的に傳道の効果を收めんとするの計劃稀なるは、吾輩の甚だ遺憾とする所なり、吾輩は佛教各宗各派が競ふて大學林中學林等を設立して僧侶を養成するの善例に倣ひ更に其の方面を轉じて女子教育機關の設立經營を務め各宗各派其の教育主義を以て女子教育に盡力せられんことは吾輩の深く希望する所なり、我國現時の女學生を觀るに其の風紀日々頽廢して殆ど救濟に由なからんとするは、畢竟宗教的感化の其心を支配するものなく、敬虔の念其の身を持するものなきの致す所なれば、現今女子風紀の頽廢を挽回せんが爲には唯宗教的感化を與ふるの外良策なし、而して宗教的感化を與ふるは各宗に於て女子教育機關を設立し名僧碩學身を以て模範を示さば其の風を仰ぎ德に化するものは啻に其の女生徒のみにあらず、其の父母兄弟姉妹に及ぼし一家より隣里郷黨に及ぼすものあらん、これ吾輩の深く切望する所なり。

此の如く華族は其の舊藩地に、富商豪農は其緣故地に佛教各宗は其の布教地に、女子教育機關を設けて女

子の高等教育を受けんとする者の爲に其の資を捐て、其の力を盡すことあらば、庶幾くは全國婦女の東京に輻湊するの弊を減じ、女學生の風紀を維持するの効甚だ大なるは吾輩の信じて疑はざる所なり。

㈢寄宿の取締

宗教々育を施し女學生をして自働的に弊風汚俗に感染せざらしむるを務むると共に、一方には父兄の監督をして十分周到ならしめ、以て他動的に墮落の誘因を防がざるべからず、監督の周到を期するが爲には寄宿舍に入れず親戚に托せず、父母の膝下より日々通學せしむるを以て最も安全なりとす、然れども遠隔の地方に在りて通學せしめ難きときは已を得ず親戚若しくは知人を選で之に監督を托するを便とす、若し親戚知人を得ざる場合に於ては學校所屬の寄宿舍に入らしむるも亦實に已を得ざる處置なれども、寄宿舍生活は動もすれば風紀紊亂の誘因を釀し易きことを記憶せざるべからず、而して如何なる場合に於ても普通の營利的下宿屋へ寄宿せしむるは斷じて之を避けざるべからず、今日の所謂下宿屋なるものは概して墮落女學生の養成所とも稱すべきものにして。決して純潔なる女學生の宿泊すべき所にあらざるなり。若し下宿屋へ宿泊せしむるにあらざれば他に適當の寄宿所を見出さゝるに於ては寧ろ就學を見合すを以て智ありと爲すべし。

現今の所謂下宿屋なるものは男女の學生を魔道へ誘引する一大機關にして、一たび身を下宿屋へ入れたるものは皆惡魔の爲に魅せられざるものは稀なるが如し然れば男女學生の爲に下宿屋を改良するは今日の急務なり、之を改良するには先づ下宿屋を男女の二種に區別せざるべからず、而して專ら學生を下宿せしめんとするものは豫め當該學校の承認を受け常に其の監督を受けんことを要す、今此の女子寄宿舍に必要なる條件を擧ぐれば

(一)成るべく學校の附近に於て開業すること

(二)成るべく當該學校の敎員に囑托して寄宿舍取締を置くこと

(三)下宿業に關する一切の經營は女子のみの手にて擔任すること
(四)寄宿料を一定し(間代、食料等)を廣告すること
(五)寄宿生の狀況を父兄に通報すること
(六)浴室を設くること
(七)病室を設くること
(八)娛樂室を設くること
(九)女醫と特約すること
(十)出入の門限を定むること

等成るべく寄宿舍をして一方には嚴重の取締を立て一方には娛樂の設備を設け寬嚴相待て寄宿生活をして成るべく快活ならしめんことを要す、世の下宿業に經驗ある人士にして斯る敎育的下宿營業に一臂の力を振はんことは吾輩の切望に堪へざる所なり。

△彼我婦人の長所

音樂に就いて東西兩洋の婦人を比較すると、西洋人は耳の發達に於て優り、東洋婦人は指の發達に於て優つて居ると。

卒業後の女學生に餞す

陽春四月花笑ひ鳥歌ふこの好季節を以て全國幾萬の女學生諸君はいづれも卒業てふ名譽を擔ひて目出度くこゝに父兄を省するの成功を博したまひぬ、多年螢雪の苦はこゝにその好果を全ふして諸孃の身邊は今や將さに無形の錦繡を纏ひ理想の瓊冠をかざしつゝそれぞれ新知故舊の間にその光榮を誇るの時とはなりぬ、何物の喜かこれに如かん、乍去この際諸孃は如何にして其の身を處せんとするや、處世の方針に就ては、元より其の父母たり兄姉たる人が大なる憂慮と深厚なる慈愛を垂れて以て孃等の身の行末のよかれかしと考ふべきは無論なるべきも只此際記者が一片憂患に堪へざるは數年間都會生活の習慣に馴らされたる女學生が兎角にその故鄕を厭ふて都會に留まらんと欲するの風潮あるに至りしことなり、勿論都會生活悉く非難すべき

にあらず、田舍も又人生志を成すべきの地にあらざる事は不文の記者が今改めて言ふを須ひずと雖も、人生の生活上の幸不幸は中々に一時の現象を以て易く判斷すべきものにあらずして、別に深く其の可否を計較すべきものたり、吾人は田園の人生に福多きを信ずるものなれどこれを以て直ちに一般に强いんと欲するものにあらずと雖も都會生活と比較していづれかよく人生の眞趣を得るか否やの點に就ては又一言を費やすこと必らずしも贅なりとせず、今や滿都の女生錦を衣てその故園を省するの機を以て聊かこゝに言及せん。

西の國の諺に言はずや『都會は人の造る所にして田舍は神の造り玉ふ所なり』と、實に神の恩寵は最も田舍に於て渥きを知る、見よ、其處には常に平和の天使來り舞ひ、自然の聖書は絶えず無聲の聲を放ちて、神の福音を宣べつゝあるを、而かも山は常に秀靈に水は常に淸冽に、花は四時の野邊に匂ひ、月は四季の山に淸し、渥い哉、田舍に於ける自然の恩賚や。加之ならず、空氣は新鮮なり、風俗は質朴なり、人情は敦厚なり、然るに都會の、風俗麻の如く亂れ、都會の人情は紙よりも薄く、その空氣は泥の如く濁り其生活は戰爭のごとくに烈し、其の利害や言はずして明なり、然るに怪しむべきは、近年田舍に於ける我が姉妹等が、無下に田園の生活を卑しみ、只管都會の生活に憬がれ、一も東京、二も東京、夢に見、幻に現し、父母に訴へ、兄姉に説き、或は遊學の目的を以て、或は求職の目的を以て、東京指して馳せ集ふこと、宛ら蟻の甘きに就くが如く、既に一び東京の人となれば、また田舍に歸るを願はず、其の遊學の目的を達して、學校を卒業せる者と雖も、依然として東京に止まり、殺風景なる競爭場裡に立ち交りて、惡戰を續けつゝあり、是れ誠に奇怪なる現象にあらずや。

▲都會の暗黑面

惟ふに我が敬愛する諸孃が、只管田園を嫌ひ都會生活を慕ふものはたゞ都會の生活の表面を見て、其の裏面を知らざるに基くものなり、其光明の方面のみを

見て、其暗黑面を知らざるが故なり。

燦然たる電燈、金紋眩ゆき二頭馬車、巍々たり堂々たる洋館、割烹店料理屋の珍味、元祿や桃山の新流行、派手模樣は成程都會の專有物たり、故に東京生活の表面は壯麗なり、華麗なり、以て我が田園の姉妹の心を醉はしむるに足れり、然れども此の壯麗と華美とは、單だ外觀のみ、其の裏面の生活に到りては、實に田舍人の想像し能はざる處ろなり乞ふ少しく都會的生存競爭場裡の慘なるを見よ。紅塵天に漲り、人奔り馬奔り車奔り、叫聲喚聲耳を聾す、これその外觀なり而かもその裏面に至つては人言信なく、詐僞行はれ姦計企てられ、朋友相欺き、物質上に精神上に常に缺陷あり、人事人情は反覆常なくして人は唯遑々として一日の事處なきもの、これ少しく人生の行路を經來りしものゝ皆よく知る處ろなり、妙齡青春の孱き身を以て、此の激烈なる而かも反覆常なき生存競爭場裡に立ち未來の成功を期さんとす、至難の事たるや知るべし。

▲自然の賜

然るにも拘はらず我が姉妹がなほ田園生活を好まざるは何故ぞや、他なし、農業を心に卑しめばなり、果して然らば是れ甚だしき了間違ひなり、先づ此の不了簡を一言せざるべからず。

夫れ河の流れは、千山萬岳に滴る岩清水を集めて其の大を成すにあらずや、夫と均しく都會は全國に散在する千村萬落の農家に依りて立たざるべからず、源遠くして末長し、大なる田舍ありてこそ大なる都會あり、大なる都會ありて大なる國家あり、故に農家は都會の礎なり、單に都會の礎のみならず、又た國家の基礎なり、言や陳腐なれども農は誠に國の本なり、誰れか農業卑しと云ふものぞ、國民にして悉く農業を賤しめば、其の國家の前途はたゞ亡滅あらんのみ。

試みに思へ、若し我が農民にして悉く農業を嫌ひ、男は鋤を抛ち、女は梭を捨たりとせば果して如何、廟堂に於ける朱紱の宰相や、紫綬を帶びたる凱旋の將軍

の特權名譽何處にある、榮耀榮華の限りを盡し、揚々世路に誇る紳士や貴婦人の面目何處にあるぞ、實に農は國家の礎なり、いでや是れより少しく田園生活の福音を述べんかな。

▲田園の趣味

農業は單に貴ぶべく重ずべき職業なるのみならず、又農業に伴ふ快樂と趣味に到りては、到底都人士の夢にだも想ひ及ぶ能ざるものあるを知らざるべからず。

第一農業は人をして天然と親しむ、彼の都會に於ける、生存競爭の殺風景や、人生の蹉跌や暗流や失敗や、名奔利走も雲煙過眼に附し、天然と直接し、其虛僞なき、眞誠なる而して其の因果の約束を嚴守する、樹木や、草卉や、穀菜やに交はる、其の快樂と趣味とは、到底都人士の想像し能はざる所のものなり。

第二農業は人をして健康ならしむ、農業の生活は戸外的生活なり、勞働的生活なり、既に戸外的なり勞働的なり、加之ならず、田園の空氣は最も新鮮なり、人健康ならざらんと欲するも得んや、實に健康は百幸の母なり、之を都會にありて、黴菌と塵埃とにて、泥の如く濁れる空氣を呼吸し、刻々自己の壽命を縮め行く都人士に比較す、其の幸不幸豈に天地の差のみならんや。

第三農業は人をして着實ならしむ、所謂る播かぬ種は生へぬの諺の如く、如何に性急なればとて、播きたる種が直ちに實ることとあるなし、一たび農業に手を染めなば、女子の共通病たる彼の儚き虛榮心や、飽くなき僥倖心の如き忽ち煙の如くに消え去るも必定なり、然れば則ち當今の女性の通患なる、煩悶病、黄金病、羅綾熱の如き、即座に全癒するを得べし、故に曰く農業は人をして着實ならしむと。

第四農業は人をして科學的精神を養はしむ、人苟くも一び農桑に從事し、天然と接し其の發達、其變遷、其活動の妙用を仔細に觀察する時は、自ら宇宙進化の理法を解得するに到るべし、加之ならず嘗て學校の教科書にて、修得したる植物學、動物學、物理化學、乃

至天文學氣象學礦物學等は、實地の經驗によりて、今日まで死したる無味乾燥の理窟は、始めて生命と血肉とを賦與せられて、其の趣味の津々たるは云ふまでもなく、又た測るべからざる多大の實益を得べきは疑ふ可らざるなり。

第五農業は人をして美趣を解し、詩情を養はしむ、支那随一の詩人陶淵明が、官を抛ち歸去來を賦して、田園に歸り、人生の功名利達を捨てゝ農業に從事し傍ら詩興を養ひたるとは、諸孃の能く知る如くなるが、英國の第一流の詩人、オーヅオルスの如きも、又田園詩人にして、其詩材は悉く農業より來り、名もなき幽草にも解き得ざる天地の妙機を寓するを詠じたるが、其の他數ある田園詩人に到りては殆んど枚擧に遑あらず、亦た以て、如何に田園生活が詩味と美趣に富み、ふ且つ自然の恩賚に渥きかを知るべし、嗚呼多趣味なるかな田園の生活や。

▲田園生活に還れ

田園生活が詩趣に富み、快樂に富み、兼ねて實益に富めること上述の如し、しかも諸孃は尚は都會に虚榮の影を慕ふて、塵埃の生活を續けんとするか、知らずや故郷の春色は正に酣にして、鶴首卿等の歸郷を待望しつゝあるを。

語を東都風塵の中に沒頭せる我が姉妹に寄す、試みに案頭に瞑目し、一び想ひを故郷の山水に馳せよ、歴歴眼中に湧き來る者は、諸孃が夢寐忘るゝ能はざる曾遊の山川なり原野なり、見よ絶頂に雲を戴き霞の帯を纏ひつゝ、莞爾として微笑を禁せざるが如きは、諸孃が曾て其山麓に蕨を取りたる某の山にあらずや、見よ淙々春の平和と長閑さとを唄ひつゝ、悠々と流れ行くは、諸孃が曾て弟妹と螢を追ひ、魚を釣りたる某の小川にあらずや、更に見よ平蕪迢々として限りなく、春風習習と吹き渡る所、土筆、嫁菜など簇々と萠え出で、雲雀の高く中空に囀るは、孃等が曾て朋友相伴ふて桔梗菫を摘みたる野原にあらずや、庭前の柳、庭後の水、皆な滿眼の生意を漲らしつゝ、孃等の歸郷を待ち詫び

つゝあるを見ずや。然り故郷の春色は今正に酣暢に諸嬢の歸郷を待ち詫びつゝあり而もこれを待ち詫びつゝあるもの、何ぞ獨り無情の山川原野のみならんや、諸嬢の老親は、鬢邊に白霜を加へ、腰間に梓の弓を張り、門に倚り悵然として嬢等の歸郷を待ち焦れつゝあり、嗚呼田園荒れんとするに何ぞ速に歸らざる、故郷の春色は今正に酣なり。

●卒業を祝する文

螢の光、窓の雪、五とせの勤學を積ませたまひし効空しからで、こたび優等の御成績にて御卒業遊ばされ候由めでたう存奉り候、げにや世の中の進歩は驚くべきばかりの速さにて女大學今川帖を、こよなき女子の寳典と心得しは疾の昔しの夢と過ぎ去り、せめて高等小學を卒業せでは一人前の女にあらずと申しゝは、つい昨日今日の事と思ひけるに、今ははや財産よりも容姿よりも高等女學校卒業といふことを縁談の要項とする時勢とまで相成申候、あなた樣には天生の御才識を備へたまふ上に今こゝに高等の教育を卒へさせたまひし事なればいはゆる錦上を花を添ふとや申すべき御卒業を祝ひ奉ると同時にゆくすゑの御良緣さへ想ひ遣られていとゆかしう存じ候、御兩親樣の御悦いかにぞや、あなた樣の御うれしみいかにぞや、御顔を拜しまゐらせたく候へども家にさゝはりの事これあり候まゝ取りあへず書中を以て御祝詞申述べ候かしこ。

膽氣と同情

故奥村女史を以てナイチンゲールに比する。兩者とも國家に盡した誠意に異なる處はないが、前者は膽氣を以て成功し、後者は同情を以て成功して居る。

聞説らく女史が十七歳の頃、男裝して長州に乘込み、高杉晋作に會見した時、女史は例の調子で「貴下の同志中には反覆常なき腰抜武士は一人も御座るまいな」と念を押すと、高杉は言下に「左ればなり。女を男と見誤る樣な間抜武士は一人もない」と一喝した、ので流石の女傑も顔を冷して辭し去つたとやら。

我が家族會

中島德藏

△會の起原

家族會は一昨年の春始めて之を開いたが、此會の兆は遠く丁酉倫理會の起つた當時からしてあつた。丁酉倫理會なるものは、最初はほんの四五人の會合で、格別廣い場所も要らなかつたから、會は何時も廻番にして、會員の家で開いて居つた。會を開く時には其家の妻君なり、家族なりが自然其處へ出て來て何彼と斡旋をされるので、一層引立つたし、會員相互の親睦を保つ上にも一方ならぬ助力を得た。それで其時より既に家族は實に好いものだと云ふ思考を有つたのであつた。

然るに其後會員は漸々增して各自の六疊や八疊の座敷では迚も集ることが出來なくなり、別に大きい會場を借りて開會することに成つた爲に、以前會の花とも見えた家族は全く會に出づる機會が無く爲つた。で全會員も是れでは不可ぬと言つて色々考案を運らしたが、就中故大西博士などは最も熱心な方で、家族を集める爲に何か一つの會を設けたいと云ふことを始終言つて居た。

此等の考が根本となつて生れ出でたのが即ち今の家族會である。併かし此會をほんとうに成立せしめるに付ては今一つ他に力を添えたものがある。それは丁酉倫理會員の妻君達が設けてゐる

△すみれ會

である。尤もこれは强ち倫理會員の妻君達ばかりの會では無いが、其會員の多分は倫理會員の妻君で占めてゐる。其の會長は元良博士の夫人、副會長は大塚博士の夫人で、其の目的は婦人間に交際して相互の親睦を保つ、と云ふにある。此の會と、丁酉倫理會とは協力して玆に新たに家族會なるものを設けたのである。

家族會は斯の如き成立であるから、會の仕事は萬事すみれ會の幹事と倫理會の幹事との協議に依て爲すのである。家族會は右の如く婦人の會と男子の會との協力に依つて設けたものであるから、此の會へは婦人も出れば男子も出る。又小供も出れば大人も出る。所謂老若男女の會合である。されば

△本會の目的

の如きも頗る要領を得たもので、會員が集つた時に「本會の目的は家族相集つて共に無邪氣に小供らしく樂むにあり」と議決した。要するに家族間の親睦を保つが即ち本會の目的である。會は春秋二季と定めてある。毎會集る者はざつと三十人許で、場所は向島の百花園、小石川の植物園、或は上野の精養軒などを選んでゐるが、世間幾多の婦人會とは異つて極めて質素なものである。で會を開いた時には如何云ふ事を爲るかと云ふと、會員は皆互に無藝の方だから其のやる事がなか／＼可笑しい。

向島で集つた時などは浮田君は得意の謡曲をうなるし、下田君は詩吟をやつた。私なども一つ拙手なおどけ話か何かをやつた。尤も或時は巖谷君に講演を願つたこともあれば、或は専門の音樂家狂言師などを雇つたこともある。上手やら拙手やら色々様にやつてゐるが、併し拙い藝も

△會員の藝

と云ふ所から見れば又一種の妙味があるし、又誰れの話を聞いて有益であつたとか、或ひは誰れの藝が面白かつたとかと、別に取立てゝ言ふ程のことは無くとも、家族會へ集ると云ふ其事が既に大いに趣味があるのである。我が會の最も重を置く所も亦た此の點である。

（伊尾生筆記）







世界第一の婦人博覧會

窪田寛六

△倫敦にて見たる事共

倫敦のアースコート婦人博覧會は丁度七年前で折しも巴里大博覧會の開催中であつたから、見物序に出掛けました。その會場は随分大きなもので、確か四五千坪はあつたと思ひます。其の館の内には、職業部あり音樂部あり、家政部あり、教育部あり、育兒部、衛生部、割烹部、遊戯部、美術、工藝、服裝、風俗などの部類を設けて、其處へ婦人に關する世界各國の事物が蒐めてあつた、尤も其の陳列品は全世界の婦人に關するものとしては材料は甚だ乏しいとの感はあつたが、歐羅巴大陸の婦人や英國の婦人に關するものは十二分に網羅されてあつた。

△職業部

この部は重に女子の裁縫を爲てゐる所、造花細工を遣つて居る所、レースを作つてゐる所、刺繍を爲てゐる所など色々の小分類があつて、たとへば上州の女は糸を繰り、岡山の女は麥藁細工をするといふ様に愛爾蘭の婦人ならばレースを作り、佛蘭西の婦人ならば編

物をする、各々其の獨特技術に從つて仕事を遣つてゐる、觀覽者は其處で各國婦人の種々樣々の作業の狀態を知ることが出來るし、又其の作つた物は參考に供へる爲に一々觀覽者に即賣することを許してゐたから、これには如何な器械を使用するのが利益であるかと云ふ事をも備に研究することが出來て、觀覽者には餘程利便を與へてゐた。

△遊戯部

此處には室內遊戯、戸外遊戯、子供の遊戯等色々の小分類があつて、何人にでも演技を許してあるので、孰れを見ても花の如き女子供が盛んに飛び廻はつて遊んでゐる。而かし男子に關する遊戯は一つも見受けなかつた。それから同じ敷地の中に廣い庭があつて、其の庭中には一寸した池が造られてあつて、其處にはウオーターシユート(舟滑)を設けて一人前六片づゝで乘せて遊ばせてゐた、婦人も子供も大そう愉快げに遊んでゐた、此のウオーターシユートは私が之を土產にして歸つて一度大阪の博覽會に遣つて見せたから既に御承知の方もあらうが、それは、高い所から水の中へ勾配を附けて軌道を敷き、其の上へ舟を走らせて勢ひ好く水を打たせると、打たれた水は大波を立てゝ左右に引分れ、舟は其の間を二三度ばかり浮きつ沈みつ波に揺られて漸く姿を現はすと云ふ仕組になつてゐて、舟に乘れる者も岡で見てゐる者も双方共に愉快を感ずる壯快なる遊戯である。

△音樂部、割烹部

これは如何かと云ふに今週の水曜日には女子大學校の生徒の組、木曜日には明治音樂會の會員、金曜日は佛蘭西樂手の誰々、土曜日は伊太利の名手某々と云ふやうな工合に一々プログラムが出來て居て、日々新樂手が入り立ち代つて互に秘曲を演奏してゐるのであるから見物は每日代つた樂を聞くことが出來る。又割烹部へ行つて見ても矢張り其の通りで、其の道に堪能な婦人か諸方から集つて來て、色々な新趣向の料理を作りつ

つ觀覧せしめ觀覧者に御馳走をして食はせる。これから又其外には圖書室が設けられて、其處には家政、育兒、裁縫等など婦人に關するいろ〳〵有ゆる新刊の著書、雜誌、新聞などが備へられてある。又尤も珍奇のは貴婦人達の秘藏されてゐる寶物類が山のやうに飾り立てられて館内は邊り眩き迄に燦爛たる光を放つてゐる。

△婦人の見世物

婦人博覧會の入場料は金二志（約一圓）であつた、それを拂へば館内を何所でも自由に見物されたが、其の中にたゞ一つ毛色の變つた珍らしい人氣物があつた、其れ丈は又別に觀覧料を徵られたが、それは矢張り館内に一つ大きく區劃して、其處へ世界各國の婦人を集めたものであつた。こいつが中々おもしろい趣向なもので其の中へ這入つて行くとぐるりと柵を廻つて見られるやうに爲つてゐて、まあ淺草の奥山といつたやうな工合式で幼稚な眼には猶更不思議愉快に感せられて其處へ佛蘭西、西班牙、瑞西、土耳其、墨其西古、亞米利加合衆國、加奈陀、日本、支那、印度等凡そ二十餘ヶ國の婦人を其の國毎に二人なり三人な



り取合をおもしろくしてならべ出してある。露骨に言へば先づ世界各國の婦人を集めた大規模な觀世物である。これは稍々極端に趨つたもので、外國人の側から見たら如何か知れぬが大抵の日本人が見たら此は怪しからぬと思ふたに違い無い。現に私なども其處へ二人の日本婦人が出てゐたから、其の婦人に向つて何故恁んな觀世物見たやうな所へ雇はれて來たのか、どうも國の人民を晒らし物同様にしたのはひどいと云つて憤慨した次第であるが、何は兎もあれ思ひ切つたものである。

△服裝と背景

併し乍ら又一面から見て博覽會の性質と其の時の趣向などから考へて見ると、是等の設備は强ち無益のものとも言へぬ。否大に益する所があつたと思ふ。先づ其の婦人の服裝は如何にと言へば、皆各々其國に固有した處の服裝を着てゐる。そして其の居る所は如何かと言へば、各々其國々の國粹國風を其儘作り出した屋室である。例へて見ると、日本の部へ行けば、其處には上方風の十疊敷位の座敷を造つて、中には額や、掛物や、生花や、琴、三味線など室内裝飾等のものよろしく具合好く粧點ひ、其の隣りには四疊半の茶室がしつらはれ、其の庭には下駄が並べてあり、手洗鉢が、据つてをり、石燈籠あり、袖垣あり、前栽あり、建仁寺垣あり、是等日本風の按排細かく注意が届いてあつて、内には婦人が茶を立てゝゐるといふ工合實に三千里外の異風殊俗を其儘活動せしめてある。又佛蘭西の部へ行くと、矢張り佛蘭西風の居室を造つて、之れに佛蘭西風の室内裝飾を施してある。尤も奇異なのは、土耳古、印度、亞弗利加の半開國で實に觀覽者の眼を驚かしたのであると云ふやうに一々其國の國風を示してあるから、觀覽者は此處を見物した丈で、土耳其の婦人は恁んな所に住居つて、伊太利の婦人は恁んな衣服を着る、何國の婦人は恁んな風だと云ふやうに世界各國の婦人の風俗や生活狀態が一目の下に判明了解される譯で、廣く旅行を爲ぬ者に取つては固よりの事又旅行を爲て

来た者に取つても之れは非常に趣味を感じ利益を與へるものであつた。

△貴婦人と博覧會

併し此の婦人博覧會に於て各國婦人を集めて観せたが為に如何程観覧者の智見を啓いたにもせよ、人を観せ物にしたと云ふ事は何うも穏かで無かつたと思ふ。此の一事を外にしては他の各部は何れも有益なものゝみでそして、倫敦市中の地位名望ある貴婦人等が各其の一部を受持つて銘々其處に自分の手腕を發揮してゐたのを見たから誠に壯観であつた。



時は恰かも秋晴の好季節に當つて人出は多く、倫敦附近の者で之を見ぬ者は殆んど無かつたと言つても可い位で、私なぞは好の道とて三四回も見に行きました。加之對岸の巴里博覧會へ往復する者は一度は必ず足を倫敦に止めて此の博覧會を見物したので入場者は毎日一萬人以上の多數を占して非常に盛んな博覧會であつた。我が婦人博覧會も殆んと東京勸業博覧會開催中の好機に開くと言へば、諸君の盡力に依つて屹度盛會となるのであらう。

米國婦人の求婚運動

越嶺

米國富豪の子女にして年々巨萬の嫁資を携へ、歐洲名家の子弟と結婚せん爲に大西洋を渡航する者擧げて數ふへからず、米國の資金は此の如き案外の道によりて海外に出るが故に、同國の經濟學者は之を防止せん爲に種々の畫策を廻らせども、此道ばかりは如何ともすべからず。

原因は生活程度の相違

米國の妙齡女子にして、歐洲に渡航して婚姻せんことを理想する者甚だ多し、是れ何故なるかと云ふに、米國豪家の子女は虛榮心あるが故に、其の好奇心を滿たさんが爲に斯く遙々歐洲の天を指して求婚に出懸けるものなりと思へども、必ずしも之が爲のみと云ふべからず、米女の歐男に嫁する主要の理由は、經濟上の觀念より出るものなり。

其故は、紐育あたりの豪奢の生活は之を巴里若くは倫敦のそれに比すれば、殆ど四倍若くは五倍位の費用を要す、斯の如き狀態なればよしや二三十萬弗の嫁資ありとて、紐育紳士社會には一顧にも價せざれども、歐洲に渡り行くときは、兎に角サロンに出でゝ幅を利かすに足れりとす、加之ならず、米國婦人は能く己れを知れり、自分の生育したる土地に於て婚姻するときには、嫁資豐ならざれば良人と自由に睦み語らふこと能はざるの事情あり、何となれば良人は生活の爲終日外に出でゝ働き、家庭生活なるものは、有れども無きが如き光景なればなり。

米女と歐男との結婚によりて何程の嫁資の歐洲社會に落るかといふに、大富豪の娘にして嫁資七千五百萬法と云ふが如きは、先づ除外としてまづ大抵一千萬法、五百萬法、四百萬法を以て飛切りとなす、多數者の嫁資に就て言へば、二十萬弗即ち百萬法を過ぐるものは甚だ尠し。

貴族の稱を望む

米國の妙齡女子にして充分の嫁資を有する者は、歐洲の紳士社會に於て適當の配偶を撰擇するの外餘念なし、米女に取りて適當の配偶と云ふは、未來の妻に全然心を委ね、米國に無き貴族の名稱を之に與ふる良人を云ふなり。



英國の貴顯紳士はチカゴの市場に賣口甚だよし、その理由は極めて睹易し、先づ英米兩國は共に弗の國にして、弗主義を遵奉し、且其の言語の共通なるところより何かにつけ甚だ便利なり、故に米國婦人にして英國に行くも、故國に在るも殆ど同樣の心地せられ、如何なる交際社會に入りても異鄕人視せらるゝの憂なし加之ならず、米國の女性が一たび英國の貴公子に嫁ぐや直に自らも貴族の名稱を得、一生身の光彩となり華族社會に出入しても、誰一人として其の出所に氣を附けるものなし、此等は米國妙齡女子の虛榮心と好奇心とによく投合する所なり。

子寶は尠し

是を以て英男米女の結婚は日に月に頻繁を加るに至る者なり、今や米國の女性にして英國の公侯伯子男の夫人となりたる者のみにても其數實に七十四人あり。右は其の名の顯然たるものゝみ、其外に名の顯れざるもの甚だ多し。

米女の結婚は英國の貴族社會に多大なる弗を携帶したれども、嗣子を齎すこと甚だ尠なし、英國の貴族領地を領する夫人三十八人中十三人は子なし、五人は令孃のみにして、五人は一子のみ、要するに三十八人中子を擧げたる數僅に三十九人に過ぎず。

巴里の市場

巴里は世界の都とも云はれ、米國の婦人を誘引するの力特に強く、就中巴里の貴公子と云へば、婚姻場裡に於て殆ど競爭者なき程名聲嘖々たる者なれば、米國の妙齢女子にして巴里の貴族社會に未來の良人、理想の配偶を撰定せんとて 焦心 苦慮する者は 甚だ多しとす。

今や佛國にては米國出の公爵夫人三人あり、侯爵夫人の有名なるものは三人、伯爵夫人の有名なるものは十七人、子爵夫人及び男爵夫人の世に知れ渡れるものを擧ぐれば、前者に一人、後者に五人あり。

生活の安き處

米國婦人にして伊太利の貴族に嫁ぐ者は甚だ尠し、羅馬の都は歐洲に世俗的榮華を求めん爲に渡航する婦人には何等の興味をも與へず、且伊太利貴族の家傳は容易に新敎徒たる女子と結婚するを許さゞる不便もあり、さりとて米國夫人は中々改宗を肯んずるものにあらざるなり。

此等の不便不都合の爲か、伊太利の貴族社會に入りたる米國婦人の數は極めて鮮少なり、其の代りに一たび同國の貴族社會に入りたる以上は、名聲暇に揚るを常とす。

且伊太利は倫敦や巴里に比して甚だ暮し易く、僅少の費用にて立派に面目を持することを得る國なれば、

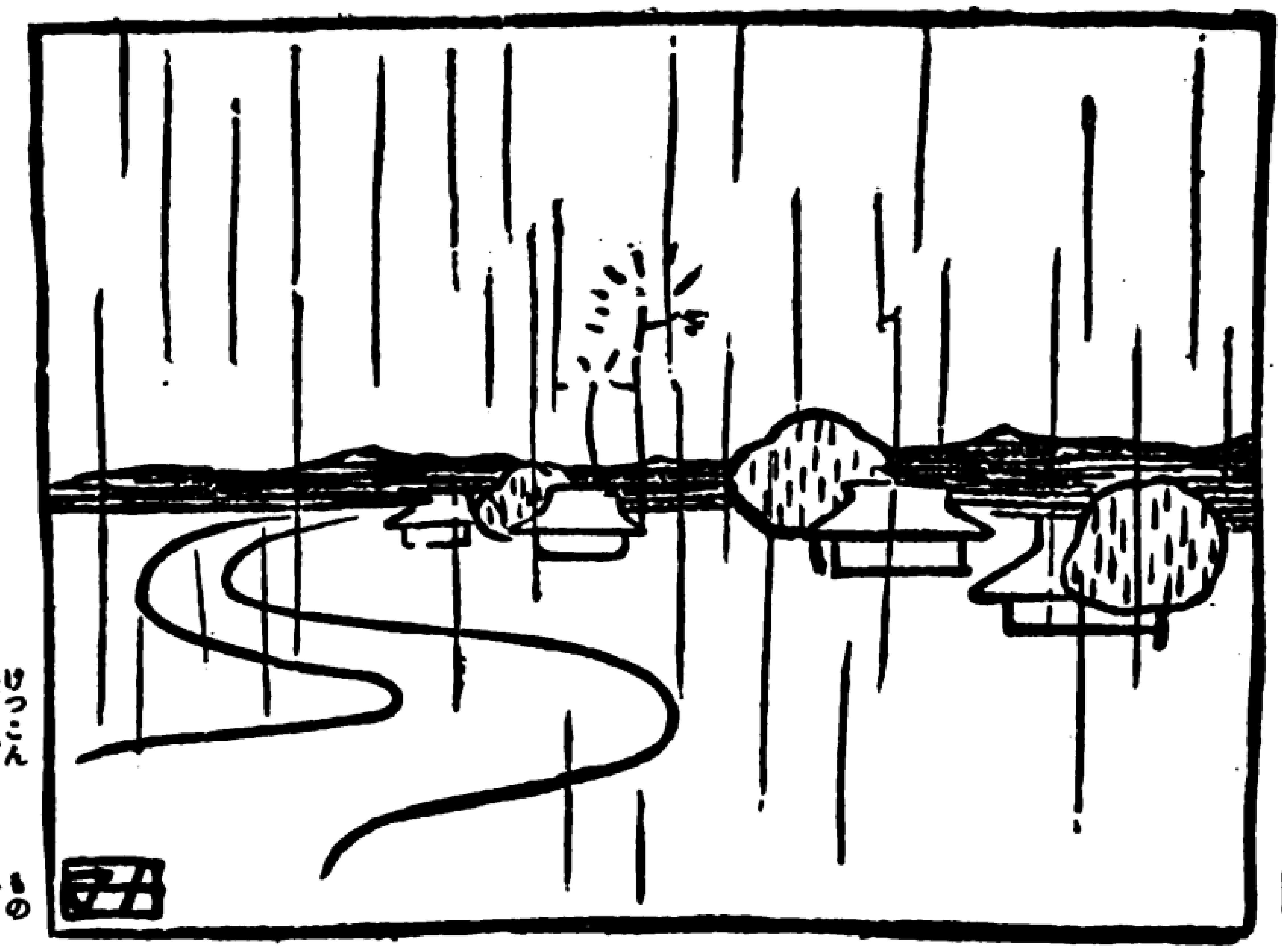
米國の大富豪家ならざる者、所謂中產の人々は今や多く居を羅馬に卜するに至れり。

此種の人々の子女は必ずしも貴族と結婚するとは限らざれども、多くは羅馬市氏の第一流の家庭の婦人なるものなり。

女の頭の低き所

獨墺の貴族と米國婦人との結婚に至りては倚一層少數なり、身分の同じからざる結婚より生れたる子は父の名義を繼ぐこと能はざる嚴制もさることながら、伯林やヴイエンナあたりの住居は紐育又はチカゴに住み馴れたる妙齡女子の好奇心を引く所のもの尠きも亦之が原因たるべしと思はる。

勿論獨墺なりとて、舊華族の外に新華族も多くあることなれば、米國富豪の子女との結婚は必ずしも絶對的に不能なりと限りたる譯にもあらず。



乍然獨逸の新華族の貴公子と弗國の貴族の令孃との結婚の倚甚だ尠き所以は、伯林の住居が米國婦人の嫌ふ所なるに基くものなり。

加之ならず、獨逸人は一體に倨傲にして、同國の婦人は聽從の美名の下に頭の上る期なければ、米國の獨立自由の生活に馴れたる女子には堪へ得べくもあらず。

若夫れハプスブルグなどに至りては墺國第二流の華族と雖、金錢上の結婚は太く之を嫌惡するの習慣あり、此の先入の爲に米國婦人なでと結婚する者は倚更に尠し。

西班牙の高貴の人々は身分の釣合はざる婚姻を好ま

ざるものなり、設令後日金と名との交換的婚姻を結ばざるべからざる必要に迫まることありとするも、決して之を北米には求めずして、之を南米に於て求めんと欲するならん、且其の條件としては少くも冬期には世界の都なる巴里に榮華なる暮をなして、同都の華族社會に交際するにあらん。

右に就て我國の女性にして婚を海外に求めんと欲する者は、未だ聞見せざる所なれども、同じ國内に於て如何なる身分境遇の者に嫁せんとするかを思ひ合すれば、女性の心は東西變りなきを見る可し、但だ我國にても華族社會の婚姻には一種の制裁あり、否、一種の規定と云はんか、先入と云はんか、兎に角平民婦人の容易に攀登すべからざる一種の城壁の存するあるが故に、米女歐男の結婚の如く容易なるものとして見るべからずといへども日進月歩の今日、大勢は遂に金滿的平民婦人をしても一躍直に貴爵夫人とならしむるに至らんか。





呉組子刀自の舍監實驗談

婦人記者

刀自は呉黄石氏の長女で安政二年生れですが、統計學者呉文聰氏の妹君、醫學博士呉秀三氏の姉君、理學博士男爵菊池大麓氏、理學博士箕作佳吉氏、理學博士箕作元八氏と從兄妹に當らるゝのです。刀自は最愛の一令孃を失はれてから、身を教育事業に委ね、明治女學校の舍監となられました。それで刀自は、嚴師と爲り慈母と爲つて力を盡すこと二十年一日の如く毫も渝らないのです。刀自は嚴肅な資格である上に、儒者の家庭に生ひ立たれたので『私は理窟家で御座います』と自ら言はるゝ位、隨分嚴ましい方ですが、明治女學校出身の婦人方が、常に足繁く刀自の許に慕ひ來るを見ますと、如何に愛情に富めるかを知り得るので御座います。昨年より神經痛に罹られて、大抵病床に在られるのですが、病を勉めてその實驗を語られました。

▲舍監の熟練

私は六歳の女兒を亡くしました際、一時非常に落膽致しましたが、これが動機となつて基督教に入りました。それと同時に、私は此世に在る間は、何か自分の天職を盡さなければならぬと考へまして、我子を育てる代りに、他人の御子さんの御世話を力の限り盡して見たいと決心致して、此學校（明治女學校）に入つたので御座います。ハイ其當時は教授も致して居りましたが、ホンの裁縫とか禮式とか、家事の心得なぞ女一通りの事を教へました位で御座いました。監督の役と

申すものも、最初の内は却々心配で御座いまして、彼樣しては世間の思惑が如何であらうか、斯樣しては校長に迷惑を掛けはせぬかと、些細の事にまで氣を揉んで決斷に乏しく、氣を揉む割に好結果も無くて困りましたが、永い月日を積むに隨ひ、自然熟練――熟練と申しては可笑しう御座いますが、先づ呼吸が解つて參るのです。十年の後にはズット樂になりまして、唯今では最早何樣な面倒な事を持つて來られても、立どころに解決し得る樣になりました。永い間の經驗上、世話する女學生達の意向も判りますし、事件の成行も大抵前から洞察し得らるゝ樣に爲りますから、自然果斷の處置を爲し得るのでしやう。これは熟練とは申すものゝ、基く所は我子を思ふと同じ赤心が養成され、此赤心から萬事を割出しますから、大に心安くなつたのだと存じます。赤心から處置致した事は、假令誤解されたとて、少しも疚しいとは無いので御座いますから……。唯今では此校に居りましても、我家に居ると同じ心持なので、別段勤めて居ると云ふ窮窟な感じも無ければ、他人の御娘さんを御世話致して居ると云ふ感じも御座いません。

▲女學生の今昔

昔の女學生は周圍の障礙に抗しても、飽くまで志望を貫かうと云ふ者、即ち抱負の大きい婦人ばかりと申して宜い位でした。唯今では一般に抱負の何のと云ふよりは、父兄が義務として學ばせると云ふ勢ひになつたのです。先ア昔の女學生は自動的、今の女學生は他動的とでも申しませうか、隨つて年齡も昔は餘り若い方は無かつたが、今は極妙齡から來られると云ふ工合で、監督上餘程呼吸が異つて參りました。

▲粗暴なりし一女學生

多勢の御世話致す中には、樣々な方が御座いますよ。古い生徒の内に校長の手古摺つて居られた一女子がありまして、私に特別の監督を托されたのです。此女子は傳道が志望で、精神は先づ確乎して居る方でしたけ

れども、動作が如何にも粗暴で、而して强情張りで困つたのです。一寸致した事が、驅け込んで來たまゝ下駄を筋違に脫いで上り込むと云ふ風ですから、貴女は折角傳道を目的として勉强されて居ても其動作では人が服しません。幾ら火の如き熱心を以て、他家へ傳道に入り込んでも、飛び跳ねたやうな下駄の脫ぎやうを其家の人に見られたらば、直に愛想を盡されますよ』と忠告致しましたが、兎角反抗することが多かつたのです。或日私は室へ呼んで、懇々と說諭致し、貴女が如何しても改めなければ、校長に告げて退學させますが



明治女學校

如何ですとまで詰め寄せました處、其後は大きに落付きまして、卒業後フエリス女學校へ入り、唯今は米國へ參つて居ります。可笑しい事には、在校中敵のやうな感じがあつたらうと想はるゝ私の許へ、フエリス女學校在學中に度々尋ねて參り、以前の感じを正直に話すのでした。『先生が餘り嚴しいので、憎らしくて堪らず、學校を出たら往來で出逢つても挨拶もしますまいと思つて居ました、併し憎らしくても流石は先生だ、彼の退校云々の御言葉の際には冷りとするほど怖かつたのです、それ程厭であつた先生が離れてから何とな

く懇しく、且つ先生に言はれたとが、今となつて一々思ひ當る節ばかりなので、近頃眞實に難有味を感じました」と言つて與れました時は、私も誠心が屆いたのかと何樣に嬉しかつたか知れませんでした。

▲何時も一世一代の心持で爲せ

私は始終寄宿の部屋〳〵を廻り、戸棚の中を見ては警告致すのです。『外へ出掛ける時、脱げ棄てた常着をグル〳〵と丸めて戸棚へ拋り込むやうな事をしてはなりません、如何ほど急な用事で出る時でも、切て袖疊みにして御藏ひなさい、グル〳〵と丸めるのと、チヨツト袖疊みにするのと、時間に於て何程の差がありませうぞ、火急の場合に整然と處理して亂れないのは婦人切要の心掛で、此小事を以て大事を律する事が出來ます。急な場合だからと云つて取亂す者は、優然した場合にも始末が惡いでせう。戸棚の脱棄着物が、整然と疊んであるのは此上も無いが、假令袖疊みにしても、手數に差は無くつて、心掛の差が大層違つて現はれるもの、丸めて拋り込んであるに至つては、言語道斷であります、貴女方が若し今日外出して、不慮の死に遭ふたと假定したなら、戸棚の中の遺留品は末代の汚名を遺す證據となるでせう。明日をも知り得ぬ人の命だと覺悟し、一寸出掛ける時も一世一代の積りで整然と始末して置きなさい、私なども唯今でこそ身體が不自由で思ふ通りには出來ないが、戸棚や引出の中は何時人に開けて見られても、不都合の無いやうにと心掛けて居るのです』と、斯う云ふ風に嚴密に注意警告して居ります。

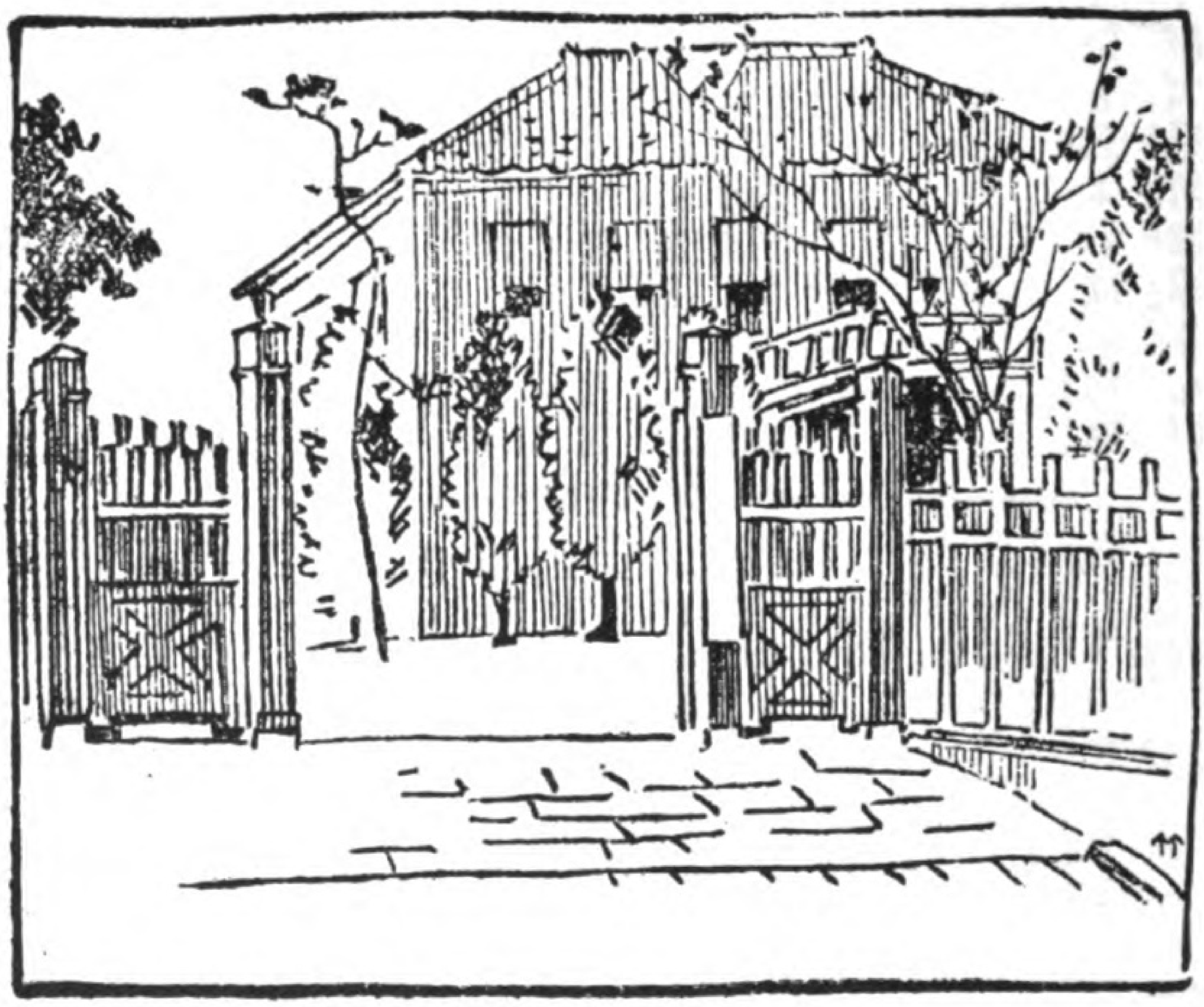
▲髪屑の始末

是もよく出る小言で御座いまして『髪を梳かして出た毛屑は叮嚀に紙に入れるとか、袋へ入れるとかして、紙屑籠へ御入れなさい、毛屑が其處らに散らばつて居るのは、他人が見て厭な心地ばかりで無く、貴女方も昨日まで頭を飾つた大切な毛の一筋が淺ましい姿で散つて居るのを見て、厭な感じがしませぬか、紙屑

籠へ入れて了へば、屑撰の手に拾ひ出されて髢と爲り、出て來るるものです。如何なる貴人の頭を飾るか知れません、貴女方の注意一つで厭な汚い物が立派な用に立つのです』と、先づ斯う云ふ風に、講釋がツイ長くなるので御座います。

▲家財の保存

箒の用ひ方一つで、唐紙の下部が直にいたむのです。粗未な唐紙なら三年に一度ぐらゐ張り替へても宜いでしやうが良い唐紙を然うチヨク／＼張り替へるやうでは大層な費用になります、總てつまらぬ品物でも大切に保存して居ると其品物に對する自分の愛も加はり、品物も亦價値が



跡見女學校

品物取扱の良否は、主婦の性質が判るから、必ず實行して下さいと、先づ斯樣な鹽梅に口うるさく申して居ります。

▲私の責任

私の生家は理窟ッぽい家庭でしたから、同胞が皆理窟家で御座います。特に私は理窟の固りで、何事によらず理窟を附ける方ですから、小言も自然多く、生徒は隨分閉口して居る樣で御座いますが、私は何時も生徒に斯樣申すのです、細かい事だと云つて私が抛擲て置きましたならば貴女方が軈て家へ歸つて御母樣に注意された折、學校の先生は其樣な嚴ましい事

を仰しやいませんでした、と貴女方が御答へでしやう。それでは私が貴女方の御母樣に相濟みません。月々少からぬ學資を送つて托された大切の娘御を、些少の家事さへ滿足に出來ない樣なウッケ者に仕上げては、誠に申譯が無いのです。私の厳しい小言が、假令實行が出來ないにしても、貴女方の耳に遺つてさへ居れば、御母樣に仰しやられた時、學校の先生も矢張り然う仰しやいました、と御答へ成さるでせうし、假令貴女方が私の小言を押し隱しても、貴女方の頭腦には思ひ當つて居られるでせう。何れにしても力の及ぶだけ小言を申して置くのが、私の責任で御座います、と先づ斯樣に導いて居るのです。

▲女の獨裁は一代一度か二度

御嫁さんが舅姑と折合が宜くないと云ふのは（勿論家に依り種々な事情もありませうが）、兎角御嫁さんが新教育を振り廻して、獨裁したがる故でありませう。兎に角家事に就ては、舅姑の方が經驗が多いに違ひありませんから萬事これに相談を掛け、成るべく從つて歩むべきです。善く考へて見ますと、老人が普通の人間である以上は行着先の考へは若い人と大した相違なく、唯だ廻り道か近道か位の違ひです。左から行かうが右から行かうが、善い道にさへ達すれば宜しいので少々ぐらゐ遲れても長者に從つて歩むのが却つて安全と存じます。これは舅姑に對するばかりで無く、良人に對しても、此心得が必要でせう。尤も何樣な場合にも器械的に冷淡に默從して居るが宜いと申すのではありません。これでは前途危いと云ふ見通しの付いた場合には、長者の爲め家の爲め自ら奮ひ起たねばなりますまい、併し此の見通しが却々尋常の婦人に付くものでも無く、又た婦人が獨りで斯うと斷行する樣な場合は、女の一生に一度か二度位しか無いものです。これは私の實驗上確かに證據立てる事が出來ます。





江木博士の家庭

雪子

記者は人の妻としては如何にして良人に仕ふべきか、夫婦としては如何なる生活を送らば趣味ある家庭を作り得らるべきか、又一家の女主としては如何にして下女を使ふべきかなどの腹案を携へて、法曹界の名士江木博士夫人を訪問いたしました。

博士のお宅は神田淡路町、大名門のいかめしく、明け放たれたる障子の蔭から電氣の光に古風の衝立鮮にかざられた洋風の應接間こゝには大なる机と楕圓形の卓子と數脚の椅子とが置かれてございます、やがて夫人榮子はお年二十九歳と申されますが、打見はずつとお若くて二十四五位に伺ひました、流行の丸髷姿うつりよく、藤色がゝつた縞お召の御小袖、同じ色の綸子の御羽織、帯は厚板か何かで、繊細な金ぐさりがちらと大體が粋なお粉粧で烏の濡羽を欺くといふ黒々としたお髪の艶やかさ、御色のくつきりと白いのが一しほ艶に、冴へたる御眸尋常なお口元など記者はうつとりと見惚ました、やがてお話は

△良人に仕ふる術

斯樣な事を伺ひましては如何と存じまするがと申せば、夫人は片頬に微笑を含まれまして『何も術などゝそんな事は存じませんが、私の考へますには夫婦はお互に敬畏の念を失つてはなりません、結婚の致したてには隨分妻の方からも良人に敬を盡して居るんでございますが、漸々日が經過ちますと妻は可愛がられると圖に乘つて、しまいには爭をも致したり不和にも成つたりと云ふ樣な譯になりますから、私は唯もう敬と云ふ事を忘れてはならないと自身に思つて居りますよ、良人は私を小供のやうに思ひますでせう、私は小供の遊が好きでございまして、度々良人の吹き出すやうな事がありましたり、又は外がはの用向で不愉快な顔を

して機嫌の悪い時抔には私が側から突然滑稽な事を申せば矢張それで眞面目な顔も花が咲てにこやかに成ります。

△小供が大好き

一體私は小供が大好きなせいですか、どうも無邪氣な遊を致すことを好みますよ、先達お節句の時には此の年になりましてお雛様を飾りましたんで良人が大笑でした、其れから女子大學の生徒さん十七位迄の令孃さん方をお招ぎしてお客を致しました、皆さんが百人首でも致そうかと良人を呼んでおぢーさんさあ讀んで下さいと仰つしやいました所が良人がおぢーさんと呼ばれたから讀んで遣らないと申ました令孃さん方は其れではお父さんと急に頓智をきかせましたから夫れならば讀んで上ると承知致しました、良人も平常事務に向ひますと眞面目になつて側見もしない位ですが小供のやうに年少い令孃達と遊んでますとまたそれを樂しみに思つて居ります。

△日本一の美男子

「世には私の前で無造作に仰つしやる方がありますよそれはあなた斯うなんですあの江木さんは○○會では一番おかしい顔だなど丶云はれますから、私は腹が立つてあなたそれは失敬ではございませんか、私の前で良人を不男など丶仰つしやるのは……其れでも私は江木は日本一の美男子と心に誇つて居りますよ、私の妹達が集りました時お兄様の鼻はおかしい事ねと云ひますから私はおかしいなど丶云つてはいけませんよ、お前方のは出來合の鼻で、お兄様のは舶來の鼻で上等なんです……私は十日計前に退院しましたが、少々療治をする爲に金杉病院に入院して居りました、金杉さんは醫者仲間で一番不男と云はれてお出なさる、すると或時付添の看護婦が私に旦那様は内の先生に似て入らつしやいますねと云ひましたから、私はすかさず江木は日本一の美男子なのに先生によく似て居るとは良人を侮辱したものではありませんかと云ひましたら、看護婦も始めて氣が付いて室の戸を開けて逃げました。

△何んでも致します

「良人は詩を作ることは熱心で只今も一生懸命首をかたげて作つて居ります、謡も鼓もやります何んでも三度程學びますとすぐ飲み込んでしまいます、上手ではありませんが何でも早分りに出來ます。

夫人も謡鼓、舞などをお稽古なされ一週一度師を招いで學ばれるそうで又詩をお作りになつて御良人に批評を求められるとの事でございます。



△病氣の經驗

夫人が自身に經驗された病氣のお話は「最初額がムズ〳〵して氣分が鬱ぎ食事も進まず、ヒステリーか抔と申されて醫者に診察て貰ひましたが體に何處も惡い處がございませんのでとう〳〵鼻中の軟骨に故障があると分り其の爲め金杉病院に入院致して膨れ上つた軟骨を切り取つてしまいました、それで只今では氣も爽かになり食事もよく進む樣になりましたから先刻も食事後に一寸犬を連れて宅の近邊を逍遙しに出かけて參りました……私が懇意の奥さんは鼻がつまると癲癇が起つて長年困じはてゝお出

と聞きましたから鼻の療治遊すことをお勸め申て醫者にかゝりましたが、鼻が全快遊すと同時に癲癇も癒りましたから、私は御婦人の方々の病名の知れない御病氣には直ぐ鼻をお診察遊ばせとお勸め致します。

△喧嘩は唯一度

御存じでもございませうが日露戰爭後に二六新聞の秋山さんが露探の嫌疑を受けられて裁判にかゝりました、其時の辯護は良人が致しました、只今は左程でもありませんが、あの頃は露探と聞きますさへ恐ろしく思ひました、すると良人は或日裁判所の歸りに御酒を頂いて參りまして突然私を露探と怒鳴りましたから私はあなたこそ露探と何の氣も無く賣り言葉に買ひ言葉一言申しました所が良人は大層立腹致されましてビールの瓶を取つて私を打たうとし私は逃げやうとします騷ぎに書生や女中迄も皆が駈付て漸く良人を止めました私をかばはうとした下女は肩を打たれて大きな紫色の痣が出來ました、そして翌朝に成りますと何の譯もない事でしたから書生や下女にきまりが惡うございました、私が江木と一緒に成りましてから、十年餘りにもなります其の間に之れが始ての喧嘩でございます、而かもそれが前にも後にも一度の喧嘩でした。

△下女擔任の配合

さようでございます、お客樣お出の度毎に一々私が指圖致しても居れませんから五年も使つて居ります一番年齡上の下女に斯々のお客樣には斯々せよと、お人柄によつて見計らひの付きますやう丁寧に敎へて其れから他の下女に命ずるやうにして居ります、來客の節は無論内々の事にも諸事都合よく致すには多年使ひなれた女中が如何しても入用でございますよ、下女は長く奉公したもの程よろしうございますが書生の長く居るのは目出度うございません、短く居ります丈それだけ一人前に成つて行くんですから。

いつぞや記者が法律新聞に夫人の訪問を記しました其折御夫婦仲が大層睦じいやうに書きましたから皆樣から仲好だと嘲かわれましたと夫人のおとがめを受けましたが、記者は却て趣味を筆にえ寫しませんのを殘念に思ひます、一昨年お目にかゝりましたときと今でも夫人は一向にお變りありません、いつでも快活なる令夫人で入つしやいます。



夫婦間のモンロー主義

下條直幹

「胸倉と髻を分ける兩隣」、コーなりては最早論外の沙汰なれど、夫れ程迄に行かずとも夫婦間のゴタ〳〵にて、他人に迄迷惑心配を懸かることは世間隨分少なからず。如何に睦ましき夫婦にても時には互に面白からぬこともあるべし、三度食ふ飯さへ剛し柔かし、長き月日の間には勘忍深き旦那樣にても稀れに御聲の暴くなることもあるべし、おとなしき奥樣さへも時には柳眉の逆立つこともあらん。天にさへも晴雨はあり止を得ぬことなれども、只之が爲他人に迄迷惑や心配を懸くるに至りては、夫婦の威嚴を失墜するものにて誠に面白からぬことなり。夫婦の間に起りたる事なれば宜く夫婦の間にて處理し、他人の耳には入れぬ樣になしたきものなり、之を稱して夫婦間のモンロー主義と云ふ。

モンロー主義とは敢て説明を要せざれど、南北亞米利加大陸に關係せる事柄に付ては、歐洲列國の干渉を許さず、と云ふの主義にて、北米合衆國第五代の大統領モンローが、千八百二十三年十二月の議會に下したる教書の大要なり。敢て何事も要らぬお世話お引つ込みなさい、と撥ね付ける譯にはあらず、コチラにて起つた事柄はコチラにて首尾よく取り纏めるから、ドー

ゾ御心配下さるなと云ふ、最上獨立心の發揮したるものなり。

夫婦とても一身同體の獨立體なる以上は、其間に起りたることは此間にて處理すべし。里方の親達や媒酌人乃至隣り近所の人々に迄も觸れ廻りて、恥の上塗をなすなど決して感心したることならず。元來夫婦なるものは冗談や一時の利害問題の爲に寄り合ひたるものにあらず、互に終生を托し合ひたる永久の結合、天の配劑なれば、何處迄も一身同體なり。右の手に胼が立ちても、左の足を擦りむきても、共に痛は感ずべし。夫の愁は妻の愁、妻の恥は夫の恥、夫れ故に互に欠點を見出さば靜かに互に注意して改めしむべし。里方へ行きて亭主が小言の棚卸をなし、友人を捉へては、女房の不足を並べ立つるなどは愚の至りなり。昔し孔子樣の頃に、或る國の人がほこり顔に、オレの國にはエライ正直な人がある、自分の父が羊を盗んだのを訴へ出でたる人があると、云ひしに孔子樣は、それは正直とは云へぬ、父は子の爲に匿し子は父の爲に匿すのが、人間自然の人情だぞと云はれたることあり。

千古の金言今も變らず、宜しく夫は妻の爲に匿し妻は夫の爲めに匿すべきなり、里方にて夫の不足を聞かば、都合よく取り繕ひて歸りて靜に夫に忠告すべし、親や兄弟より妻の小言を聞かば、上手に執りなし置きて陰にて注意を加ふべし。人間誰か過なからん、夫も妻も互に幾分の欠點はあるべし、互に心付きたることを注意し合へば、自ら習ひ性となりて、妻は次第に夫の理想に近つき、夫は妻の理想に近つくべし。然れども人各生來の性質あり、同じ雞の腹に暖められたる卵より出づるも、家鴨は水に入り雉子は叢に入る、或る程度以上迄は人間生來の性質を撓めさすることは出來難きことなり、聖人すらも其力に及ばずと、貝原先生も說破せられたり、此は互に大なる覺悟を要する點なるべし。

西洋流にて結婚前に男女が如何に長く交際をすればとて、徹頭徹尾其性質を究むることは不可能ならん、何ぞ況んや媒人口によりて、或は一遍の見合によりて

決せるものぞや。要するに男女が互に其終生を托するを期して、二つなき身を投げ出し合ひたる上は、半ば以上は天運なり、人間一生の關ヶ原、籤を抽きて後之は案外などゝ思へばとて、最早天運致方もなし、それを厭はゞ始より籤を抽かぬに若かず。故に籤を引く上は互に多少の欠點は免れざるものと覺悟せざるべからず。夫れも半年一年の珍らしき間は多少の欠點も互に心付かず過ぎ行けど、五年六年と經るに從て、互にアラも出で、我儘も出で來るなり。殊に夫婦間のゴタゴタなるものは、多くは感情より出づるものにて、深き理屈のあるは少し、從て他人には何故面白からぬや何故腹が立つや聞きても充分了解の出來ぬことなど多し。斯ることを他人に訴へたりとて致方なし、夫婦の威嚴に關するのみならず、寧ろ親兄弟其他他人に訴へたる爲め益々一方の感情を害せるの例は甚だ多し。加之他人が斯ることを聞けば、頗る不愉快に感ずるものにて、特に親兄弟に至ては此上なき心配の種なれば、宜く相互の間に於て解決して其圓滿を計るべし。



國際間に於ては談判整はざれは干戈あるのみ、互に理盡き語究まれば鐵拳飛ぶも尙可なり、否、可なるにはあらざれども、後の平和さへ得るならば、他人に聞かすも、他人を煩はすに優れり、然れども世には往々氷炭相

容れず、朝夕互に不快に暮す夫婦あり、斯くの如きものは速に其關係を絶つ方双方の幸福なるべし。苟くも一身同體として夫婦の實を保つ上は、余は切にモンロー主義を主張するものなり。

尚一言注意すべきは、家庭に關する問題に付て、夫婦意見を異にする場合、親戚友人に向て正否を訂し、或は助言を求め、又は識者の説を聞くなどは、夫婦の獨立に妨なく、寧ろ奬勵すべきものなり。其他何事によらず一家の事に付き、兄弟親戚互に相助くる如きは、此モンロー主義と相反するものにあらず。

納戸改良案

家　政　子

一　お寢間食堂兼帶の納戸

この頃大分臺所の改良と云ふやうな議論がありまして、これを實行して居られる家庭を見受けますが、まだ納戸の改良と云ふ事は聞かないやうです。普通先づ納戸と申すと、家事の中心となる處で、こゝに一家の女王が政權をお揮ひになる、申さば中央集權の間ですから、頗る整頓して居なければならない筈ですに、什麼も見渡したところ、餘り整頓したのは見受けないやうです。上流社會はいざ知らず、中流から下となりますと、それは家の狹い故もありますが、この納戸は取散されて居るところ、疊の一番汚ないところ、塵の舞立つところ、餅や鰯の燒ける匂ひが鼻を突くところと極つて居るので、成程座敷は一糸紊れずと云ふ體裁ですが、襖一重向ふには、衣服が脱ぎ捨てある、翫具箱が蹶返へされて居る、襁褓と足袋とが雜居して居る、これが一家の女王が在します所かと思ふと、實際涙が零れるばかり、それでも家内は平氣なもので、この中に雜居して居るのであります。

それもまだ可いとして、この納戸が食堂も兼帶ならば、お寢間も兼帶と申すので、いやはやお話しにならぬ次第、御飯を食べるにも何となく不潔らしく、寢れば寢るで頭痛を催す、考へて見ればこれ程不衞生なも

のはありますまい。

二　運動場を兼ねた納戸

まだそればかりではございません、お子供のおありになる家庭では、この納戸が一日運動場になつて居る事です、寢間となつたり、食堂となつたり、軈てまた運動場となつたり、かうなつては納戸も實際重寶には相違ありませんが、考へても御覽遊ばせ、朝起きると坊ちやん方の暴れ廻つた跡へ、碌しか掃除もせずお膳が出る、お汁の中へ塵の舞込むのも關はずに召上る、晝も、晩も其通りを繰返して夜になると其塵の中へ床を展べてお寢みになる、まア何と云ふ不衛生な事でせう、假令ば運動場で御飯を召上つて、運動場でお寢みになるやうなもの、習慣だから只何とも思召さないと云ふばかり。

三　洪水の納戸と火災の納戸

天變地異ども〳〵至るとは今の中流社會の納戸でせう、普通先づ長火鉢が置いてあり、これに鐵瓶が懸つて居る、猫板の上の水差しを顚覆すと、其處等一面の洪水、これが疊の目へ浸み込んで、じめ〳〵して居るかと思ふと、下婢が炭團を挿み損ねて、其處等一面火の海となる事などは稀らしくない事實で、彼方の隅には燒跡が印され、此方の隅には石油の汚點が地圖のやうに擴げられて居る仕末、思へば納戸程不潔なところはない。

四　覗かれる納戸

で、この不潔、この不整頓、これが外から見られなければ結構、女王はまたいつでもこれを見せまいと庇護ふのでありますが、ドツコイ、この間が必らず何處の方面へも便宜の可いやうに出來て居ますから、襖が開いて居れば玄關から、障子が開いて居れば臺所から大抵は見通しで、座敷の客だけにも見せまいものと思へば、柱時計がこの間唯一の装飾となつて居る以上、「何時ですか」と開けられて、赤い顔をする事も往々あると云ふものです。

五　危險極まる納戸

不潔はまだ偲ぶとして、今日普通の家の納戸程危險

なものはなからうと思ひます、何故と申せば、納戸には大抵簞笥が据えられて、其上には鏡臺、針箱の類、さては雜多な箱や道具が積まれて、釣渡した棚の上には能く重箱、菓子折の明いたの、五人前乃至十人前と記した膳碗の箱、新聞、雜誌の古いの、襤褸、陶器の破片、種々な物が載せられて居るばかりでなく、火鉢の斗抽に肝癪玉と海苔と同居をして居たり、それはそれは危險千萬、一朝地異天變がないにしても、肝癪玉を海苔と知らずに燒いたら、飛んだ間違の起るは當然、考へて見ると梁の下へ寢ると云ふ諺は、かう云つたやうな納戸へ寢る事を云ふのでせう。

六　暗黒極まる納戸

それのみならず普通の家の納戸と云いのが大抵は四方から他の間に圍まれて、薄暗へのを特色として居る觀があります。晴天でさへ女王が針へ糸を通すのも椽側へ出なければ用が便じないと云ふ有樣ですから、雨天の日など丶來れば、それこそ暗黒世界、不愉快さは此上もありません、それは暗いから塵が見えない、安心して御飯も食べられゝば、お寢みになれもすると云ふものですが、これへかん〱日が當つて御覽じろ、電車の中と同樣、其塵に驚かれる、この暗いのを苦にしたお方が、たま〱天井を拔いて明取りなど丶云ふ窓をお明けになりますが、これも餘り氣持のいゝものではございません。

七　不要心極まる納戸

女王はこゝで御飯も食れば、お寐みにもなる、一寸の隙もあからうとあつて、簞笥の錠も懸けると云ふ事なく、脱ぎ捨てた衣服は其處へつくねたまゝ、お小使は使用の度に、其釣錢は、簞笥の角や、戸棚の隅へ置忘れと云ふ有樣、女王ちやとて時にはお庭の散歩もありませうに、さりとは不要心千萬な事ではありますまいか、これ等も習慣に相違ありませんが、日本の家庭に多く秩序のないと云ふのは、かう云ふ納戸が一家の晉府となつて居るからです。

八　物置同樣の納戸

前にも申上げた通り、今の納戸には貴重品と云はず、

日用品と云はず、あらゆる器具が陳列されると申さば、未だしも聞えもようございますが、實は亂雜に配置されて、其間に僅かの空地を存して居る有様、宛然物置同然こゝがまた食堂となり、寢室となるかと思へば不思議千萬です。

九　便所兼帶の納戸

いよ〳〵出でゝいよ〳〵不潔い事になりました。いやこれは特例でもありませうが、隨分詮索したらかう云ふ納戸も尠くはあるまいと思ひます、それは夜分この納戸が寢室となりますと、子供衆の便器が枕頭へ運ばれて、忽ち便所兼帶の納戸となる事です、一歳や二歳のお子さんの便だから、疊の上から申し上げても、不潔と云ふ上から申し上げても、それ程とは思召さないでせうが、兩便は矢張兩便で、餘瀝は四方へ飛散する、臭氣は一室へ瀰漫する、もしかゝる納戸へ潔癖な他人を入れたら、それでも一時間を默しては居られますまいと思ひます。

十　動物園とも見える納戸

中には動物園其儘の納戸もありまして、多く子供衆のない家庭に見かけるところですが、納戸には猫が居る、狆が居る、それでもまだ足りなくて、モロモット、南京鼠、種々雜多な動物が雜居して、甚だしきは、猫が牛乳を飲んで居るかと思ふと、狆が御鉢の蓋を開けて中の御飯を食べて居るのもある、何と云ふ不體裁の事でせう、これでも女王は金殿玉樓と信じてお出でなさるのでせう。

十一　いかにして改善すべきか

以上十項は今の普通の納戸に印せられた習慣上の缺點ですが、これは臺所の改良よりは一日も早く改善したい一つではありませんか、いくら臺所ばかり改善したからと云つて、この一家の中央政府が、このやうに紊亂して居ては何にもなりません、そんならこの納戸を改善するとして、什麼したらいゝかと云ふ事が問題です。

十二　中流以上の家庭

さてこの納戸の改善と云ふことも、中流以上の家庭

に在つては、極めて容易で、食堂を別室に設ける、寢室も別にある、子供の運動場も建てる、雜具は凡て土藏乃至物置きへ仕舞込むと云ふ餘裕があれば、別に云ふ事もありません、始め女王の美くしい首府となつていづれの點から見るも完全無缺の納戸と見ることが出來ますが、

十三　中流以下の家庭

さて中流以下の家庭、先づ五間乃至三間の家となつては、什麽してもこの納戸は食堂と寢室とを兼ねゝばなりません、座敷を食堂とする事も出來なければ、玄關を寢室とする事も出來ませんから、什麽してもこゝを食堂寢室として、一切の事をこゝで整理しなければなりません、そんなら什麽したら此の亂雜此の不潔を防げるでせう。

十四　船の客室に傚ふ

先づ寢室をこゝに兼用するとすれば、人數の尠い家内ならば、其所の押入を今少し突出して、棚を三段位に設け、此處を洋床式として、夜の寢室とする、恰度船の三等客室に傚つたやうなもので、一番輕便に且つ一番容易な改善かと思ひます、現に今の名士でこの方法を採つてお出でになる方もあるさうですが、結果は甚だ宜しいと云ふ事です。始めは少し窮屈でせうが、馴れゝば結句安心して眠られる、頭の上に多くの雜具が積んであつたり、今にも其の重量に折れさうに棚の下へ寢るに比しては、いくら安全だか譯りません。

十五　若し食堂を兼るとして

寢室は先づ押入と極める、そんなら若し食堂を兼るとしたら什麽したら、塵を防ぎ快よく箸を把る事が出來やう、これは先づ其納戸を六疊と假定して、其三疊丈けを板の間にする、不體裁と思召さば上へ毛氈を敷くも可し、兎に角疊の數を省いて、第二に長火鉢を徹去する、この長火鉢と云ふ物が尠からず家庭を因循たらしめて、又塵を立てる根源である事は、疑もない事實、灰神樂など云ふ不粋な沙汰必らず此處から生ずるのであるから、これは早速取拂つて、瓦斯焜爐にする、さうすれば塵も立たず、經濟にもなり、また便利でも

あるのです。何故また疊の數を省くかと申せば、納戸は兎角出入の、多い間で、一人二人の座る所があれば、剩餘は板の間の方が塵が立たず、子供衆が少し位暴れても、疊の損ずる憂ひがない、で、また足の高い食卓を据へて、食堂とすれば、今日の納戸のやうに不潔な事はあるまいと思はれます。

十六　雜具を如何にすべきか

そこでこの納戸にある雜具、これは如何にすればいいかと云ふと、小さい物置を建てる餘裕があればそれへ入れる、もし無いとしたら不用なものは賣拂ひ、必用のものだけを一つの箱へ納めて、成るべく秩序を保つの外はないでせう、今の納戸と雖も整理すれば、さう散かる筈もないですが、納戸は即ち物置きと心得て居られる結果、整理と云ふものが屆かない、不用なものまでが積載されて、前に申したやうな不體裁な納戸が形ちづくられて居るに相違ありません、これは是非整理して、他の間の押入へ移すべきものは移して不用なものは賣拂ふやうにしましたなら隨分整然とした納戸が出來るだらうと思ひます、未た〳〵此の他に改良案も澤山ありますが、先づこんな事にして置きませう。

瓦斯專用の臺所

天野誠齋

△薪炭は却つて不經濟

臺所の事は從來世人に輕く視られたが、近年漸く此の習慣を脱して、注意を拂う家庭の多きは、誠に喜ばしき事です。無頓着で居れば何んな勝手道具でも左程不便や不經濟を感じまいが、一度臺所に重きを措くべきことを悟つたら、いろ〳〵改良の必要を來し、決して天保時代の儘甘んじては居られますまい。

其の改良の一つとして薪炭を用ゐ煮炊きするよりは瓦斯を代用する方が遙に便利で、經濟で、塵埃も立たゝず衞生上にも爲によいと云ふ處から、上流の家庭を始め大分瓦斯の臺所に改めたるを見受けます。

水道を引けば、堀井戸の水より飲むにも安全で、臺所を働くにも便利でせう。瓦斯で煮炊きすれば矢張り水道のやうに重寶で、且つ孰れの臺所にも輕便に使用する事が出來ます。

△瓦斯竈と瓦斯焜炉

私の知つて居るお宅で、近頃瓦斯竈と瓦斯焜炉を臺所へ備付けたが、毎日の炊事は之れで充分ださうです。最初瓦斯を使用する前に、借家住いの臺所には不向きだらう、家をも新築してからの事と諦めて居たさうですが、實際瓦斯を引く段になつて見たら、彼んな面倒臭い事なく、是迄の竈と焜爐の位置へ、ソックリ瓦斯竈と瓦斯焜爐を置換へたのみで、案外雜作なく出來たと申されました。序に設計の模樣や、費用の點を尋ねやうと思ふ

問「瓦斯管取付けの工事は餘程費用がかゝりませう」
答「初めは矢張り左う思つて居ましたが、近頃では一切の取付け工事は瓦斯會社の費用故、一文も出さずに濟みます」
問「夫れは好い都合ですな、竈や焜爐は」
答「瓦斯會社から買ひますが、宅では二升炊きの竈を求めました代價は十圓廿錢で、現金なら一割引です。焜爐は二ヶ口で四圓廿錢。此外に取付けの瓦斯管から竈と焜爐へ金屬製の螺線管を繋ぎます、之れが一尺三十二錢の割」
問「其外の經費は」
答「別に入りません」
問「二升炊きは何分間で炊けますが、而うして瓦斯代は」
答「十五分間なら充分です、此瓦斯代凡そ一錢三厘」
問「成程經濟ですな、私は薪で焚したが、二升炊だと冬は一錢七八厘懸ります。而うして水は何分間で沸きますか」
答「十分間なら沸騰します」

△即席のお料理

竈の下を焚付けるのは巧拙もあるが、慣れない女中になると、容易に焚付られない。故に折角朝早く起きても火を焚付けるに稍暫く時間を費し、其上吹竹で吹付けるから、塵埃が一面に舞上り、臺所は勿論頭髮から衣服まで臺なしに汚れますが、瓦斯を引いてあると其の心配はありません。ドンナ山出しの女中さんでも瓦斯栓さへ捻れば燐寸一本で事が足ります。

薪炭は置場を別に設けなければならず、縄屑など散亂しがちで、掃除したり整理するに無駄な手數を懸けなければならぬが、瓦斯なら自然斯ういふ無駄な勞力を省いて、外の仕事に此時間を振向けられます。

瓦斯竈や瓦斯焜爐だと、御飯もお菜も即席に出來ま

す。夫れ故お客を見懸けて御飯の炊足しも出來れば、汁物位は直ぐに拵へられる。之れに就いて面白い咄しがあります。此の正月に麥薯蕷でお客をしたお宅がありましたが、招れて來た人は書生さん達が多う御坐います。一體茲の家庭は春の如く溫かで、書生さんは日曜日などに此家へ行くのを此上なき樂しみと仕る程ですから、實は此日も豫定のお客樣より多くなりました扨いよ／＼御馳走が出ると、お客の方でも決して遠慮を致さず『之れは旨い結構だ』とナカ／＼お給仕が間に合ひません。處が澤山拵へた麥薯蕷もお客樣が增へたので、少々不足を告げさうですから、臺所では早速麥飯の追炊きをするやら、薯蕷汁を拵へるやらして、悦んで喰べて下さるお客樣に充分お强い申す事が出來たさうです。之れも臺所を改良して瓦斯竈や瓦斯混爐を備付けたお蔭に少しも惑付かなかつたが、若し日本竈や七輪であつたら迚も間に合はないで極りが惡かつたらうと申されました。

△瓦斯の經濟法

瓦斯のために時間を省き、従つて手數を省けば、二人、女中を使つた家では一人で濟むやうな譯になります。けれども瓦斯は使ひ方によつて經濟にも不經濟にもなるから、毎日の事は餘程注意して瓦斯の無駄にならぬ樣心懸けねばなりません。

妻君『混爐へ懸けたお鍋は煮えたかへ』

女中『ハイ煮えました』

妻君『では鐵瓶と懸換へな』

女中は鍋を混爐から下して、鐵瓶へ水を注しに流し元へ立ちました。妻君は急いで混爐の瓦斯栓を捻り

妻君『直ぐ鐵瓶と懸換へないなら、一旦瓦斯をお消しなさいよ、鐵瓶へ水を注す間でも、瓦斯は無駄に燃えます。僅のやうだが之れを一ヶ月に積り、一ヶ年に積つて見ると、ナカ／＼馬鹿に出來ない、瓦斯は燐寸一本で付くから、燐寸を儉約するより瓦斯の無駄にならぬ樣にするのだよ』

と懇ろに瓦斯の使ひ方を女中に敎えられました。

瓦斯の臺所では此の妻君の如く、巧なる使用法を心得ぬと、僅な事から大なる不經濟を來します。（[illegible]）



四月の總菜

新らしき野菜の調理法

四月は總菜の年度變りともいふべき時なり、冬季から持ち續きたる舊き品々は漸に影をひそめ、新なる原料として筍出で蕗出で新蕨、莢豌豆の類出で來り、且つ春海洋々、汐干狩の獲物なる蛤、あさり、まて貝まで臺所に供へらる。これを前の月に比すれば其賑さは同日の談にあらず、客月にて見れば三月とは名のみ、其實は舊曆正月の節なるゆへお雛樣にも室咲ならでは桃の花も捧げられず、二八とて八月と共に壹年中二季の海上不穩の月に數へらるゝ位なれば沿海地も不漁つゞき雜魚、小魚の類にすら不自由を感ずる程なるに、其上一方にては陽氣發する處金石も亦透る一陽來復してからは野菜は外氣の如何に係らず遠慮なく成育し葱は坊主を出す、大根には洲が入る。京菜菠薐草には塔が立つと云ふ勢ひされば誠に三月の臺所は寂寞の中に暮れたりしなり、さて四月の總菜には冬季から永々と食膳を賑し來りたる名殘の野菜の調理法から述ぶべし。

△霜降大根

大根の洲の立ちたるは煮ても漬けても本來の風味絶てなく、これ厨婦の持て餘しものゝ一なるべし、而もそれを尋常一樣に喰させるには霜降大根なるべきか、大根の皮を薄く脫き、竪に四ッ割となし小口より薄すゝと刻み、一寸胡麻の油にていため鰹節の煮出にて煮るなりさてその煮熟したる頃程能く味を付け、絞豆腐を未塵にこわして入るべし、サット煮上りたる時に火より下ろしてよし。

△京菜の芥子あへ

京菜も塔が立つ樣になりては葉も莖も硬くなりて纖維計りかと疑はるゝまでにシベつきて、以前の軟き風味なし、此時尚ほ食膳に上せて一願を得んには芥和への一法なるべし、先づ京菜を湯煮、(此ゆで方には中々加減あり、ゆで樣が足りなくては硬く、又ゆで過ぐれば赤くなりて本來の美色あせ風味の一半を失ふ、故に莖の軟くなりて葉の青き色のあろうちに引上げて水へ放す)その冷えたる後に莖を揃へて水氣を去り小口より微塵に刻み、その刻みたるを再び絞りて水分を十分に去り斯くて芥子味噌にて和へるなり、味噌は芥子をぬる湯にてとき味噌と擂り交ぜて拵ふべし。

△筍の煮しめ

筍は本月から五月へかけて總菜料理の大關とも云ふべく、上下おしなべて食膳に上らざるはなし併しその煮方はまちまちなればそのうち煮しめの煮方に付て最も風味能き方法を述べん筍を調理するには總て最初に皮をむき縱に二ッ割となし水を十分に入れて湯煮、それより水に

浸し置きて用ゆ、さて煮〆となすには、ゆでおきたる筍を採り出し株の方より五厘位宛に切目を入れ約四分位にて切り放し半月形に切るをよしとす、切目を入るゝには成るべく深く切りて放れざるを度とすべし、これは煮汁の能くしみ渡るやうの注意なれば末の軟かき所は斟酌して切るをよしとす鰹節の煮出しにて緩るく〳〵煮詰め程能く味を付くべし、ナンダ又筍かいと顔をしかめさせるも、オヤ今晩もと眼を細くさせるも此煮加減一つにあるとゆゑ上手に加減すべし

△蕗の煮〆

蕗に二種あり、太くて中空なるものと、少し細けれども中空ならぬものとの別ありて、その風味は太きだけに大味にて、細き方を上品とすべし、太き蕗の方は生の内にその筋を除り置き、細き方は湯煮したる上にて取去るをよしとす、筋は茎の皮と知るべし、湯でゝ水に冷し置き筍と同じく便宜にこれを用ふ水さへ取換ゆれば一週間位は大丈夫なりさて煮〆を拵ゆるには湯煮おける蕗の茎をそろへ一寸三四分位に切り鰹節の煮出しにて煮るものとす、味は少し甘く着くるをよしとす、莢豌豆など取合せば妙、

△新蕨の煮〆

蕨の株の硬き部分を惜気なく十分に摘み捨て、跡の軟き処を桶に入れ木灰を振懸け上より熱湯を注ぎかけて暫く蓋をして置き、その冷ゆるを待ちて水にて能く洗ひ、取揃へてくづれぬやう竹皮か何かで括り置くべし、是れ新蕨は干蕨に比して鮑強きゆゑ斯くしてその鮑をぬくものと知るべし、一寸乃至一寸二三分位に切り鰹の煮出しにて蕗と同じ様に餘り烈からざる火にてコト〳〵と煮詰め、鹽辛くならぬやう淡さりと味付くべし、晩餐の小皿盛には一珍に數へらるべし

△彼岸菜の鶯あへ

うぐひす和へとはその名を聞く許りにても風味の程思ひやらるれ、殊に原料が彼岸菜とは頗る妙なるべし、もと彼岸菜は田舎にて其色と香とを愛でゝ鹽漬となす爲に態ざ〳〵作る一種の菜にて恰も小松菜の如きものなり、拵へ方は根を切り枯葉を去りて湯でる、湯で加減は京菜と同じく其色を損せざるよう注意するを要す、さて豫め白胡麻を炙りて甘味噌に摺り混ぜ砂糖を加へて味噌の鹽梅を調へ置き、右の湯でたる彼岸菜を取り水を絞りて極微塵に小口刻みとなし、再び水分を絞りて調へ置きたる味噌と摺り交ぜるべし、味噌と菜と一所にした樣は、鶯の摺餌の如き觀ありとのことより斯くは名づけられたるべし、時節柄一賞味の價値あり

△土筆の浸物

土筆は出入の八百屋に命じてもよき品は得られざるべし、摘草の獲物として僅に食膳に上る珍羞なり、先づ土筆の袴を去り、(袴とは土筆の茎の節々に着たる竹の皮様のものにて注意して取らざれば茎の折るゝ恐れあり)能く水にて洗ひ、笊などへ揚げて水氣をきり、焙烙にて炙り生醤油をかけて其儘喰ふ法もあれど、又一寸湯煮して胡麻醤油にて食するもよし、一種の風味あり、特に愛嬢が摘草の獲物なり

せばその珍品たるとは言を待たじ、

△嫁菜のはり／＼

嫁菜も青物屋の店頭には上らず、土筆と同じく摘草の獲物の一なりとす、揃方は能く湯でゝ後ち水に浸して其飽を除き、水氣をきりて小さく五分位に刻み胡麻醤油をかけて用ゆ、取合に干大根の二杯酢漬を混ぜるべし、これは丸干大根に限る即ち干大根を取つて極薄く小口切りとなし一寸ぬる湯にてもみ二杯酢に漬くるものとす

△三葉の浸もの

四月には三葉芹もいよ／＼本場ものが出來る時なり、室仕立の作物と異りて葉莖共に十分生長したれば風味も一段とよし、ザツト湯でゝ五分位に刻みて胡麻醤油にて用ゆ、丸干大根の二杯酢漬を取合せば、三。。。。。。葉のはり／＼となる、風味一段たり。

△土當歸の酢味噌

土當歸も本物が出て來るは本月なり、されば香も高くして味も亦一段の風味を添へたり、甘煮、汁の實など又は調法な料なれど最も賞味すべきは酢味噌和なるべきか、一寸二三分位の長さに切り皮をむき堅に薄す／＼と刻み暫く水に浸して飽をぬき笊などへ揚げて十分水分を去り、生のまゝ酢味噌にて和へるなり、酢味噌は白味噌ならば上等なれど甘味噌にてもよし、十分に摺りて裏漉となし　粕去り砂糖を加へて程能く加減し酢にて解きて用ゆ、

△萵苣の浸しもの

萵苣は中々馬鹿に出來ざるもの、野菜の内にても彼の神經の過敏を鎭め、不眠症を治する功ありとか、殊に利尿緩下、開通劑には此上なき特功あるよしにて賢臟患者はつとめて食用するをよしと經驗ある人はいへりさて實生のまゝ三四寸位に成長したものを用ゆると、又大きく仕立て漸次葉をかきて用ゆるとのとの二種あり、最も飽強き菜ゆゑ十分に湯煮し水に浸して用ゆ、小さく刻みて胡麻醤油にて食膳に上すなり、又汁の實となすも風味惡しからず、一體四月といふ月はポカ／＼暖かくなりて逆上氣味のする季節なれば、朝餐の味噌汁に萵苣の葉を泳がせ、或は晩餐の小皿盛に浸物として召上がるもよろし青物屋の持來れる實生の根引の内にて三四株庭前に植え置かんには、花の咲く頃迄には二三尺の高さに成長すべく、毎朝の汁の實位はかき取りて間に合はすべし

△春菊の浸物

春菊又の名を菊菜とも呼びて捨て難き香氣あり、葉莖共に軟かくして時節柄適當の總菜なり、牛肉或は鳥肉などゝ共に煮て喰ふもあれど、本來の風味を賞せんには浸し物に限るべし、赤くならぬやう注意して煠で水に浸しおきて用ゆ、一寸位に切りて胡麻醤油にて食ふべし、

△豆腐の木の芽田樂

白豆腐を長さ一寸五六分乃至貳寸、巾五分、厚さ四分位に切りて爼板に布巾を敷きたる上にならべて先づ水氣を去り、青竹の皮の付きたるまゝなるを元まで割りかけ股にして削れる竹串に刺してあまり強から

ぬ炭火にて炙り、砂糖味噌を擂りたるを兩面に塗りつけ再び炙りて拵へるなり、味噌の鹽辛きは風味よろしからぬゆゑ砂糖など加へて程能く鹽梅し裏ごしにかくべし、此の味噌に山椒の芽を擂り交ぜるなり、さて味噌は元來焦げ易きものなるに其上砂糖がはいれば尚ほ一層焦げ易きゆゑ炙るときには油斷すべからず、又木の芽を味噌に擂りまぜしてず生のまゝ一葉二葉添へて出すもよし。

△烏賊の山椒芽和へ

烏賊の甲を去り嚢を裏返して墨汁嚢其他雜物を除き、皮をむき、眼球及び鳶口も共に取り捨つ、(鳶口と云ふは軟骨にして實は烏賊の口なり)、サツト湯煮し厚さ二分長さ六七分乃至一寸位に小切となし程よく味を付け山椒芽味噌にて和へ拵ふるものとす、味噌の色を濃くせんには青菜の葉尖を摘み山椒芽と共に擂りまぜるべし、



△筍の木の芽和へ

兼て湯煮しおける筍を取出し、細きは竪に四つ割、太きは六つなり八つなり見計ひて、厚さ二三分位に小口切となし、味淋鰹の煮出にて下煮をなし程能く味を付けて後ち山椒芽味噌にて和へるなり、味噌の拵方はきのめ田樂に用ゆるものと同じ

△菓子椀盛

お惣菜に菓子椀を拵へるは比良目や、鯒の煮付で濟せるに比せば多少手數もかゝるとなれど、有り觸れたる原料を旨く取合せて仕立てんには其風味は同日の談にあらず、こゝは忠實なる厨婦の勞をまちて試みらるべし

一、刻牛蒡、胡蘿蔔、里芋、中片、青味を加へて五色、

右の内胡蘿蔔は一寸二三分位に切り皮をむき竪に三分位の厚さに切り更に竪に極細く庖丁を入るべし、此庖丁の入方は一方を切放さゞるやう恰も茶筅の如く切るものとす、里芋は皮をむき竪に二ツ割となす、中片は斜めに二ツ切となして用ゆ、刻牛蒡、胡蘿蔔、里芋は何れも一寸湯でゝ共に掛汁にて煮、能き加減に味付くべし、盛方は一人前刻牛蒡を臺に胡蘿蔔二切里芋二切づゝ竪に並べその中に青味を挾み、中片を上置とし、掛汁をたつぷりに掛けて出すべし、青味は彼岸菜、小松菜、菠薐草、菊菜何れにてもよし、一寸ゆで菜尖一寸計りを切りて其儘用ゐてよし、

二、干瓢、椎茸、牛蒡、竹輪に青味を添へて五色

右の内干瓢は約二寸の長さに切り一人前づゝたばね充分水煮すべし、水煮が足らぬ時は味付けても煮こじれて軟くならぬ恐れあり、牛蒡は一寸二三分位に切り更に竪に二つ割となす、湯でゝ鮑を取ることを忘るべからず、椎茸は足を切りて其まゝにてよし、竹輪は大きく斜に切るべし、何れも掛汁と共に煮て味付けべし、盛方は干瓢を臺として椎茸及び牛蒡を並べ、竹輪を上置となすなり、青味前に同じ

三、初霜（昆布）、小椎茸、高野豆腐の三色　初霜はそのまゝにてよろしけれど、高野豆腐は先づ熱湯に浸して十分に膨らせ、よき程を見て絞れば白き汁出づべし此時絞りては又湯を吸はせ、湯を吸はせては絞り斯く三四度繰返へすうち白き汁出でざる樣になるゆゑ、よく水にてあらひ堅く絞りて用ゆ、小椎茸はよく洗ひて足を切ればよし、高野豆腐及小椎茸は掛汁と共に煮て味付くるものとす、盛方は初霜一摘を臺となし小椎茸を三四枚あしらひ、高野豆腐を上おきとなすべし、青味を省く

四、筍、車海老、新蕨の三色

右の内筍は湯煮したるを取出し大きく斜に厚さ三分計に切り最も五厘位庖丁を入るゝことを忘するべからず、車海老は背に一寸切形を入るべし、新蕨は鮑をぬき一寸三四分計りに切りて用ゆ、車海老と筍は下煮して味を付け、新蕨は掛汁と共に煮てよし。盛方は筍二切を臺となし、青味を稼れて蕨をあしらひ、車海老を上おきの心持にて盛るべし

五、蒲鉾、莢豌豆、里芋の三色

右の内里芋は丸のまゝ皮をむきて湯でゝぬる〳〵を去りて掛汁の中にて能く煮て味付くべし、莢豌豆名ひ蒲鉾は一寸掛汁の中に入れ莢豌豆のさつと火の通りて青臭味のぬけたるを度としておくべし、盛方は丸芋三個を臺とし莢豌豆五六青味をかれてあしらひ、蒲鉾を上おきにす、蒲鉾は大く半月形に切りて用ゆべし、

さて掛汁は尋常の鰹節煮出しにては充分ならず、鰹節とだし昆布とを文火にて永らく煮出し、汁の濃くなりてどろりとねばりけあるやうになりし頃、粕を放して用ゆべし、春の日永の睡氣さす頃急そがず

コトヽヽと拵へ置くを要す。

△すまし汁(春の吸物)

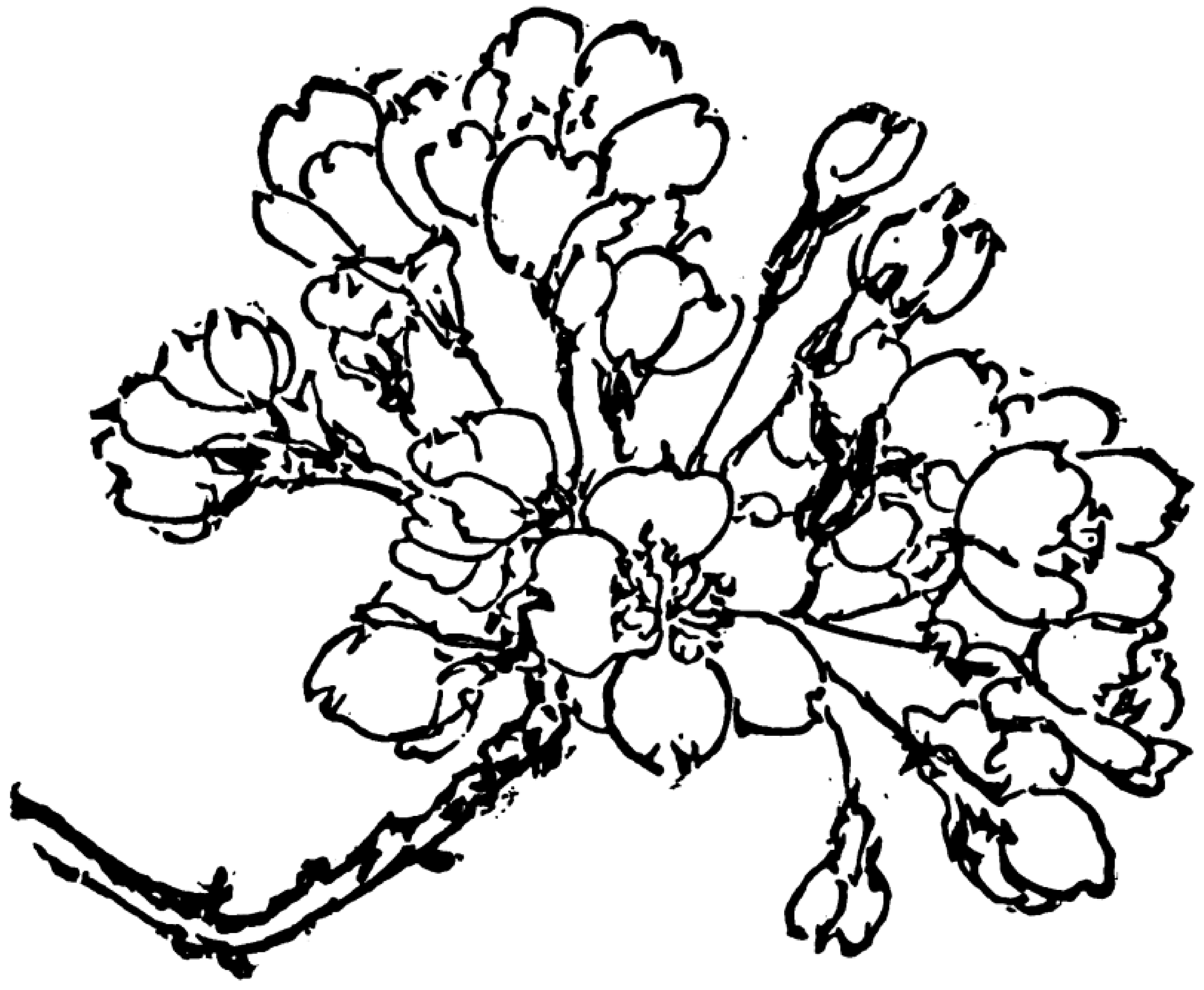
すまし汁は、菓子椀の掛汁と異なりて淡泊なるをよしとす、鰹節の煮出にて充分なり、陽氣が暖くなるに連れて味噌汁、大和汁、薩摩汁などは重くろしくて進まずこれからの汁はすましに限る心地す、

一、摺芋と青海苔　すまし汁の中へ薯蕷を山葵おろしにて摺り落し、青海苔を炙り添へて出す、

二、白豆腐と淺草海苔　程能くすまし汁の出來たる頃、白豆腐を小さく奴に切りて入れ煮上りたる時、椀に盛り淺草海苔を炙りて揉りかけて出す、

三、土當歸と干海老　汁の出來たるを待ち土當歸を一寸二分計りに切り皮をむき竪に薄すヽヽと刻み水に浸して飽をぬきたるを水をきりて入れ二三度くらヽヽと煮かへりたる時に火より下ろし椀に盛りて出す、海老は皮を去り土當歸と共に入れて煮るものとす、

四、小海老と芹　小海老は頭と尾とを殘して皮をむき、芹は一寸湯煮て用ゆ、



五、おぼろ昆布と小茸椎　小椎茸は足を去り汁と共に煮て味を付け、昆布は生のまゝ盛る時椀に入れべし、

六、三葉芹と竹輪　三葉芹は一寸湯煮、竹輪に小さく輪切にして用ゆべし、

七、春菊ときす、きすは三枚に下ろし笹の葉結ひにむすび、菊菜は約一寸計りに切り共に湯煮して後ち汁と共に味付けべし、

八、ぎせい豆腐とほうれん草　ぎせい豆腐は巾一寸位、厚三四分位に切り其まゝ用ゐ、菠薐草はゆでゝ葉尖一寸計りを用ゆ、共に汁の出來し頃加へて二三度煮かへればよし、

五、蠶豆と霰半片　汁の鹽梅加減出來たるを待ちて蠶豆、半片共に入れ、火の通りて蠶豆の莢の軟くならず齒切のあるうちに椀に盛りて出す、半片はあられ形に切るなり、

十、湯葉と干海老　汁の出來上りたるを見計ひ湯葉及び干海老を入れサツト煮て味付くればよし

△糠味噌新調

香の物は惣菜附屬の重法品なるが、さて年が年中大根の澤庵漬や菜の鹽漬にて濟まさば何の手間ひまも入られど、それでは如何にも厨婦の伎倆がなさ過ぎはせぬかと思ふなり、何がなくとも香の物でお茶漬サラ〳〵とか、何がなくとも新香で一膳とか云ふ塲合に鹽辛き澤庵漬や、鹽壓の菜漬位では餘り興の醒めた話なれば、季節〳〵に似合はしき新漬を拵えて事を欠かしめざるは忠實なる厨婦の心掛にして、又一皿の漬物にて厨婦が料理鹽梅の上手か下手なるかと云ふことを知るとも難からず、

さて四季を通じて最も調法便利なるは糠味噌漬を第一とす、その容は古き程よろしけれど今新に拵へるには、白水即ち米の磨ぎ汁の濃き部分を溜め置きてその汁にて炒りたる米糠を解き鹽を攪りまぜて造るものとす、糠味噌は漬物を出す毎に糠の附いて出で耗り易きものなれば常に新くしてふやし償ふことを忘るべからず、さて最初は何を漬けても醎辛くて本來の旨味なければ其處は容さへ慣るれば自然と其風味出來るものなれば、容は成るべく懐を廣くし毎にかきまぜるをよしとす、その上等に仕立つるには酒の殘りを入るべし、折々酒を少しづゝ糠味噌の中へ注ぎかきまぜ置くものとす、大根、蕪菁、京菜、胡瓜白瓜、茄子の類何を漬けてもよし、急ぐ塲合には小蕪など一寸微温湯にてもみて漬くれば二時間の後には香しき新漬を得らるべし、キヤベツなど球のまゝ糠味噌にうづめ置き食事毎に外側より一枚づゝはがして用ゆるも妙なり、序に念の爲め注意し置くべきとは葉の多きものを漬ければ上げる度に糠味噌の附着して出で容を耗らす恐れあれば控へものなり、又糠味噌は人が手を入るゝ程風味佳くなると云ひ傳へ、日に一度より二度、三度に及ばゝ食事毎に新らしき香物を食膳に上して感謝せしめ得べし、併し夏の土用最中にアイスクリームを拵へるに鹽と氷を碎きて冷やす位なる故、冬季中鹽辛き糠味噌の中へ手を入るゝは冷めたきより寧ろ痛きと云ふ程なれば中々容易の業にあらず、而も春季から夏季へ掛けてはさる苦み心配もなければ、成るべく旨き新香物を拵へて食膳を賑はしたきものなり、

△鮒の煮こゞり

鮒は淡水魚にて殊に生まぐさく好き嫌ひ多し、源五郎鮒とて琵琶湖の名物で大なるは刺身に作ることあれど、大抵は小さく骨硬ければ雀め焼とて背を割きて付焼にするもあれど面倒なれば素人には向かず、さて世話入らずして案外喰べさせるは煮こごりなるべきか、鮒の鱗をふき腹を切り番茶の煮がらにて三四時間も煮れば、硬き骨も軟くなり其上生まぐさみもなくなりゆゑ、程能く味を付けて置けば一週間が二週間でもそのまゝ持ちてお茶づけの菜に備ふるを得るなり。

東京名代の上菓子

東京の菓子は甘味が淡泊で、上品で、意匠も美事です。市内で有名な菓子には皆な其の家々の名代と稱する專賣物があつて、夫々特殊の佳い風味を有つてをりますから、其を左に案内申しませう。

▲最中　は馬喰町の玉村のが美味しく出來てゐます。

▲壺々と云つて、壺の形をした最中は、芝西久保の壺屋の專賣で、是は餡がよくて、皮がうまい。

▲屠蘇おこし　は芝口一丁目の蟹屋のが一番うまい。

▲羊羹　は上野廣小路の岡野のが美味しく喰べられます。

▲煉羊羹　は本郷四丁目の藤村のが上等で、又たこゝの大徳寺、田舍饅頭などは上品に出來てゐます。

▲腰高饅頭　は日本橋瀬戸物町の松岡のに限ります。

▲大福、開化饅頭、春日野など申す菓子では南傳馬町の風月堂のが一等よく出來てゐます。

▲カルヽス煎餅、カステラ、栗饅頭、蕎麥落雁、桃山の様なものは、兩國若松町の風月堂で拵へるのが尤も上風味です。

▲甘納豆　で賣り出したのは、日本橋西河岸の榮太樓です。又た此店の名物は村時雨、玉簾、松葉羊羹、梅干等です。

▲煎餅類　は京橋彌左衛門町の松崎が宜しく、殊に厚燒煎餅の美味は日本一であります。

▲干菓子類　は南傳馬町の松月がよろしく、就中海雪、牡丹、芋煎餅等は此店の名代です。

▲洋菓子類　は京橋南鍋町の風月堂、殊にビスケットが旨く、此家のを喰べては他のは喰べられません。

▲麵麭菓子類　は銀座四丁目の木村屋と南傳馬町の三河屋。

（舟人）

△樂と苦

父親道樂息子に向ひ「コラ貴樣は何故さう遊んで許り居るか、若い時遊んで居ると、年を取つてから苦勞するぞ。

息子「私は年を取つてから苦勞を爲る爲めに遊んで居るのです。

父「馬鹿め、何故そんな事をいふか。

息子「でも阿爺は始終そういつてるぢやないか、苦は樂の種だと。

女學世界定期增刊 婦人博覽會

四月十五日發行

千萬里と隔つる土地の事柄、千種萬樣と殊なる人の藝術を一堂の下に會して、千百萬人の見聞智識に達せしむる妙工風、これぞ博覽會の特色なり、凡そ今の世に耳あるもの、眼あるもの、又足あるもの、翼あるもの、誰れかこの智識の庫に入りて、滿腹十二分の愉快を買はざるものやあらん、嗚呼偉なる哉、文明の餘澤、嗚呼盛んなるかな國運の進歩、これを祝せずして將た何をか祝さん、本誌はこの盛會を祝さんと欲して、こゝに『婦人博覽會』なるものを發行す、這はこれ婦人に關する一般社會上風俗上の事柄を諸方面より觀察して、尤も有益に且つ尤も有趣味に編成したるもの也。

目次概要

新説
食物哲學

佛國大醫新案

△何故に食物は不消化なるや

四百四病の其の中で最も頻繁なものは消化不良なり、就中上流社會に於て然り、消化不良は萬病の根源なり。

消化不良の原因には、心の作用より起るものあり、即ち悲哀、厭倦、家業の心配、事務の憂慮等、皆その原由たらざるはなし、其の證據は土地を換へ、散策を試み、山野に出でて新鮮の空氣を呼吸し、海濱に到りて青松白砂の地に遊び、只管心配を打掃はんとすれば、消化不良の病は立ろに消失し去りて食慾頗に亢進するに徵しても知る可し。

露國の生理學者パウロウ氏曰く『消化をして良好ならしめんには、愉快に食事せざるべからず、食事中種々の事(心痛若くは過度の愉快)を考へるか若くは口に適せざる食物を強て食せんとするときには、愉快といふものなき故唾液も胃液も分泌せざるを以て、消化は甚だ困難なり、之に反して大好物に接せんか、唾液津津として口に溢れ、胃液も亦豊かなるが故に、消化は忽ち行はるゝなり』と。

故に先づ第一に食物の調理法を完全にせざるべからず。

△徐食せざる可からず

調理法の完全なるは第一なれども、單に之のみを以て足れりとすべからず、倘其上食事法の適宜ならんことに注意せざるべからず日本人は多く其の食事法を誤れり、何となれば多量の食物を餘り急速に食するの癖あればなり。

速食は天下一般の通弊なり、或者は時間に迫られ、急ぎて其の事業に取懸るものあり、或者は又神經質の

爲に何事をも急ぐ癖あり、中には又食慾の要求に堪へず、食卓に就くや否や、一時に嚥下せんとするが如き者もあり。

此場合に於て結果は皆同一なり、食物は充分嚙み摧かれず、消化液普く之に行き渡らず、不消化物は醱酵して屎尿を催うし、之が爲に關節炎の各種の弊害を釀すに至るものなり。

米國のフレチアー氏は斷乎として徐食主義を取り、口中て嚙み砕きたる食物を唾液にて殆ど乳漿の如くになし、牛乳、肉汁、葡萄酒及び其他の飲料をも暫時口中に留置したり、口中の食物を斯くこまかに嚙み砕くときは唾液にてアルカリ化せらるゝと云ふ、氏は此のアルカリ化の必要を飽迄も主唱し、時には酸味の菓實を以て故さら之を起さんことを務めたり。

此の如くするときは消化は甚だ容易く行はれ、腸內の黴菌を減じ、腐敗性のものを消散し、人糞の臭氣なきものは尚一層長く腸の內に停留し、其の分量を減ずるが故に、大腸は膨脹の要なし。

隨つて食事は自然に愉快になり、尋常の食物に對しても食慾は著しく亢進し、同時に健康に大影響を及ぼし、食後心身の倦厭疲勞することなく、神經痛もなく、何處と定めがたき苦痛もなく、レウマチス、痛風などの病徵が自然に消失し、之が爲に氣象までも變り、何となく愉快になりて樂天主義となるを自驗したりと。

又ジアン、ピノー氏は、健康と長命とを保たんには、單に萬事を節するのみを以て足れりとせず、尚又長命なる家門の後裔遺傳たらざるべからずと云へり。

又哲學教授〔チッテンデン氏〕は此の徐食主義の効能を尚一層學理的に實證し、フレ氏の方法を嚴密に施行したる結果、單に徐食の一事のみを以て、食物の分量を半減するに至れり、時には三分の二まで減量するも差支なきに至れり、就中肉類を減少すること最も多量なりと云ふ、斯くして此の主義を取れる者は愈よ强健壯快にして心氣何となく愉快になり、健康上大なる効果あるを認めたりと。

△食量を減少せよ

人は常に餘り早く食する而巳ならず、又餘り多量に食するの癖あり、此の二種の習癖は相互に離す可からざる關係あれば、急食する者は勢ひ多食せざるべからず、其の理由甚だ瞭なり、食物の一半は消化せざればなり、是に於てフレ氏の徐食主義が食量を減少するの理を尚一層明に看取するを得べし、食したるものを消化すること能はざるときは、愈よ食して、愈々食せんことを欲し、而も尚且飽くに至らざるべし。



昔人は多食の害を論ずること詳なり、有名なる諺あり、曰く『饕食は刀劍よりも多く人を殺すものなり』と、然り、大食の爲に倒るゝ者世甚だ多きを見て知る可し。

減食の利益を初めて實證したる者はルイジ、コルナロと云ふ人なり、此人は伊國の紳士にして、初め放縱逸肆にして道樂三昧の暮をなしたる者なるが、年四十にして重患に罹りたる結果、斷然減食主義を實行し、殆ど隱君子的生涯を送りたり、毎日食量を減少して終には一食にパン二切れと牛乳一合に至るまで減量したり。

此の如き節食法によりて氏の健康は非常に强壯とな

り、七十歳の時誤つて馬車より失墜し、支體を碎き、頭蓋にも重傷を被りたれども、身體の健全なるお陰にて、醫師の危ぶみたるにも係らず、長速の進歩を以て全快したりと云ふ、爾後尚又節食主義を墨守し、嚴しく憤怒の情を抑へ、虚心坦懐にして、心身共に平穩、氣象も亦常に快活なりき。而して八十三歳に至りて長命無病の道を論じ、九十七歳まで健在なりき。

爾來之に則りて減食主義を取る者尠からず、近頃にはジアン、シャルコ氏南極探險旅行を企て、同志と共に平常の食量を半減しつゝ、愉快に活潑に、何等の病氣もなく、其の目的を果したりしが、歸來殘餘の食物を衆に分ち、飽くまで食せしめたるに、衆咸消化不良の病に罹りたりと。

然れども茲に研究すべき問題は人の生活に必要なる食物の最低減量如程と云ふことなり、此は人の身長體量、其の屬する所の種族、其の棲息する土地の氣候、及び其の從事しつゝある所の業務等によりて決すべき問題なり。

概して言へば、少壯の人は過食より起る熱度をも忍ぶことを得、單に體溫上進して過度の活動の必要を感ずる位なれども、老人及び體質の弱き人に至りては然らず、餘り多量に食すれば、消化器をして重きに堪へざらしめ、餘分の勞働を請求し、身體を疲勞せしむること太甚し。

△徐食の習性を馴らす方法

食事を改良することは甚だ必要なり、改良問題は左程六箇敷き事にあらずして、單に『今後斷然食事を改良せむ』と云ふ決心あれば可なるが如くなれども、實際に於て惡癖を矯正することは頗る難事に屬するものなり現在消化不良の病に罹れる者と雖、之を矯正せんと希望しつゝあるに係らず、單だ其の意志のみにて實行せざるもの多し、成程食事の前後には氣が附きて、注意せねばならずと思ひ乍らも食する時には頓てそれを忘れ、又復た今迄の習性に司配せられて、丸呑過食の弊に陷るものなり。

勿論口中にて充分食物を嚙み砕きたる後には、唾液と胃液とにて容易く消化し得べしと雖、それにしても唾液には滲出する時間を與へざるべからず、是を以て餘り大口を開けず、殆ど啄食的に食し、而も常に徐食主義を忘れずして、細かに切りたる肉類、菜蔬、及び牛乳、ソップ、酒までと徐食すること甚だ必要なり。

　唾液の缺乏を補はんが爲に食後一種の藥品を服用すれが可なりと思ひ、米人など多く此の方法を取れども、是れ單だ一時の苟息主義に過ぎず、胃に入る間には食物及び胃液と混同して、早くも其の効用の一半を失ふに至るものなり。



　貪食と呑食の弊を矯正せん爲には、豫め肉類及びパンなどをも細に切り置くを宜しとす、汁物なれば、小匕を用ゐ、前匕のものが全く嚥下せられざる間、後匕のものを口に入れぬ主義を取るより外に良法なし。

　餘り食品の種類を多く用ゐざることも亦一法なり、單調の食物なれば自然に徐食しつゝ其の味を咀嚼せんと欲する心起り、之が爲に其の消化尙一層早くなるの効あり。然れども此種の單調物を愉快に食すること能はざれば、强て之を食するに及ばず何となれば、快食は消化第一の要件なればなり。

　消化不良の人の食物は成る可く

單純なるものを必要とすれども、尙其上に鹽梅好く之を調味せざるべからず、蓋し其の風味の良好なるが爲に、中を咀嚼するの心起り、知らず識らず徐食主義を實行するに至ればなり、食事の際に愉快なる話をなして、時々止食「食事を中止」するも亦可なり。

△消化し易きものゝ目安

フレチャー氏の言に據れば、小食及び徐食の結果、數月の後には如何なるものをも食することを得、貝類までをも消化し得べしと云ふ。

此の如き好結果に至るまでには、兎に角消化し易き食物を撰びて食せざるべからず、然れども消化し易き食物と云ふに就きても、區別あり、或人は凡て容易く胃腸に入る所の食物を以て、直に消化し易きものと思ふ者あり、然しながら胃腸に入りても、尙未だ消化せざるものあり、是故に直に類化し得べき乳糜に化する所の食物を以て消化し易きものと見做すべし、但だ此乳糜化の事實を確定すること少しく困難なるが故に、已むを得ず通常の定義に從ひ、「知らず識らず消化する食物を凡て消化し易きものと云ひ、何となく重きに堪へずして、暖氣を催うするものを不消化物と云ふ、」の言を採用するをよしとす。

化學者及び生理學者は消化物不消化物の種類を仔細に研究して其の品目を一々列擧すれども、唯だ消化物なりとて必ずしも消化不良者に之を無差別に供給し得べきものにあらず、何となれば胃弱の人にして不消化物を最も容易く消化し得る等あればなり、尙又醫師の診斷を誤ることなきにしもあらず、庸醫の中には個人の病氣の素因を看取すること能はざればなり。

凡て快味を帶びて食せらるゝものは、皆消化し易きものなりとは斷ずべからず寧ろ之が反對の例多きが如し、されば此點に於ては自家經驗に重きを置くべし。

然れども如何なる場合にも凡ての消化不良者に好適せざる食物あり、興奮刺激的食物と肉類なり。

芥子、胡椒類は食慾を刺激すと雖、胃の粘液膜を興奮せしむるに過ぎざれば、宜しからず、肉類の食物も胃の粘液膜の上を蔽ふて、其の分泌を妨ぐるものなるが故に、是れ亦宜しからず。

客あしらひ

○客間

左に記するは目下巴里の交際社會に行はるゝ、佛國社交術の一班として同域の家庭雜誌の一節なり曰く客間は如何樣になし置くべきかと云ふに、先づ室内の温度を適度に保つことは第一の急務なり、來訪者に寒氣を感ぜしめ、風邪を引起さしむるやうのことありては、心配の種なり、次に光明と空氣との缺乏を來たさぬやう注意すべし、光明は愉快の携帶者にして、空氣は生命の元素なり、故に客間などには一刻も缺くべからざる必要物なり夕方日傾き、暮色蒼然として來る頃には何よりも早く燈火を點ずべし、暗憺たる室ほど悲しく不愉快なる所なし、暗瞑は沈鬱を齎すものなり、暗室に在るときは談話までも自然活氣を失ふ心地せらる、若し電燈なきときは、豫め洋燈を準備し置き、女主の合圖と共に光直に顯はるゝやうなすべし。

整理の能く行き届ける家には、必ず一人の召使を玄關に附置くを常とす、此は先づ來訪者の取次をなさしむるが爲、次には門戸を開閉したり又は來訪者の遺し置く衣帽などを持ち入らしむるの役目に充るものなり。

○化粧

女主の來客に接するや、必ず相當の化粧を凝して出づべし、然し餘り華美に過ぐるは不可なり、來訪する者必ずしも富貴なる者と限らず、普通の婦人の入り來ることもあるに、美服盛粧して之に接するは、如何にも衣裳の美に誇るかごとく來訪の婦人を恥かしむるかの如くに思はる。

○挨拶

手袋を穿めて握手するの可否は、久しく世の議題に上れる所なるが、此は餘り失禮のやうに思はるれば、穿め方を宜しとす、然れども人によりては、手袋を穿めぬこそ却て失禮なれと論ずる者あり、此は一國の風俗問題に關聯するものなれば、風俗の決定すると同時に解決せらるべし。

女主の座は暖爐の隅と定まれり、婦人及び老人などの訪問に接するときは、必ず起立するを禮とす、男子なれば、坐せる儘に挨拶す（此處少しく女尊男卑の風あり、我國の婦人に取りては兎に角考へ物なり、少くとも從來の風習によりては許されぬ風なり）

○見送り

來訪者多くして、椅子に不足を告ぐれば、男子は女子に椅子を讓りて自ら起立す來客の立出づる時には居殘れる客の週邊まで見送れども婦人なれば戸外まで送り出づるを禮とす。

談話の禁條

何事も適度あれとは處世の金言なり、談話に於ても又然かり、殊に女は爲べきをよりも、先づ爲べからざるをを誡しむるこそよけれ。

▲談話は餘りに熱心に過ぐること勿れ、熱心なるには又其場合あり、凡ての場合に熱心なるときは、眞面目過ぎて、人にはかたくるしく思はるゝものあり、普通の談話にては、至極平易に、至極趣味多く、又至極淡泊に話すべし、熱し易きものは又冷へ易きものと知るべし、殊に熱心に過ぐる時は往々人をしく厭氣を感ぜしむるものなり。

▲談話は長たらしくすることなかれ、一つ事を幾度も繰返すことなかれ、又多辯を弄して、他人に嫌厭を來さしむること勿れ。其要領を簡潔に且つ明瞭に說くことを忘るゝことなかれ。

▲人より聞たる事を、殊更に枝葉をつけ、殊更に感動を起さしむる樣に勉むるはわるし、虛言は往々かゝる處に萌すものなればなり。

▲多人數集會の場所にて、地方の方言や、外國語・若しくは合言葉等を用ゆることなかれ、又或は一人にのみ對して理解せらるゝ事實を話すこと勿れ。(例令ば其人の一身上の事の如し)かゝる時は、他の衆人に對し大いに興味を殺ぐものなり。

▲談話中に人を冷評し人を誹謗する如き言辭を用ふることなかれ、又醜猥下卑なる言語を用ゆることなかれ、例令用ゆる人にして、其意思なきも聞く人の耳には、殊に感動を與へ易きものなり、猶更婦人は謹み深きこそよけれ。

▲衆人の中にて、忠告がましきことをいふ勿れ、受けたる人も、有難く思はぬのみならず、深く耻ぢ入りて遂には其人を恨むに至るものなり、而して關係なき他人さいもかゝることをきかば氣の毒に思ひ、不興氣の感を懷くに至るものなり。

▲徒らに他人の話振りに做らひ、之を用ひて多衆の人を笑はせんとすることなかれ、これ其人の輕卒浮薄なることを自白すると共に、倣はれたる人の感情を大に害ふものなればなり。

▲目上の人に對して、いやに諂らいの言を爲すこと勿れ、こは敬すれば足るものぞかし、又目下の者に對しては、殊更に嚴酷の語を用ゆること勿れ、愛して馴れしめざる言語を用ふるこそ上策なれ、人は必ず其の時と其の場所とによりて談話の法を異にすることを忘れまじきものなり。



小説 空蟬日記

加藤不二子

上之巻

十月十八日、いとよく晴れたり、明日の祭日に變らばやと、又儘ならぬ憂き世託ちつゝ、例によりて病室へ出でぬ、小春日和の暖さ、病院の内ながら珍らしくとも心浮立ち、川喜多様回診の後、後園を漫歩しに、名もしらぬ千草八千艸咲き亂れて、さながら錦の褥を敷き並べたらん如く、美しきが中に、葉鷄頭の殊に赤く黄ばみたる邊り、こよなう心ゆくに、手術室の後方にて、櫻の返り花見出たる、一しほ嬉ばしう、目飽かず眺め暮せしが、あたら此儘捨置きて、心なの人々に手折られんは口惜く、足を爪立にし、手をさしのべて、漸々の思ひ一枝手折り、看護婦室の水甕に、挿入し置きしを、人々珍らしがりて、己が寄宿へなどゝ騒ぐ、そが中に誰なりけん、いと傲り顔なる面憎し、その褒美にかくして差上げんと、あら／＼しく花拔きすて、我を屬目けて打ち付けしかば、あはれ殘りなく花は散り果てゝ、悔めど悔めど詮方なし、人は、人の憂き目を喜ぶものなり、

（評、全篇の構想この折花の伏線によりて活く）

午後、入院患者一名、そは山本幽香氏にて、今春、我内科に在勤し折、神經痛の爲め、永らく入院し、受持なりしかば、心安く互に語らひ明し、其後も憎からず折々文給りし、うらやさしき青年なりけり、君はいたく文學を好きて、殊に新體詩など巧妙と聞及び、我胸の安からざりしも幾回か、

然るにても如何なれば、世を果敢なみましけん、昨夜の十時といふに、短銃を、我と我咽喉に當て、自殺を企てられしが、命を果すに到らず、咽喉部の所々に傷所を殘し、今日しも又入院せられて、再度我受持の

室にと、思へば奇しき縁なり、我胸又も安からず、物をこそ思へ、多くは語らじ、仔細に寫す筆もなければ

（評、筆意勁健）

幽香の君の傷は、何れも致命傷にあらねども、頸動脈の邊に、止まりし銃玉の、首尾よう脱出ざれば、或は大事に至らんやも計り知られず、よく〳〵患者に注意せよ、少しにても容體に變狀あらば、すぐ報告せよとの、川喜多様の命令、

此の君の事、心にかゝれど、時來りぬれば、宵番の人々に、かくと申渡し、言ひ告ぐるに念入りたるが可笑しとさげすむ、寄宿舍も此の新らしき話柄にのみ、今宵は騷々しく、いつしか夜は更けて、燈火の暗うなるをも忘れ、何れも何れも、己がじゝ心に道理を付け或は失戀の果ならんといひ、或は學理に熱中してと語り、否否斯くかくしかじかの次第と、眞實しやかに述るもあり、中には打付にも我つれなかりしが、させし業と、言ひ罵詈しらる、聞くだにつらし、何條我のつれなかりけん、胸中は掻撈らるゝ如く苦しきを、涙は涸るゝまで悲しきを、竹ならば割てだに見すべき此の胸中よ、（評、一句極てよし）

さても幽香の君は、未だ人事不省の中に在つて、譫言にとぎれとぎれて、我名を呼び給ふのみ、秘密の幕は堅く鎖されて、誠をそれと知る人もなく、語らふ人もなし、然るにても、然りながら、戀にもせよ、何にもせよ、我と我手に生命をちゞめ賜ふとは、心の中に切なさつらさ、如何に悲しく、如何に悼しき事のありつらんよ、察するにさへ、涙こぼるゝに、嗚呼、噫、今宵は星も涙に薄し、

然ることあらぬは必然ながら、もしや我のそれとは返り事せざりしを、恨みてそれに及ばれしならば、如何に、いかに、如何にかせまし此の我身、何物の我身を責むるぞ、胸は波立騷ぎて、我呼吸苦し、

睡眠れど睡られず、思はそれよりそれと、目は冴え渡りて、時計の音のみ心を刻む、

十九日、曉番なれば、一時の音を聞き濟して起き出づ、流石に秋も最中を過ぎしかば、夜寒の眞夜中より、

曉方の勤め、そろ／＼つらくなるに、中木樣のいとゞ心地よげに、寢入りたまへる姿の、うらめしく、惡戲して出しに、うつゝながら呵りたまふ聲、硝子障子を洩れたるが、可笑しと、森山樣又笑ひ給ふも少時、夜は靜に、星は稀に庭には蟲の聲のみ時しり顏なり。



幽香の君は、猶も人事不省の中にありて、苦惱はげしければ、我は專屬の有樣にて看護す、一室たゞ寂として、患者の苦しげなる呼吸に、折々洩らすうめき聲のみ、高く響く午前の二時、今夜はわけて、電燈の光も薄く寒げに、蒼白き患者の顏の上に、かすけく照らす心細さ、かてゝ加へて、秋の日和の定めなく、何時しか空は搔曇りて雨だれの、ぽつりぽつりと音の寂しさに誰がしめ忘れけん、何處の戶ともしれず折々風に煽りて、露にむせびし蟲の音も、いつしか聞えずなりぬ、何時になく寂寞しく感じたる今宵哉、

午前五時過ぐる頃なりけん、患者は氷を求めしかば、粉碎にくだき、匙もて口に含ませしに、甘露の味やしたりけん、早くも嚥下して猶もと乞ふ、乞ふがまゝに尙一片を含ませば、さも嬉しげなる顏付にて、呼吸も靜まりし樣子なれば、少しは心地の勝れてと訪ひまゐらすに、いとも不思議の面持にて、きつと目を開きて一圖に我面を見詰つゝ、そう貴方は、

「鈴木樣ならずや、千勢子樣ならずや、確に」

とけたゝましき聲にて、聢と我手を握りしめ、只管我に縋らんと身を寄せ給ふ、

「ようこそ御忘れなう」

「忘れじとは恨み、忘れねばこそ思出しもせぬ、少時だに忘るゝ暇のありもせば、この苦しみはせまじきを否、否、現にてはあるまじ、夢なるかな、夢なるかな夢なりとも醒覺るな」

と殆物狂はしき有樣、我はたゞ醉心地になりて、握られし手放ちもあへず、動氣頻りと高まるに、坐にも居たゝまらず、君も又呼吸はげしく、苦痛に耐へでか、うめき給ふ、靜かにしたまへ、氣を靜めではと、元の座に伏さしめ、からうじて廊下へすべり出で、ほッと息をつきしが、後の事案じらるゝに、戸を細目に押し開き、そッとぬすみ目すれば、次第次第に呼吸も靜まり、後には夢か、夢かと、うつゝなの聲のみ聞えて、次にはいつしか寢入り給ふ樣子に、先ッ何よりと安堵しつ、曉の風一しきり、身はぞつと振ひあがりぬ、

ありし事ども朧げに云ひ置き、晝間の者と交代せしが、此の君の事、心にかゝれば、寄宿に歸る心もいでず、今朝程の言葉、繰返し繰返しては何事も手につかず、心は嬉しきやら、悲しきやら、何と評すべき、我れと我心わけ難く過にし春の事ども思出でゝ、とぼ〳〵といつしか我室に歸るに、其折君と共に摘みし菫を、相撲らしては打興じ、打興じ、互に小兒の昔に返りしを喜び、或は朧月夜の花の下影、漫歩きする後より、追ひ縋り給ひて、四季の月の唱歌を、淸しき聲にて合唱はれし時は、夢心地に嬉しかりし事ども、眼前にちらづきて、思ひはそれよりそれと、夜團被りて寢

よとはすれど、殊更晝の事、まして午後は手術と聞くからに、その事他處事ならず感じられ、終には起き出づれど、又詮ん術もなく、うつらうつらと机に向へど、書ひろぐる氣にもならず、起つ居つ、有耶無耶の中に日を暮し、或時は君を見舞はんと、出掛けしが、人のおもわく如何、とがめらるゝが恥しく、用もなき看護婦室に行きて、外處ながら君の様子聞きて、心やりをするに、早くも噂立ち初めぬ、女の口は姦うて

同日、宵番、待ち兼ねし勤の時刻も近づきしかば、人のおもわく如何ならんも、笑はゞ笑へ、誘らば誘れと、心を定め、病室へ出でしが、何時にない早い事と、言はれて女心のうら恥しく、ほつとして時計を眺むれば、實にこそ一時間程は、早かりし事のうたてさよ、

幽香の君は案ずる程の事もなく、院長の手術にて、頸動脈の邊りに留まりし銃丸も、



脱け出で、醒覺の後もさのみ、嘔氣を催さず、たゞ時折氷を望み給ふ、我は何よりも心嬉しく、安堵の思ひ此事なり、されど手術の後なり、殊に心にかゝる君なれば、繁々と見廻るに、君はうれしげの面持にて、此の春の折の事ども、なつかしげに語り出でられ、

「若艸萌ゆる小松原のあたり、君の肩に凭れて、黄金

花咲く野面を眺めては、共に胡蝶となつて舞はんかと思ひ、雨の夜の品評には、憂き世とのみおぼえしぞ、かかる樂しき境もあるとかと、世を厭ふ心も失せはてゝ、思ひ返せしも、つかの間よ、我には憂き世、又君ゆゑに憂きを求めて」

と怨しかけられ、何んと答へん樣もなく、手術後は餘りに談話し給ふな、身體に障るべければと心付くれば、

「なに君故に捨てし生命、取留むるとも詮なきを」

「さのみは早り給ふな、なにしに君を嫌ひまゐらすぞ」

「そは誠か」

「誠ならでやは」

「千勢子の君、千勢子の君、君はよしつらくとも、斯して君の手に抱かれ、君の手に看護られて死なんは、なんぼう嬉しき限りなり、緣も盡きせずありけん、かくて死なんは心安し」

「よしなき事いひ給ふな、考へ給ふな、君が御身體こそ大事なれ、快くなりての後に、嬉しく樂しく語らんに」

と思はず釣り込れたり、折柄交代の時迫りぬ、君安られと斷りつゝ、

今宵も睡眠られず、思はじとすれど思ふ思ひ、我身ながらに物狂しきかな、と疑はるゝよ、夜は更けたり人目はあらじ、よし人の見る目も何にかせん、秘め置きし、君の玉章取出し、卷返し繰返し讀むに、君の情の籠るかな、我あやまちぬ、君許させ給へと、やさしき君が水莖の跡、胸にひッしと抱きしめ、何故今日迄はつらかりしぞ、よし人目の關は越え難くとも、心の程だに明し申さんに、何咎めらるゝ事やある、斯くて此儘我君に、許したまへ今は我君と呼ぶことを、もしや此儘我君に變事のありもせば、末は如何なる身なるらん、あるときはあるにまかせてつらかりきなくてぞ人の戀しかるらん、と讀みしはこれ歟、胸は痛し、頭は重し、嗚呼、嗟よしなきこと念じつるかな、君は程なく快よくなり給ふぞ、明日は吹きなん春の風、花の咲く日ぞ心浮き立つ、我も今年は錦を故鄕に飾る身ぞ、

少時の夢にだに、母様枕に立ちたまへ、慕しきは故山の水、それの橋、

二十日、寝られざりし宵の疲か、暁よりいぎたなう寝入りぬ、起き出て頭重し、物思ふ身にはうるさけれど、當日とて湯浴せしに、中木様來られて、幽香の君危篤とぞ話さるゝ、どうしてそれ程急にと色替るに、後出血よ、それ程心配なのかと、あざけり顔なる心憎く、氣もそゞろそこそこにして上るに、今のは皆虚言昨夜の敵取た計と笑はるゝ、あまりの事に腹も立られず、（評、戀敵の君にこの戯謔あり何等の狭着ぞや）

此日晝間、中木様の戯言讖をなしゝか、不思議にも幽香の君、後出血甚しく、爲に疲勞を來らし、容體甚氣づかはし、我は左迄とは思はねど、氣早き者は今日の知死期は何時よ、早くも危篤と騒ぐ、我心をもしらで、面白からぬ人の心よ、（評、筆つかひ極て妙）



今日しも母より文ありたり、追々御年のめされし

か、筆の運も力なく、悲しき事のみ書き列ねたり、斯くやくざなる我れをしも、子と思ひ給へばこそ、杖とも柱とも頼みたまふか、妹は我が卒業の期を、日毎指折數へつゝ待居るとぞ、いつもながらやさしき心、同胞ならではとしみ〴〵嬉し、（評、這個數行の辭を拈出し、他が心裡惑亂に頭失せしむ、巧手といふべし）

中之巻

靜けさを何に譬へん、病院の夜の靜けさを、萬籟死して聲なく風もなし、內には、高き天井に吊されたる電燈の光のみ、あかあかと、飾りなき病室の白壁に反影りて、薄ら寒く、死を誘ふ惡魔の秘そめる宿とや見るべき、ベットに橫たはる患者のうめき聲は、草間にすだく蟲の音よりも細く、絕えて續きて、又絕えて、指折數ふれば後の月も過ぎたり、我身一つによるかとぞ思ふ、寂しさの秋の暮れゆく眞夜中よ、

今宵も曉番なれば、午前二時より病室に出づ、少にても君快よかれと祈りつゝ、廊下を歩む足もそぞろ氣もそぞろ、かゝる思を神も哀れとおはしめせ、

神も無きか、佛もなきか、幽香の君の容體愈々惡しく、今日をも計られぬ有樣なり、よくよく看護したまへ、最後をこそ肝要なれ、君待ちわぶるに、と言ひ捨てゝ森山の君は、寄宿舍へ急がれぬ、戲言も程にしたまへ、おどる胸を押さへて、足音も立てず、驚かしては惡かりなんと、忍び忍びに、ベットへ差寄るに、檢溫表は取除されたり、嚴そかなる用意胸を刺す、靜に呼吸を數へつゝ、驗溫器をそつと腕に挿入めど、少しの身動きもしたまはず、靜けき樣は、神か、人か、否うつゝなの有樣、昨夜とは一夜だに經だてぬを、斯くも變りたまふか、肉は痩落ちて、骨は高く、色は白きが上に蒼く透き通りて、既に此世の人と思はれぬよ、

今は聲を限りに叫ぶ哉、幽香の君こそ我戀人なりと生命を捧持し戀人なりと、人には告げじ、神よ聞しめせ、ミユズの神よ聞しめせ、我眼うるみて、脈とる手はわなゝく、數ふる數は誤算らんも、危險の狀態には誤まりなし、脈搏百四十を超過て、體溫三十五度を降

る、此病院由來外科を以てなるに、なにしに此君のみ斯る狀態に落入らせしぞ、人恨めしく、己悲しく、打もたをれん我身なり、

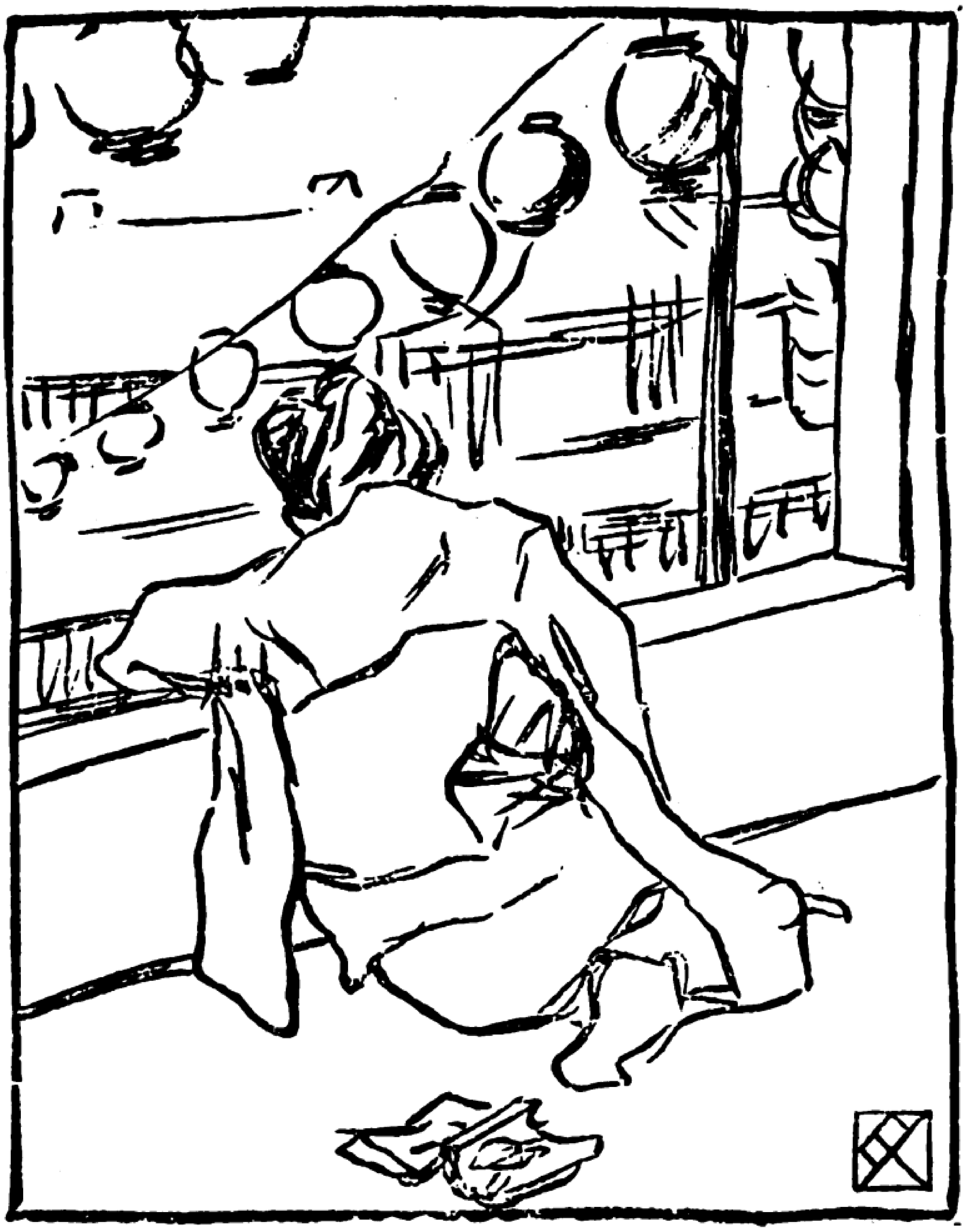
今は耐へじ、耳もとに口差寄せ、千勢なるぞ、千勢なるぞ、千勢なるがわからずや、君よ心を確に持せ給へ、心弱くてはかなはじを君、

（評、悲切の聲見るがごとし而して文辭、遒勁、一語千鈞の重みあり、史記、蒂輪譜の文と雖も又獨り擅らなる能はじ）

「オヽうれしさの限りよ、千勢子の君、菫咲く野の夕まぐれ、小米花咲く曉をつれなかりし君なりしが」（評、垂死の人、朦朧の間にこの辭を成す前後の對照極て妙）

と聲はかすれかすれて、絶え絶えに、跡はうめき給ふ、君よ許させ給へ、ゆめつらかりしにあらず、君の御心疑てより、許させたまへ、妾のたらわぬなり、

曉近く烏の啼く聲けたゝまし、燈火明滅す心凄や、終夜附添ふ君の枕邊、次第に



次第につく息のみ激しくて、我が呼ぶ聲も通せす、死ぬ、死ぬ、との切れ切れの聲、我腸寸斷る、胸は破れて、水よ、水よとかすかに耳朶に響く聲聞きもあへず、院長の室へひた走る、赤酒と言付けられて、院長は後

より靴音高く續て見舞れぬ、呼吸器を胸に、確かりなさいとやさしき言葉、脈搏數へて溫度はと問き給ふ、

「三十四度七分」

「親族は」

「昨夜電報にて」

「遲からん、君言遺す事はなくて」

「先生モルヒ子注射を、モルヒ子注射」

「看護婦に」

（評、痛切入神の評、戀人の臨終に周章たるの狀見るべし）

嚴格なる調子、先生は患者の胸くり廣て、注射の用意、夜は全く明放れて、遠く聞ゆる汽笛の音、軒には雀の聲、

（評、一段落下の巻一數十行寂々悠々、餘韻盡くることなくして人は徐ろに詩の世界に入る）

下之巻

親切にも森山樣又訪ね來られて、妾が戀人を死亡室に迄送りし健氣な擧動、さては亡しきベッドを眺めしまゝ悶絶したりー心の中、いかに悲しかりつらんなど、其當時の事ども話され、慰めらるゝと思ひしは、唯うたゝねの夢。我れは暖き春の光を背に受けて、うら柔き若草の上に、打まどろみつゝありけり、うれしや夢なりけり、唯夢なりき、天つ御神は何條我か願をすて給ふべき、君は猶健全なり、我が戀人は今も妾の前に壺菫のやさしき一束を持たれて、何處にてと訪ぬればそれ其處よと指ざゝれ、共々に猶も摘まん、いざ摘まん、と爪先上りの野面を、そこはかとなく心にまかせ足にまかせつゝ、何時暮たりけん、春の夜の、月は朧に、紅の、花にしばしの宿かりて、匂ふは月か、はた花か、天つ少女は霓裳羽衣の曲なして、實に舞遊ふべき夜の樣、仇にすごさん無念さよ、とバイオリン取出で給ふ君の御風姿、幅廣の背廣服召されて、胸あけ豐に、薄花櫻の子クタイ胡蝶に結び、髮は佛蘭西流行刈、薔薇の香あたりを拂ひ、透も通らん許美しき御手に、バイオリンゆるく持添へ、靜に奏樂給ふ朝々の音色、春の小川の緩く流るゝ如く、時には驟雨俄に至り

て、百千の雷霆怒るが如く、或は高く、或は低く、何の楽とはしらねども、一座感にたへ兼ねて言葉もなく耳を澄して聞居れば、忽然と君の御姿消ゆると共に、微妙の音楽次第に遠く、見る見る月は雲隠れ、花の遠（あた）り風騒ぎて落花狼藉、かゝる不思議もある事よと、唯茫然と佇立しが、一向君の御跡慕しく、おぼつかなくも



呼子鳥、たづきもしらぬ山中を独遥々わけ入れば、山又山の峯深く道漸々に狭まりて、草ぼう〳〵と生茂る雑木林の、木梢疎なるあたり、土少しく盛上りたるが、稍に近てゝぼろぼろしたる唯中に、悲しや新らしき墓標立てり、誰が奥津城といはんは遅し、見るからに涙の雨にも消えで、墨蹟くろ〴〵と、薄倖詩人山本幽香の奥津城と

ぞしるされたる、あはれや君はまさしく死亡し給ひけるか、嗚呼夢にはあらさりしか、夢にはあらざりしかまさしく黄泉の土となり給ひしか、思へは夢、少時だに忘るゝ暇のありもせばと語られし、それも何日、昨日今日とぞおぼゆるに、早くも北邙一片の烟と化して今はたづぬるよしもなく、逢ふに手段もなかりけり、君よ、許させ給へ、よし我が罪深くとも、人は云ふ、君の自殺、君の横死、皆我が爲、我がつれなかりし業なりと、然りながら、我、君をこそ恨め、君の御心解け難きに賤しき女の身より、いかでそれと言ひ出でらるべき、云ひて辱められんよりと、己とつゝむ胸の苦しき切なさを、君は汲取り給はざりしか、今は我こそ少時だに、忘るゝ暇もありせば、かゝる苦みもせまじきをと、御墓に取付き仰伏せになりて泣き叫ぶか、恐ろしやおどろおどろして御墓動き出でゝ、足下より一道の瑞雲立昇り、千勢子の君、千勢子の君と肓ひ給ふ御聲、いかで聞き違ふべき、まさしくなつかしの彼の君、なつかしの我が戀人、何處よりぞど見上ぐれば、

虛空遙に小手さし招かせられて、此處へ此處へと呼び給ふ、夢にだに逢ふ事難しと思ひしに、今目のあたり、顯然と見る事の嬉しさ、喜しさ、實に心は狂はん許り直に御傍へ行かんとするに、かなしや君は天つ御空、我は羽なき身の虛空をかけられず、飛行の術もなければ達するによしなく、唯彷徨と、右へさまよひ左へ迷ふに、恐ろしや恐ろし、數千の大蛇首を持上げてはせ集り、手といはず、足といはず、或は顔へ、或は首へ、卷かゝらんと、火焔の如き舌出して、あはれ目もくれ心も消えて聲なく、君よ救はせ給へ、我君と合掌す、今こそ助けん、やよや戀人しばしと、やさしき御聲の下より瑞雲我身を圍みて、何時しか君の膝下、恐ろしき數千の大蛇影もなく、そこにはやさしき壺菫、粹米菜、蒲公英、咲き亂れ、しよろしよろ流れ水温く、霞の奥は花の山、時雨るゝ峯は紅葉して、鈴虫、松虫、聲を競ふ、やよ待兼しぞ千勢子の君、つれなしと思ひしは我が誤り、ゆるせ我背子ゆかしの君、君よ御心、とけにしか、ゆかしの婦よ、ゆかしの夫と、手をとり

て、我、戀の誠を歌へば、君も合唱給ひて、此處は諸々の惡魔も來ぬ處ぞ、野邊は春秋の花一度に開き、山は不斷の雪を積みて寒からず、川はとこしへに涼風を送る、松江の鱸、さゝなみや志賀の諸子魚も、心の儘よ、樂しくゆたけく二人して、ともに契らん千代八千代、幾千萬の末かけて、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、かなしやこれも夢なりき、覺むれば同じ病褥に、身は一日と痩行く許、

嗚呼樂しきか天つ御國、みし夢の樣ならばよし然なくとも、此世にて終に逢ふべきよしもなき、人をいたづらに戀つゝあらんより、物憂き思に日毎夜毎苦しみつゝあらんより、かくて望なき世に生れんより、むしろ此の身をなきものにして、早く天つ御國に行かん哉、嗚呼願はしきは死よ、戀しきは黃泉の國、されは死は安し然りながら、老ひたる母の悲歎を思ひ、いとけなき妹を、跡に殘して、安じて死の御神に生命を捧得べきか。



（完）

懸賞小說第壹等
丹波國園部町字本町
加藤不二子

文中の評は閱讀の際戯れに記せしを削らずして印刷に附したりこゝにその不注意を謝す　編者



思ひ出の記

靜子

縫ひかけの袷も昨日終へたり、今日一日は釦をやすめて、讀書に耽らんものと、机の傍に行李開きて、彼か、是かと取り出す底に古き日記の四五冊、其の間に挾まれたる西洋紙の五六枚は、母校の寄宿舍に在りし頃、朝な夕な、日に幾度となく面合する友の殊更らしう、小さき人に賴み、あるは夜學の時間に自ら持て來て渡せしものなり一枚〳〵讀み行けば、何れも〳〵、子供らしき事、をかしき事の限りにて、名前も記さず、唯運動を勸めて、議論めかしく說きたるもあり、僅かの事に怒の言葉、吐きたりとて、あやまり、以後、妹と思ひ給はれ、姉樣となりてよと、くり返したるもあり、親しかりし友の非を、忠告せし我への答へに「アゝ君よ、アゝ友よ」の言葉に滿ちたる赤インキ三四ページの、走り書は、文章に巧みなりし、感情家の手紙なり、斯く思ひ返せば、たのしかりし其の時代の樣、目に見へて、今、現に四年五年の昔に歸りたらん樣にぞ覺ゆる。

△入舍當時

故鄕を後に都に出でたるは、上野や隅田の春、今ぞ盛りにて、大路の往通ひしげく、樹下、男は女、女は男の假裝して踊り狂ふ時なりし。荷物も高く積み上げたる車の後に曳かれ行く我は、九段の邊り、日比谷の傍り、打眺めて、げに帝都よ、との感初めて起りぬ、連れ來り與し、從兄に別れ、幹事樣に「此處があなたの御室ですよ、皆樣この御方は……」と紹介せられて低き聲に「よろしく御願ひ申ます」と初對面の挨拶すみて、後は荷物、片づけ、机の位置等、定めて、ごた〳〵の中に夕食となりぬ、

食後、幹事樣に導かれて、諸先生の御室を廻りし折の感想、思へば又こも、興深し、言葉少なく、唯僅か

微笑みて、首下げ給ひし先生を、何となう、人遠く、なれにくき先生よ、と思ひ入りたるに、今は最も慕はしくなつかしき先生となりて、母校、訪づれてもこの



君、在まさねば心淋しうぞ思はるゝ。其夜苞の香うせぬ新調の夜具に包まれても、子供ならねど、流石に寂しく悲しく、一時二時迄、眠りも得せず。「朝の集りは講堂よ」と同室の方に導かれて寄宿舍より少し隔りたる建物に入れば、弓形の腰かけ、斜に、三列に、並びたる、美くしき色ガラスの窓、大きなるピアノ、等物珍らしく思はれて、彼方、此方、見廻はすに、集まりし人の樣も異樣に覺えぬ、殊に目に附きたるは髮の結ひ樣なり、前髮とりて結ふ事の初めなりければ、前のみ三角の樣に分けて、少し出したるのみ、耳の上より全體にとりて脹らましたるは二三の人にて當時のハイカラと見られたり、地方にはまだ、大きなる束髮の流行し頃とて、「入學當時の靜樣の髮は天井より落ちやしぬらんと危ぶまれり、」とは二月、三月の後、友の誰彼とも、なれ睦む樣になりたる折の友の評なり、我もさこそ、をかしかりつらんと失笑しぬ。

△別離の情

稍く寄宿舍生活になれて、後は、故郷よりの音信あるは眞情こもる小包等、手にして、思はず打泣く事もあれど、身に染みて、悲しう、覺ゆる事もなく、日毎樂しく、面白く、過ぎ行く事、三月、世は皆、若き綠の香に包まれて、客室の壁に這ひたる白薔薇盛り、丁子の花の香高き、一宵、入舍の時より優しくて、無二の友と、交らひし君と二人、故郷の川に釣せし事、林に森に憧れし事ども語らひて、「あなたもさう？」、私もよ」と言ひ交はし居る折しも中庭より走り出でし、黒き影の、正子樣〳〵と呼ぶに、友も我も、何事ぞと近寄れば「今あなたの叔母樣が、パーラに、隨分、探してよ」と。「靜子樣そんなら、行つて逢つて來るはね」と言ひ捨てゝ走り入らるゝに、我は他の友と二人室に入り、血行盛んになりて、暑く覺ゆる身體を、机によせ我も此地に叔母樣と云ふものあらば等、空しき思ひの果てもなし。夜學の鐘、鳴りて、自修室の席に就きて後、十分計り、正子樣の這入り來給ひて、突然、「靜子樣、私、御別れしなくちやならないのよ」餘の事に御言葉の意、解りかねて視詰むれば「國許より是非、歸國せよと迫りて、叔母に連れかへり呉れよ、と賴み來れる由、とにかくに明後日、立ちて、熟く〳〵話を定め、再び歸校せん覺悟なり」との事、然らば、兼て、聞き知りたる御目出度き話ならん、君の幸は嬉しけれども、我、一人、殘さるゝかと思へば賴りなくて、と早や涙は、止度なく落ちて、打伏しぬ、周圍の友の訝りて、此方のみ見守るに耻かしく、こゝに在りたりとて、勉强も手には着かじ、室に歸らんと思ひ定めて監督の人に、今宵は是れにて許し給へ、煩はしき事の有ればと、正子樣も、我も共に歸りて、別れの袂絞りぬ。翌々日の午後六時、汽車の窓より首さし延べて、「唯、暫しの間の別れぞ、然は、歎き給ふな」と勵ます君も、涙にくれて、車窓の內と外に、泣き崩折れぬ、其の折の心細さ、悲しさ、今も尙、忘れはやらじ。

△趣味の時代

我から、好みて遠ざかるとにはあらねども、一人居の、樂しく嬉しく、放課後も、夕食迄は、室に在りて

明日の豫習をなし、食後は、默想に耽り、あるは好める讃美歌を歌ひつゝ、長き廊下を往きつ、戻りつ、何とはしらぬ、喜び湧れて、感興わくを覺えぬ、休日の折等は、敎室に、隱れて、小說を綴り、あるは高山先生の、瀧口入道、我袖の記をくり返し〳〵讀み耽けるを此上なき樂しみとはしつ、出來もせざるに、小說作る事の面白く、樂しく、雜記帳に書きては消し、消しては書き、彼の人の性格はこの樣に、この主人公はかゝる境遇にと夜も、臥床に、夢、圓やかならず、思ひつゞけて、成りたる稿を讀み返せば、思ひ足らず、筆、熟せず、讀みも果てぬに嫌になりて、滅茶〳〵に消し去るが常なり、かくて、果ては、由なき事に、貴き時を費したり、と口惜しくて、一切、思ひ切りたる折も折、親しき友の机の上なる、雜記帳、取り上げて讀み居たるが、斯くて、朽ちさせんは惜しき業



なり、女學世界に、出して見給へ、と勸む、我もふとその氣になりて試みたるに思ひきや、秀逸の部に入れられて、無名なれども學校の名は記されぬ、こゝの室彼處の室に、噂とり〳〵、誰よ、彼よ、と推し見て、可成の出來なりと言ふ人あるは貶しむる人、我は一人を

かしくて、そしらぬ顔に、聞き流しぬ。げにこの時代は一人居の樂しく、默想の快く、貴く、高く、進まん〳〵との思ひ滿ちて、克己、向上の、念强く、思想界文學上の本に夢中なりし頃にて、其よりぞ身體を痛めて、一年も二年も、學、遲れ、今も尙己が身の弱きをかこち歎けども其の生活、其の思想を思ひ出でゝは幽しきよろこび覺ゆるぞかし。

△冬の御休み

近き地方の人々、あるは土地の方にて、寄宿に在はせし、人々等、皆歸宅せられて、殘りしは二十人許り笑ふ聲、叫ぶ聲、廊下の足音、等騷がしかりし昨日に引かへ、舍内、物靜かに、朝夕、絶間なかりしオルガンの音も、折々聞かるゝのみ。心合ひぬる友と二人、火の氣なき室に肩掛、纏ひて、友は文書き我は足袋つぎに余念なかりし折。他の友の觀訪來て「御二人とも御熱心ネ、私あなた方たに小說を讀んで上げ樣と思つて持つて來てよ、そりや、いゝ小說なの」と二人の間に座るに「然う？嬉しいは讀んで頂戴」と我の言へば、「何と言ふ小說？」と他の一人が表紙を返して「アラ、不如歸なの、何だか、大變な評番だは、まあ〳〵待つて頂戴、もう直ぐ之を書い了なから」と急ぎ書き終へて、筆を納め編物持ち出して「サア讀んで頂戴。」新婚旅行の樂しかりし樣、武夫、浪子の無邪氣なる問答等美はしき、夫婦の情愛、偲ばれて面白く、聞かれしが進むにつれて、悲しも、痛はしき運命の、浪子の上に加へられ、不治の病に惱み歎くあたり、三人共、同情の淚にくれて、針の運びも辿々し、夕食につきても、その人の上、思ひやられて氣も心も沈み勝ちに、卓を離るゝや、叉急ぎ立ちて食堂の暖爐の周圍、取りかこみ、晝間のつゞき讀み給ふ、我も〳〵、とある限りの人、皆、其々に、手仕事持ちて、集り來たる。離婚の條、不動堂の述懷汽車の窓の瞬間の逢瀨、佐世保の病院、浪子が臨終等、讀む人も、聞く人も袂を顏に、押當て、あるは打伏して、泣く人、咽ぶ人、小說の爲に、かくも苦しき思いして、と自を嘲り、笑ひても、尙、堰き來る淚にくづそるゝ人、事情知らぬ人の、ふ

と此の室に這入り來まさは、何事の起りしと審り給ふ事ならん。其の頃はこの本、隆盛の時代にて、本屋に在れば、奥様、男女學生、女中の様なる者、皆、不如歸〳〵と求め行く有様なりしかば校内にもその、批評、彼處に此處にとり〴〵にて肩掛、纏ひて散歩しても浪様と呼び言葉の、節々、喑んせし人さへ有りぬ。

△四月一日

明日は四月一日よ騙されぬ様心し給へと前の日より、互に戒め合ひぬるものを、早や、朝疾くより、騙されて、此方、彼方の室に笑ひ騒ぐ、聲しきりなり叔父様、來ませし、友訪ねたりと、騙されて、失望の余り、腹立



つもあり、年毎の、例なれど、我は未だ、人を騙せし事もなければ騙されたる事もなし、此の日も、人々のいたづらを見聞して、笑ひ興じ居たるに、玄關の鐘、鳴りて、間もなく、取次ぎの女中走り來り、靜子様、御從兄が御出になりましたと言ふ、若しや、と思ひしも、日頃、眞面目なる女中の言葉殊に四月一日を、虚言日とさへ、わきまへぬ人なれば、まさか、と思ひて玄關に出でたるに其らしき人もなし、騙されたり、歸らんとする後より、一人の友が、「御從兄を、探して、被居るんでせう、？多分、先生の御室よ、あゝ虚言と思つて、ちや見て御覧なさ

い、御靴があるぢや在りませんか」と言ふに、見れば、實に臺石の上に男の靴一足幷べり、然れど、中、怪しければ、其の儘、室に歸り居たるを此度は、先生の御室より、とて呼びに來りしば、御めん下さい、と愼みて、御室の戸を開きたるに、先生、一人讀書し居給ふ、隣の室に笑ひくづ折れて、四月一日、と叫びしは先きの友なり、余りの巧みさに、我も笑ふより他なく、靴は何處より借りて來給ひしと、問へは、其の心組にて、昨日兄のを、借り置きたるなりと、さても御用意、周到・御苦勞樣ぞと笑ひて止みぬ、翌年の四月一日は、今日こそ、昨年の復讐と、待ちに待ちたる日なれば、午後その友を訪れて、「今、國許より、小包屆きぬ少なけれども、名產なれば味ひ給へと、薄き美濃紙に石鹼を小さく切りて包みたるを差し出したるに「さう、何？」と氣つかざる樣なり、「之はチヲゾラート卷、羊羹なの、之で卷いた儘、食べるのよ」と我まづ、一ッ摘みて、食するまねするを氣がつかで、「ちや頂くはネ」と口の邊りに待ち行けける時、四月一日と、言ひ捨てゝ、逃げ去りたり。惜らし〳〵と口惜がるを他の人も聞き知りて一口噺の種となりぬ。

△夏　休　み

學生に取りて、こよなき樂しみは夏の御休みなる可し、試驗てふ、山も、今日は終りと云ふ日は、成績の、善惡も忘れ果てゝ、土產物買ひにと出で行く人、行李室中に引出して、荷造りする人、あるは、鐵道、唱歌勇ましく聲を揃へて、歌ふ人等、何れも〳〵喜びの色、面に滿ち溢れて、廊下の步行、輕く、繁く、呼び交ふ聲も常とは、異りぬ、汽車の時間表、くり返し〳〵、我は一番、我は、夕方、早きがよけれど、彼の家此の家、一度、訪はでは、と呟くもあり。

サア考へて、頂だい御祖母樣の御土產には何がいゝでせう、弟には去年もサアベルを持つて行つたから、今年は何か、他のものを、「私は去年澤山持つて歸つて書生の中は斯麼に、しなくていゝと、父樣に叱られたから、今年はもうよすの、」等と御隣の部屋の評議も手に取る樣に聞こゆ。

この折のこの樂しさ、一度、斯る身になりたる人ならではいかでか、思ひ量らる可き、都に住める方々の我にも御國と云ふものありて、皆樣の樣な樂しみ、一度、持ちて見度しと羨やまるゝも理ぞかし。いよ〳〵明日と云ふ前の夜は寢ても得やらず父樣の御樣子、御祖母樣の御喜び、弟や妹の優しき歡迎、等思ひ浮べては、目も心も冴へ行きて、曉方のまどろみを、鐘の聲に破られて、尙かこちもせず。常もこの心有らましかは朝の食堂に寢亂髮の儘なる姿は見らるまじきを、かの一二日は校門に、さよなら、御機嫌よう、御手紙を、チ九月には早く、等の言葉、日に幾度も、くり返されて、喜びに輝きたる面を、新橋に上野にと運び行く、車夫の、入り代り〳〵、上野行、二臺、新橋行四臺と叫ぶ聲さへ、勇ましく、嬉し。

評　文章自在筆の走ること驥馬のごとく才情溢るゝばかりにしてよく妙齢處女の感情を寫し出されたり此の點尤も感服、されどこれを小說として推薦せんには今一段の構想と意匠を工ますんばあるべらず、且つ本篇は規程の紙數に充たざるを以てこれを撰外とす但し賞金は五圓



こゝろごゝろ

なでしこ女史

一

『これでしやうね。今朝來たのは。』と秋子は坐たまゝ、スラリとした半身をねぢむけて、後の机の上から一封の手紙をとり、一寸裏へかへして、『本郷にて……生。』ね、これでしやうと火鉢向へ出す。客は友達と見える、眉の薄い厚化粧の華美造り、年は廿八九なれど、さて人妻とも見えぬ風俗。

『えゝこれよ。』と打返し見て、『手もよく書でしよう。オヤ松代樣貴女まだ讀ないの。』秋子は書た樣な眉尻を一寸りきませて頷き『だつて今朝着た許なんですもの

ね。」と落付てゐる。

薄眉は投る樣に手紙を投り出て、「オホヽヽヽ。ぢやう物の順序が轉倒してるんだもの。ぢや先づ其をおよみなさいな。それからの事に仕ましようよ。」と少しぢや先刻から妾の云た事は、充分意味がとれなかつたでしやう物の順序が轉倒してるんだもの。ぢや先づ其をおよみなさいな。それからの事に仕ましようよ。」と少してれて、所在なさに床の花に目をそらせたが、やがてツイと立て障子を開て椽側に出た。

庭は梅の眞盛りである。苔むしたる置石に庭の老いを見せて、梅樹は何もどれも、幹頑に枝太く、梢々の分目には、餅のかびの樣な樹苔がこびり附てゐる。

紅白相半して、九分までも咲き出たる花は、如月末の日に榮えて見れば香に醉さるゝ心地である。婦人は斜矢の御召に羽二重更紗の下着を重ねて、紋綸子の被布の裾永う、暫くうつとりと見てゐたが、耳の傍で、『才子樣何を見てます。』とささやく樣な優しい聲がする。

ハツとして忙てゝ懐へ入れた手を袖の中へすべらして、四邊を見廻したが誰も見えぬ。

袖垣の向ふの籠の中に金絲雀が餘念もなく餌を食てゐる。

妾はマアどうしたつて云んだろう。馬鹿な。と、つぶやくかと思へば厚化粧の頰に何の意味やら、さつと花の樣な色が上つた。

出した手のやり場に困つて焦茶の飾糸をいぢりながら、あてもなく空を見上て又も一度にツことほゝゑむ。

新らしい庭下駄のそろへてある大石から四ツ目の短冊石の傍に貝母の鉢植のおいてある、さびのついた、つくばひにでも直させたらさぞと思はるゝ石がフツと目に止まつた。

まだ學校に居る時分、あの石の根の處に、澤山、爪切草を植ゑた事が有たが、今でもあるかしら。

あれは夏の初で有た。欲しい、ほしいつて松代樣が云から伯父樣に賴で貰て持て來て上ると丁度不在で、餘り遲いから叱れては大變だと思て丁度彼處のところへ、ペン軸で土を掘て汗になつて植えて居たら。突然に頭の上で『大層美しい花ですね。』吃驚して顏を上る

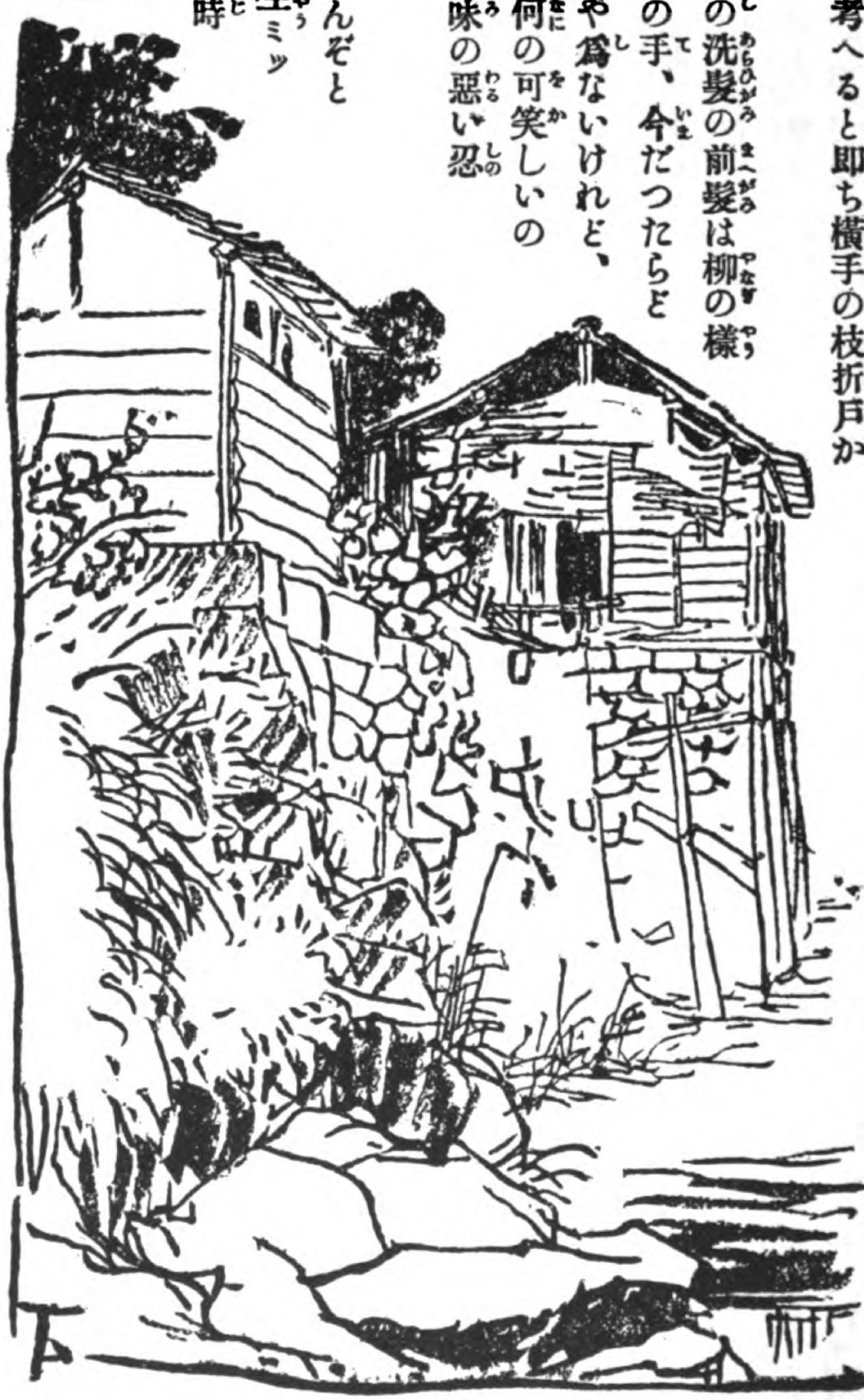
と、白ズボン、帯劒、黒衣、軍帽。スッキリと水際立た海軍士官が何時の間にやら立て居るんだもの。見れば靴ばきのまゝで。後から考へると即ち横手の枝折戸から這入て來たのだ。

少し風のある日で、妾の洗髪の前髪は柳の樣に亂れて、汗んだ顔に泥の手、今だつたらどんなに極りが惡いか知れや爲ないけれど、あの頃は、オホヽヽ。』何の可笑しいのか婦人は首をすくめて氣味の惡い忍び笑ひ。

ホントに彼の頃は男なんぞと白眼で見返て、自身は一生ミッスで清く、高くと思てた時代だつたから極て平然と

『でも直き萎れますの。』

と返事してセッセと根に土をかぶせて居ると、士官は座敷！。秋子樣の書齋を覗き込で、今日は秋は居りませんね。ハイ御不在です。大久保の方の御友達へいらしつて、御歸は夕景になりますさうですと云たら、さうですか、ちやあなたと白帽の深い庇に一寸手をかけて、失敬しますと云てスタスタ出て行つた。



翌日、學校で濱田樣に話して、二人で運動場の隅で冷していぢめて、さん〴〵油を取て上げたが、オ、彼の人は？　と婦人は思はず聲を出て、吃驚して障子の方をふりかへつた。

內はひつそりとしてサラリ〳〵と紙のすれる音。

二

『眞實に眞木野樣は男らしい男よ貴女。風采は御覽なすつたでしよう。ね、あの通り。赤の細仕立の襟飾なぞなさると夫は吸い付たい程よく似合てよ。そして優しくつて同情深つてね。噓ぢや有りません。夫は卒業の席順こそお尻から數へる方が早かつたけれど、けれど何だわ。社會へ出たら實際の處、生た書物的の人は役に立ない。眞木野樣の樣な活用の才のある、てきぱきした人でなくちやあ無益よ。眞實の處、どちらかと云へば、少し位、道樂をしたつて腕が有て、ずん〳〵お金を拵て社會に地位を造る樣な人の妻になるのが眞の幸福だわ、松代樣はどう思つて。』今まで椽側に吹晒されてかぢかんだ手を火鉢の上にさしのばせて、秋子の顏を覗き込んだ薄眉の氣取才子。

『それはさうでしようね。でも才子樣、爾した言葉を妾、貴女の口から聞されるとは思なかつたわ。貴女も地方へ行てゐらつしやる中に、スツカリ替つたのね。でもあの妾や柴田樣によく惱された獨身論は、今でも實行してよ』と才子の顏を沈と見て意味ありげに打ゑむ。

『オホヽヽ隨分だわね、何とでも有仰よ。』さては昨夕の日比谷を、チツキリあの時よ。と才子は薄氣味惡げにあたふたして秋子の視線を避けたが、傍に置かれた先刻の手紙に目をつけて逃路が出來たとやつと落付き。

『あなたこれ讀んで。』と秋子の心の底までよむ積りで今度は才子が沈と相手の顏を見つめる。秋子は目も動さず。『えゝ讀みました。御厚情は有難く受けます。然しね、折角の御厚意に背く樣ですけど、どうかこれはね、貴女持て歸て其方によく云つて御返しして下さい

な。ね、よくつて。』と意外な言葉。しかも此樣な場合によくある冷笑の影は何處にも浮で居らぬ。オヤ〳〵こんな筈では無かつたが。困た事になつて仕舞たよ。あれ程あの人に受合ておいて、今更不可つて云たら定て怒るだろう。が何アにあんな人の一人位絶交したつて知れてるけれど、あの人を怒らせては、神山樣の地位がぐらつくかも知れない。今ぢやもう妾達の爲めには眞木野大明神なんだからね。と、才子は心の中にとつおいつ。



三

何か思ひ出した樣子で一寸會釋して、スラリと立上つた秋子は、書棚に飾た古銅の一輪差に白梅を一枝はさむだのをとつて、四君子を書た黒繪の襖を開て次の間に出る。

音も立てず稍暫し、待てども〳〵出てくる樣子もないので、何をして居るかと才子は秋子が一尺計り開けておいた襖の傍まで行つた。

室は六疊計りの高麗べりで、一間の床には表裝の地味な畫の横物を掛け、波に千鳥の彫刻をした高足附の銀の水盤には梅の古木の大蛇の樣な太い幹ばかりが活られてある。

花はたゝえた清水に散て、しかも花は活々と猶母木にあるものゝ如く、脈々たる清香は廻て室に滿つ。床脇の押入の襖が一枚開かれて、其處には金光燦爛たる眞宗佛壇。ハテね、變なものが、可笑い事と才子は首をひねつた。

此方を見れば圓窓の許に粗末な机をすえて、机に似合さうな本箱が一ツ、机の上には古びた硯箱と共に一輪差が載て居る。

秋子は其机にもたれて、床の方を沈と見つめたまゝ、何事をも忘れた樣。後に人が立て居るとも知らぬ。才子はそゞろに其視線をたどつた。

オ、此人!!!

床前の楣間に高く大理石の額縁の付た寫眞の主。まがふ方もない。濃き眉、太き目、瘦せたる頰、高き鼻、一文字に結んだ唇。軍帽を戴き襟を詰めて威儀正しけれども、一度物云はゞ、眞白き齒のもるゝと共に、あの目は優しい色に、しはむのだ。

オ、あの人!!!

四

梅香女學校の名譽教授として、一校の信任を受て居る松代秋子の經いぢりは、同人間に今は可成り有名になつて居る。四季を通じて朝夕の讀經を缺した事はなく、夏冬の休暇の旅行は元より、一寸調物をすませてからの散歩にも、出入の度に必ず一度は佛間に這入る。

秋子は千葉縣のさる豪家の娘で、千葉の六邑と音に名高い本家の松代家は、八九年前仔細あつて零落して、今は跡も絶えて居るそうだけれど、分家の秋子が家は家運隆々として、年々に榮え、本家零落の後は、一村一郡の尊敬を家一ッに集めえて、つひ去年の夏、沒した其父は、長者議員にも選ばれて、亡くなるまで毎年上京して居た、然し上京の度に、必ず旅館へ宿るので、以前は松代家の別邸にしてあつた今の秋子の住居へは、四五年この方近づきもせぬ。

何故とは知らず、それでは其中違ひとを後悔して、せめてもの詫心から亡父の後世を弔ふ經いぢりか。イヤイヤ秋子のは遙かにそれより以前。日露の役の價に收つて、どうやらかうやら平和の曙光を見た年の秋の終り、二度目の出京をした頃からである。

五

「薫ひては白雲と遠方人は仰ぎけむ。かゝりては香へる雪と下ゆく人の袖にも春を宿しけむ、花の盛も早や短夜のゆめと消えて、いとゞ茂りのみゆく葉櫻の、梢は虫の住家となり。露の山吹、ゆかりの藤も、香なつかしき紅ばらも、皆一色に花はうつろひて、見るかぎり只青々と、下ゆく水の瀬のみ白う、夏は漸う深からむとす。

照夫様、秋は惜しからぬ命ながらへて、うき年月を今年も又、半すごしぬ。思へば五年の昔、春の一夜、上野に君が歸郷を見送りて、惜しき袂を別ちし時こそ、誠に御身と我が一生の別れにてはありけるかな。

御身が深き心を知る身には御憤りのかばかり深く、かばかり強からむとはつゆ知らず。かりそめの、たゞかりそめの別とのみ思ひ輕めし事の口惜さよ。

あな偲ばしの春の宵や。落花我袖にかゝりて、其香は君が胸をも廻りしに、何事ぞ春の神の妬か、一夜の雨に名殘りなくも花の心は地にまみれて、涙ばかりぞ空しく秋が身には殘りける。



永かりき〳〵此五年の春秋、春は幾度か來り。花は幾度か梢に歸れども、君が心に結びし水は、葉ごしの風のゆるうして、遂に解くるの折もなく、果ては何日かなと頼みし我一縷の望も仇となりて、悲しや

今は幽明相隔つるの身となり終りぬ。君が御心は永刧迄にとくるの期なきなり。秋が五年の朝夕に注ぎし涙の、いつかは君が枕に通ひて、もしや御心の解もせばと、たゞ其のみを力にて、つらき月日を過ししに、あゝ君は御心とけずして世を去り玉ひぬ。泣けばとて。君なき世に、泣けばとて誰に通はす涙ぞや。さりながら憂を常なる世とし思へば今更に何をかはかこつべき。たゞ御身は怒りのまゝに世を去り玉ふ。これぞ秋が忘られぬ生涯の遺憾。つきぬ〳〵我世のうらみなる。

傾く日影は庭の梅林を通して窓の障子にカッと明るく、物靜の土地柄の、殊に奥深い此座敷までは夕ぐれながら、豆腐屋の鈴の音一ッ聞えぬ靜さ。

庭には藪鶯が下りて居る、花の間から可愛らしい小首を傾けて、無心に餌を食てゐる金絲雀を不思議さうにチヨイ〳〵と見て居る。

トタンにけたゝましく電鈴が鳴りだした。

小召使が來る。秋子が立て行た跡に、才子は猶も窓にすりよつて、手にした二三十枚計りの罫紙の冊子を一枚かへした。

照夫樣。今は世になき照夫樣。などて御身はつれなうも、かくは御心替らせ玉ひし。御憤りは父にこそおはすものを、秋が此心、深くも知らせ玉ひつゝ、つれなや彼の後は、御筆の跡をさへ惜み玉ひぬ。御身が練習艦に乘り組て濠洲より歸りつき玉ひし折。再度まで心をこめて送りし我手紙小包をば、封も解かですげなくも送りかへし玉ひける。其時さりとては餘りの御氣强さに秋は涙も出ざりき。

六

照夫樣。秋は昔が戀しきなり。元より君が憎しみ深き此家、此身。垣さす櫻枝の下をだに、過ぎさせ玉ふまじけれど、流石に古里の戀しくて、もしやみたまの歸りてもましまさば、暫し恨を忘て五年の昔秋と共に、東都にありし日を思ひ出させ玉へ。秋は昔が戀しきなり。

「まだ讀でゐらつしやるの、アラ夫んな處はね、面白くない處ですから、最と、も少しお飛しなさいよ。オホヽヽ、大層御熱心ね。」

……今は世に望みなき秋が身も少しは哀れと覺しめし、せめては御石碑の傍に朝夕の訪ればかりを許させ玉へかし。とてもかくても解けざる御憤にしあらば、むしろ石となり玉へる今日こそ、秋はなかなかに嬉しかりける。知らざりし〳〵秋が戀の斯くまでに果敢なくて終らむとは。秋はかけても思ひし事か。………

「才子樣。今ね濱へ行た弟の處から電話が掛てね、横須賀へ軍艦の進水式を見にゆくんですつて。妾にもおいでなさいつて云て來たわ。貴女どうですの。」

「マア待て下さいよ。」

御母上の病篤しとは云ひながら、七年八年振の御歸鄕に御心樂しく汽車を下り玉ひし御身は、まづ昔に似ざる御住家の古り荒れたるに驚き、思ふにまして母上の衰へ玉ひし御姿に驚き、最後に御家の事、亡き御父上の事、秋が父の事、家の事、殘る方なく聞玉ひて、更に幾倍を加へたる御驚きと御怒り、程もなく御母上は思ひを殘して空しくなり玉ふ。これとかれと加へたる悲憤の涙にさしもの御心も亂るゝ計り、一度は亡き父上が秘藏の短刀をとりて、我父を一刀の許に刺さむとまで猛り玉ひしを、年久しく使ふる老僕の涙と共に止めまゐらせし……。

「マア大變なのねえ。」

……御母上の遺骨をば老僕に托し、再び此地を踏まじと墓地に横須賀に向ひ………。

「そして今度戰死なすつたのね。も少し、ま最少し讀ませて下さいよ。」

苦樂を共に二人樂しく渡らむと、ちかひし世を君は早めて一人ゆき玉ひぬ。仇し世に殘りて秋は此半生涯を如何にすべき。

端近く、なき面影を偲ぶ調べの想夫戀。自ら細る音色をたゞ美しと人は云ふなる。照夫樣、秋を哀とはおぼさずや。

つれなき世は、御身を夫とは呼ばせねど、君ならで誰にまみゆる我身ぞや。君ならで誰にまみゆる我身ぞや。

才子は再び默誦して目を閉ぢた。

ある程の縁の話に耳もかさず、我から身は埋もれて、世をも捨て親にも背きぬ。あゝ不幸の子。うらめしきは君ながら、父ならず、かくて猶生きよと敎ふる天なり人の道なり。

思ひ立て、翌日は東都に立たむとす。今日は殊に五月の雨の心細うさみだれて、卯の花腐る物さびしさ。傘さしかけて君が御墓に詣で、水を手向け四邊を清めまゐらせて後、猶ゆきもやらでさまよへば、いつしか雨晴れ月さへさし登りて、露深き水澤の声にとびかふ螢のかげ。汝は誰をか戀ゆる。もゆる思ひの我袖を音もせで、とぶ哀さよ。仰げばほのかなる月の許に翼そろへし雁の一連れ。あはれ誰が國ゆへ戀しの照夫樣。なつかしの照夫樣。

才子は次第に首を垂て、深く〳〵思ひ沈んだ。持ちたる冊子はハラリと疊に落ちて、表紙はおのづから是を閉ざし了つた。

七

「でもね此頃は夢に見るわ。昔の樣に中よくならうつて笑つて妾の顔を見る樣になつてよ。えゝ父は亡くなりました。弟が姉樣は氣の毒だつて云てくれてね。でも貰つて父のよく爲なかつた本家の松代の家を貴女が立てなさいつて云てゝくれますわ。これで分たでしよう。妾の御經いぢりの譯がね。せめて後世でも弔て上るのが妾の樂ですの。才子樣誰にも云こなしよ。」

「秋子樣。もう妾は何も云ません。ではせめて交際丈けでもね貴女。」

「イヽエ妾は世間の誤解を恐れます。折角の御親切ながら。どうか惡からずね。」

「夫でね、横須賀へは矢張り今夜に行ておく方が好いから貴女、一度歸つて支度をして、すぐゐらしつて下さいな。」

何を記せるかは知らず、眞木野學士が心をこめし手紙は、かくて空しく其人ならぬ人の懐に收められた。

才子は松代家の手車に送られて、本郷の住居へ歸る道すがら、目を閉ぢて、自分や秋子等の往時、其學生時代を追想した。

あの頃は愛の戀のと云ふことを、蛇蝎よりも嫌ひ又賤んで、自身の結婚問題にも父兄に反抗の出來ない樣な意志の弱い、不甲斐ない女は兎に角、自分丈けは自ら高くして、婦人を尊ぶ事をしらぬ今の男子輩には犯されまい。廿世紀の女子の意氣を自分が示して見せ樣と公言もし、又實際さう考へて居た。



あの松代樣や柴田樣なぞの花の樣な粧ひが妾は氣に入らず、常住不斷の身嗜を賤んで、墮落學生と相去る事遠からずなぞと隨分冷評して居たものだが、柴田樣はあゝして三人まで子を持て立派な奧樣になる。松代樣は又殆ど女の典型とも云ふべき？

イヤ然し、あれは少し舊式だ。何が何でもあれは餘り極端過る。

惡くはないが、彼の人の奉ずる道は古い。熱情に串分はないが、あれぢや廿世紀の貴婦人とは云はれないよ。

妾なんぞに云はせれば、まづ融通の利かない女。才

子はこゝまで考へて、ホッと息をついた。

人を愛せよ、愛せば須く永久なる可し。愛は清かるべく移すべからず。

あゝ戀愛は神聖なれ。

愛人の運命により。時の經過によつて、みだりに其愛に冷熱を見するもの、あゝこは誠の戀愛と名附くべきものではないのだ。

然しながら元來がこの聖なる最高の愛なるものは、人格の最も高き男女によつて、初て實現さるべきもので有て、事實大方の世間の戀物語りには、この眞なる愛は極めて少い。殆ど見出す事が難い。

御多分に洩れず妾はどうだ。

才子の良心はまだ其叫びを止めぬ。

獨身主義は暫しの間。いつか愛の神聖を稱へ出したのを手初めに、次第に軟化し、墮落化して岡山以來、男を弄だ事も幾度。男に弄ばれた事も幾度。

あゝ自分の素行を顧れば松代様の様な人の傍にはまぶしくつて居られない。

考へて見れば此身體も汚ないのだね。

才子は嘲る様な笑を浮べて我と我身を見廻した。

でも今更、神山様と手を切て見た處で何ァに潔白な身體になるでもなし。

マァ妾はわたし。秋子様は秋子様としておくさ。

電話線に烏が一羽止つてカアと鳴く。

何處からともなく、二三羽バタ〳〵とやつて來る。

嘴をそろへてガア〳〵と鳴き立てると、下を通る人の足と、車のわだちが思はず知らず速力を早める。

妙なものだ。

軒洋燈にもうチラリホラリ火が這入り犬が走つて小僧が行つて、其跡を冷い夕風がドッと大路の砂を巻上げて過ぎてゆく。凍る様な寒さ、折角咲いた花も可愛想に、車上にある身も首をすくめて、いとゞマッスの手を深くした。

才子は家に歸つて直ぐ手紙を書いた。

佛壇の燈明皎々として輝く許に、水晶の珠數掛けて讀經に餘念なき秋子の繪の様な神々しい姿がフッと目

に浮ぶ。

何としもなく彼は寒げに袖を重ねるのであつた。

花一時、青春いつまでか身にとゞまらむ。若き血しほの燃ゆるに任せて我にもあらず薄倖の道ゆく女の末あはれ。知らずや御身等が老いは早くもそびらにせまりつゝあるものを。

さゞ波よする額のあたりを束髪の前髪に隠して、晝はいづれにか教鞭とれる老嬢の今宵は何に浮れたる、ふし面白くかなずるピヤノの音が、才子の書斎まで聞える。

あな哀れ。明日は誰が身の。

才子は遂に横須賀へは行かなかつた。其後も絶えて秋子が許をば訪はなかつたのである。

評　照夫の憤懣、秋子の失戀、その何の故なるかを明言せざるを以て、讀者を五里霧中に彷よはしむ。故に才子と秋子との兩人生觀を解釋するに甚だ困難を覺ゆ、加ふるに全體の筆路朦朧として一讀、直ちに人を首肯せしむる事能はざるあり、小說としては猶一段の剪裁を加へざるべからざるものなり。



文園

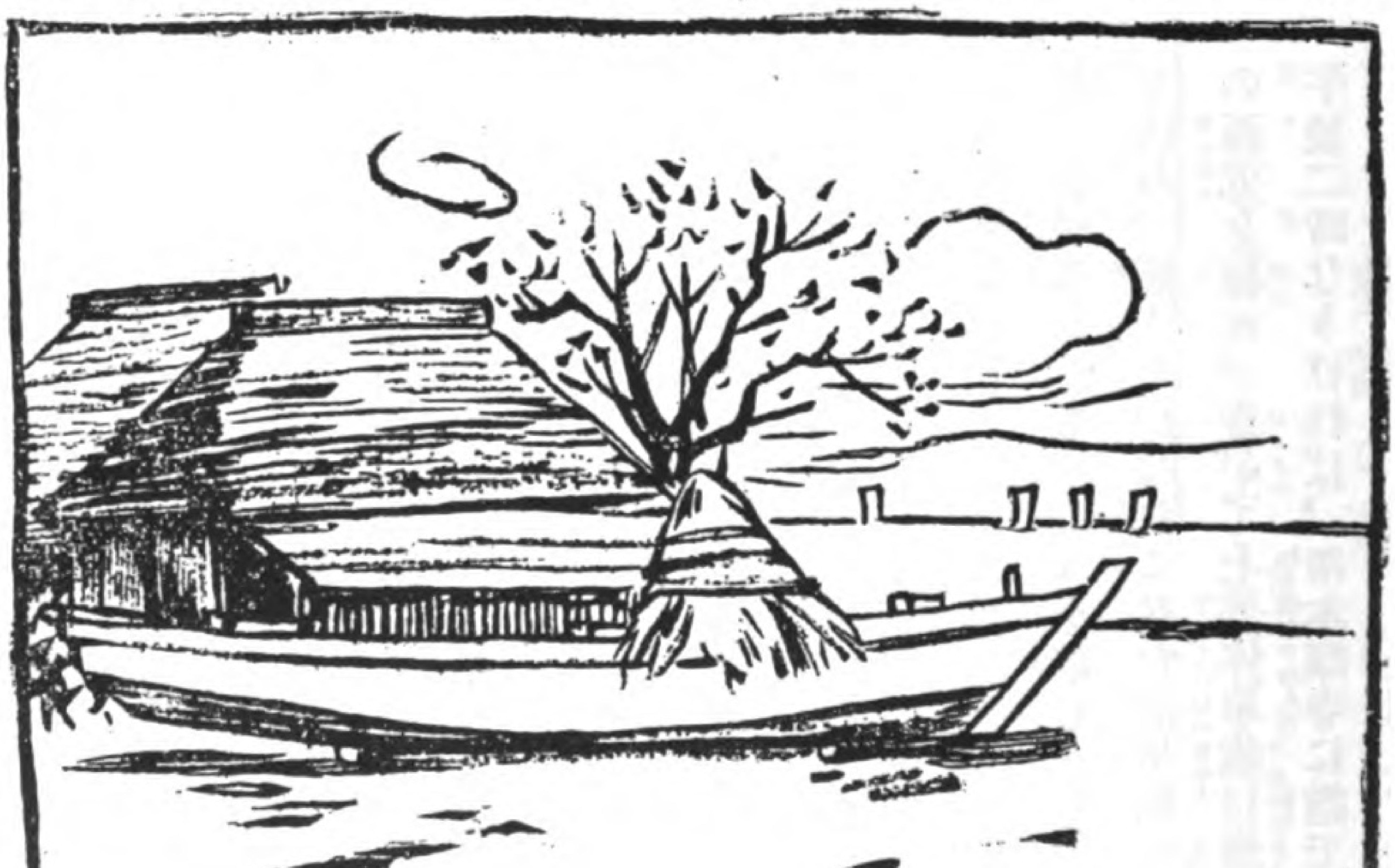
春日粧

春の都見物　楓の舍

學年試驗も首尾よくしあふせたれば、二日間の許を得て、母上と共に京見物にと出でたつ。午前六時梅田發の汽車にうち乘り、七時三十分といふに七條停車場に着く。直に電車に乘り三條小橋のほとりなる、とある旅館に旅鞄をおろしぬ。少し憩ひて後、宿の人して心きゝたる車夫を傭はしめ、うち乘りて見物にと出づ、小橋より川端を南へ四條小橋に出で、左に折るれば四條の大橋なり。大阪の天神橋浪花橋などの壯觀に比すべうものあらねども、何となく品よき心地す。川は大阪のそれの如く、兩岸まで水浸さず、處々に磧ありて雜草など生ひ茂れるさま兼て想ひしに似で、いと殺風景に覺えしが、水はさすがに淸冽なり、東岸疏水に臨める柳の並木は毿々たる綠の糸を淸流の上に垂れ、眺望いとよし。東を望めば蒲團着て寢たる姿の東山、穩かに横はる。橋を渡りて東は有名なる祇園町なり。進みて八阪神社の西門を入り、まづ社殿に詣づ。本社拜殿いづれも壯嚴にて境内には一點の塵だになく、かの天滿天神などの俗塵紛々たるとは同日の論にあらず。社を左に見て東へ進めば即ち丸山公園、まづ目に入るは一本の垂絲櫻、老幹高さ四五間にも餘りぬべし。幾百條となく垂れたる枝に今眞盛りの花を着けたる壯觀、目のさむる心地す。その周圍には棚を繞らし床几を設け、遊人の休憩に便す。此の櫻を中央にして四方に池あり、亭あり、噴水あり、芝生あり。樹石の配置、自然に近く、終日逍遙すともなほ厭かじ。此の邊にうち集ふ都人の男も女も皆綺羅を飾りて、花と艶美を競ふが中に、菅笠脚絆の田舍道者も見ゆめり。こゝを過ぎて阪路を登り盡せば、即ち眞葛原、西行庵も此の邊にありとかや。こゝに平野屋、也阿彌などいふいと壯麗なる旅館旗亭ありしを、去年回祿の災に罹れりとか、

西方を見渡せば京の市街は眼下に見え、遥かに西山の翠色をも望むべく、眺望ことに勝れたり。こゝより稍北に進めば、智恩院の鐘楼に出づ。

暫しこゝに休らひて鐘の大いさ寸法など聞き、やがて石磴を下れば本堂の前に出づ。左甚五郎の建築とていと有名なり。堂に上りて本尊を伏しおがみ、また其の内陣を一覧す。鶯張りの廊下、狩野法眼の拔け雀、さかさ不二などいづれも珍らし、甚五郎が置き忘れたりとかいひ傳ふる屋根裏の破傘も目にとまりぬ。總じて此の境内、松楓などのいと古りたるが多き中に櫻花の雜れる景色、畵も及ばず、山門も亦いと宏壯なる建築にて古色蒼然たり。門前の石階を下れば櫻の列樹あり。衣香傘影往來旁午たり。こゝより北に向ひ粟田の宮の前を過ぎ、また東に折れて、蹴上といふ處に、疏水のインクラインといふを觀る、船、山に登るとは唯鄙諺の上のみならで、今眼前に阪路を上下する舟を見て、人工の妙を感じぬ。それより彼の一帶長松路不迷といふなる松原を過ぎて南禪寺に詣づ。建築の古雅な



る境内の幽邃なること他に比類あらじ。これより永觀堂、若王寺さては銀閣寺、黒谷、眞如堂吉田などの神社佛閣を一々

訪ひたまへと、車夫、切に勸めたれど、限ある旅行のさまではと思ひ止りて引かへし、恰も正午に近かりければ瓢亭といへる旗亭に入て午飯たうべぬ。やがてまた疏水に沿て、もと來し道をひき還し、紀念動物園を一覽し、美術館に入て新古の美術品に目を驚かし、丹楹蒼甍の大極殿に平安朝の盛時を偲び、平安神宮に詣でゝ神德の彌高きに感じ。又車を急がせて加茂川の東岸に出で、荒神橋といふを渡りて西に向ひやがて御苑内に入る。もとより昔時のさまはあるまじけれど、御苑の廣濶にて清潔なる、打ち續く筋塀のいとおごそかなる、諸門のいと神々しきには自ら頭の下るを覺えず。立ち並ぶ殿舍の甍を門外より伏しおがみて、あれよ紫宸殿ならんかし、これよ清涼殿ならんかしと、暫はえも去ず。かくて堺町御門を出で、丸太町を東へ寺町に出で、三條通を東へ旅館に歸り着ぬ。此夜は新京極を散歩す。いと賑はし。鷺知らず千枚漬など、くさ〲の土產を購ふ。

翌日また早く旅館を出で、電車にうち乘り、木屋町丸太町下立賣、堀河、西陣などの町筋を通りて北野社に詣づ。思ひしよりも壯麗なり。こゝよりまた腕車にて金閣寺を訪ひ有名なる園池を一覽しまた轅を回して御室に仁和寺宮を拜し、嵐山へと向ふ。三軒屋といふに入りて午飯し、欄に凭りて眺むるに、滿山の櫻花、今を盛りと咲き揃ひ、翠松の其の間に立ち雜れる配合の好さ、いかなる油繪の名手も其の眞を描き能ふまじ、大堰川には、あまたの遊舫上下して絃歌の音さへ響き、風にさそはれて、はらはらと散る花の下ゆく筏士が棹の雫も香ふらん。渡月橋のあたりには遊人絡繹として綺羅水に映ず。きのふけふ見つる京の名所の數々いづれはあれど、こゝばかり風景の佳きはあらじとぞ思はる。急がぬ旅ならましかば、一夜の宿を借りて夜景曉景をも見まほしと思ひたれど、かくてあるべきにあらねば名殘惜しくも、こゝを辭し。京都鐵道の汽車に乘り込み、窓よりかなたこなたを指點しながら、京都市の西郊を馳せ、やがて七條停車場に着きけるに、まだ午後二時なりければ、兩本願寺に詣で、枳殼邸の横を過ぎ正面橋といふを渡りて豐國社、大佛殿、耳塚、帝

國博物館などを一わたり見物し、五條坂にて陶器二つ三つ購ひ、序に淸水寺にも詣で、やがて旅館に戻りしは、黄昏近き頃なりしが、夕餉はてゝ後電車にて七條へと急ぎ、終列車にて歸阪しき。さても忙しき京見物とはいへ二日の間に東山西山の名所の數々を、あらまし見盡しぬるは、これも文明の餘澤ならむかし。



養蠶の秋

ことし初めて母上と二人して種紙半枚の蠶を飼育しぬ。固より別に養蠶室の設とてなければ、十疊の座敷をそれに充つ。必要の器具は豫め其道に長けたる人にも聞き、また物の本など見て、調べおきけり。桑の葉は我が家の畑にあるだけにて事足ばとて別に用意せず。母も我も始めての事とて成功いと覺束なし。

かくて、孵化したる毛蠶を掃きおろしたる時には、一つの小さき餅箱にも滿たぬほどにて、桑の若葉をいと細かく刻みて與ふるは、子供のする飯ごとに似て、いとやさしきものなりしが、一日一日に生ひ立ちては、筵の上へ別け移すに、二枚とな

り三枚となり、五枚六枚となり、二眠三眠の後の後には拾枚拾五枚となり。桑の葉も驚くばかりに食ふ。はてはや十五六枚となりて、かねて用意の棚のみにては狹くなりたれば、次の室さへ取り込みて、七八枚をそこへ移す。桑の葉も不足を告げたれば、止むを得す他より買ひ入れたり。

上簇の四五日前には、桑食ふ音さわがしきまでにて、一と通り、與へ了らぬに、初に與へたる筵を見れば蠶のみ稠くて葉は稀なり。そを飢えさじと手早に葉ふりまく忙しさ、目もまはんばかりなり。雨の日はまた濡れ葉與へじとてそを乾かす手數一かたならず。とりわけ通風と温度とに第一の要件なれば、絶えず驗温器見て、そを加減する苦心えもいはず。蠶は氣候の激變少ければ、まだしもなれど、夜間俄に温度の降りたる時に折角、半ばまで成育しつるものを皆斃れしむることなどありと聞くにぞ、少しも油斷できず。されば眞盛りには母もわれも、髪結ふひまも浴みする間もあらばこそ、定刻に食事せしことなく、二三日は夜の目も眠らざりけり。人手假らじと初に思ひ定めけることもあだとなりて、止むを得ず、桑摘む人を傭ひ入れたり。

かゝる苦心のかひありて、みな〳〵無事に上簇し、素人わざとしては、よき繭あまた得たる喜はまた言ひ盡しがたし。われとて一襲二襲の絹の衣裳持てるが、養蠶のかくまでも辛勞多きものとは今までつゆ知らざりき。此の經驗によりて半纏の袂、一寸の小切も疎かにはすまじきものぞと悟りぬ。

手傳を賴む詞

文もて申上候ことしは私と娘との兩人にて試に養蠶致し候處昨今四眠前と相成兩人にてはとても手廻り兼候に付傭人をと存じ候へども時節柄おもはしき者これなく誠に困り居候間誠に恐入候へども御娘子樣若し御手透きに候はゞ一週間餘り御手傳ひ下され候やう願はれまじや別にむづかしき事はこれなく唯桑摘みだけ御助け下され候はゞよろしき儀に御座候右御たのみまであら〳〵。

櫻花の詞

春は花の世界なり、櫻花は花中の女王なり、この世界に我物顔をなすも故あるかな、櫻花の時は春色駘蕩にして、野も山も、村も巷もさては水ある岸も、岡の麓皆白雲と見まがふ櫻花によりて占領せられける。

貫之は歌へり、櫻花咲にけらしもあしびきの山の峽より見ゆる白雲、と實にその通りなり、春來むと待つ人の心は櫻にありて、櫻咲きなばながくしき日もあかぬ色にひかれ、待つも惜しむも、春は櫻の爲めに忙殺せらるぞかし、業平は歌へり、世の中に絶へて櫻のなかりせば、春のこゝろは長閑けからまし、と實に櫻なかりせば、日本の春は寂寞として七分の光彩を減却すべし。



梅は消けれども瘦せて寒し、譬へば心むづかしき女のどことなく世にすねたるが如し、海棠、牡丹は妖艶なれども、情多きに過ぐ、譬へば遊女の濃粧して欄によれるがごとし、桃花はむくづけく、梨花は淒婉に過

ぎて愛嬌なし、獨り櫻花は、艶と麗とを專らにして又十二分の温味あり、萬人に好かるべき花の面影なり、されば春來りて櫻花匂ひ出づれば、太陽一たび出でゝ群星の光輝を失ふたるがごとし、櫻花の美は行くところとして佳ならざるなし、その姿態の品位ある、其色のうるはしき、山の巓にあるも、水の涯にあるも、平野に咲くも、籬落に咲くも、位置によりて其の美を損することなし、櫻花は又白日によろしく、月下によろしく、而して尤も朝日によろし、その爛熳たる花の朝日に匂ひ出でたるは、誠に大和心の粹なるかな。

櫻の價値あるはその開く時の一時にして而して散りぎわの殊に潔よく美なるにあり、花は千百ありといへどもその品位高くして高雅の姿を備へたるもの櫻花の右に出づるはなし。

月下の櫻尤もよし、天上の神仙一夜俗界に下りてこの塵土を一時の清淨界に化したるにはあらずやとおもはる、某所の公園電燈に映ずる處ろ麗彩煥發して其美其妙言ふべからず。

櫻花の麗はしきは又寂しき古城址などに懷舊の詩情を催さしむるに尤もよし、斷壁、殘礎のほとり、古木空洞をなせるところ一樹の櫻花名殘なく咲きみちたる人をしてそゞろに憑弔顧望に堪へざらしむ嗚呼櫻なるかな、櫻なるかな、櫻は實に我が日の本の人の詠歎し、崇望する花の王にぞある。

田舍の春

山の容は不斷の碧を含み、水の色は四時の藍を湛ゆ。早蕨、松茸の手に任せて採るべく、細鱗、鮮魚行く處ろとして釣れざるなし、前には數項の田圃あり、耕せば以て一家數口の糧となり、後園には桃、栗、梨の果物あり、柿、蜜柑、累々として、赤玉をつゞり以て幼童の口を悦ばすべし、畑の蔬菜は四季に絶ゆることなくして總菜の用自から供はる、畦畔の大豆、小豆は以て味噌を製し、赤飯を炊ぐべく、砂園の瓜、茄子は漬物として十二ケ月の鹽菜に事を缺くことなし、籬の菊

は折りて挿すべく、路傍の松は挫いて焚くべし、居ながらにして人生生活の用備はり盡せり。前庭の草花は以て目を喜すべく、後園の桑楮は以て帛を織るべし。茅屋疎籬、鷄犬優遊として其の間に戯る、陶淵明、諸葛孔明にあらずといへども誰れか此の間の妙趣を羨まざるものあらん、田園の生活何ぞそれ閑靜なるや。嗚呼詩人が謳ひするも尤もぞかし。

乍去文明の手は都會も田舍も其の内容を俗化せずんば止まざるこそ、うたてけれ。つら〳〵惟るに田園そ



の者の光景こそ今もむかしもさして異なる處ろなしといへども、人事は日に月に舊態を破壞して時々刻々に生活の俗趣味を漲らしつゝあるを如何せん。田舍生活の優長なりしは久しき以前の夢にして今は中に都人士の想像するがごとき、閑適なるものにはあらじ。今日の田園の人は決して昔時のごとく質樸無邪氣ならず、見よ彼の村長と稱し、村會議員と稱するものは、いづれも高帽を戴き八字髯を蓄へ、赤十字の記章を胸間に閃かしつゝあるに非ずや、見よ彼の若衆と稱する青年

は、其の肥臭き手もてコスメチックを塗り、絹ハンケチを頸に捲き新調のインバチスに流行を競ふにあらずや、牛肉も食ふべく海魚も味ふべく、加ふるに山家村里の一邊、怪しき飲食店は軒を掲げて妖婦の出沒を見る、こゝに靑年の囊底は叩き飛ばされ、鄙俚なる絃聲に濁れる波を揚ぐ、されば曉夕桑麻を採るの窶婦も旣に奢華熱閙の味を覺へ、珊瑚の珠、黃金の簪其の頭を飾り、糸織の小袖、襦珍の丸帶、其の粧を凝らす、勢ひこの如くなれば山を賣りて學問交際の資となし、田を放して銀行會社の株に投ずるに至る、彼の選擧に奔りては其の德を變じ、彼の運動に加はりて、其の友を紿くに至る。嗚呼田園も亦俗化せしかな。

△冷かなる上流の家庭

上流社會の家庭を見るに其多くは親子兄弟の關係が嚴格にすぎるか、又は放縱にすぎるかの兩極に偏して何れも中庸を缺いてゐるから 他の家庭に比して骨 肉 間の愛 情が冷やかである。

△俳優の觀たる化粧法

中村芝翫曰く、東京女の化粧法は秋の月の如く冴え〲して而も寂ら淋しい處に美があり、關西女の化粧は 春 月の如く濃艶で且つおぼろなる處に 趣 があると名評といふべし。

△花時の化粧に就て

陽春四月頃の空氣中には種々の物を含んで居るので餘り厚化 粧をすると却て醜くなるのみならず、顏面を荒す事が夥しいから、此時節には一ト皮膚の脂肪を拭ひ去つた後に、白粉を成可薄く刷いた方がよろしい。

△珍奇なる學說

女性崇拜の大家マックスオレルは恁那事を云つ居る。世界創造以來神は常に下等の生物から漸次に高等の生物を造つて居る、人間の中でも男が先で女は後から作られた、故に女は人類世界の最も高貴な者であると。

△男女鼻の曲り方

男子は大抵左の鼻孔に故障があるため鼻筋が左方に曲折し、女子は之と反對で右の方に曲つて居ると。

△新發見の滋養品

近來 醫學社 會 に於て食物衞生調査の結果、從來廢物同樣に 扱はれてゐた豆腐の滓が普通の滋養品以上なる事が發見されたといふ。滋養品は滋養品でも消化の方から見たら駄目かも知れぬ。

△夫婦共稼ぎの家庭

勞働者に近き社會は別として現今 東 京 に於ける中流以上の家庭で夫婦共稼ぎで月給を取つて居る知名の士は四十人以上もあつて此等の中には夫よりも細君の方が遙に收入の多いのもあるさうだ。

月の手鏡

麗水

四月

百花の氣空に蒸して、夜も光るは此の月なり、櫻ばな、言ふもさらなり、李、杏子、梨の花、木瓜の花、雨の海棠、朝露の華鬘草、彼れは美人の睡起の姿に喩へ、これは年齡若き比丘尼の朝勤めするさまに擬ふ。櫻草、金盞花、薊花、蘇枋の花、小粉團の花、小米櫻、さて月の終りには、躑躅の花は丘に燃え、藤の花は池の渉にさゝれ波をゆかりの色に染めなすべし、別て富貴の花と稱へらるゝ牡丹の花まだ嫁らざる二八の處女がねよげに見ゆると賞でられし芍藥の花、沈の香のする沈丁花、瑞香花、野邊を彩どる菜の花、菫、蓮華草一輪を一枝の黄金に交ゆといふ薔薇の花、摘んで人形の衣の綿とするに堪えたる茅花、辛夷、木蓮華、雨つながら禪家の庭に相應しく、連翹、山吹、共に其の花の實にして而も實を結ぶこと稀れなるは、村雨に傘なき宿の庭に栽ゆるに好し、石楠花は、岩ともなるべき木の名なれど、花は乙女の髪に飾るに堪えて美しく、木の中の武士と稱へらるゝ松も亦た翠立ちて、十返りの花を咲く、やがては草閣の柳やうやく暗らく、野池の、荷葉初めて圓に、今宵ばかりは春の名殘に朧なれかしと祈る月も、次第に冴へては目に青葉山杜鵑、初松魚の節に入るべし。

三日　神武天皇祭なり、上野の彼岸櫻、此の日あたりより盛りとなる。

八日　釋迦誕生灌佛會、各宗の寺院にて堂前に花を葺きて花御堂を作り、釋迦の像を安置して甘茶を接待す、兒女、靑竹の筒を提げて甘茶を受け、且つ佛に灌頂す兩國の回向院この日の甘茶を作ること二十石に及ぶとぞ。

十二日　は此の月第二の金曜日とて耶蘇の磔に逢ひたるの日と傳へられ此の日より四日目なる十五日の月曜日は耶蘇の昇天したる日なりとそこ隨處の耶蘇敎會堂にては禮拜會を催し莊嚴なる儀式あり。

十四日　下總の中山日蓮宗の大本山法華經寺にて十九日まで千部法要あり、總武鐵道、臨時滊車を出し信徒雲集す。

十五日　向島木母寺の梅若祭なり、この寺は忠圓阿闍梨が貞元年中に開基して、五智如來を安置す、梅兒嗣あり梅若塚なり、傳へ曰ふ梅若は吉田少將維貞の息寛和年中、人に拐誘されて武州に來り終に此處に死せりしを里人哀みて葬うたりとぞ花曇の天、時に微雨を降らすを、梅若の涙雨といふ、此の日の前後に、隅田堤の櫻、眞盛りなり。

十七日　東照宮大祭、上野公園の東照宮にては、此日の午前十時、神殿に管絃樂を奏し七十五案の神饌を供へ德川家及び元の譜代の諸侯伯、舊臣の參詣多し、神殿の前に建らるゝ金扇の大馬標は將軍の牙旗なり、白髮の舊臣、在りし世のさまを今に偲ぶ料ともなりぬべし。

二十二日　池上本門寺に二十八日まで、千部の法要あり。廿五日は中回向とて天童供養、二十八日は總供養とて日蓮宗信徒の諸團體參詣し、最も賑ふ。

二十日より以後、月盡るまで、荒川堤の櫻盛りなり、此には櫻花の諸品を栽えて、遠く熊谷堤に連なりぬ、奈良櫻、朱櫻、樺櫻、普賢象、楊貴妃はいふも更なり、鬱黃の櫻、雲珠さくら、吉野、毬、葉まで見るに宜しと謎めきし名の朱雀櫻など、晴れたる川と美しき麥田菜圃を背景にして立ちならびたるさまは、實に櫻花譜を披き看る心地して關東の花は、此の地を第一とこそ稱ふべけれ。

此の月の水の遊びは、野釣に妙なり、殊に池の鮒釣に好し、菜の花の影涵す野の水、若菰齊く水鳥の綏るやかに霞める鏡と澄成したる水の面に遊ぶところ、獨り釣其の興味は言はんとすれば言葉を忘るゝばかりなり、海にては針魚繩、さて又た、膳に上すの新味には、櫻鯛、若鮎、筍子は此の月の末目黑の村より市に上る。



女代診（其八）

糸左近

子宮病

世人の誤解――今や「女子教育」といふ聲は頗る八釜敷なつて來たが、其割合に生理衛生の思想は發達せぬ、其故子宮病と言へば、唯一病で、而も夫を有つてる若い婦人で無くては無いものゝやうに心得てる方が多い、『まあ彼の御婆樣が子宮病とは』とか、『彼樣な小娘が子宮病だつて』とかといふやうな言葉を屢々耳にする、それから又「衛生顧問」の質問にも、『妾事子宮病で困つてゐますから、其の療法を教へ玉はれ』といふ如き、簡單な手紙が往々來る、是等は皆人體に關する觀念に暗いからである、御婆樣であらうと、赤兒であらうと、子宮といふ器管の有る以上は、必ずしも其の疾病に罹らぬとは限られぬ、又同じく子宮病にしても、其の實質に傷んでるのも有れば、癌腫の出來たのもあつて、色々樣々に區別せらる、然れば左に、

子宮病の種類――を言はう、子宮病を醫道では、(一)子宮內膜炎(二)子宮外膜炎(三)子宮實質炎(四)子宮癌腫(五)子宮周圍蜂窩織炎(六)子宮周圍腹膜炎(七)子宮後血腫(八)子宮纖維腫(九)子宮肉腫(十)子宮乳嘴腫(十一)子宮前轉(十二)子宮後轉(十三)子宮前屈(十四)子宮後屈(十五)子宮脫出の大凡十五種に別けてゐる。彼の卵巣嚢腫や卵巣炎或は膣加太兒などは、又別種類である。今順を追うて是等の原因病狀から豫防法等に至るまで、簡單に說明しませう、成程と頷かるゝ節も定めし多からうと信じますれば何うか讀んで頂きたいものである。

△子宮內膜炎

〔原因〕月經前後の寒冒が最も多い、次に藥液の誤用、不熟練な醫者が器械の使用を誤ること、其他腺病濕地の住居、分娩後の不攝生、或は分娩後に乳汁を哺ませぬ事、或は貧血、流產、或は淋病毒の侵入等から起るものである。

〔病狀〕急性はゾット惡寒を催し、續いて熱出で、インフルエンザにでも成りたのかと思つてると、內股や腰の邊に牽張るやうな疼痛を覺え、子宮も多少痛むやうに感じ、間も無く稀薄なる水樣の物が下る。慢性は急性より轉するが、或は初より慢性なるもある、何れにしても多量の濃い粘液が下り、爲に腰卷を汚すことも屢屢有る、斯うなると、月經は多くなつて、月經時には疼痛を覺ゆるし、且つ月經時で無い時も出血し、これが長く續いてる中に、姙娠し難くなり、遂には段々衰弱し、身體は瘦る、呼吸は苦しくなり、食欲は減り、動氣は高ぶるものである。

〔攝生法〕急性症は極めて淡泊なる食物、例へば粥豆腐、牛乳、鱚、鰈、小鯛の如き物を取り、心身の安靜を專とし、可成仰臥してるが宜い、慢性症は余の狹き經驗では、湯治に行くこと最も大贊成である、其他腹部を溫め、滋養強壯の食物を用ゐて、全身の血液を殖すこと肝要である。

〔療法〕は必ず素人療治出來ぬのみならず、事情の許す限りは、大學病院若くは專門病院に入院して、熟練なる醫師の診療を乞はねばならぬ、併し慢性症であつて、數度醫師の手術を受けたる人は、器械の使用法、藥液の溫度等も了つてゐるから、自分でイルリガートルを用ゐ、硼酸四瓦を三百倍の石炭酸水四百瓦に溶して洗つたり、或は硼酸二瓦を倔里設林三十瓦に溶し、之を綿球に浸して挿入するなどの手前療治を（醫師の指圖を受けて）爲ることも有る可し。

△子宮外膜炎

本病は前者と原因病狀療治等殆んど同じきものなれば敢て言はず。

△子宮實質炎

〔原因〕これも前者と能く似てゐる、即ち月經時の寒冒、淋毒の侵入、藥液及び器械の誤用、其他身體の劇動、精神の感動、過房、或は心臟、肺臟及び肝臟の病から反射して來る等のこともある。

〔病狀〕急性症は滅多に無いけれど、若し有るとすれば、矢張惡寒がして熱發し、子宮の餘程奧の方に疼痛を覺え、歩いたり咳嗽をしたりすると、殊に痛さが增す、それから惡心を催し、或は嘔吐し、時に依ては腸加太兒になつたかの如く下痢したり、裏急後重になつたり、重きは子宮から膿汁の出ることがある。慢性症はこれ



も胃腸に障害を起し、腰は痛む、子宮には鈍痛を覺え、時には頑固に便秘し、反對に小便は數多くなり、子宮は段々膨れて、其の容積を增し、月經は時に依ては閉止し、爲に妊娠で無いかと醫者でさへも疑ふことがある、然れども妊娠ならば腰等の痛む事は殆んど無い、それから段々病の進むに從ひ、例の白帶下即ち粘液を下し、不妊症となつて、攝生法が惡いと、病は往きつ戻りつして、數年乃至數十年の間、ブラ〳〵臥るでも無く、起るでも無く、鬱々日を送り、從つて家庭の圓滿を得られぬものだ。急性症の時に化濃する者

は甚だ危険である。

〔攝生法〕急性は嚴重に平臥を守り、勉めて精神の安慰を計り、食物は急性内膜炎と同じき物を取り、寒冒に罹らぬやう注意をせねばならぬ。慢性症は慢性内膜炎と殆んど同じことであるが、特に注意す可きは、可成外出を禁ずる一事である、而して便秘には早速灌腸すること甚だ肝要である。

〔療法〕急性症に、水蛭を貼けたり、氷罨法を施したり、麻酔劑を服んだりすることは何れも熟練なる醫師の治療を請はねばならぬ、返す〲も手前療治をなし、一生を過つてはなりませぬ。慢性症には例の綿球を挿入し、及び内服藥としては、沃度劑を用ゐるのであるが、是亦醫師の指圖を受けらるゝこと言ふまでも無い。兎角本病は、其の經過が長い所から、氣迷して、遂に廣告の餌となり、何とか姫が敎へたとやらの神秘的を信じ、大將湯とか云へる藥を服むなど、敎育を受けたる、やんごと無き方々にすら有るとは、慨かはしき次第である。

▲子宮癌腫

〔原因〕子宮癌腫に限らず、癌腫と名の附く病は、凡て其の原因が了らぬ、或は遺傳なりと言ひ、或は然らずと駁し、或は榮養不良に在りと論じ、或は房事過度なりと說き、未だこれといふ輿論は無い、然れども貧賤の人や、房事過度の者に多い所から見ると、此の二つが誘因となること丈は、恐らく確かであらう。

〔病狀〕其の初期に在つては、急性内膜炎や急性實質炎の如く、劇しく無いのみならず、左程の苦痛も無い、唯粘液を洩し、或は少量の出血ある位に過ぎぬ、且つ大抵月經時に來るを以て、今度の月經は、常よりも少し多いやうだ位に思つてゐると、病の進むに從ひ、月經時ならぬ時にも出血し、其量は次第々々に殖ゆる、而して粘液も初は水樣なれども、段々濃くなり、後には極めて惡臭を放ち、褐色或は黃色の液體に變る、疼痛も初期は殆んど無いが、日を追うて增し、終りには劇烈なる痛さを覺え、腹一面に影響し、立つても座つ

ても居られぬ位になる、而已ならず小水を頻りに洩し、遂にジブ〳〵断えず洩るゝやうになり、其の臭氣と言つたら、何とも譬樣が無い、斯くして次第々々に衰弱し、足甲に浮腫を發し、太陽が山の端に隠るゝかの如く、ピシヤ〳〵と黄泉の客となる、憐れ果敢無き狀態である。

〔攝生法〕勿論前病と同じい攝生法で可いけれど、前述の如く、其の發病の仕方如何にも緩慢なる爲に、小敵なりと侮り、左程の心配も無くて、月日を送るが何よりの失敗である、昔は本病



を白血又は長血と稱し、否今も尙斯る名前の許に、輕々しく打捨ておいたり、或は賣藥若くは素人療治をして、悠々寛々病を重らせ、愈々苦痛を感ずる末期に至りて、醫士に泣き縋る輩が往々有る、其故六日の菖蒲十日の菊、醫師は匙を投げて『私一人醫者でも有りませぬからね』と云ふやうになる、然れば聊か子宮に故障あるを感じたら、早速專門醫の診療を受けらるゝ事、これ何よりの攝生法である。

〔療法〕種々の藥液を塗布し、或は内服するの方法無いでは無いが、何れも幾分の苦痛を

緩らげ、其の經過を長くするまでの事で、現今では未だ之を根治せしむるの妙藥とては無い、悲しむ可き事である、けれども末期になつて、衰弱を來さぬ中なら、外科術を以て子宮を切り除けば、生殖の道は勿論不能になるけれど、生命を長らへて、家政を掌るの任を全うする事は、確かに出來る、嗚呼病は少しく萌せる時に處置す可きものである。

▲子宮周圍蜂窩織炎

〔原因〕產後の產褥熱が主なる原因で、其他藥液及び器械の誤用もある。

〔病狀〕骨盤內に劇熱を發し、其熱は身體一般に及び、消化不良となり、即ち胃病になつたかの如く、重きは惡心嘔吐を催し、腰部は甚しき疼痛を覺え、便秘はする、小水は仲々下り難く、頗る困難の結果、遂に子宮より水樣物を洩すに至る。病の經過は數月乃至數年にも及ぶことあれど、早く相當なる治療をすれば、斯の如く長い月日を苦しますして全治するものである。

〔攝生法〕膣內及び外部共に清潔を旨とし、嚴重に身體を安靜にし、腹部に、フランネルを濕し且つ溫めたる物を纏ひ、時々之を取換食事の攝生精神の保養等は、上來述べたる諸病に同じ。

〔療法〕は沃度加里或は沃度曹達などを內服し、沃度仿謨又は水銀軟膏等を外用するのであるが、是亦素人療治の出來るものでは無い、宜しく餅は餅屋病は醫者の諺を守るべしである。

▲子宮病者の良人に告ぐ——子宮病の攝生及び療法等に就いて、前々の如く述べ來つたが、尙今一つの大なる攝生は、病中及び病後數週の間に於ては、必ず房事を愼しみ玉へと申す事柄である、之は何れの書物にも、婦人に愼めといふ樣に書いてあるが、元來患者は大に生殖欲の減ずるものなれば、之を破るは婦人に非ずして、必ず其の良人なる事は疑も無き事實である。嘗て余は一婦人を診察して、此の一事を愼まずんば、到底全治覺束無しと說いたれば、「婦人潸然と涙を流し、『先生に聽かざるまでも、疾から之を知つてゐます、

けれども如何せん、良人の言に從はざれば、怨み且つ怒らるゝのみならず、遂に如何なる家庭の紊亂を來すやも圖られず、これ妾が良人の犧牲となる所以であります」と、余も亦同情の涙に咽んだ事がある。嗚呼世の良人よ、

意馬追ウテ吾ヲ來ルモ　心猿酒爲スモ媒ヲ
何ゾ折シャ路傍ノ柳　堪ヘダリ愛スルニ一株ノ梅

と歌つて下さい、必ず和氣靄々家庭に溢るゝであらう。

子宮病全體を説くには尚十數頁を要さればならぬから次號に詳しく述べませう。

◉流行の帶〆

リボンを帶〆代用とする事は目下婦人社會に於て流行しつゝあれども、リボンは結び目擦り切れ易くして、折角の意匠を凝らせるものも使用久しきに堪へずして不經濟に終る事あり、今回大阪（南久寶寺町三丁目）吉崎本店に於て發明したる胡蝶帶〆と稱するは、結び目の内側に一種の金具を付して伸縮自在なる上に外觀はリボンを結びたると同じく、且つ結びの格好なども崩す憂なきを以て婦人社會に歡迎されつゝあり、其の質は鹽瀨、羽二重、厚板等にても製するを得る格好、體裁共によろしき帶〆なり。



四月の衞生

過度期の衞生

柳は烟る、櫻は霞む、實に好い時候になつて來た、好い時候に伴れて、人の心身も自ら爽快になる、然れば此月の季節衞生の章は、抑々何の爲かは、併しながら、諸姉が健康長壽を保たるゝ二大基礎を立てらるゝは、此月に限るのである、斯う申すと、其の二大基礎は疾くの昔に立てゝ居るから、陳腐な事を言ふなと叱らるゝかも知れぬが、仲には立てゝ居られぬ方も有らうから、更に記して猛省を乞ふことにしよう。然らば二大基礎とは如何、曰く、

冷風浴と雨浴

である、冷風浴とは太陽が地平線上に昇るを度として起き出で、直に素裸になり、朝風に吹かれながら、

五分時乃至十分間の間、滿身の力を籠て、「一二三四」と體操するのである、これが終つたら、直に雨浴に取り掛る、雨浴とは圖の如く桶の下方なる側に穴を穿ち、之に如露を附け、水を充して高處に擧げ、霏々と雨の如く水滴の落つるを身體に注ぎながら、手拭を以て皮膚を摩擦するのである、斯くして身體隈無く洗ひ、且つ摩擦し終らば、乾きたる手拭を以て拭ひ、直ちに常の如く衣服を着、それより、御掃除を爲さらうと、御化裝を爲さらうと、其れは諸姉の御勝手だ、之を此の月から御始めになれば、段々暖氣に向ひますから行り易い、行り易い中に習慣を附ければ、冬になつても行はれます、乃で何んな効能が有るかと言ふに、第一に皮膚を淸潔にし、且つ抗抵力を強め、寒冒に罹る憂が無い、第二に神經を强壯にし、歇私的里病、神經衰弱等の豫防となるのみならず、初期の神經衰弱ならば、是丈で治ることがある、第三に食欲が增し而も消化が良くなる、其他業務に疲勞を來し難くなること、一日中身體がポカ〳〵温いこと、朝起になる事など其の効能は實に莫大なものである。けれども寒冒に罹つた時や、或は呼吸器病、心臟病等の有る人、或は小兒老人、乃至は身體の非常に虛弱なる方は、是非避けねばならず、何となれば、斯る冷氣に抵抗するの體力が無いからである。換言すれば、十五歲以上四十五歲以下の無病者が仕始め、數年若くは數十年の間、習慣になれば、四十五歲以上七十八十になつても連續して差支無いのである。斯う申すものゝ湯殿は家毎に無いから、雨浴の裝置に困る方は、普通の冷水摩擦でも可い、余は茲に白狀致します、余は、醫者であるにも拘らず、所謂不養生で、酒も飮めば煙草も吸ふ、大に怠ることも有れば、過度に勉強することもある、併し近來に至つて追々改心し、殊に冷風浴、冷水摩擦、日沒の入湯、必ず缺かしませぬ、故に女學世界の末席を汚して以來、呼掛六年の間、私丈は唯の一回も休みませぬ、これが何よりの證據でありますなどゝ、管らぬ自慢話は止して、次は痲疹と種痘に就いて一寸申し上げたい事がある。

痲疹



は四季の中で三四月が比較的多く流行するといふまでゝ、其他の時に無いのでは無い兎に角傳染病で有て、大概は小兒を襲ひ、仲々油斷のならぬ大病である、即ち本病に罹ると熱發してコン〜咳嗽出で、咽や鼻が惡くなるは言ふまでも無く、重いのになると、肺炎肋膜炎或は肺結核までも惹起し、あはれ可憐の撫子も其儘散つて了ふことがある、然るに麻疹は古來人の熟知せる病で、自然耳慣れてゐる所から、大抵の親達は、左程之を恐れず、寒冒か何かの樣に輕々しく取扱ひ、甚しきは藥一服與へぬ人がある、實に無慈悲至極の次第だ、故に親たる者は、病の輕重に拘らず醫師の診察を乞ひ、注意に注意して介抱するが義務である、又全治したやうにあつても、當分の中は外出を禁じ、入湯を避けねばなりませぬ、

新鮮の空氣を呼はせねばならぬとか、或は皮膚の清潔が肝要であるとかなどの衞生も、時に依りけりで、病後未だ身體の回復せぬ小兒に、應用するは間違である、氣管支加太兒肋膜炎其他の重病を誘ひ、一方ならぬ危險に陷ることあれば、宜しく愛の繩を以て、室內に止めおく可しである。又、何うせ一度罹るものなら、早く傳染らせた方が可からう、大人に成つてからでは重いといふ說もある、此の何うせ主義は、一應理屈のある事なれど、其の當時の流行する麻疹の性質、及び我兒の身體狀態を考へねばならぬ、詳しく言へば、流行する麻疹の性質が、順良で、而も我兒の無病健全なるを認めたら、故らに病兒に接せしめ、早く傳染せしむることもある、然れど醫師の指圖を受く可きことを忘れてはなりませぬ。次に、

種痘

は春に限ると、大抵の人は思つてるが、之は頓でも無い間違で、年百年中何時でも構は無いのである、取も直さず生後五十日を經たら早速醫師の許へ伴れ行きて、種痘を請はねばならぬ、併し一年中で、夏は勿論汗の多く出るのみならず、種々の病に罹り易い時であるから、天然痘の流行時ならざる限りは、見合した方が可いと、先輩諸氏が言つて居る。若し天然痘の流行する兆があつたら、是等の條件を悉く取消して、夏で有らうと、五十日以內で有らうと、其樣なことに頓着せず、早速種痘の實行を怠つてはなりませぬ、種痘の爲に生ずる熱發などは、天然痘の危險に比べては、天地の差あるものである。我が顏には、ヤレ奇麗水だの、ヤレ色白藥だのと騷いでゐながら、嬰兒の種痘を、今日だ明日だと延ばし、遂に生れもつかぬ痘痕を殘さしむやうな人も、世には無いでは無い、面憎しとは斯る親をこそ云ふならめ。



衛生顧問

眼病、耳鼻、咽喉等

注意――二月は婦人科皮膚科、三月は内科を答へましたから、今回は雑部に致します、雑部の中には、眼科外科藥物など色々有つて仲々答へきれませぬから殘餘は來月に廻します。

質問心得

一、書體は楷書で假名は變體を用ゐられぬ事。
一、姓名年齢病状（可成詳敷）を必ず記入せられたき事。
一、葉書は一人一問たる可き事。
一、郵券封入或は往復葉書を以て返書を乞はるゝも必ず應ぜぬ事。
一、匿名は異様なるを選ばれたし「女學世界愛讀者」「愁願女」等の名は、多く有つて、甚だ混らはしき事。
一、男子の質問固より差支無れども、男子生殖器に關する事は、答へざる事。
一、面白半分の問と認むるものは、必ず沒書にする事。
一、科目を分けて順々に答へますから、問に依ては三ヶ月後に廻るかも知れぬ事。
一、質問書は東京市本郷區森川町一番地表北裏七十八號糸左近へ必ず宛てらるゝ事。
一、日曜日ならば午前午後共に診察の御依頼に應じても宜敷き事但し開業して居ませぬから、處方箋を差上る丈なることを御承知おき下されたし。
一、森川町一番地は、四百何十戸ありますから、御訪問下さる際に、必ず表北裏七十八號を御忘れなさらぬ事。
一、小生に本名を明せとの手紙が往々參りますれど、糸は本姓で、左近は本名であります、雅號では有りませぬ。

眼病の部

●●●●●トラホーム●●●●に就いて

問 三十八年の暮から、トラホームにて困難いたし、色々治療も受けましたが少し宜いかと思へば又惡くなり、今に根治致しませぬ、何卒これが根本的の治療法を伺ひたし。（臺灣の困雜生妻）（中國願女）等

答 これは實に善い質問で、詳しく之を述ぶることは、讀者諸姉の爲に、甚だ有益ならんと信ず、能々御熟讀有りたし。

▲トラホームの攝生法――本病は初期の苦痛が他病の如く甚しく無いから、左程に思はず、自然に治るだ

らうとか、或は明日醫者の許へ訪ねん、イヤ明後日にせんなど、日を暮してる中に、何時の間にか病は增長し、遂に長い月日を費さねばならぬのである、偖又醫療を受けると、直に輕快を覺え、間も無く全快したやうに思はるものであるから、大抵の人は治療を止めて了ふ、其故又々再發し、燒木杭に火のつき易い道理、火の手は以前よりも盛んになる、斯の如く一度より二度、二度より三度と度重るに從ひ、其の治る月日は長くなり、最後には治らぬといふ不幸を招くことがある、故に本病に罹つたら、醫者が眞に全快しましたといふまで、長い月日を辛抱して治療を受けねばならぬ、さうで無いと、却つて其よりも長い月日を苦しむものなることを御心得ありたし、返す〳〵も此の一事は特筆大書して本病者の方に御勸め申すのである。次に該病者のみに限らぬが、爰に一つ

一般の眼病者心得

と申せば、可成賣藥の點眼水を避けられたいものだ、抑々賣藥の點眼水は、醫藥の如くに患者を見て、直に調劑するのとは違ひ、調劑してから幾月幾年と日が經つてるに相違無い、故に其の點眼水中に、有機物の入り居ることや、或は全然腐敗しゐるなど、珍らしく無い、然れば往々之を點眼して、病勢を重くする種になつた例は多くある。次に新鮮なる空氣中に住み、塵埃及び煙を避けねばならぬ、暴風の日に外出する如きも、甚だ宜しく有りません。次に眼部に充血を來す可き事、例へば頭を低れて仕事をしたり、酒を飮み、或は辛き物を食するなども、嚴禁するが肝要である。其他細い物を見る事、夜業をせぬ事、手巾手拭及び手指の淸潔を守る事、終りに體力一般の强壯法を大いに計られたき事、是等は余の說明を待たざるも旣に御存じでせう。

トラホームの療法

前述の如く攝生法を能く守り、能く便通に注意し、若し便秘する時は其由醫士に告げて下劑を乞はねばならぬ、點眼藥は、二%の硝酸銀水、或は一%のクレオリン水或は〇、一%の昇汞水などを結膜面に塗り、間も無く蒸餾水にて洗はねばならぬ、斯の如くして醫藥功無き時は、電氣燒灼

亂切法などもあるし、又或る醫士は丹礬と僞里設林と當分の液を結膜に塗つて、間も無く蒸餾水で洗ひ落すこと、日に數回致せば治らぬといふ事は無いと主張してゐらる、然れど斯る療法は、眼科專門醫の爲す可きことで素人療治の出來るものでは無い、下手に行ると却て眼球までに大影響を來し、甚しきは盲目となつて、人の笑を招くに至ることがある、それとも笑ふ門には福來る、鬪ふ事は無いと言はるゝに至つては、手も足も出ぬ。

答 一昨年頃より近眼になり、十五度の眼鏡をかける程に候



が、眼鏡は色附の方宜敷や、又手近の物を見る時は、掛けぬが宜しく候や、御敎を乞ふ。

（愛媛縣　いなか女）

答 外出の折等は、色眼鏡を掛けねばならぬ場合も有れど、平常は色眼鏡ならぬを可とす、凡て近眼者は適應せる眼鏡を是非掛けねばなりませぬ、然らざれば物を見るに困難し、愈々度の進むものである、然れど近眼者ならぬ方が、度の有る眼鏡を掛けることは、近眼者になる稽古するやうなもので、甚だ宜しく有りませぬ。

耳鼻咽喉の部

口內炎に就いて　問 幼少より朝起れば、口中に臭氣ある唾液充滿す、是は胃病の類でせうか、其の原因治療を御敎示下されたし。（神戸市多門通入丁目　松女）（久留米桂頭吹女）（其の愚思ひ母、子（十九才））等

答 朝起出れば、誰でも多少の臭氣あるを免れず、然れど其の臭氣の甚しき原因は、齒牙に故障あるか、或は咽頭又は口內に、何か病があるか、或は御尋ねの如く、腸胃病があるか等、診察の上ならでは分り兼ねます、療法は原因に依て異なるが、一般に朝は言ふに及ばず毎食後及び臨臥に微溫湯を以て含嗽せねばならぬ、斯くしても尙臭氣有る時は、硼酸二瓦を溫湯半合に溶かして、之を口中に入れ、頭を少し仰にしてガラ〳〵と含嗽するが宜い。

鼻病に就いて　問 去年の六月頃より臭氣を感じ鼻にて呼吸することが出來ませぬ、其故か朝起き出ると共に咽喉に痛を感じて困難致します、何卒良き療法を御敎へ下さいまし。（靜岡縣 十八歲鼻病女）

答 鼻の奥より咽喉に通ずる個所に何か故障あるのでせう、是亦診察の上ならでは何とも答へ兼ねますが、兎に角劇しく鼻汁をかまぬこととし、イヒチオールを鼻中に塗り、石炭酸と依的兒とを一と四との割合に混せ、之を瓶中に入れ鼻內へ嗅ぎ入るゝことを試みられよ、又前答の如き方法にて含嗽せらるゝことも必要である。

▲（靜岡縣 望月生）（宮城縣仙臺 廿歲女）（大坂北區 なには女）（北海道旭川町 十七歲女）等に答ふ――質問の意味は何れも多少異れど、前者を應用せられたし。

▲（牛込 鳥撃女）（靜岡縣遠州 蓮花女子）等に答ふ――器械を用ゐて鼻の形を宜くせんとするは面白からず、天然の形に安んぜらるゝこと宜しと信ず。

▲（十四才 △女）に答ふ――「鼻が高くなれ云々」の禁厭的文句、面白半分の問と信じます。

問 私の咽頭口にはポタ〳〵としたる物が兩側に生じ二三ヶ月經れどと今に治らず候此治法を敎へ下され。（甲斐の 晩雨女）

答 唯是丈の容態書で判斷せよとは、恰かも系脈で診察

しろと注文するやうなもので、一向に要領を得ませぬ。或は「慢性の軟口蓋咽頭炎」かも知れぬ、果して然らば硝酸銀で灼くが宜からうと思ひます、御地の醫士に能々御相談ある可し。

問九歳の長男、四歳の時、上の前歯貮枚を抜きしが今に生えませぬ、生えるものでせうか、又生える薬は有りませうか。
（安藝の 心配母）

答是非共歯科醫の判断を乞はれよ、歯の生える薬は有りませぬ。

問歯面が黒くなつて困ります故、先日醫士に治療を乞ひたれば、奇麗になつたれど、又々黒くなります、或人は稀鹽酸を塗けて磨けと申しますが、害ありますまいか、御教示を乞ふ。
（東京の 御園女）



答（神戸の松山）に答へたる如く、毎朝、食後臨臥の五度口中及び歯牙を清めて、尚黒くなるならば、薬用石鹸を塗て磨く可し、稀鹽酸は歯の琺瑯質を腐蝕する憂があるから、必ず塗けてはなりませぬ。又煙草を吸ふ方であるなら、奇麗にした所が賽の河原であります。

●耳●漏●に●就●い●て● 私事年中耳の中より粘液或は膿汁の様なものが出て困ります、何卒この療法を教へ下さ

れ。（日本橋の博文館近邊女）

答　まづ左の藥をスポイトで注射し、軟らかにしておいて、然る後微溫湯で洗はねばなりませぬ。

硼酸一瓦、偏里設林一瓦、水十瓦

すべて耳の中へ注射する藥は、水の溫度が肝要である、若し冷たければ腦貧血を發し、熱ければ腦充血になり、何れも眩暈するものである。さて其の溫度は水氣を放れてゐるといふ位なのが可い。

問　度々齒齦が腫れて其每醫士に切つて貰ひますが之を未發に防ぐ藥は有りますまいか。（山口縣一青生）

答　矢張一日に五度の含嗽をなし、左の如き齒磨粉を御用ゐられよ。

沈降性炭酸加爾曳謨五匁炭酸麻偏濕曳謨三匁鹽酸加僧謨一匁薄荷腦 少許

右混合して齒楊子に塗け磨く可し齒も、清潔になるし、齒齦の爲にも宜い。

藥物の部

問　一月詰上中の鹽酸必魯加兒必涅の混合藥は何部に用ゐても差支ありませぬか。（鳥取縣山家の睦女）

答　差支無し。

問　美白劑（白妙）は色を白くするものに候や。（奧州の色黑女）

答　外用にて色を白くする確功藥は恐らく天下に無し。

問　偏里設林二十瓦とは幾滴位に候や又一磅入は何程の價に候や。（一青女）

答　二百滴乃至三百滴なり、藥の價は藥屋に尋ねらる可し。

問　二千倍の昇汞水を髮毛に塗布すれば髮毛に害無きや（岩代の愛讀者）（越中の愛讀女）

問　毎日〳〵ザブ〳〵と洗へば害あるも一週に一度位ならば更に害無し。

問　阿列布油百瓦莞菁丁幾五瓦の混合劑が四五日經て固まり候、如何致して宜敷や。（新潟の十八才女）

答　火にて溫ため溶かして用ゐらる可し。

問　亞砒酸は藥店にて求められ候や。（福島縣吉勢女）

答　毒藥なるが故に醫師の證明無くば求められず、故に

之を用ゐんとせば宜しく醫師に打明けて醫師監督の上にて内服せられたし。

問 薄荷水の製法を問ふ。（神戸市 松女）

答 薄荷油二瓦を溫湯千瓦に入れ、能く振盪し冷めてから濾過紙にて濾すのである。

問 私は男の愛讀生でありますが、硫酸亞鉛にて洗滌する代りに何か他の良き藥ありますまいか。（安藝國 山奥特別生）

答 鹽剝三瓦を溫湯半合に溶かしたるものを代用してみられよ。

問 私は貧血で林檎鐵丁幾を用ゐて居ますが醫師は絕體的に茶を飲むなと申されます、實際で有りませうか、又鐵劑は何日程服用すれば効ありませうか。（大阪 みどり）

答 鐵劑を服しつゝ茶を飲めば、鐵の効能を奏しませぬ、何日頃で効あるかは、病の輕重等に依りますから、何とも申されませぬ。



問 パンドレンは小間物屋にありますか、又は藥店に賣ますか、御答へを乞ふ。（神奈川の 毛硬女）

答 小間物屋に賣ります。

問 硫酸麻倔涅臾謨の功用量及び調劑法を問ふ。（深山の 白梅女）

答 効用は下劑なり、用量は一回大凡五瓦にて、之を溫湯三十瓦（約二百）に溶かし、四五滴の稀鹽酸を白糖を混せて用ゐねば、昧惡くて嘔氣を催します。尙他に二問

を附記しあれど一度に一人一罎の規則に依て答へず。

答 加里石鹸で毛を洗ひましたら、仲々容易に落ちませんでしたが、私の毛に合はぬのでせうか。（北海道 春子）

答 湯水にて、ザブ／＼洗ひ落せば落ちぬことは有りませぬ。

問 夫の大酒を厭にするやうな良薬有りますまいか。（京橋の 某商店妻）

答 別にこれと申す良薬も無いが、左の方法を試みられよ、貴女の熱心に依つては、功有らんと信ず、若し功有つたら必ず御報告を乞ふ。

酒厭になる妙法——之は本人に知らせずして為さねばならぬ、即ち親戚は夫の大酒を止めさせんと思ふには、「御止め遊ばせ」との諫言らしい言葉を露発せぬやうにし、寧ろ召上れと云ふ位に勧めておいて、朝午晩の三食には、味噌汁や香の物の如き副食物を可成せぬやうにし、朝から御馳走をなし、其の御馳走は、必ず酒塩を入れて旨く煮るのです、斯くして追々に酒塩の量を増し、遂には酒の代りに焼酎を入るゝのである、三ケ月乃至四ケ月も続いてゐる中に、何と無く酒を飲みたい念慮が止むものである、但し「酒塩が過るぞ」と言はるゝ場合には、「畏まりました」と答へて、其時は一二度減じて又殖すが可い、此の手際が上手であつたら必ず功あります。

▲（二度 何女）に答ふ——酒を御止めになつたら、鼻の赤きも、手足の顫ひも治ります、若し酒を止めんと思ひなさるなら、前答の処置を取られよ。酒を飲みつゝ赤鼻を治さんとするは、恰かも木に縁つて魚を求めるが如し。

問 三月の誌上に御著素人薬物學を紹介して有りましたが発行所朝香屋は何處で有りませうか又果して私等の如き何も知らぬ素人が見て了りませうか。（京都の 若倒女）

答 発行所朝香屋は東京市神田區鍛冶町二十二番地であります、仮名さへ読まるゝ方なら必ず了ります、因に定價四十銭と有りしは、六十銭の活字誤植であります。

問 身長を大ならしむる良薬及び他に何か良法有ります

まいか御敎示を乞ふ。（美濃のGK女）

答 身長を大きくする藥とては知り申さず、恐らく無いものでせう、方法としては左に、

身長を伸す法―（一）坐らぬこと、即ち常平生に椅子を用ゐるとか、横に臥てゐるとかして足の血液不循環を來さぬを肝要とす。（二）粥、麥湯、果實を取るの習慣を附ける事。（三）大氣に觸れて運動體操する事。（四）腦力を過度に使はぬ事。（五）小羊の頭に在る淋巴線を取つて食ふ事。

右の中（五）の如きは果して眞なりや否やは未經驗故に保證し難し。又佛國のスプランジーといふ人の説に大麥小麥燕麥裸麥乾甘蔗及び糠の六種を何れも同量に混和し（全體の目方約八匁程也）之を水凡そ六合にてトロトロに煎じ詰め、篩にて濾し、更に水三合を加へて、これを毎日服用すれば、小兒の發達は甚だ迅速になるし、大人でも數吋を高くすること容易なりと、併しこれも未だ經驗せぬ事故唯御參考までに記しておく、害の無き事なれば行つて見られた上に御報告を乞ふ。



▲（出羽鶴岡 好兵生）（北越のリツトルガール）（神戸の身短女學生）等に答ふ―何れも身長を伸す方法の質問なれば前答を見られよ。

●答者の希望―質問者を出されたる方は「女代診」「季節衛生」及び「衛生顧問」全体を御一讀ありたし、何となれば其等の中に答ふ可き事柄の含める分は、別に問者の名を一々揭げぬことがあるからであります。

感心な女學生

●●情操正しき女學生の善行を募る●●

父兄より一定の學資を仰いで修業するものと、自活的に苦學するものとを問はず、何事にても勝れて感心すべき志操ありて他の模範となるべき奇特の行あらば其の事柄を詳細に記述して送られたし、是れ他山の石以て我が玉を攻くの料となし、一般女生の奮發立志に裨益あらしめん爲なり。

多くの女學生の中には或は一家の生計を助けつゝ學ぶ人もあらん他家に雇れつゝ學ぶ人もあらん、或は繁忙なる職業に從事しつゝ學ぶ人もあるべく、若しくは家計の困難に堪へつゝ猶志を失はざる人もあるべく、逆境に處しつゝ初志を貫かんと焦心する人もあるべし、其他額に汗しつゝ、生計に苦みつゝ、手足を勞しつゝ學ぶものもあらん、その學ばんと欲するの志は一なるべきも其の奇特なる志操と行爲とは千差萬別なるべし、要するに志ありて確實に、行ありて立派なる、女學生の模範的行爲を求む、吾人は斯る人々の教員より、友人より、親戚、知己乃至一面識ある人によりて是等感心すべき善行美事の世に顯はれん事を切望しそれに就て本誌は多大の誌面を供するに吝ならざるべし、掲載したる事項に就ては三圓以上拾圓以下の謝儀を呈す。



男の心を讀む人

曾水生

△第一の疑問

兎を捕ふれば之を料理せざるべからず。妙齢の處女にして、若き男子を捕ふれば、如何に之を料理すべきか。此に於て第一に起るは、服從を誓ひたる妻が、其夫を操縱するとの、果して正當なるや否やの問題なり明の順聖皇后は手づから皇帝に、日々の膳部を供したりといふにあらずや、細川忠興の妻は、夫を思ふ爲に自殺したりといふにあらずや、然れども不幸にして、暗庸愚劣の夫を持ちたる時は如何。斯る場合も、倘婦道の一點に拘泥して火の中水の中に投ずべきか。夫は妻に對し生殺與奪の權を有すとは、頑迷者流の口より往々聞く所なるが、而かも斯る極端の服從論は、國家の法律だに承認せざる所なり。故に操縱と謂へば、少しく語弊なきにあらざるも、若し柔弱凡庸の夫に代り、妻が或る程度まで、一家を經營するを以て、操縱の名を下すべくんば、其操縱たるや、家庭を幸福ならしめ、繁榮ならしむるに、極めて必要なりと謂はざるべからず。

又一方より考ふれば、妻は婚禮の際、夫に對して服從こそ誓ひたれ、盲從を誓ひたるにあらず、曰はく左せよ、『ハイ』、曰はく右せよ『ハイ』、曰はく白き烏を持ち來れ『ハイ』、曰はく龍の肉を供せよ『ハイ』、此くの如く唯命是れ從ふは、決して妻の本領にあらざるべし。縱令夫たりとも無理不法のことを命令したる時、其誤を正すは、唯り無禮にあらざるのみならず、同時に夫の缺點を補ふものなり。一家は男子のみにて維持すべからず、夫の柔弱暗愚に代り、妻が一家を整理するは自然の理にあらずや。而かも此場合、妻は手を拱して夫の爲す儘に任せんか、愚ろかなる彼は、他の惡漢猾奴の欺く所となり、大なる過失を爲すに到るべし

故に凡庸なる夫に對し、妻の之を操縦するは、家庭を作り社會を組織する上に、極めて必要なりとす。

△利己的操縦は不可

操縦既に可なり、然れども利己的操縦は斷じて不可なり。或英國の少夫人曰く、「妾は夫をして妾の意に從はしむる術を解す、そは他にあらず、夫が妾の言に耳を傾けざる時、直に臥床の上に横わるにあり、頃日も妾が二十磅の金を請へるに、唯十磅を出せしかば、妾は憤然として臥床に入りたるに、半時間を經ずして、夫は更に十磅を妾に與へたり」と。是れ實に利己的操縦の一例にあらずや。

故に出來得る限り、結婚前の心を以て其夫を操縦せざるべからず。夫が單に吾が戀人たりし時、吾れが如何にして其精神を樂しましめたる技術を回想し、結婚後と雖も、此技術を以て操縦せざるべからず。諺に「娘は眼を以て其戀人に語り、妻は舌を以て其夫に語る」といふ句あるも、餘りに饒舌なれば、忽ち家庭の風波を捲起すべし。

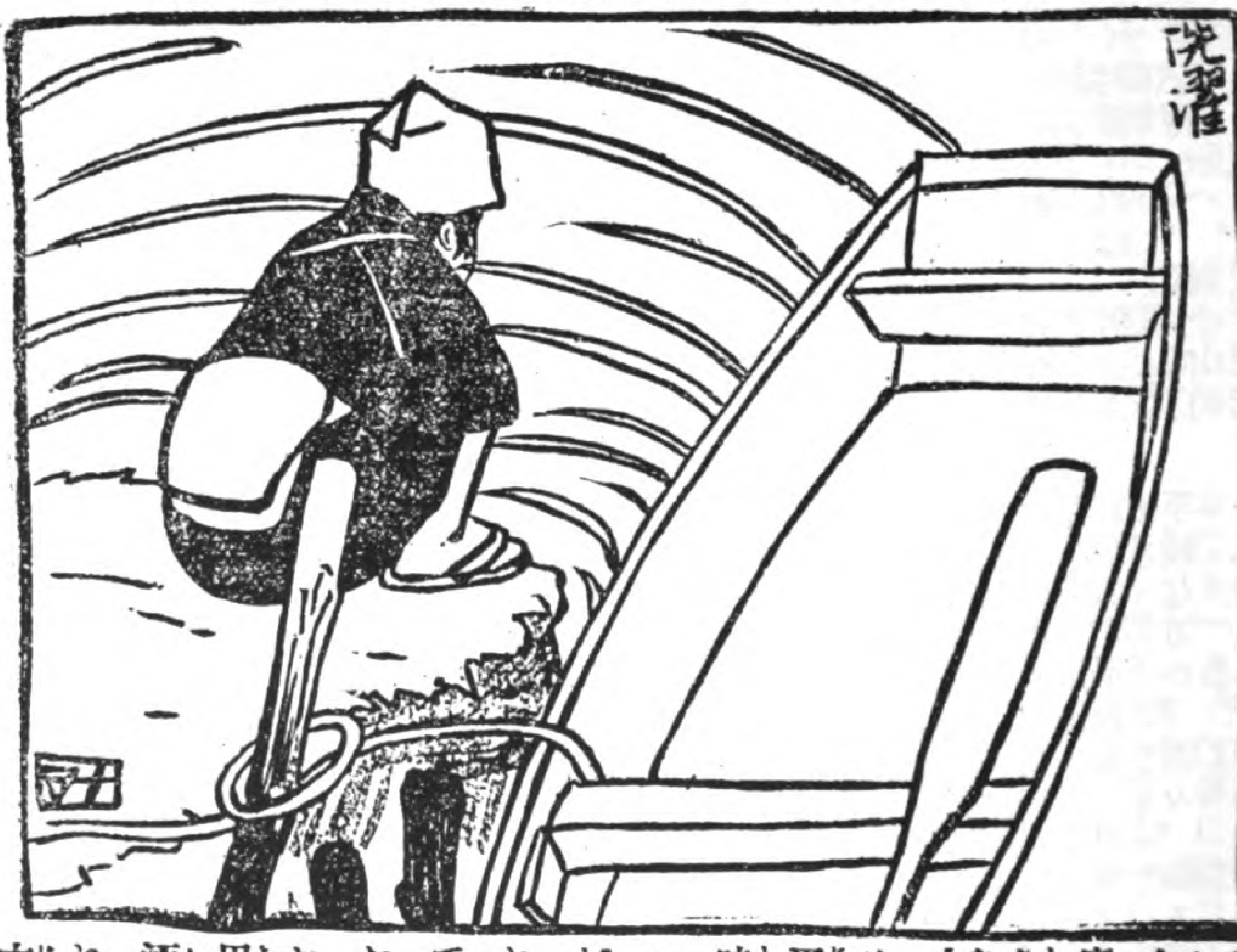
如何なる時と場合とを問はず、夫に處するには、自己の利益を計らずして、夫の立身發達を思はざるべからず。己れが金剛石の指環を欲し、芝居に行くを欲するため、夫を操縦して金錢を支出せしむるが如きは、操縦の範圍を脱して、詐僞の境に入りたりといはざるべからず。妻にして夫を欺く、社會豈に斯る大なる罪惡あらんや。

△惡性の夫を操縦する法

天性惡しき夫を、如何に操縦すべきかは、極めて困難なる問題にして、可憐の婦人が日夜其胸を痛むる荊蕀なり。然れども婦人よ少しも恐るゝ勿れ、汝の夫が怒りたる時、鐵棒を振り舞はしたる時、茶椀を投げ附けたる時、毫も周章恐怖の態度をなすべからず、斯かる態度をなせば、夫は益々狂ひ出し、遂に制止する能はざるに到らん。動物園の猛獸檻に入る人夫の、往々獅子の爲に其手足を傷つけらるゝは、彼等が毅然たる

時にあらずして、戰々恐々たる時にあり。此呼吸を領解するものは、宜しく夫の暴行に對しても、自己の威嚴を保たざるべからず。自ら侮りて人之を侮どる、如何に惡しき夫と雖も、獅子の如く猛惡ならざるを明らかなれば、妻にして己れの身を正しくし婦人特有の權威を備ふれば、結局夫は其前に降るに到るべし。換言すれば、惡性の男子に嫁したる女は、最初より『妾は愚人にあらず、妾は御身の亂暴なる言行に避易するものにあらず』との意氣を示めさゝるべからず。

『エジチス、オフ、ライフ』の著者ハーデー曰はく『余の知れる一人の細君、其夫の酒癖を矯正せんと欲し、百方苦心したるが効を奏せず、遂に夫が頗る金錢を愛するを認め、之を利用せんと留意し、爾後夫が家にありて飲酒する時、己れも亦高價のシャンパン酒を購ひて之を傾け、又夫が料理店に出で行く時は、己れも家族を携へ、其跡を追ふて料理店に登り、散々飲食したる後、盡く夫に支拂はせしかば、流石の大酒家も、其費用の多きに耐へ兼ね、斷然飲酒を廢するに到れり』と。是れ幾分か毒を以て毒を制する方法なるも、或る場合に用ゆ



べき簡易の操縦法なり。我等は必ずしも「安全なる結婚は、最初より餘りに愛せざるにあり」との語を信ずるものにあらずと雖も、世には愛の價値を解せざる男子少なからず、少しく愛すれば多く愛するよりも却つて善く命を奉ずる狗の如き徒もあることなれば、夫の性癖を矯正するには、愛の安賣をなすべからず。

△夫に安慰を與へよ

夫を操縦せんと欲する細君は、努めて其容姿の清美を保たざるべからず、縦令華麗なる衣服を着けず、濃艶なる粉飾を施さゞるも、其優雅なる擧措、其風致ある應接を以て、夫の精神を吸引することに意を用ゆべし。夫の性質豪放にして、斯る邊幅の修飾に頓着せざるが如きも、妻の身邊の清洒なることは、思ひしよりも大なる感化を夫に與ふべし。又毎日の料理の如き、食卓に於ける食器の排列の如き、少しく注意すれば、外より疲れて歸れる夫を樂しましむることを得べく、從つて良人操縦の一助となるべし。

米國バルチモア料理學校の一講師曰はく、「善き夫も細君の惡しき操縦に依りて汚さるゝこと少なからず。或夫人は常に其夫を熱湯の中に置かんと欲し、又或妻は絶へず其良人を冷水の中に入れんと欲す、換言すれば彼等は其夫を蒸肉にも燒肉にも將た鹽汁にも料理せんと欲するものなり。然れども是れ誤まれり。此の如くにして夫を料理すべからず。故に世間の婦女子よ、諸君にして現在若くは將來其良人を巧妙に料理せんと欲すれば、先づ慰安といふ紐を以て夫の身心に結び着けざるべからず。夫に慰安を與ふると、是れ家庭に於て諸君の學ぶべき第一の敎訓なり」と。

然らば如何にして夫を慰さむべきか。夫の疲勞して外より歸り來れる時、態とスネて見せ又は種々の難題を提供するは、果して夫を慰さむる方法なるか。又夫が金銭若くは公共上の問題の爲め、苦心慘憺たる時、己の衣裳裝飾品を注文するは、是れ果して夫を慰むる手段なるか。否々、斯る言行は夫の疲勞煩悶を益々増さしむる外、何等の效果なきこと明らかなり。而かも之

に反して、怡顔微笑を以て夫の歸るを迎へ、縱令山海の珍味ならざるも手料理の食物を膳部に供し、夏の夕なれば軒頭に小さき提燈を吊し、冬の夜なれば暖爐の火を熾にする外、留守中に書齋を掃除し亂れたる書冊紙類を美術的に排列し置けば、夫は心の中に必ず我が妻の用意周到なることを感謝すべし。既に此感謝を有す、妻の諫言提案は立ろに快諾せられ、雜作なく操縱の實を擧ぐることを得べし。フキリップ、ヘンリー曰く、『天下の父母は如何にして其娘の爲に、善き夫を求めんかと焦慮するも、余は寧ろ我が娘を如何にして良妻たらしめんとするかに苦心するなり』と。仁者に敵なきが如く、良妻の前には惡しき夫も善き夫となるべし。



△カーライル夫人

英國の文豪カーライルは、紳士として君子人として洵に尊敬すべき詞宗なるが、其夫人ジエーンも亦欽すべき婦人の模範なりき。彼女は博士ウエルシュの娘にして、千八百二十六年カーライルに嫁し、千八百六十五年夫に先つて永眠するや、カーライルは自ら其碑に銘して曰はく、『此婦人は四十年間其夫の眞實親愛なる内助者なり』と。此くの如き賢明なる夫人は、能く夫

を助けて快樂と慰安と奬勵を與へ、又家庭の經營者として大に貢獻したり。曾て倫敦の一新聞紙に、英國の紳士は一年三百磅にて生活し得るやの問題出でたるが、カーライル家は夫人の手腕に依り、一年三百磅の金を支出せずして經濟を保ちたりき。而かも同家の客室は常に優雅にして、器具も亦美麗に、最も善く客を待遇するのみならず、夫人の衣服も華奢こそ盡さゝれ、流行に後れざる清楚の風姿を整へ、且つカーライルは其愛馬を有し、夫婦相携さへて旅行したること少なからざりき。又カーライルが其一生の大半を貧苦の中に送り、常に逆境に立ちたるを慰さめたるは夫人にして、彼が意氣軒昂、筆鋒鋭利、俗人腐儒と戰つて其本領を發揮し、『グランド、クロース、オフ、パス』の榮譽ある稱號を授けらるゝや、『そは余に取りて帽子の如きのみ、鈴の如きのみ』と斥けたる崇高の人格は、確かに夫人内助の功與つて力ありと謂はざるべからず。されば如何に獨身主義を鼓吹し、婦人を汚物視する禪門の仙僧と雖も、カーライル夫人の如き人物に會へば、必ず其主義を挫へて、結婚宗の信者となること疑ひなからむ。

我等は世界の夫人に望む、宜しくカーライル夫人の如く、其配偶者を操縱すべしと。妻の夫に對する心情行爲、一度此境に入れば、最早操縱とも服從とも名稱を下さずして、自然に夫を支配することを得べし。

△妻は夫よりも強し

夫は妻の主長なりとは西洋の諺なるが、妻は時に夫よりも強きことあり。舒明天皇の時、上毛野形名が蝦夷の爲に圍まれ、逃奔せんと欲して、其妻の爲に阻止せられ、妻自ら劍を佩びて匪賊を敗りたることは、國史に明記する所ろなり。斯る場合に於て妻が夫より強きも決して非難すべからずして、寧ろ其勇氣を賞せざるべからず。

戰場に於て若くは公衆の間に於て、前記の如く妻が夫より強き例は、極めて少なきも、足一度家庭の閾を越ゆれば、幾多の例證を發見すること難からず。下層社

會に於て、山の神と唱へ、嬶大明神と稱するもの、豈に道理の消息を傳ふるにあらずや。而かも斯る習俗は、紳士淑女の共に伍すべからずとして、上流社會の家庭を窺ふも、夫人の勢力は遙に夫の勢力を凌ぐを觀る。勿論粗暴なる言語を使ひ、荒々しき行爲は、修養ある女子の禁物として爲さゞれども、其優雅なる論調、柔婉なる擧措は、知らず知らずの間に、夫を感化するにあらずや。而して斯る感化は、家庭の財寶として之を重んせざるべからず。

家庭に於て我等は夫の感化より、寧ろ妻の感化の強きことを欲す、何となれば家庭を一國として、妻は其總理大臣なればなり。國家の政治は總理大臣が左右するが如く、家庭の政治も亦妻によりて處理せられざるべからず。此意味に於てする妻の權力、操縱は、敢へて男子の憂ふる所にあらざるなり。



△善き操縱と賢き服從

善き操縱者は賢明なる服從者なり、願くは操縱よ、專横とを混同するなかれ、又盲從と服從とを一器に盛るなかれ、我等は夫が妻よりも柔弱暗愚なる時に限り、妻が其夫を操縱することを承認す、然れども如何なる場合も、妻の專横を許す能はざる也。夫が一家の財政を料理する能力なきに乘じ、自己の欲する物品を購求し、演劇其他の快樂に耽ては、是れ操縱にあらずして、專横なり不貞なり、

泰西の某詩人、善良の妻を歌ひたる句に曰はく、

　妻の輝きたる光は、
　明日も今日の如く愉快ならしむ。
　妻は夫を支配するも、
　決して誇る色を示さず。

一代の賢婦淑女と謂はるゝ人の經歷性行を觀察するに、何れも善き操縱者及び賢き服從者の資格を備へざるはなし。彼等は能く夫を操縱して正道を蹈み、善事を成さしめ、又能く夫に服從して、己の貞操を全ふし、義務を盡くすなり。故に操縱と服從とは二途ながる如くにして、實際は一途なり。神に仕ふる心を以て、夫に仕ふる妻は、其形式が操縱となり若くは服從となりて現はるゝも、義とせらるべし。露西亞の諺に曰はく「航海する時は一度祈禱せよ、戰場に行く時は二度祈禱せよ、結婚する時は三度祈禱せよ」と。以て妻の夫に對する精神の、如何に大切なるかを知るに足らむ。

二十一歳の既婚夫人喟然として嘆じて曰はく、「妾等は善良なる夫の爲に支配せられんことを熱望す、然れども斯る夫を得るの難きを如何せん」と。是れ米國の一雜誌に掲げられたる所なるが、此嘆を抱くもの、唯り黄髮綠眼の佳人に止まらざるべし。故に我等は現代女子の爲に操縱の福音を說くもの也、世上の不幸なる結婚を嘆く夫人、我夫の無氣力鈍才を憤慨する細君は此福音によりて、年來の不平を排開し、一道の光明を仰がざるべからず。曰はく「男子を操縱す」。此語短かしと雖も、不平滿々たる令夫人閣下の熱を解く一服の清涼劑たらんか。

◎婦人は優美溫雅の心のみを以て足れりとせず、堅忍不拔、健強勇壯の心をも備へ、良人の逆境に陷りたる時、先づ第一に其志を勵まさゞるべからず。

◎妻は良人の利害に關するを見ば、先驅して戰ふの決心なかるべからず。

◎婦人の大禁物は、厭倦なり。

◎家庭は史上に特筆せらるべき忠孝の場所にあらず、寧ろ世の耳目に觸れざるを常とすれども、其實社會の舞臺に赫々として顯はれ出る德行の根源なり、宛も谷間の泉源の如く、樹木の蔭に隱るゝと雖、名流大川之より出で、洋々として流れて大洋に歸するがごとし。



妾の半生

宗教に倚依せし老婦人の實話

人の一生は長いやうで短く、私が今日、福音女の聖職を汚して、神の福音をお傳へするやうになりました動機を御話し申せば、随分長いことですか、今日まで五十六年の歳月と云ふ者は、終の十餘年を除けば、誠に難義苦勞の生涯で、安穩無事の日とては一日もありませんでした、此の世の中の苦勞艱難は、悉く甞め盡し、意地惡るい運命の手に、虐げられ、難儀苦勞の餘り、死なうとおもつた一刹那、神樣の光に打たれまして、蘇生致したのでムいます、是れがそも〳〵基督に歸依した動機です、云ふまでもなく、神に歸依して道を求むると云ふには、何れ何か身にあまる煩悶か苦痛があつて、自分一人の力では、自分を拯ふことが出來なくて、夫れで神の御手に縋るのですが、其の神の御手に縋りまする動機には千差萬別、失戀の結果救を求むる者もありませうし、又た浮世の苦痛より免れやうとする者もありませうし、其の他情慾とか、虛榮心とか、不平とか薄志弱行とか種々樣々でせうが、私のは失戀からでもなければ、又た浮世を恐れると云ふ原因からでもありません、つまり打ち續く不幸災難に全く喪神がしてしまつて、死の手によりて、一日も早く此の世の苦痛から救はれやうと願つて居ました時、圖らず神の御光に救はれたのですが、くはしいことは中中申し悉されませぬ。

▲棘で編んだ輿

私の家は幕臣で、旗本八萬騎の中でも、マア可なりの方で御座いました、今は何とか云ふ華族さんが住んで居ますが、御存じでも入らつしやいませう、神田の仲猿樂町の東側に大きい長屋門があります、私は彼處で産れたもので御座います、で家は格別に裕福と云ふ

譯でもありませんでしたが、何といつても當時の旗本、乳母日傘で何に不足なく生立ちました、殊に弟が一人ありました許りの獨り娘で御座いましたから、兩親からは掌中の玉と慈しまれて、誠に幸福の身の上で御座いました、マア斯樣の次第で、物心つくまでと云ふ者は、誠に結構づくめの境遇で厶いまして人樣から羨まれたもので御座います、併し有爲轉變は人生の常此の幸福も誠に儚き一睡の夢でございます、閑話休題、斯樣に百花咲き匂ふ樂園にも譬ふべき、極めて幸福の私の身の上に、落ち來ました第一の打擊は、私が十二の歳に母が不圖した病氣から、還らざる客となつたことで、云はゝ恐ろしき雷雨の前兆で御座いました、で父は母に亡くなられて、非常に落膽しました、後妻を迎へませんから、子供ながら家事萬端私が取り扱ひまして、弟には嫁を取つて遣り、私は同格の矢張り旗本の家ですが、財産はズット豐かな家へ懇望されて嫁くことになりました、是れがそも〱私の多難の生活の始めで、此の時私の乘りました輿は、玉の輿でなくて、云はゝ棘を編んだ、刺だらけの輿であつたことは、後から分りました。

▲波瀾の序幕

荊を編んだ輿と云ふのは、何も其の結婚を誤まつたわけでもなく、又肝腎の良人が花柳の酒に腸を腐らして、家を外なる遊びに耽るとか云ふ意味ではなくて、只嫁と姑、小姑との調和難で御座います、併し舅は誠に出來の能い人でしたが、姑が隨分事い苦い人で、夫れに小姑が三人あるのですから堪りません、マア私は六人の主人を持つたやうなもので、一つの身體は六つに使ひ分けるのですから、並み大抵の苦心ではありませんでした、亡くなつた人を斯う申しまするのは、本意ではありませんが、其の姑と云ふ人か、強情で癇癪持ちで、口の達者な、謂はゞ鷺を烏とでも云ひくるめる、其の辯舌で滔々とまくし掛けらるゝ時は、如何な男子でも辟易したものですから私の前にも三人とか嫁に來た人があつたが、一同長いので半年、其他は二月

か三月で逃げ歸つたさうで、下女なども物の一月と居るのはありませんでした、夫れは私も武士氣質の、嚴格の家庭で、女大學一流の教育で、鍛い上げられましたものでしたから、嫁た先きを墳墓の地と堅く、決心はして居ましたものゝ、偖て實際其の場に當つて見ますと、俗に云ふ裸體で蕀を脊負ふと云ふやうな、辛いことが隨分ありました、で時には、辛抱しきれないで、亡くなつた母を思ひ出して、屛風の蔭で泣いて居る所を、見つけられては、又た叱られて、泣き〳〵したことなども尠くはありませんでした、併し其う彼うして居る中に、世の中が大變に變つて來て、私も子供のやうに、死んだ母を思ひだしたりなんかして、泣いてばかり居るやうな譯には參りませんでした、夫れは何故かと云ふに、聞もなく彼の御一新の大騷動が持ち上つたからであります、私の生涯に大波瀾の起つて來たのは、是れからで御座います。



▲平家の落人以上

人の一生には、泣き面に蜂と云ふべき時期が、屹度一度はあるものだと申しまするが、私の經て來た境遇と云ふものは、それどころではなくて、宛で千仭の谷底に蹴落されて、上から石を投げられるのですから、

堪りません。御承知の通り、維新の際に於ける、旗本の家族の悲惨加減たらありません、江戸市中は宛で鼎の沸くやうで、男と云ふ男は、悉皆脱走やら彰義隊やらに加つて、行き方知れずですから、女ばかりでどうすることも出來ません、夫れで私の家では舅も良人も、又た故里の方では、父も弟も、脱走仲間に這入りて、江戸には居りませず、加之に天朝の軍勢が、潮の如く乗り込んで來て、市中を横行し、江戸中を焼き拂ふと云ふ風評ですから、何時殺されることかと、氣が氣ではありませんでした、其の中に上野の彰義隊は、負けて奥羽の方へ落ちまして、江戸市中だけは、平穏になりましたが、舅や良人や、又た父や弟の消息が薩張り分りません、軈て間もなく舅と弟は、討死をしたと云ふ事が、やうやく知れましたが、父と良人の行衛は到頭知れませんでした、然う云ふ次第で、私の實家の方は全く斷絶致したやうな譯で御座います、が、偖て私の居りまする北村家は、ズット前に三人の小姑は一同他へ嫁ぎまして、私と姑とたゞ二人で留守居はして居りましたものゝ、舅や良人が右の有様ですから、もう何が何やら、夢に夢見る心地で、生きて居るやうな氣は致しませんでしたが、悪い時には何處までも悪い者で、其中に私が產をする、家は丸焼けになる、賊軍に與したと云ふ譯で、家祿は取り上げられる、最う居る所も、食ふ物もなくなり、全く絶體絶命になりまして、暫時途方に暮れて居ましたが、やうやく氣を取り直して、田舎の縁りの人の所へ、落ちつくことにしましたが、此の時の惨めさと云つたら、全く平家の落人以上で御座いました。

▲重圍に陥いる

產れた許りの乳呑兒と、身體の自由の碌々利かぬ姑を、脊と腹に抱いて、田舎へ落ち着きは落ち着いたが、固より貯へとてある譯では御座いませんから、然う何時までも坐食をして居る譯には行きません、最も此時三人扶持と云ふ者は、上から頂戴して居ましたが、五千石の生活をして居たものが、三人扶持位貰つたとて

何うすることも出來ません、殊に姑は永い間の贅澤が身に染みて居るから、斯う云ふ窮境に陥つても、其習慣がなか〳〵拔けません、夫ればかりでなく、持て生れた癇癪は、足腰の利かぬやうになるに伴れだん〳〵強くなつて、手も足もつけられぬではありませんか、夫れも財産でも澤山あつての上ならば、贅澤も癇癪もまだ好う御座いますが、一日は一日より貧窮に迫り行くのだから堪りません、其んな這んなで、如何程私は氣を揉みましたらう、平常私は日蓮上人の『憂きことの猶ほ此の上に積れかし限りある身の力試めさん』と云ふ歌を、こゝろに守つては吾れと吾が身を勵ましては居ましたが、此の時分にはよくよく氣落ちがしてしまひ、つくづく此の世が厭やになりまして、死なうと思つたことも幾度あつたか知れません、併しまた我が子の愛に引かされては、氣を取り直し、暮らしの道を立てる事と致しました、



で晝間は村の子供を集めて手習を敎へたり、夜は晩くまで賃仕事をしたり、又た百姓の仕事の忙しい時は、田植の手傳へまで致しまして、兎に角、女の細腕で三年の間、一家三人の糊口を過しました、こうして居る中に、圖らず光明を發見しました、夫れは何かと云ふに、死んだのやら、生きて居るのやら、皆暮れ行

衛の知れなかつた、良人の居所がある偶然の機會から、知れたのです、知れたばかりでなく、剩へ良人は明治政府へ召出されだん／＼出世をしたのでございます。

▲運命の廻轉

長の月日、暗黒より暗黒へと走りて行つた、私の運命は、良人の出世に依りまして、正しく一廻轉致しました、つまり雲霧が排けて月日を見るやうな次第です、兎に角苦勞の仕甲斐があつたのです、マア斯う云ふ次第で、私も田舍の瘠世帶を疊んで、再び東京へ戻ることになりまして、爰に少しは人生の小康に浴することが出來たのです、其中に良人はます／＼出世して、暮らし向きもだん／＼樂になりました、猶其上にも朝夕行衛を心配して居た父の存在が知れたのです、これは實に奇遇ともいふべきもので今では神樣の御引合せであると考へて居ますが、夫れは誠に小説よりも奇な事です。夫れは丁度明治九年の冬で、雪がチラ／＼降る寒い晩で御座いました、牛込の知己へ參つて、餘り晩くなりましたから、其家で雇つて貰つた俥に乘りて歸宅たのですが、驚きましたのは私の乘つてゐた車を引く老年の車夫が、私が夢にも忘るゝ事の出來なかつた、實の父ではありませんか、此時の私の歡びと驚きは、改めて申しあげずともです、夫れから親子十何年振りで、嬉しい對面を爲し、父が彰義隊以來、惡き運命の手に沈みまして、到頭車夫とまで零落した、一伍一什の物語りを聞いて、しみじみ泣かされましたが、これは宛で夢のやうで御座いました。

▲幸福は夢

天運循環とでも云ひますか、死んだと思つて居た良人は生きて居て、其上ます／＼出世をする、此の世では到底逢ふことは出來ぬと思つて居た、父はまだ達者で居て、十何年振りで親子が對面すると云ふのですから、宛で小説のやうで御座います、浮沈は人生の常とは云ひながら、餘りの變りやうではありませんか、夫れは兎に角斯樣の次第で、私は一陽來復して、再び

人生の春に逢ひましたやうの心持が致し、是れまで十二分に苦勞したのであるから、是れからは、必ず花が咲くことだらうと、將來の幸運を夢みて、胸を躍らせて居ましたが、併し夫れは誠に儚き夢で御座ました、よく／＼私は禍の神に魅入られたものと見えます。

昔の人の云はれた通り、禍福は糾へる繩の如しとやら私が夢みて居た、希望の光明は、端しなく、十年の騷ぎで消えてしまひました、夫れは何故かと云ふに、其時陸軍中佐で、熊本に籠城して居た良人が、亂軍の



間に討死を遂げたのです、夫ればかりならばまだ好う御座いますが、引き續いて一人ぎりの伜は、戰爭後流行した、虎列拉の爲めに落命する、間もなく父も老ひの衰弱で彼の世の人となつたのです、月と日が一所に這入つたとでも云ひますか、散々苦勞してやれ善かつたと思ふ間もなく、此の始末です、丁度路傍の草が、踏まれ蹴られ、やうやく芽を出してだん／＼成長しかけた所を、馬に喰われたやうなもので御座います、是れが何うして落膽せずに居られませう、それからと云ふ者は、すつかり氣拔けがして仕舞つ

て、何を見ても少しも目には這入らぬでせう、何だか斯う底の知れぬ暗い穴の中へ、だん〳〵に落ちて行くやうな氣持ちが致しまして、生きて居るとは名ばかりで、只だ呆然して居ると、死んだ良人や父や伜が、交る〳〵迎ひに來るではありませんか、で只だ一日も早く死の手に引き取られたいと、心から願つて居ました時にです丁度、或る知るべの外國人から與へられたのが、一册の聖書で御座いました、是れが抑も宗敎に一身を捧げる動機となりました。

私は爰で今更ら聖書の講釋や、難有味を説明しませんが、兎に角聖書から、黑白も分かぬ、眞の闇裡の中に、一點希望の光明を發見したのです、一寸した文句が、妙に胸に響く具合は、斯う見渡す限り涯のない大海原へ乘り出した船が途中で暴風雨に遭ひ、西へ行つて好いやら、東へ行つて好いやら分らぬ時に、遙に燈明臺の微けき一點の火の光を發見したやうなもので御座います、で氣をつけて讀んで居ると、其光がます〳〵大きくなるのです、夫れから其の道の先達の人に從て、ます〳〵深く研究して居る中に、靈魂の不滅と云ふことも分り、天父の廣大なる愛と云ふものも知ることが出來、今日までの自分が如何に弱き者であつたかと云ふことも分りました、到頭熱心なる基督敎の信者となりました。

私が信者になりましてから、最早今年で廿何年になりますが、變り易き浮世の榮辱には心を惑はされずに、常に變らぬ神の祝福の、自分の頭の上にあることを信じて居りますから、心は何時も春風に浴して居るやうで御座います、夫れにつけても思ひまするのは、人の子は極めて弱い者であつて自分一人の力では、到底此の浮世の波風を凌ぎ退けることは、出來ないと云ふことで御座います、人は神の力に倚りて、始めて罪惡に勝ち、情慾に勝ち、また惡魔の火の矢を消し、誘惑の罠を脱がるゝ事が出來ると思ひます。（胡劍雅記）



愛の生活

小式部

夫婦の間の愛情は、家庭を平和にし、生活を幸福にし、兼て運命を樂ましめ、加ふるに困難と闘はしむるといふ樣な、絶大の力を有つて居ります。若し夫れ夫婦にして愛情の力に缺くる所あらんか、希臘の俗謠に謂へる、鶯の來鳴かぬ花園は如何に淋しきかな、愛情の動かざる人生は如何に哀れなるかな、の嘆聲を發するに至るは必定です。思へば實に愛は人生の寶です、然り愛は眞に夫婦生活の寶で御座ます。願はくは夫となり妻と成つて生涯忠實の伴侶たることを誓つた以上は、獻身の愛を捧げ、滿腔の愛を傾けて、互に相依り相助け、其の結合を全うせねばなりませぬ、言ふまでもなく妻たる者と夫たる者とが、愛情濃やかに確乎と亦繩を結ぶは、是れ實に地上に於ける最大の幸福で、此世に是程芽出度いことは御座ませんもの、誰しも斯くあらんことを冀はぬはありますまい。されば是より西洋で名の聞えた人の愛の生活を少しく紹介すると致しませう。

英國有名の彫刻家ジョン、フランクスマンと、其妻アン、フランクスマンとは、好い似合ひの夫婦でありました。アンは其夫が未だ一寒書生で在つた時分に、早くも其才德を慕つて、滿腔の愛を注ぎましたが、到頭偕老同穴の約束が二人の間に成立つて、アン二十二歳ジョン二十七歳の時、芽出たく婚儀を取結びました。花嫁のアンは生來文學美術を嗜み、佛蘭西語伊太利語をも巧みに操り、又希臘語の素養も可なり御座ましたが、また克く良人が畢生の事業たる彫刻の技術をも習ひ覺えて、傍より良人を助け、ジョンをして滿身の精力を鑿に打ち込ましめようと、或は良人の爲めに下畫を描き、或は良人に代りて書信を認め、殊に處世向の事は一切自己が腕一ッに引受けて、少しも良人に内顧の心配を掛けさせまいと勉め、百方慰め勵して只管ら

良人の出世を祈つて居りました。左ればフランクスマンが結婚後の勇氣は、獨身時代よりも幾層倍か加はつて一心不亂に自個の事業に熱中して居りました、所が或日のこと、有名なる肖像畫家のジヨシユア、レナルヅより「君も結婚したさうだが、美術家としては最う駄目だよ」と言はれたので、フランクスマンは之が氣にかゝり、心も進まずして家に歸り、愛妻アンに此事を話したのですが、妻の何時に變らぬ機嫌好き顔を見るや、早くも元氣を回復して「假令レナルヅ如き老耄畫家が何と言はうとも、俺は必ず成功して見せる」と呟いて、妻の手を緊乎と握り「アン、俺は疾うから伊太利に往き、歷代の名作に就いて研究して來たいと思ふて居たが、今日も今日とてレナルヅの惡口を聞くにつけ、胸がむづ／＼して最う我慢が出來ぬ、一日も早く彼等に鼻を明かせてやりたいもんだ、俺は遠からぬ内に羅馬へ行かうと決心しました、アン、お前も一緒に行つて結婚は事業を助けこそすれ、決して妨げるものでない事を彼等に見せつけて與れ」と申しました。夫人は之を聞いて喜の涙を浮かべ、贊成の意を表しました、其後程なくフランクスマン夫婦は、伊太利をさして旅立ちましたが、其滯在中の研究にも、夫人は内助の力を傾けて、良人を勵まし、善き天の使とは、ほんに斯う云ふ婦人を謂ふのだらうと、知る人々の噂に上つたと云ふことです。されば後年フランクスマンが美術界に盛名を博する樣になりましたも、全く恁う云ふ妻君のあつた御蔭で御座ます。此の夫婦は偕に幸福の生活を營むこと四十有八年、夫人は七十路の坂を越えた年、あの世に旅立ち、夫フランクスマンも亦た數年の後、亡妻の跡を追つて亡き人の數に入つたと云ふことです。

探檢家兼傳道師として有名なるリヴイントンと其妻メーリーとの交情も亦た頗る目出度いものでありました。リヴイントンは亞非利加の傳道地に於て宣敎師モフアツトの長女なるメーリーを娶り、沙漠の上なる椰子の樹蔭にめでたく華燭の典を擧げました、其後夫妻諸共に傳道に從事し、至極睦まじう暮らして居りまし

た。夫リヴイントンは或時は單身にて、又た或時は妻子を携へて亞非利加内地の探檢を試みましたが、千八百五十二年の春、彼は妻子を英國に還へし、決死の覺悟で、亞非利加の奥深く進み入りました。かくて五年の星霜を沙漠の地に過し、久振にて本國に歸つて參りましたが、其時の夫人の喜悦は果して什麼で御座ましたらうか、夫人は當時の感想を詩に作つて歌ひました。



百たび千たび歡迎す、歸り來まさん時近し、遙けき萬里の異郷
より、汝の國に汝の家に。
久しく袂を別かてばとて、行かれし時より何時ちかも、夢なき夜
はなく、安き日とてはなきものを。
今日までの吾が悲みもて、汝を迎ふると思召すなよ、一たび御顏
に接すれば、悲みの雲はやがて消え、喜びなたゞ胸の中
唯だ愛のみを吾が心。
望むらくは、再び別かるゝことなきを。

然れどリヴイントンは其後復た官命を帶びて亞非利加へ出掛けることになりました。こたびは夫人も一緒に參つたのでしたが、折しも懷姙のととて途中より俄かに産氣を催し、間もなく又た病魔にさへ襲はれましたから、已むなく子供を携へて英國へ引返しました。されど心にかゝるは萬里異郷の地にある夫の身の上、朝に夕に夫

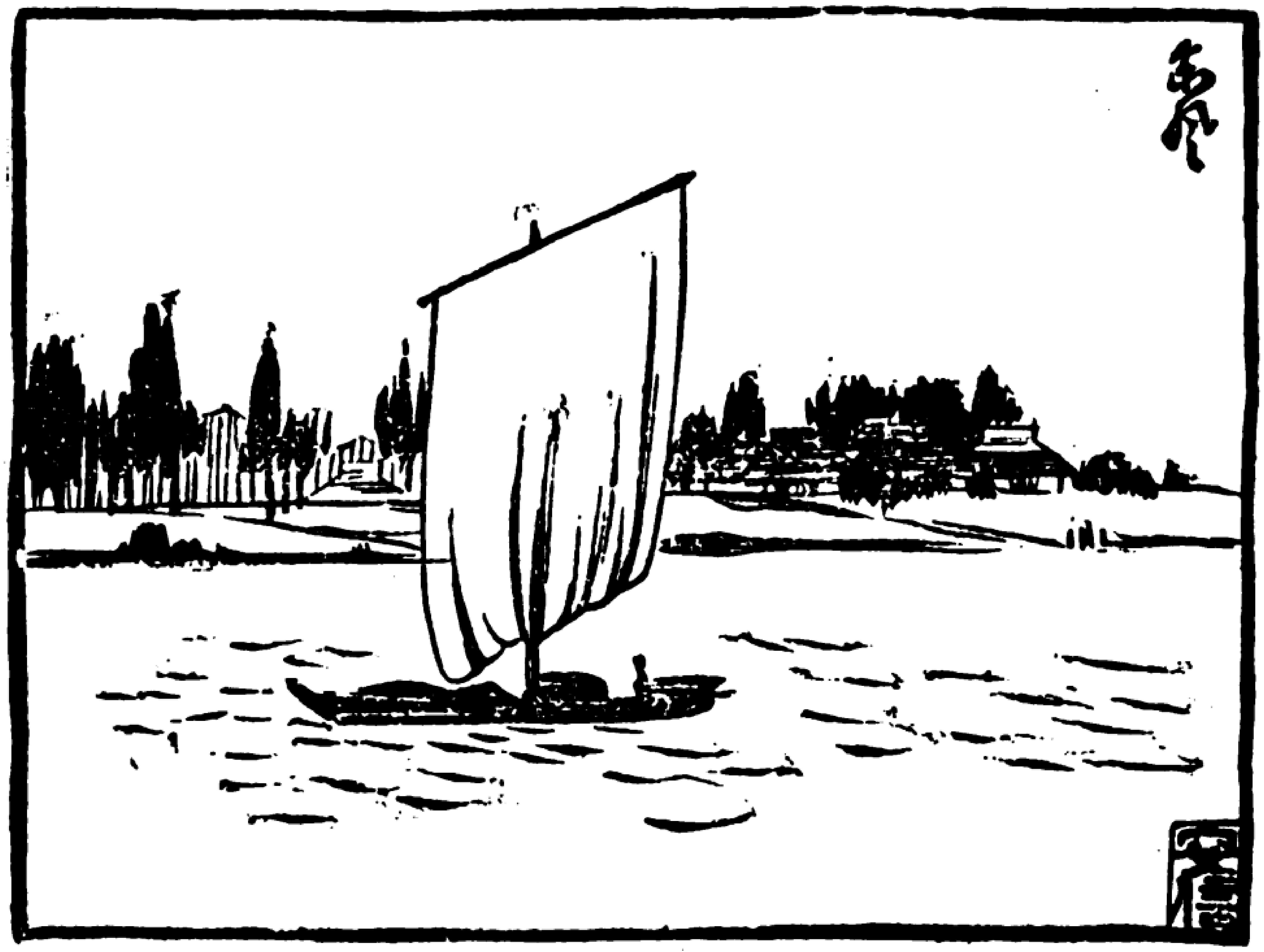
が沙漠の熱沙を蹈んで居ることを思へば、心の落着く隙とては御座ません、終に思ひあまりて病を押し亞非利加さして旅立ちましたが、サムベシー河畔に夫の無事の顔を見て、嬉し涙に咽びてより日柄も經たぬに、復しても病氣が甚くなつて、看護の効もなく、遂に良人が神に祈禱を捧げる聲を聞きつゝ、夫人の靈は安らかに此世を去りました。愛妻を先だてしリヴイントンの悲嘆は察するもあはれ。彼は其の日記の中に此樣書いたので御座ます。

「嗚呼是れ余にとりては何事よりも最も苦しき事變である、余は落膽して全く力が脱け唯だ幾滴の涙を其屍に濺ぐのみであつた、余は彼女を愛して結婚したが、共に送れる日數の重なるにつけ、余の彼を愛する心は愈々加はるのみであつた。嗚呼吾がメーリーよ、メーリーよ、余は御身とコロベングに住ひし以來、暫らくなりとも安けく靜かなる家庭を作らんと冀ひしことは、それ幾度であつたか。」而してリブイントンは、娘に送れる手紙に、「母が生前に汝に敎へたことは今も尙ほ天より悉く然かせよと敎ゆるぞ、母は眞實な婦人であつて、曲つた所は露程もなかつた、而も事に當りては精一杯に克く働いたものだ。」と書き、又亡き妻の母に與へた手紙には「彼女は良妻で又良母であつた、彼女を載せて來たゴルゴン號の船員は、揃つて彼女を尊敬した、彼等の彼女の爲には何事をなすも辭せなかつた。」と認めてありました。夫人の死後此言あるは、生前の交情濃かなるを證して餘りあるもの、蓋し此人にして此妻あり、誠に好配偶と謂ふべきで御座ます。

詩人ブラウニングの夫人は、初め其良人に嫁ぐに當りて、親戚や朋友はブラウニングの樣な詩人に身を寄せるは、頗ぶる危險なものだと氣遣つて、彼此言つたのでしたが、結婚後の樣子を見ると、豫想に反し夫婦の仲は至つて麗はしく、幸福の月日を送つたのでした。其事は夫人より其友に與へた手紙の一節に「最もよく吾が夫を知るものは妾に若かずと存候、妾は實に彼の心中に在つて其呼吸する音をさへ聽取るまでに有之候」と書いてあるを見ても能く分ります。夫人の如

きは眞によく自分の夫を解釋して、その性癖をも了解して居つたものと見えます、妻としては誰も斯くありたいもので御座ます。

又た詩聖トンネは或る富豪の令孃に戀して、終に孃の父母の承諾を得ないで結婚して了ひました。其故孃の父は大層腹を立てゝ、鐚一文だとて此の新夫婦には與らぬと言渡したのです。そこでトンネは直ちに一句を賦して岳父の許に送りました。所が其詩がひどく岳父の氣に入つて、到頭其が爲に我を折り、改めて此の夫婦に對して承諾を與へた許りでなく、多分の金をさ頒け贈つたので、貧乏に苦しんで居つた若夫婦も、其後は饒かに暮せる樣に成つて、幸福の生涯を送つたと云ふことです。



又たしても詩人の噂ですが彼の詩聖ハーバートは、その細君に初めて會つてから三日目には最う結婚して了つたのです。この夫婦も大層仲が好くて、夫は其の收入の十分の一を細君の小遣ひとして與へ細君は其を重に慈善的の費用に使ひました。ハーバート夫人が世界有數の慈善家として今日までも其名を歌はれて居るのは、夫婦の交情が濃やかであつたのが、一つの原因であつたに違ひありません。家

の中を麗しくする人は、外に向つても美しい德があるもので御座ます。

佛國の歴史家ニコラス、チエリーは、四十五歳の時眼病の爲めに明を失つて、不自由の身となりましたが、幸ひに賢妻シユリーの內助によつて、歴史の研究を繼續し、多くの傑作を遺すことが出來ました、此の人は其自著に題して申さく「吾が妻は自分にとつて兩眼なり、備忘錄なり、確實なる助手なり、彼女なかりせば吾が大著述は迚も出來ざりしなり、彼女は常に撓むことなく敏捷に立振舞ふて己を助けたり、良人の爲に忠實に秘書官の役目を勤めたるが上に、絶えず同情を表し奬勵を加へたり。」と、又言へるには「彼女の才は余の上には出でずとも、余と同等なり、唯だ甚だ謙遜の德に富めるが爲めに重要なる著述を計畫せざるのみ」と、其のよく夫の不幸に同情して、身を以て之に代りよく夫を支へ家を支へたことが解ります。

ジヨン、ローレンスは、又或日細君や娘や妹や其他の家族とで、應接間に集つた、其時彼は一心に讀書に耽つて居りましたが、何時の間にか細君が其の部屋に見えなくなつたので、傍に居る娘に「阿母さんは何處へ行かれたか」と訊きました。すると「阿母さんは御二階へ御いでゝす」と答へました。そこで彼は再び讀書し始めた、かくて眼を書物に曝らして、ものゝ二三分と經つか經たぬに、又しても同じことを娘に尋ねた。娘の答へは矢張以前の通りであります。仍て彼は再び讀み續けました。やがて須臾すると復た同じ問を發したので、餘りのことゝ側に居た妹は吹き出して「兄さん、ほんとにマア貴兄にも呆れますよ、義姉さんが五分と見えないと、勉强が出來ないのですか」と冷嘲したのです。すると彼は澄したもので「其やその筈だよそれだから乃公は彼女と結婚したのぢやないか」と答へたと云ふことです。

英吉利のゴルドン將軍は、天下の女一人として乃公の氣に入らぬ、己と百年の契を結ぶに足るものは迚も有りはせぬと言つて結婚しなかつた。所が其內に彼の理想に副つた一女子を發見して、之とめでたく合巹の

式を擧げました、この夫人は良人に從つて、印度内地を經廻り、具さに色々の困難とたゝかひ、あらゆる危險を冒したといふことです。

又た彼の法律家として將た煽動家として有名なるダニエル、ヲーコンネルは其妻君に對する戀の道に於ては宛で子供見たいな初々しい愛をさゝげて、四十三年の間少しも渝りませんかつた。外に出て居る時は如何程職業が多忙を極めても、又いか程國事に熱中して奔走する塲合であつても、必ず月に何度と日を定めて、細君の許に手紙を送るのを常と致しました、而して其手紙には何時でも「御身の老父の



戀文」と署して在つた相です。

ヲリヴアー、クロムウエルは、倫敦の豪商の令孃と結婚しました、夫人の性格に就ては憚らず思ふものが無いでもなかつたが、クロムウエルの夫人に對する愛情は始終渝りがなかつたのです。結婚後三十年を經て其の旅行先より夫人の許に手紙を送つたことがあります。其には「余はたとへ御身を酷愛せざるまでも、決して他し女の手にかゝる樣な間違ひは、萬々無之と確信致候、況して御身は余の爲めには、天地間一切の生きとし活けるものよりも、戀しく思はれ候ぞ、希はくば余のこの情を酌まれよ」と書

いてありました。

歌曲の作家として有名なるモザートは、其歌曲を和する通りに家庭をも好く調和して、その妻君との間に少しも調子の亂れた所や、聞き苦しいことがなかつた妻君が不幸にして癈人と成つてからは、病床の側に在て之を慰め、その靜かに寢入るを待て歌曲を作した。そして朝早く外出する時分には、眠りを覺まさぬよう忍び足で、細君の枕許へ行つて、眼の醒めた時讀むようにと、必ず一本の情の籠る手紙を遺して出掛けた。といふことです、其中の手紙に恁ういふのがあります。

「奥さん、御早う御在ます、私は御身が今朝も御ゆるりと御安眠あれかしと祈り上候、風を引かぬやう、餘り急いで床を飛起きぬやう、又は腰を曲げぬやう、脊を伸して物を取らぬやう、女中を御叱りなさらぬやう、呉々も御氣を御付け可被成候、又た次の部屋部屋へ御越しなされ候節は、閾に躓かぬやう、是又御用心相成度、私は早く歸宅致すべきに付、其迄は一切の家事を御心配なされぬやう重々祈望し進らせ候。」何と妻を思ふの親切、行屆いたものではありませんか。

婦人と齒

婦人は比較的男子よりも齒を破壞し若くは病み患ふ時機の多き者なり殊に懷妊以後は齒牙に送る營養分を減殺せられ爲めに齒痛を患ふる者甚だ多し、又嬰兒に乳を呑ませ居る間は前者と同じく齒牙の營養を欠き從つて齒を病む者少からず、是等が男子に比して婦人の齒の患者多き一原因なるべし、又義齒の塡充材料としてはセメントは酸化し易く亦ゴムは酸化に堪ふるも嚙み潰さるゝ患ひありて漸次剝け出し遂には琺瑯質を露出するに至り延いて齒痛を起すもの少からず、義齒の塡充材料としてはアンマル若しくは純金充塡適當なりとす又我邦にては小兒の齒を患ふる者極めて多く殆んど小兒として虫齒ならざるは無き程なり、是れ主として其母親たる者の不注意に基くものにして要するに齒の掃除の行屆かざるに因るものにて彼の味噌つ齒の如きも成長の後ち有害の原因たるものなれば決して放置すべきものにあらず。



學者の妻と常人の妻

紫陽花女

私の小供の時分、其の頃餘り御目が能く御見えなさらないんで、白鼈甲か何かの太い柄の嵌まつて居る大きな眼鏡をお掛けなさりながら、狆だの猫だの兎だの小鳥だの、色んな可愛らしい動物の押繪を拵へては下すつたり何かして、大變に私を可愛がつて下すつたお隣家の御隱居さんが、能つく這麽事を申されました。

　その御隱居さんの旦那といふのは、恐ろしい學者ださうで、其の時分、藩のお殿樣さへ先生〳〵つて下へも置かぬ程にして敬つて居らしたと云ふから、藩中の子弟は云ふに及ばず、近鄉近國、中には江戶表邊りからさへ遠く風を聞いては笈を負うて來て師事する門弟も甚だ少なくはなかつたと云ふ事である、何しろ當時中村敬字先生なんかと肩を並べて、維新の三大學者と迄稱せられた程の學者で居らつしやるから、其の奧樣になつた方の氣骨の折れた事は一と通りでない。

　朝は未明からぞろ〳〵門弟が多勢押し掛けて來る、其の中には來客もある、私用の爲めの外出もあらう時には藩主への出教授もせねばならぬ、漸く御歸宅になつてお夕飯でも召し食つて居られると、今度は入り代はつて又候塾生がぎつしり、と云ふ頗る五月蠅段取りであるから、怎うやらやつと一日其の日のお講義の終はるのは大槪夜の十二時だと云ふ、其れから直ぐに奧樣の御給事でもつて、少々熱燗な酒で聞こし召して後はさら〳〵とお茶漬けの三四杯、玉露の香氣の美いので流し込みながら、今度は御自分の御勉强、乾度少なくも二時間は一心不亂に遊ばすと云ふ、御自分こそ天才イヤ天性好なき道で何とも思つて居らつしやらぬだらうが、奧樣になつた女こそ飛んだ災難、却々以て並大抵の事では行り切れない、十六の秋緣に引かれて嫁いてから二十幾年、旦那樣が中風でお死去りなさる

迄と云ふものは、殆んど如何な晩だつて帶を解いて寐た事は無いと仰つしやる、其れも其の筈旦那樣の御夜食が濟んで御勉强が濟んで、御床を延べて差し上げて、兩手をちやんとつかへて、お休み遊ばしませと申し上げる時には、もう一番鳥が鳴いてると云ふ騷ぎですもの、田舍の曉は早いから其處此處もはや藁打つ槌の音も聞こえて居やうと云ふ譯、其れからとろりと現寐の手枕うつら〳〵と眠ずに明かす夜も多いと仰つしやるのは、如何にも御尤もな次第、其處へ以て來て、濟貧とやら、今時の博士樣や學者樣には、些とお合點の參り兼ぬる至極淡泊とした御氣性で入らつしやるので御好物は鯛の潮煮に牡丹餅、羊羹、一分一兩黃金色の山吹色のと見るも癪の種だと仰つしやるから、何時だつて〳〵御臺處向きはぴー〳〵がらんどと火の車、其の癖米櫃が空つぽになつたつて、食客の十八人や十五人、位は常時呉呂〳〵してますので、全く行り切れませんでしたよ、いへもう、私の一生は泣いて〳〵泣き續けでしたよと。

未だしも其れは彼麽偉い人を良人としたのですから身體の苦しいのや家の貧乏な位は我慢もなりますけれど、連れ添うて夫婦とは名ばかり、一年三百六十五日、終しか所夫らしい親切な優しい言葉を掛けて呉れるではなし、幾人小供が生れたつて、汚い〳〵つては見向きも致す事ではありません、其れに少し虫の居處でも惡いとなると、誰れの粗忽だつて悉皆私の處へ持つて來て、其れは〳〵怒鳴る叫喚く、鐵拳は飛ぶ、鐵瓶は踊るお湯呑が跳ねる、其の騷動つたら丸で無いんで御座いますよ、通し唯苦虫でも嚙み潰した樣な、妙に素つ氣無い不快顏付して、私が何かすると、へん女子と小人とは……直ぐ之れでせう、眞箇に口惜しいじやありませんか、だから實家でも私の事を大變に氣の毒がつて、思ひ切つて仕舞へ、諦めて仕舞へなんかつて申しても呉れた事がありましたけれど、僅々一人のお姑樣はすつかり御年を召して入らつしやる、旦那樣な旦那樣で學問一方で埒は無し、私がまあ構はず飛び出したら後が怎うならうと思へば、一旦嫁いた上からは見

までゐる中ぞ、甚麼事があつたつて、出様のなんと云ふ氣は出ません、未練がましい様ですけれど怎うやらじつと辛抱し貫いて、可愛い五人の小供にも繼母の憂き目辛い目も見せずに濟みましたよと。

御道理千萬、近頃聞けば、某博士夫人の如きは、愈々御良人の虐遇に堪兼て離婚をされたと云ふ事ですが、成程事實さもある可き筈、些とも御無理ぢやない、餘人は知らず私はお察し申し上げる。

云ふ迄も無いが、總じて學者と云ふものは存外沒曉漢な方が多くつて、自體が理性にばかり冷たう走つて居られるから、隨つて情には極めて淡いと云ふ、其の癖怒りつぽくて、圖々しくて、高慢で、利己主義で、尊大で、人を人とも思はず而かも一體に我執の念が强い者だと云ふから、成る程之れでは始末に終へない道理である、勿論世は十人十色人種々な裏表、蜀錦必ずしも隋玉を包むとにも定まつてる譯では無いから、泥中にも清い麗しい香氣を放つ白蓮はある、細君に胸倉捉まへられて直ぐに降參なさる御方さへ中にはあると聞くからには、奥様御歩行の時に手を迄引いてお上げ遊ばす優しい學者も居らつしやると云へば、浮世は朧の月影に朦朧透して、玉石混交、怎うでも同じ鑄形の中へ押し込め様と云ふのでもありませぬ。



全體人生の目的、人類の幸福とは何であるか、學問は何の爲めにするのであるか、何の爲めに博士の學士のと云はれる程のものか、美しい心の妻を人前で叱り飛ばして打つたり撲つたり足蹴にしたりして、上句の果てに追ん出して仕舞ふとはどうした事でせう。よしや目には一丁字なくとも、大學の椅子に寄つた事は無くとも、足る事を知れば富貴もさのみ願はず名聞もさのみ欲りせず、女房一人位の始末は怎うにかつけて、修身齊家の道を立派に講じて居る人もあるでは無いか。

成る程之れでは詩を作るより田を作れ、私共に云はすれば、徒らに萬卷の書を讀破して口先ばかり叩いて居るよりは、龍馬經を駄して佛の果とやらを得たと云ふが、幾ら氣が利いて居るか知れないと思ふのです。

物の哀れを知らぬ、鬼神をも取り挫がんず醜の荒くれ獵夫すらも、窮鳥懷中に入る時は之れを殺さずとさへ云ふでは無いか、春は初花未だうら若う、緋無垢白無垢揃へて重ねて、三々九度の杯さらりと四海浪平かに、松は高砂尾上の櫻　陽氣に謠ひ納めて仕舞へば厭でも夫婦、生かそと殺そとまゝよ、身體髮膚は之れを父母に受けたれども、鬢の亂れの一筋だにも我が物ならじ笠の雪、拂はゞ袖に散る露の身の弱き女を、弱き妻を、腹立ちの當て木にするとは隨分酷ではあるまいか、云はう樣無き御卑怯ではあるまいか。這麼人を洋行歸りだ、學者だ博者だ、偉い人だと無茶苦茶に唯有り難がつて、仰ぎ奉るから、思ひも寄らぬ間違ひが生じ易いのであります。

嘗つて自分の極く懇意にしてる文學者の一人で、頻りと奧樣の候補者を探して居られた時の事でした、當時は新進作家として文壇に地歩を占めて居られた事とて、十七八の美しいのから二十二三の嫁入り盛り、中には庇髮もあれば、高髷等もあると云ふ譯で何れ菖蒲と引きぞ病ふ程の景氣、先生大に其の撰定方に迷はれて、より〳〵は私の處へも見えられて怎うしやうか等と仰つしやる事もある、その時曰く貴君の樣な方には素人は迚も駄目だから一層藝者でも御貰ひなすつたらいゝでせうと、頗る露骨に申しました。

すると文學者先生氣の毒な位眞つ赤になつて悄然引き返されたが、其の後間も無く某紳商の令孃と結婚されたとの事、けれど怎うも、兎角に夫婦間の意思が疎通し無かつたか、別に之れといふ程の理由もなく、僅か一年ばかりで不幸にも自分をして先見の明に誇らしむるの場合に立ち至つた、或る人は一圖に之れを愛無き結婚の罪として居るけれど、之れも机上の空論としか受け取られませぬ。



近頃或る偉い先生が「勝利に伴ふ一種の悲哀」とかと云ふ事に就いて説かれた事がありました、成る程之れは我れ人共に首肯が出來やうかと思はれる、戀の愛のと隨分大騷ぎをする方もある樣ですが、愛や戀は結婚に對して左ほど有力なものではありませぬ、よし又有つて居るにした處で、戀愛に依つて成立した結婚に限つて終生圓滿な結果を得るとは云はれないのです。

事苟くも結婚の大問題である、今日日本の文壇で立派に一家を成して行かうとする文學者に向つて、女もあらうに自分は醜業婦を細君にと撰んだ――串談も事



にこそよれ何樣人を馬鹿にし切つてる樣にも思へる、が併し、自分は決して調戯つたのでも無ければ人を馬鹿にして云つたのでわありません、前にも云つた樣に學者には一種共通の——否少くも普通の女共には決して好かれぬ性の妙な氣風があるから、無暗に恐れ入つて居るばかりでも行かず、其れかと云つて威張り出したら猶更大變である、恐れ入らず威張らず淡泊として情には濃かに、はつきりとして優しう、此處の呼吸が却々會得める次第のものでは無い、其れで止むを得ずんば、比較的此の間の消息には通じて居る筈の黒人に甘んじたら、或は却つて意外の好果を得はせんかと思つたからであります。

其處へ行くと、平凡の人は平凡丈に、大した我が儘はせず優しう事へてさへ行けば、其れで大抵は太平無事にすんで行くと云つて婦人の方から見れば、甚だ僭越がましい樣ですけれど、餘り性根なしの役立たずにも大に恐縮する次第だから、柳の枝に櫻の花の匂ひ翻れて梅の香氣のする樣な具合には怎しても行かぬ譯です、天には不時の風雨あり人には旦暮の禍福あり、迚も浮世の配合と云ふならば毛寶龜に乘るも嬉しく普賢白象に乘り玉ふも尊く、痴漢駿馬に乘るも可笑し。

學校卒業後の婦人

津川千代子

一定の職業を得て、獨立自營せむと欲する婦人は別問題として、かりに高等女學校を卒業し婦人として適當なる敎育を了へたものに、「今後はどうなさる」と問へば其多くは「此から家に居て家事の手傳をいたします」と答へませう。親たる人は此娘をして二三ヶ年間家事の實習をなさしめ、主婦としての修養をさせるつもりでありませう。また「裁縫學校にまゐります」とも答へませう。此は高等女學校時代に於いて學問ばかりして、手藝が未だ餘りに拙ないといふので、其親が勸めて裁縫を學ばしめやうとするのでせう。中に、「私はどういたしますかわかりませぬ」といふ此答は何の思慮もなく、只運命の支配に任かせて、無我夢中に生涯を送らうとするのでせうか。多くの親たる人は「早く嫁けて仕舞ひませねば」と人に語て、更に其語の賤劣しきに氣付かずして得意げに話しつつあるものの如きは、最愛の我娘を犬猫見視してゐる有樣ではございませんか。

卒業後の婦人自らの修養が、ただ手の上にのみあるが如く思ひ、其の頭にある事を知らないのは、婦人が何時までも社會の劣等分子として待遇せられる、原因でせう。即ち婦人の修養すべき方面は裁縫、料理、編物の如きにのみ走り、精神を修養し、智識を擴めて、男子に後れないやうにとの自覺なきは眞に淺ましき限りです。

斯の傾向よりして、卒業後二三年を經過しますと、在學時代の學術上の智識も、道德上の敎訓も、全然忘却して、さて學問はしたが、今更何の役にもたたぬと云ふやうな有樣となるものがある實に嘆かはしい次第です。

然るに男子の社會は生活の困難や、目的を達する希望等其境遇に依る、苦心の結果は、常に其智識にも精神にも偉大なる進歩をゐたへます。學問研究、旅行、求職、其の他交友談笑の間、職業上の研究自ら修

養の道を得、日日に新しい智識を得て、進歩するは、正に社會の進歩でせう。

男子が進歩しつゝある要素の一つだも女子は有してゐませぬ。婦人嫁して一家の主婦となつたとき、交友の機會も少なく、見聞もせまく、職業上の研究もない。

かくの如き状態で、如何して男子の半面たる事が出來ませう。無限に進歩すべき國民の母たる事が出來ませうか。男子の半面をして其内助者たるからには、必ず其慰藉者として趣味性の人とならねばなりますまい。

私は、以下、婦人殊に女學校を卒業したる婦人のために、其修養すべき要項を申しませう。其の第一には讀書です。世には隨分亂雜に讀書する人もありますが、それは却つて無益な事です。一定の方針を以て、着實に讀むことに勉めなければなりませぬ。一定の方針とは、自己の品性を高尙ならしめるため、たとへば福澤氏新女大學の如き、宗教の經典や、大家の倫理談を好んで讀むと共に、一面には趣味性を養ふために、新刊の小說や、詩歌を嗜んで、其情味を掬する事を忘れてはなりませぬ。職業的、たとへば敎員にならうとか、看護婦にならうとか云ふ目的あるものは、其の目的に相應して讀む事は勿論のことです。

讀書の中にて最も要用なるものは、新聞です。而し三面記事や、不潔なる小說をのみ相手にしてゐては、やはり新聞を讀むの主意に反してゐるのです。政治、實業、經濟界の出來事について、時勢の推移を知る事に勉めなければなりませぬ。かくて其活ける全世界の狀態を達觀して、夫と共に話題の重なるものとしなければなりません。かくて其子も自然の感化によつて大なる人格を養成する事となりませう。

△第二は社交。社交を以つて自己修養の資とするの要用なるは、申すまでもなく其中で殊に交友よりして得べき實際の修養は、其人の人格までも變化せしめる程の勢力あるものですから返す返すも注意しなければなりません。就中男女交際に就いて有益なるだけそれだ

け危險もすくない事は、申すまでもなく。次に各種の婦人會や、演說講話會等にも出來るだけ出席する事であります。親族間の交際も社交上の修養として要用なる條件です。

△第三は旅行。日本の家庭の生活程度及び社會事情よりして、婦人の旅行と云ふ事は、甚だ困難なる事で、實際上多く行はれず殊に主婦となりては、愈々不可能の事となり其費用の尠からぬ事を相俟つて益々困難なる事となります。しかし自己の希望として、常に念頭におき、機會あらば實行して、未だ觀ざる地勢山水及び各地人文發達の狀態を知る事は、申すまでもなく肝要な事。

△第四は社會觀察。西洋の諺に「野にある樹の一つだに何れの樹にもなき特色を發見する程の觀察力なき人は遂に、文章家となる事は出來ぬ」とあり。支那の聖者は、「爾言を尊ぶ」と云ふ事を云はれました。觀察力を養ふ事、修養の資、實に世俗の間に溢れてゐる事を知らなければなりません。市街や公園や、散歩の序でに、仔細に注目して、人間の活動狀態を觀察すれば、實に私どもの敎訓とすべき事實、應接に暇ないほどでせう。

以上四ヶ條の外に料理や裁縫等の必要なるは申すまでもなく、只此等の技術に達したるの故を以つて、直に平和なる家庭を造る事が出來るなどとは以ての外の心得違び第一は其の夫と趣味嗜好を同じうし、智識の程度を同じうして、溫和なる同情に富む人となつてはじめて婦人の道を得たものと申すべきでせう。僅に一女學校を卒業して、學問の道を盡せるものの如く思ひ、自己の修養を怠るに至つては、如何なる幸運の人といへども、遂に家庭に秋風の吹き渡るに至る事は理の當然と信じます。

◎愼み深い人

甲「謙子さんは本當に謹み深い人ですね。

乙「オヤ彼の方は學校でも色々好くない評判があるではありませんか。

甲「さうですか、夫れでも彼の方は夜歩きするに每晩二人も三人も兄さんを伴れて、決して獨り歩きをしたことはないさうですよ。





花の東京

花時遊覧の栞

蝸象子

花の東京は即ち博覧會の東京なり。博覧會が既に上野に開かれしとすれば、花の東京は先づ上野に止めを刺すべし。されども玆に東京と云ふ、獨り上野の花にのみ憧がれて、他を忘るゝは遊覧の實にそぐはず、いてや筆の及ばん限り、花に賑ふ東京を紹介せん。

△上野の花▽

花の上野の位置とし云へば、下谷區にありて、谷中の墓地とは背中合せ、面積は十六萬九千餘坪と註せられ、今の博覧會各館の外、博物館、動物園、美術展覧會に運動會、花はなくとも、この公園は東京一との評判あり、況んや花も見頃にして、博覧會の開かるゝ今日此頃、人足自からこゝに集ふも道理ならずや。

此地舊忍が岡と云ひ、伊賀の國は上野に似たればかく名けたりとは、江戸砂子に記すところ、俊成卿の歌にいへらく、誰がために忍の山の下はらひ、煙りは絶えず見え渡るらん、起元は明かならざるも、寛永二年徳川家光此地に大伽藍を建立し、東叡山寛永寺と稱しつゝ、江戸城の鎮護となしてより、後二百餘年維新の變に遭ふて、金山の伽藍悉く烏有に歸し、其公園となりしは明治六年の三月なり。

山下の池を不忍と云ひて、辨財天女の祠古く、今其後方には観月橋虹の如くに懸れり。さらば今花見がてらの博覧會見物、電車を山下に見すてたらば、先づは其歩を左りにとりて、不忍池畔に出で給へ、其處には多くの賣店ありて、陳列品も尠からず、池畔の櫻の香

に醉ひつゝ、更に池を左へ繞れば、其處には巍然として機械館、外國館あり、觀了つて東照宮の石階を斜に上り、動物園の前に出づれば、若木ながらも花美くしく、紅の雲緑の松を包める風情、逍遥きに興を呼んで、博物館の前に出で、こゝに本館其他を觀るも、一日の興樂尙足らじとせん、歸りは竹の臺より、櫻が岡床几に淡き茶を啜りて、小袖幕の昔を偲び、秋色櫻の香に訪ひよりて左りを見れば、花の上なる大佛高く拜まれて、時の鐘に日や暮れん、西郷翁の銅像や、彰義隊の墓碑なんどは云はずもがな、淸水堂の朱欄を繞る落花の趣き、博覧會の諸建物と相待つて、こゝに雅俗の興こそあれ。

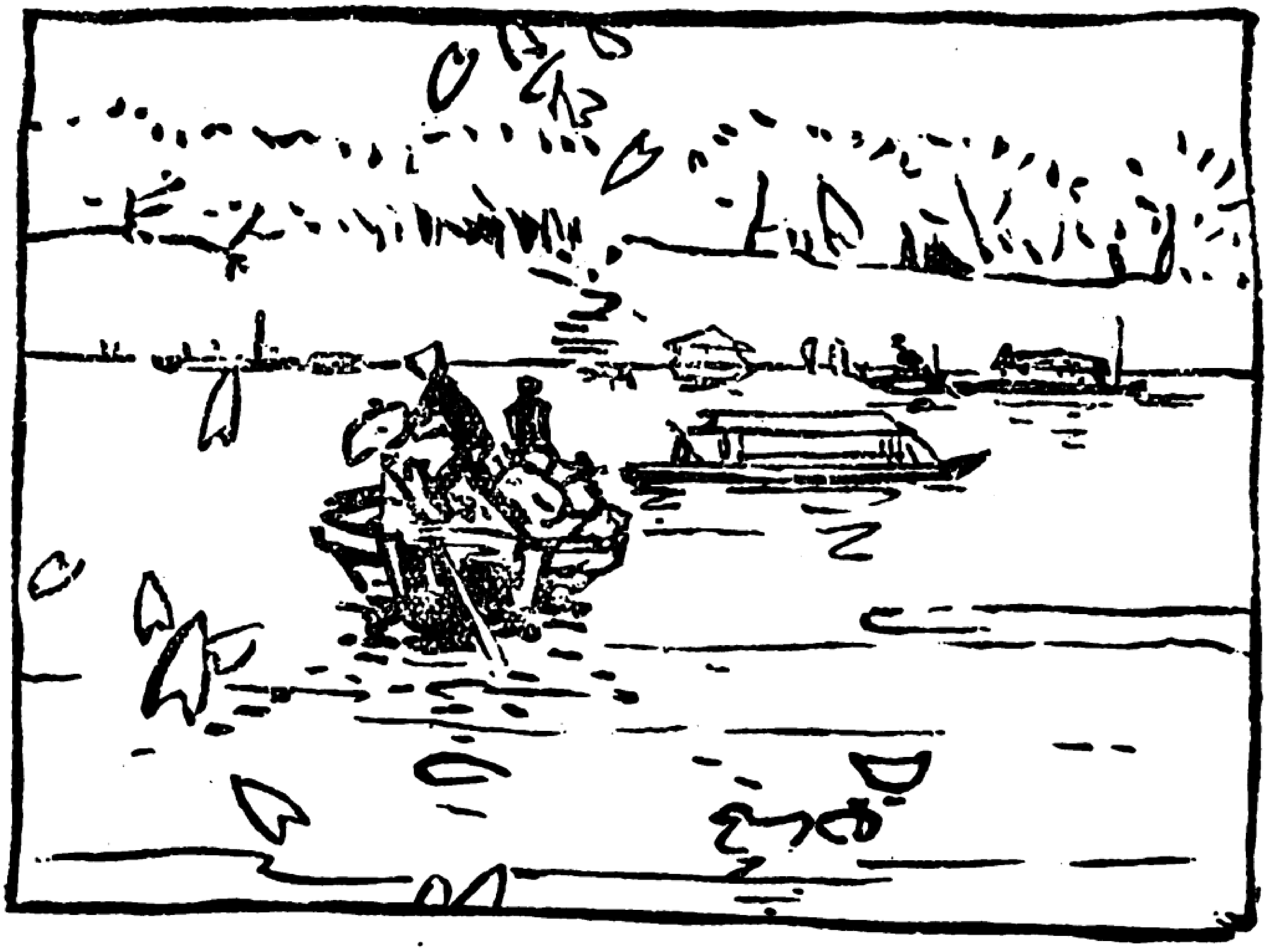
△墨堤十里▽

吾妻橋を渡りて、日本麥酒會社の札幌麥酒醸造場に沿ひ、八百松を左りに見て、堤へかゝるもよし、吾妻橋よりは千住通ひの滊船を利して言問に上るも好し、いづれは長堤十里の花、行けども盡きず、望めども花や雲なるそれの上に白帆のかゝるも興なからずや、三圍の祠に賽しては、其角が雨乞ひの句を偲び、白髯に詣でゝは梅若の昔を想へ。櫻は枕橋の袂より白髯のあたりまで古く、それより先きは若木なり。見渡せば聖天の森水に落ちて、梢を潜る鴉の群、一時にばッと飛立つあたりを、赤よ、白よ、靑よ、黄よ、端艇競漕の景物あり、上野に優る眺めあらずや、花に飽いての歸るさを、淺草公園の池の畔、數株の櫻に香をゆだねて仲店あたりの土産を買ふも、またこれ春の興樂なり。

△芝靈廟▽

芝の靈廟を押包んで、三縁山增上寺の境内十六萬八千五百餘坪、明治六年六月公園となりてより、山門より丸山かけて、四時の景勝他に類なく、詩人墨客の杖を曳くもの尠からず、山門前の電車停留場より、右に德川家の靈廟あり、右すれば東照宮に賽すべく此處より丘陵突如として起る、丸山即ちこれ、櫻はこれが中腹にありて、木は若けれど、花に活氣あり、風なきに

何の落花ぞ、ひら〳〵と舞ふ蝶の行衛や、いづくと見れば、一眸品川の海に落ちて、蝶に代るや白帆の影、煙動ぐと見るは滊車か、漣別けて行く滊船もこゝよりは進むと見えぬ長閑さよ、いざさらば今一つ登りてんか、櫻に映ゆる五重の塔、棧道危うく下駄蹴返して、やがて辨天の池の畔、こゝにも櫻は植ゑられたり。池の緋鯉に麩どもやりて、新たに出來し瀧など見るも面白からん。杉の林に沿ひながら、再び道を左にとれば紅葉館の前に出づべく、この邊路傍の櫻また惡からじ



上野へは行きたり、向島は遠し。花見ならば、こゝに優すものあるべからず。況んやこゝには婦人博覽會のあるぞや。

△靖國神社▽

舊競馬場の邊りより、境内に櫻多し、花冷やかに神の庭祀れる人は大和魂の、朝日に匂ふ俤偲し、祠をぐるりと一繞り、花に濃艶の眼を背けて、一度遊就館に入りて見給へ、國に殉せし勇士の遺物、櫻に擬ふ香はしき名の、いつまでこゝに咲く事か、劒の銹は譽れの血、飛んで館外數尺の地に、春を花とや化したらん、櫻の數こそ尠なけれ、

見る眼に飽かぬ心地ぞすなる。

△麴町公園▽

日枝神社に屬する丘、一萬二百餘坪と云ふ、老杉古松枝を交へて、神寂びたる境内の、石燈都合五十二級隨身門を衝と入れば、向ふに見ゆるが神殿なり、紫の幕張渡して、鈴の響きもいや寂びたり。櫻はこゝにも尠からねど摺鉢山のある邊り、西の端なる平たきところに若き老ひたるこきませて、來て見よがしの花の裝ひ、伏目に眄れば切通しの一路長く花に包まれ、上にも花よ、下にも花よ、これは〳〵の句もなるべし。山を溜池の方に下りて、花を別け行く切通しを、東に右へと繞り行けば、一路は高く花の隧道、支那公使館に續きたり。それよりはまた右に、溜池橋の畔まで、櫻は人を醉はしむべし、この邊り凡て皆賤しき者の見えざれば、上野、向島の喧騷とは、打て代へての閑寂を賞でもせん、されど路傍の櫻に憧がれ、一枝欲しとの心を出さば、花盜人のやさしくとも、罪はいづれか免れざらん。

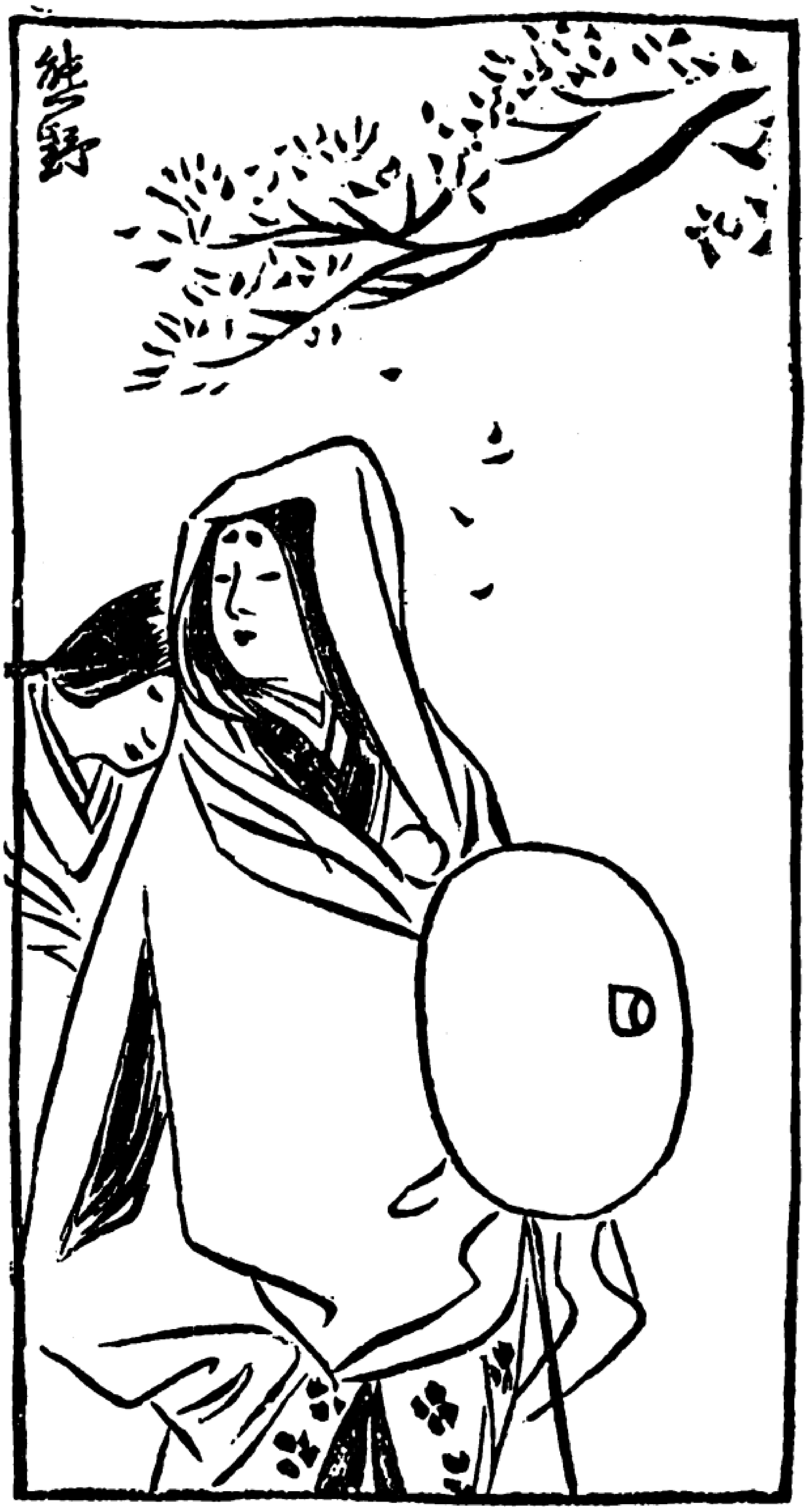
△清水谷の花▽

赤坂見附の櫻花も芽出度し。素袍着ても渡らま欲しき辨慶橋を超ゆる所、兩側に櫻あり、こゝのみは八重なれば、少し遲れて見るを可とす、八重の櫻は淋しと云はんも、一度に咲きて一度に散る一重に比して、更に可笑しき風情はあるべし。色紅に雨を帶びて、月に照りさう姿如何、西施浴後の嬌態あらん、道一條に辿り行けば、左りに仰ぐ石碑の影、大久保利通公が、こゝに落命の名殘とや、池を左りに櫻多く、一重もあり、八重もあり、庭狹けれど、清泉湧き、丘低けれど躑躅もあり、朝に清新の氣を吸ふて、夕に塵世の汚を吐く、こゝ靜閑の別天地、嘘と思はゞ來ても見給へ！

△日比谷の春△

公園の中の新らしきものこれなり。陸軍練兵場五萬四千八百餘坪、鐵柵くるりと折繞らして、周圍に六門を設け、池あり、山あり、運動場あり、樂堂あり、花

壇あり、公園中の新式と稱せらる、いかにせん其公園となりてよりまだ四年を過ぎざれば、植えたる樹木皆若く、園内何處やら廣漠として、綠濃かき松の梢、紅高き紅葉の枝それはこゝには無しとして雲形の池は鶴四時に水を噴き、心字の池は澤瀉の鶸に包まる、櫻は心字池の畔より運動場に沿ふての遊り、それより西へ雲形池の此方なる、躑躅が丘の其處此處に、やさしき色を漏らせるなり。園内廣く樹多ければ彼方此方の花を見歩行き、草臥足を松本の二階に憩めて、ラムネに咽喉を潤さんも、淑女に恥ぢぬお花見ならずや。



△植物園▽

電車よりは稍遠し。場末ながらも車はあり、小供連れての花見には、此處で教訓の一つとならんか、小石川は白山御殿町に植物園てふ名は高からん、天和年間幕府開設の藥園なりしを、今大學の植物園と改稱せられて、入園料に小銅を蕟發まば、こゝに靜閑の花を見るべし。園の面積は總四萬八千餘坪、園内の樹木には一々學名を附し、溫室あり、盆栽あり、眺めは飽かぬ結搆なり、

櫻は門内の坂よりかけて温室の邉りに多く、並木をなして植えられたるが、西へ下つて泉石奇趣ある庭に出づれば、緑の松に打混りて、花一汐の紅あり、葉のみとなれる梅の下、菫を踏みて枯れたる萩に袖をとられ冷たき道を東へ辿れば、竹の林の青きが上に、一枝零れし櫻の風情、これや蒼海の碧に喩へん、一日とては飽きもすべし、されども花に飽きけん眼を、他の植物に養はる、思はぬ發明あるべきなり、徒らに花より團子の轍を踏まで、一度はこゝに遊び觀賞智育二つながら修め結へとお勸め申す。

△飛鳥山▽

上野からは汽車、王子に下車して少しく戻れば、飛鳥山に出づ、瀧野川村の一部にして丘は王子より道灌山に連り、染井の田圃、西か原の楢林、遙かに筑波も望み得て、眺望の佳なるは更にも云はず、櫻は此處の名物なり、老木も尠なからねど、若木に花の威勢も見えて、樹下に毛氈を敷き、軟かき小草を踏みての鬼事も興なからずや、櫻のこゝに植えられしは享保年間の事にして、德川吉宗公の設計になれりとぞ。飛鳥山十二景は林信光の選むところ、近きに瀧野川、王子を控へ、こゝにも櫻尠からねば、花見寺より丘傳ひ、各所の花を尋ぬべし。

△御殿山▽

北に飛鳥の勝あれば、南に御殿山　花の雲丘の様も能く相似たり。こゝは今其半ば取拂はれて、昔の俤を見るに由なきも、若木の櫻幾百株、處狹しと云ふ勿れ、南は田圃遠く開けて、一條長き汽車の路、菜花十里の趣き深し。

△江戸川▽

水せゝらぎの江戸川縁、櫻は岸に植へられたり。水道橋よりは電車の便、大曲りよりは歩して觀るべし、櫻古しと云はざれど、水に映れる花の俤、小舟に輕く棹操らて、落花を浴ぶるも面白し、釣竿肩に櫻の影、

長閑き春は此處にもあらん。

△小金井▽

都に近き花の中の、遲きは此處の櫻なり。國分寺に汽車を降り、布目瓦を拾ひなどして、田圃の間を繞り行けば、やがては花の下に出つべし。一抱へにも餘りぬらん、大木淸き流れを挾みて、花の殿りを見よとの裝ひ、此處ならでは得こそ見られじ、茹卵子に芋の串刺、鯣に舌の鼓を打つも、肴乏しき里の習慣、こゝも櫻に飽きたらば、井の頭の辨天に奏すべし、國分寺より更に折れて府中に遊ぶも面白からん、花の頃しも臨時の汽車あり只其櫻を見んとなら、一日にして足れりとす、塵に塗れし都の花、それに飽きたる人々よ行きて此淸き櫻を訪へかし、首頷く花は迎ふる如く、水に一片落ちても見せん、落花意あれば流水情あり、櫻の精にうら訊ひなば、よく來ませしと答へ



もすべし。

△滿都維花▽

以上は只それ花の名所、優れて愛たきもの〻みなり四月の東京は滿街これ花、到るところに香をとゞめて行人の步行緩やかなりさては解語の花幾群か、日傘に顏を見られじとの要意賢こく、大路小路を練り行くさまこれまた愛てたきもの〻一つなり、老も若きも打連れて花を觀步行き、家に土產の櫻餅もいかでか花に背くと云はんや、鞍馬と云はず、遠き里より使の來て、巻き納めたる花の便りも、眼を病む人の慰みなり。空温かに蝶舞ふところ、花があらぬか一朶の雲、海よりかけて丘の上、畑のあなたの草の屋まで、近郊はやがて花の天地糸繰る姥老ひたりけり。三坪の庭にも鉢植の櫻は咲き、一木の花にも蝶は舞ふべし。春今こゝに酣なれば、醉はざる人も醉へるが如く、狂はぬ人も狂ふに似たり、花の見頃を大江戸の八百八街、鐘も霞みて聞ゆるならずや、何事ぞ世を憂きものと感せし人の、などや此花に背かんとはする、出でゝ見給へ、滿都維花！ゆめ春なるを忘れ給ひそ。

婦人博覽會

▲四月十日開場——芝公園にて

滿都の人、花に狂し、博覽會に狂するの時、こゝに又婦人博覽會なるもの開かれたり、これは婦人に關する內外百般の事物を蒐集して觀覽せしむる者にて大要は前項窪田氏の談話にある如き組織なれども、何樣日本には始めての事なれば未だ十分とは行くまじきも婦人界の進步に伴ふて家庭の趣味嗜好を高尙にし、婦人生活の方法を紹介するを目的としたるものにて、去年上野に開かれたる小供博覽會を觀られし人は粗々御存じなるべきが、敎育、衛生、服裝、料理、遊戲、音樂、技藝等のいろ〳〵の方面を陳列するのみならず一々これを實演して觀者に縱覽せしむる趣向なりといへば一層の妙趣味ある事ならんと信ず猶詳細の記は開會の上にて報道すべし開期は四月十日より六月卅日まで入場料一人十錢小供は半額。

見たり聞たり 博覽會

陽春四月こゝしばらくは花の山、人の山、櫻花爛漫、東臺の春色正に酣にして人花に醉ふの時、博覽會の景氣一しほに榮へぬ、滿城の春を此の一所に集めたらんごとき人の出さかり實に太平の瑞相とや言はん、いざや少しくこゝの盛景をものさんかな。

▲觀覽の順路

先づ上野にて電車に降りなば、直ちに第二會場に志し、其正門より臺灣館、瓦斯會社列品館を見て、外國製品館に入り、夫れより三菱出品館、機械館を經て、觀月門を出で觀月橋を渡り、忍坂より竹の臺に上り第一會場にては第一號館より第五號館を經て、第四號館に到り、夫れより模型日本橋を渡りて、直ちに觀覽車に乘り、了つて赤十字社出品館、美術館、第三號館、溫室、演藝場、材木館、不思議館、活動寫眞等を順覽し、再び模型日本橋を越へて、特別飲食店音樂堂を經、第三號館に入り更に動物館、蔬菜館を觀覽して北門を出で、帝室博物館前を左折して、其外圍に沿ひ、更らに右折して第三會場に體育館を覽なば爰に全部の觀覽を了るものにて、其外尙ほ見たくば博物館でも動物園でもパノラマ館でも、世界一週館でも隨意に見る事を得べし。

▲生花陳列所

美術館の前にあり日本風の古雅なる平家建にして、前面に玻璃窓を設け、白地に櫻花を染拔きたる幔幕を懸け廻らし、床は二段に築き上げ、別に二十五疊の休憩室を設け、一般觀覽者の便に供したり。

▲第三號館

之れは織物、染物、刺繡、被服類を以て充されたれば、婦人の觀覽に取つては唯一の場所なるべし、殊に出品人が陳列上の意匠を凝らしたるも此の館なるべし、されば博覽會の花と云ふべし、館の入口には東京織物組合の出品にわたる漢服、吳服の立像あり、華美にして、見物の目を喜ばすものなるべし。

▲罐詰試食館

第二會場なる外國館の裏にあり全國の罐詰類を陳列し、兼て觀覽者の好みに依りて試食せしむべしと。

▲入場券と入場門

入場券は第一號館の正面二ヶ所の賣下場にて發行し一葉三枚綴き、第一會場、第二會場、及體育館の三個所に通用し得べし、而して一般觀覽者の入るべき所は、第一會場の方では正門(第一號館前面)北門(博物館前)車坂門(屛風坂中程)脇門(第一號館右側)第二會場では正門(東照宮石段下)觀月門(不忍池の西にて觀月橋の畔)より入る事は自由なれども、先きに案內したる順路の門より入るを便とす。

▲學校生徒の入場者

千葉縣高等女學校生徒の入場問題が動機となりて、東京府管内學校生徒は團體にて一定の日を限り無料入場を許し、他府縣の分は同様半額を以て觀覽せしむることに決定せり。

▲女子職業學校の出品

一ツ橋の女子職業學校にては牡丹、菊、薔薇、藤、其他千種の造花を盛つたる花籠と、菊花の縫ある屏風を出品したり、殊に造花は同校の特色にて、北門内の造花會社出品と相並んで博覽會内奕觀の一對。

▲植物温室の珍花

第一會場の植物温室には酒井伯の出品せる蘭植物科四十一鉢の珍花及小石川植物園より出品せるもの等數種類を陳列し、其他桃、李桃等の開花せるものあり、紅白爛漫として美を競へり。

▲教育學藝品

一號館の教育學藝品陳列中理科博物標本など宛然實物かと怪まるゝもの少からず、殊に一般觀覽者の注意を惹くものは、アルコール漬と、模型標本との見分けもつかず「二子の産れる時はあんなものでせふか」「此月足らずの子供は丸で本物の様ですね」と囁き居るを聞きたり。引き續き陳列せるは、玩具遊戯品にして、人形、馬、面等無雜作に陳列されたれど、具に見れば皆念の入つたる美術的細工品なり、要するに此の邊は現今教育學藝の進歩を代表せるものとして、一般觀覽者に多大の利益を與へたるは出品者の手柄と謂ふべし。

▲オーターシユート

舟辷りは辨天橋より十五間南に當り、池中に突堤を造ること三十間位、高四十五尺の由にて之れも四月十五日頃には出來上るべしと。

▲觀覽車の心得

博覽會にては下足料は無論なきも、自轉車、ステツキ、包物等を携ふるときは、それぐ携帶品預り所に預け置くべし、其賃は自轉車五錢其他は二錢なり、又場内の空中觀覽車に乘るには料金十五錢を要し、公衆便所の外は二錢の料金を取らるゝ事と承知すべし。

▲會場附近の旅館

博覽會々場を中心とせる上野停車場前、廣小路、本郷附近旅人宿兼高等下宿は晝なしにて一泊上等一圓二十錢中等八十五錢並等五十五錢位にて一週間以上滯在の客には多少の割引ある由、前記の外安旅人宿にては一泊三十錢位の所ありとも云へど、却て、泥棒等の恐れもあれば中以上の旅館に泊る方安全なり。

▲評判のもの

珍らしき出品を數ふれば數限りもなけれど、第一は前の征夷大將軍德川慶喜公の揮毫せられたる「東京博覽會」の扁額也、建物の一等大きなのは第一號館、一等長いと云はれたものでは不忍池に架せらるゝ觀月橋、一等高い物は空中觀覽車、一等愉快なるものは舟辷り。



鯉の料理法

淺草山谷町　重箱主人

▼美味を有する鯉▲

◎同じ鯉でも、産地によつて、夫々味ひが異なつて居るもので、非常に美味いのもあれば、不味いのもあります。が素人方では、まだ料理をせぬ前に、一見して夫れを鑑別すると云ふことは、難かしい。

◎如何なる鯉が美味であるかと云ふに、先づ外形から申せば、背の色が淺黄がゝつて居て、腹の色が眞白で而して腹の肉が厚くて、全體が稍扁平たく、能く肥滿つて居る鯉なら、屹度美味です。

◎斯う云ふ鯉ですと、肉の色が純白で、之れを庖丁して、湯煮をして見ると、少しも其汁が濁りません。然るに不味い鯉になりますと、肉の色が赤くて、湯煮を爲ると、忽ち其汁が濁つて仕舞ひます。

▼料理法のいろ〳〵▲

◎鯉の料理は、洗ひ、泥龜煮、濃醬、生作り、亂切り煮などで、他の魚類は大抵燒肴にもしますが、鯉に限つて、昔から燒肴にしないものです。夫れは昔武士が切腹する時にのみ鯉を燒肴にしたとか云ふことで、夫れからして燒くのを不吉として、一般に忌だのでありませう。

◎鯉を庖丁する時には、脊を自分の方に向け、腹を向ふにして、尾の方から切りはじめるのです。所で素人方は動もすると鯉の膽を切つて大失策をすることがあります。彼れは非常に苦いものですから、下手をすると、肉に苦味を移して仕方がなくなります。

◎其苦いものを安全に取るには、如何したら可いかと云ふに、水の中に入れて拔くに限ります。苦いものゝある所は、前のあふり（腹部上方の鰭）の眞中でして庖丁に熟練した者ならば、夫れに障らない樣に腹を開

けて、指で拔きますが、素人方は先づ頭を切落し、水に入れて其切口から徐かに拔けば先づ無事で、假令誤つて潰しても、水の中ですから直ぐに洗落せば、肉に苦味の移る虞はありません。

◎洗ひかたは大抵な方が御存じでせうが、先づ鱗を去つて、三枚に卸し、皮を離して、頭の方を手前にし、右側の肉を切る時には、手前へ庖丁を引き、左側を切る時には反對に向ふへ庖丁を使ふ。斯うすると肉が崩れないで容易く切れます。それから其切つた肉を、金氣のある井戸水で洗ふと、よくはせます。それを今度は淸らかな水で能く洗つて、器に盛り、また皮は熱湯に浸けて、直ちに引揚げ、それを能く手で揉んで洗ひ二分位宛に切つて添へるのです。

◎鯉濃醤――御承知の如く、味噌汁で、味噌は並の赤味噌で宜しいですが、薄くこしらへるには、八丁味噌を使ひます。鯉は先づ鱗を引いて、今も申しました通り腹を割き、臓物を取出して、それから厚さ六分位宛に切り、味噌汁に入れて煮るのです。頭が浮上れば、夫れが煮えた證據ですから、乃で膳に上せて可いですが、鯉濃醤は、成るべく長く煮た方がよろしいのです。

◎泥鼈煮――これは、私の處の名物の泥鼈と同じ樣に鯉を煮るから、斯う云ふ名を附けたもので、先づ鱗を引き去り、臓物を取つて、それが四百目位の鯉なら十三位の數に筒切りにし、それから鍋に入れて、味醂と醤油とで煮詰めるのですが、味醂の分量は、五百目の鯉とすれば、先づ五合程の割合で、醤油は味醂を加へて煮詰めたものを使ふのです。

◎亂切り煮――と云ふは、非常に美味いものですが、其代り手數が掛かつて、面倒臭い料理です。實は私も此料理を知りませんでしたが、お得意先から特に御誂へがあつたので、其節茶の宗匠に就いて教はりました。これは大きな鯉を撰んで、三枚に卸し、充分に水氣を切つて、胡麻の油で揚げると、肉が縮れて骨の尖が現はれます。乃で骨を一本宛鑷で拔取り、更に鍋に入れ、味醂で先づ煮て、それから醤油を加へ、泥鼈煮よりも甘い位にするのです。

◎生作り——これは、庖丁に餘程熟練した者でなくては出來ませんから、素人方には難かしうございます。之れは片身を生作りにするので、一旦客に出して引下げ、更に其片身を荒煮に爲て出すが御馳走なのですが、實際は然う云ふ工合に早速の間に合ひませんから、別の鯉を煮て出さなければなりません。すると、二尾の鯉を用意せねばならぬ譯でして、之れは好奇に近い料理です。

◎鯉の料理法は、以上述べました如くで、私共には別に秘傳も秘訣もありません。旨く出來ると出來ないとは、全く經驗の如何に因るので、料理の方法は書いた物を見ても、話に聞いても、實地に當つて經驗を積まなければ、到底腹に入るものではありません。ですから私共も、自家の子供に向つて、先づ日常のお惣菜を調理へて見る、其經驗を積めは、自然と煮炙の加減なり鹽梅なりが分つて來るから、と常々申して居ることです。



養魚場の鯉は、總じて脂肪に富んで居りまし、之れは食物の故でありませうが、料理にするには成るべく脂肪の少ないのが、美味く喰べられます。天然産殊に河流に育つた鯉は、概して脂肪が少ない方ですが、料理にするには却つてよいのです。



流行の花見小袖

流行子

時節柄の花見小袖と云つた所で、棠の一本で見るやうに、櫻樹と烟樹へ小袖幕を打巡らすの、仕立卸しの新調小袖を花の雨に濡すなど云ふ、贅澤は有繫に出來ないとしても嗜好は往時に劣らず、知名な呉服店では其の注文で、縫工が忙殺されて居るとやらまづ流行の一斑は

△江戸褄と小紋

元祿模樣桃山模樣の隆盛期は旣に去り、新たに社會で歡迎されつゝある新流行は、相變らず華美を衒ふ傾向となつて居て、年若の新婦人さんや令孃向きは江戸褄模樣、稍年長た御婦人に變り小紋、併し其の江戸褄も多いに改良を加え、從前のやうに縱褄と前巾のみでは、後の方が寂しいとて昨今では、褄模樣を前巾より後巾へ掛て配置するやうになり、之を換言したら江戸褄と裾模樣の折衷と見て克い、之を新たに名命したら

△變則江戸褄模樣

とも稱すべきでせうが、單に褄模樣の改良のみでは趣味に乏しく、模樣其の物へ新意匠を凝し、從來のやうな白拔きを嫌つて地色、則ち地質の染色と反對した樸素な色を、配合する事が流行となつて來ましたが、此變り色の褄模樣の特色は、先づ遠見では判然と華美に見え、近寄ると樸素になるのですから年長た方が召ても克い、恁う云ふ按排に遠目の利く模樣なので、夜會などには尤も適して居る、然ば華美を好む此花見小袖には、變則江戸褄が多いとやらだ、夫から之に次の流行の兆は變り小紋である、

△變り小紋とは何？

元來小紋と云つたら呉服屋や京染紺屋には、小紋帳の備へ付けがあつて、其の中から選擇したものですが、今日では普通の小紋では觀客に滿足を與える事が出來ぬ、所で變り小紋と云ふ新意匠を凝すやうになり、變り小紋の嗜好者が增殖するの傾向となつた、けれども其の變り小紋と云つた所で嶄新と慢る程でもなく、普通小紋の或る點へ變化を來したに過ぎぬ、先づ一例としたら霰小紋を繼ぎ合せ、碁盤目の線を太くして見たら、拍子木絣をブツ違ひに變更させるなどである、如上

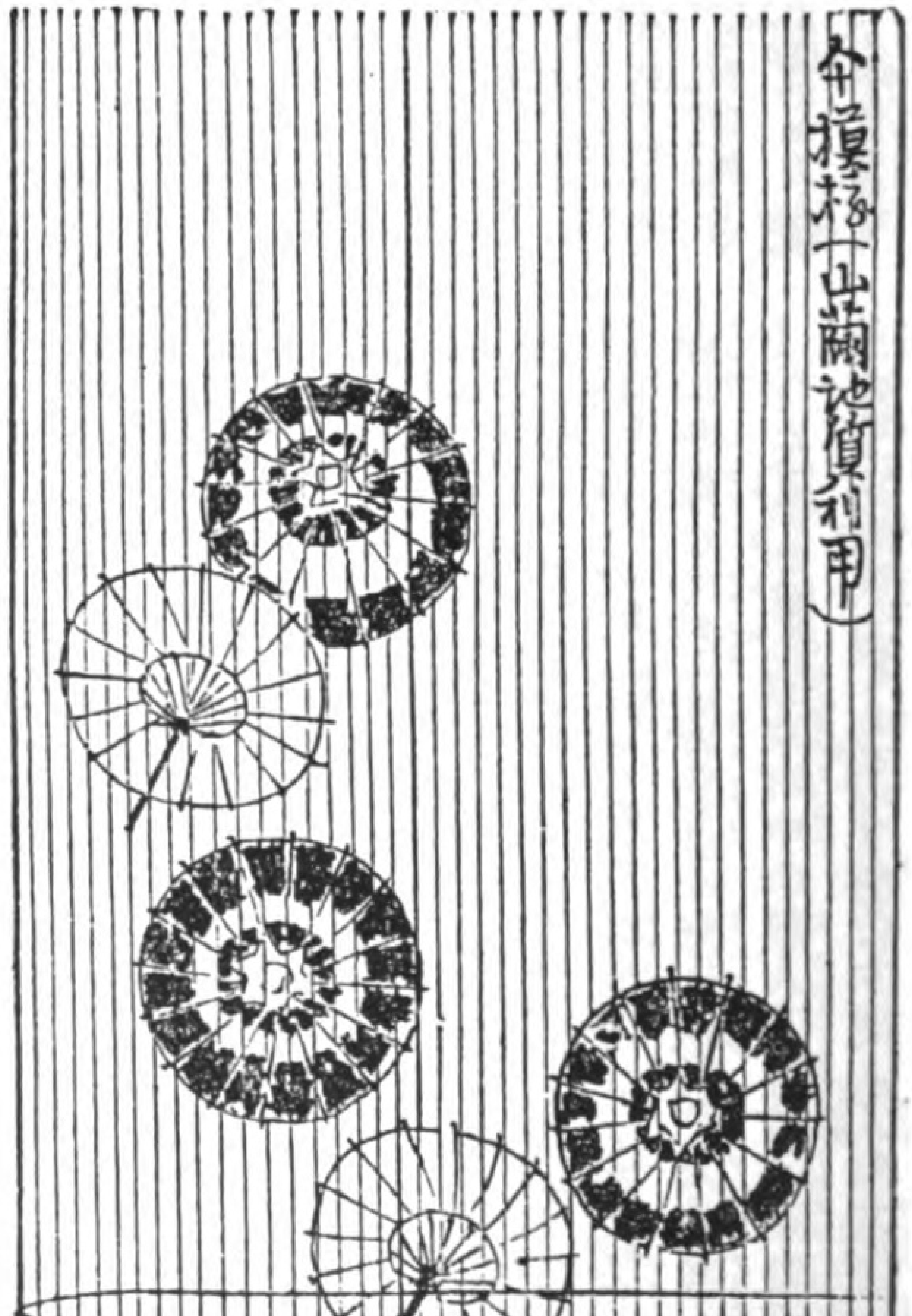
の江戸褄模様や小紋の地質は、過年無地お召に限られて居るのだが江戸褄を流行の山繭お召に染たら、尤も粋な二枚袷が造られるのである、

△自然的の地模様

地質を山繭お召として金通しや大名、偖ては薩摩縞のやうな柄を見立て、夫へ季節の草花等を模様とするのだが、花見小袖には花菖蒲、牡丹、破れ傘櫻の落花のやうな類で之を裾模様とすれば山繭の織縞が發輝して、宛ら雨のやうに見えて自然的の地模様となり、模様の草花は雨中にあるが如くで活躍し、所謂粋で高尙と云ふ衣となるのだ、のみならず無地お召とは違ひ極らぬから、花見小袖に適すと云ふので、三越吳服店の如きは此種の注文が多いとやら

△縞お召より山繭

殊更に縞お召を嗜好せずとも山繭お召には、織出しの縞があるから之を流行色に染め、色糸で縫紋でもしたら禮服ともなり、又は遊山着にもなるから、山繭お召の需用が頓に盛んで來るのですが、此山繭お召へ



意匠を加へた橋本お召と云ふのがある、橋本お召は吉野織のやうな地質で、其の横糸に山繭が織込んであるから、太陽の光線に由つては横縞ともなれば、又縦縞ともなると云ふ趣味を有して居る、二枚袷などには尤も適當した地質で、嶄新の流行品の中へ算へられつゝあるのです、

△絞り縫と縫紋

流行は文字の如く壹十年一日の如くならんやで、地質染色の變化に

伴なはつて、模樣も時々に異なつて來るもの、昨年流行と目されて居るのは當時に遡り、一斑に縫模樣と云ふ趨勢である、けれど其の模樣も單純な物では嗜好に適せず、總ての要求が濃厚主義となつて來て、封建時代に奥女中等が被つたと云ふ、裲襠模樣と當世風に擬し、縫箔—友禪—絞り染の三種を配合した模樣が則ち流行摸樣となつて居るのだが、最近の所では絞り縫と云ふのが呼び聲高く、絞り縫とは無地お召へ友模樣を絞り染として其の輪廓を色糸で縫箔をするのだから、緻密な模樣はなく

絞り縫模樣



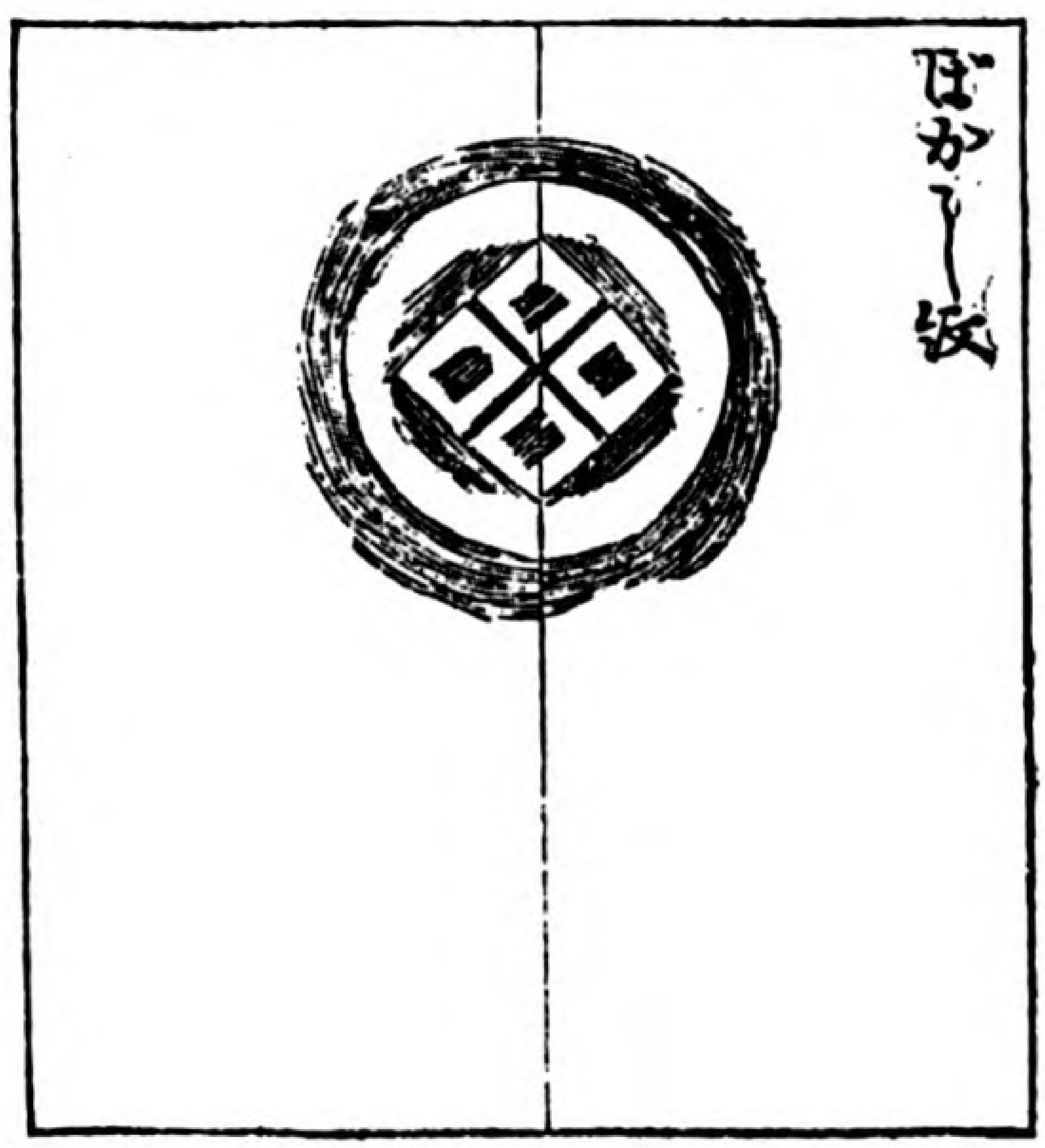
孰れも光琳風に限られて居る夫に縫紋は

△ぼかし縫が流行

の光である、暈し縫は天明時代の遺物を三越呉服店で再興させ、目下花柳社會では頻りと暈し紋を珍重がつて居るから、近き將來には一派の流行となるには違ひない、所で暈し紋と普通縫紋の差であるが、暈し紋は在來の縫紋と反對に紋を地質で顯し、紋の周圍を蛇腹縫とするのだから、朧夜の月影のやうに紋がクッキリと出て、周圍がボッと暈されて一寸風流な者だ、此暈し縫は地質と同じ色糸に限られるさうな、

△地質と染色

お召縮緬の種類は澤山あれど、需用の多いのは相變らず無地お召、之に次ぐのが紋御召等で、流行品と目されて居るのが山繭お召と、新機の橋本お召であるさうだ、乃で染色



はオリブ代赭の時代も去り春衣裳から藍氣の勝た染色となつて來たが、袷着は一層色の淡い藍鼠な、物でお納戸—寂お納戸、藍氣鼠のやうな嗜好だが、年齡に由つて藍氣に紅の混つた、鳩羽鼠—桔梗色と云ふやうになる、兎に角流行色の中心は藍色となつて居る、

△帶と襦袢

袷着には羽織を餘りお召にならないから、勢ひ帶の新調を選擇する

のであるが　生暖かい風が吹く季節だから帯も肉の厚い、厚板織繻珍緞子と云ふ側より、寧ろ塩瀬の染帯と云ふ形勢で、染色の流行は白茶—金茶—利久鼠となり、衣類の藍気に配色の克いやう帯は茶掛つた色を嗜好す、其の帯も無地では索漠過ぎるとて、例の縫模様を置くやうになつて居る、襦袢は友禅染よりは紋羽二重の、絞り染が昨今の流行となつて居るのであります。

貴婦人の装飾品

觀風子

▲和洋両装の装飾品

先づ和装の場合には、櫛、笄、釵、帯留など、また儀式禮典に際して、洋装した時には、洋式の髪飾、腕環、ブローチなどが必要であります。其他の指環だの、懐中時計だのは、和洋両装共に用ゐらるゝものであります。で此二品の装身具は、中流以下の婦人にも澤山持人がありますし、櫛、笄、簪、帯留等の如きは品質の如何は別として、何人も持つて居るものですが洋式の装身具となると、主に貴婦人社會のもので、中流以下の婦人に、之れを持つて居る人は甚だ稀であります。それゆえ、東京市中の婦人用装飾品販賣店でも、前記の様な洋風の装身具を賣る店は、天賞堂とか、大西白牡丹とか、丸嘉とか、玉寶堂とか云ふ様な屈指の家を除いては、他に賣つて居る店は殆んど皆無と云つても差支へない位なものであります。

▲和洋装身具の價

洋式の装身具は、總じて貴金属に寶石を鏤めたものであるだけに、價も從つて一體に貴い。殊に寶石もダイヤモンドの善良なものを擇ぶと、非常に高價で、一個のブローチを求むるにも、何千圓と云ふ大金を投せねばなりませぬ。和装用の装身具となると、贅を盡したと云つても、左程の高價を要しませぬ。尤も婚禮用の櫛笄は、案外高價なもので、之れには金銀珠玉等は一切用ゐないで、單に無地鼈甲のみで製するものであるが、品質を充分に吟味して造らせると、數百圓を擲たねばならぬと云ふ事です。

▲静子姫殿下の御装飾品

此程御輿入遊ばされた久邇宮多嘉王妃静子姫が、御婚儀のさい買上になつた櫛は、儀式櫛の半京形無地鼈甲で、對の御笄は、松竹梅の兩花附き、同じく鼈甲の御前挿、後挿は、菊に蝶々と鶴龜の花附きで、誠に美事の御品であると承りました。また御帶留は、菊水の彫刻にダイヤ入りの金物附き、御指環は、菊の彫刻にダイヤ入り、御襟留と御釵とは、ダイヤとルビー入りで、何れも今回御用になつたとの事。

▲有栖川宮妃殿下

數々の美事なる御装飾品を御所持遊ばさるゝが、其中にも別けて愛でたき御品は、洋風の御装飾で、之れは星形にダイヤ入りであると承りました。

▲北白川宮大妃殿下

同殿下にも、星形にダイヤ入りの御髪飾を御着け遊ばし、また御腕環も寶石入りの結構な御品であると承はつて居ります。

▲小松宮大妃殿下

同殿下には。寶玉類の中にも、眞珠は餘りお好みでないさうで、何の御装飾品にも、眞珠は一切お用ひになりませぬ。數々の和洋装飾品を御所持遊ばすが、中にも、殊に愛でたきは櫻にダイヤ入りの御首飾だそうです。

▲山階宮妃殿下

花形にダイヤ入りの御腕環を折々御着け遊ばされ、其他種々の貴重なる御装飾品を御所持遊ばされるが、其中にもダイヤと眞珠とを鏤めた御襟留は、別けて結構な所品であると承はりました。

▲華頂宮妃殿下

妃殿下の御首飾と申すは、頗る結構なもので、ダイヤ入り八角形の提物に、サフヤ入りの鎖と、眞珠つなぎの紐附き、其他御腕環、御襟留なども、ダイヤや眞珠

入りの美事な御品を數々御所持遊ばさると。

▲山內侯爵夫人

伏見宮家より御降嫁遊ばされた御方で御婚儀の際にも、種々の結構な御裝飾品をお求めになりましたが、其中にも半京形の御櫛笄は、非常に美事なもので、一揃ひの價が六百五十圓との事。各種の美術品が大層お好きで、種々の結構なる製作品をお求めになるさうです。其中にも裝身具は、毎日出入りの商人に御注文になりますが、ダイヤだのルビーだの云ふ樣な寶石入りの指環の如きは、幾個あるか知れない程でありますし、櫛笄、釵、帶留なども、美事ださうです。近頃お求めになつた裝飾品も尠なくないが、就中百合花にダイヤ入りと、月形にダイヤ入りと、櫻草にダイヤ入りの帶留兼用の釵などは、特別のお好みで、大層立派なものださうです。また腕環も數ある中で、星印にダイヤ、ルビー、眞珠を箝入したものは、殊に美事で、之れは侯爵が軍人であるから、特に好んで星印に作らせられたさうです。

●お伽倶樂部の大會●

眞谷さん久留島さん達の御儘ふしになつたお伽倶樂部は丁度先月が一週年の紀念會で例により神田の青年會館で開演がありました始めに婦人音樂隊のお伽の唱歌それから祝文などありまして勇ましい江見さんの「船乘の決鬪」といふ御話があり、それから眞谷さんの「世界お伽ばなし」これが滅法界もなくおもしろい物で皆さん大喜び大喝采、それから狂言の靱猿、おしまいに餘興の「羊の天下」といふお伽芝居がありました、これは小羊が母羊の留主中狼に喰はれて仕舞ひ母親が歸つて來て悲しみ歎く愁嘆の處ろからまもなく狼は慾深の腹を裂かれて仇をうたれ、そこで呑まれた小羊は皆無事に飛び出すといふ實におもしろい趣向悲しみもあり喜びもあるお伽芝居、少年少女半日のお娯みとして此上もないよい會合でありました、さて本月の例會は第三の土曜日です。



婚姻の媒介

堀内新泉

歐米諸國では、男女の間に立つて、媒介を業とする會社が成立して居るさうだが、我が國には未だこの事なく、男女緣談の媒介と云へば、主に知己朋友の間に於いて、この大切なお役目に當ることに成つて居る。

媒介者の任務は實に大切なもので、謂はゞ神樣の代理をやるのだから、この任務に當る人は、重大なる注意を拂つて着手らなければならぬ。媒介者の任務を以て、何故神樣の代理だと云ふと、これは神業であつて、決して人間業でない。重言すれば、世は萬事人意ばかりでは行かぬと云ふ、中にも殊にこの事ばかりは、人意丈では決して行かぬ。神秘的に云へば、神の使命に接しなければ、首尾好く本意を果すことは出來ぬと、この事に關係つたことのある人は、誰れも皆左樣いふ。

我が聞き及ぶ所に據つて二三の實例を擧げて見れば、その知己の間に於いて、喩へば甲の家では、我が息子の爲に切りに嫁を搜して居るところが、又乙の家には妙齡の好い娘があつて、早く何處へか嫁に遣りたいものだと、これも切りに良緣を求めて居る。これは妙だ、早く橋渡しをして、双方に滿足を與へようと云ふので、早速

△緣談の口

を開いて見ると、この度の我が任務にして、暗に神の使命を受けたものでないと云ふと、それは近頃耳寄りの話だと云つて、双方共に初めは笑顏を以て膝を前めて來ても、その中に何か故障が起つて來て、第三者の目から見れば、いかにも良緣のように見えても、終に美しい玻璃の玉の破れたような結果に成つて、殘念ながらお別れに成るような事になる。何時もこんな事ばかりだと云ふと、誰れも緣談などに口を出す人は無くなる譯だが、世は決してそんなに色氣のないものでな

い。前のような張合のない事があると思ふと、また實に一種不思議な事もある。若しその縁談にして、我れその媒介の勞を執ることを、神に使命されたものであると、喩へば男の方は臺灣の生れで、女の方は樺太もの、自分は以上の男女に對して、眞個の昨今の知合の間でも、つい

△串談半分

に口を切つたのが、おそるべき威力を有つ導火に成つて、謂はゞ夢心地で媒介の勞を執つた位のことで、圖らず好個の新夫婦を造り出し、十五夜お月さんより末始終眞圓く行くこともある。それかと思うと、一方からは、是非貴方の御盡力でと云つて頼まれても、さて一方に持込んで見ると、何うも御親切さまに有難う存じます、いづれ親戚共にも篤と相談して見ました上でと云つた切りで、濡れた手毬を見たように、いく度突いても叩いても機勢んで來ないばかりで無く、天神さまのお腹の物を見たように、いゝ、そりきりになるのもある。けれどもこれ位な事で、千變萬化、妙不可思議ずくめの世の中は、決して失望してはならぬ。また或る場合には一人の人から、甲の家の娘を、乙の家の子息に是非媒介して貰ひたいと頼まれる。ところが双方共に、中々苦情の多い家で、



△第三者

の目から見た時は、この縁談到底も芽出たい結果を得さうにもない。と考へられるので、折角の御依頼ですが、手前は口を利くことが不調法ですから、これは何うか他の然るべきお仁に御相談を願ひたひと、言葉に艶を附けて斷る。所がその時の我れにして、はや神の使命を受けて居ると、容易に其處が脱けられぬ。それでは何うもと諦めて、一度はその儘引取つても、おもひ直して又來たり、毎度御邪魔を致して相濟みませんが、他には何うも心當りがありませんので、過日御依賴の一條、何うか狂げて御承知を願ひたいと來る。左樣ですなと長い返事をして居る中に、双方の事を考へて見れば、所詮纏まりさうにも思へないので、毎度御足勞を煩はして相濟みませんが、これは何うか是非他のお方にと云つて又斷る。何うしても御承知下さいませんかなと云つて、眉間に皺を持つて歸る。先ア好かつたと思ふ間もなく、また恐れ入つて遣つて來る。また斷る。また來る。また逃げる。その中にそんな事は、何處の家でもあること、主人持て餘して細君に相談して見る。と、何がさてお易いことゝ云ふように細君は微笑を漏らし、良人さう御苦勞遊ばしても、この事ばかりは又別物でございますよ、何も御縁次第ちやアありませんか、それ程までにお賴みなさるのなら、兎に角一度お遣りなすつて御覧なさいましな、纏まらなかつた所で元々ちやアありませんか、人は

△一生の間に

三度は必ず媒介をするものだと云ひますから、うまく行けば一つ役目の減る譯ちやございませんか。ちやア初めから駄目だと思つて遣つて見ようか。それは不信切です、乾度出來るものだと思し召して一番遣つて御覧なさいましなどゝ云ふ話から、フト一時の出來心で、恐々着手して見ると、案じるよりも產むが易しで、これは案外、イヤ此方も待つて居りました、イヤ此方も望む所ですと速に埒が開き、スグ最う結納の交換、今夜は既に御婚禮、オヤ最う歸事、ナニ最う昨夜赤ン坊がと云ふような事もあるといふ。而て見れば、個中

の神秘的消息は、敢て人意を以て猜し得る所にあらず、また人爲を以てこれを左右する事能はず、即ち、媒介は神の使命なりと云はねばならぬ。神の使命を果すには、總ての點に亘つて、大慈大悲、清淨潔白の心懸を以て、この大任に當らなければ成らぬ。即ち個中に人間の私意私慾を挿んでは、我れ人として、實に怖るべき一大罪惡を犯すことに成る。いふまでも無く結婚は人生の大禮にして、人間一生世を幸福に送り得ると否とは實にこゝに起因するのである。此處に好個の伉儷成立すれば、その夫婦は、生涯、世を幸福に送ることが出來るが、これに反して、若しその一を誤まれば、一は終生人生の至貴至高なる幸福に接する事が出來ないのだ。換言すれば、人生に於ける地獄極樂の分岐點は、結婚その物に在ると云はねばならぬ。されば、我れ若し正直に神の使命を奉じて、こゝに媒介の勞を執り、好個の伉儷を成立させて、夫婦に人生の至貴至高なる幸福を與ふることが出來ようなら、世にこれ程の慈善事業はない代りに、萬一、これに反して、我が任務を忽にし、その當を誤まる時は、世にこれ程の罪惡はあるまい。さればこの任務に當る人は、先づ



△媒介の目的

は何であるかと云ふことを、篤と承知してかゝらねばならぬ。さらば媒介の目的は何かと云ふと、最も

△尊敬すべき慈善事業

を行るのである。即ち、我れは今、神さまの代理を遣るのだといふ覺悟を以て當らねば、到底も完然にこの目的を達することは出來ぬ。

△質問に答ふ

「呪はれたる女」一度び出でゝ計らずも著者身上の穿鑿に物議を生じ、諸方よりやかましき質問十數通に及べり、一々お答せんは煩はしけれど、世間に疑を同ふする方も多からんと思へば聊かこの誌上を借りて辯ずること爾り。（編者）

言ふまでもなく「元祿姉さん」は婦人におはせり、編者の知れる限りに於て此の方は婦人が受くべき最高等の教育を受けられたる方、而かも才情双絕の淑女におはせり、是れ爭ふべからざる事實也。

抑も文章は性情の發露なり、一度其の文を讀めば其の作者の男女の孰れなるかを知るに於て敢て餘師を要ぜざるものなり、彼の文章を本讀して男子の作となすが如きは平素文章の何物たるを知らざる昧者の言のみ採るに足らず。

然るに世上に群疑を生ずる此の如きは何故ぞ、畢竟は署名の語弊に拘泥したる故ならん、世に「姉さん」といふ語極めて鄙俗なり、苟くも筆を持てる人、其雅號を撰むに當ツてこの鄙俗を敢てす、是れ婦人の爲し能はざる處ろなりと誤解の原因果してこゝに在りとせんか、吾人は今更世の見解の極めて狹隘なるに驚ろくのみ

問者の中に松ケ枝女史といふ人あり、姉さんは花柳界の人なるかとの質問、これは聊か序文が累を成したるものとおもへば改めてお答申さん、著者は決してそんな穢がらはしき者にあらず、一考しても見玉ふべし、當今の世如何に成金黨が跋扈する様になりたりとてまだ花柳の巷に斯る大天才の埋もれ居らんとは、極端の臆像も程のあつたものなり、それは廣い世の中の事です、千人萬人の藝娼妓の中には偶に手蹟の立派な者はあらう、英語の饒舌れる者もあらう、併し斯學彼れの如き、妙文彼れの如き、讀書萬卷彼れの如き、眼中奇山なき彼れの如きが、歌吹界裡に埋もれ居らん事は斷じてあるまじき事なり。

次に神田の吉永生といふ人あり、姉さんは金屋の阿嬌かとの質問、これも又松ケ枝女史と同じ疑ひ、飛でもない誤想と申すの外なし

本郷KM生、並に横濱川村氏は姉さんの本名と寫眞と筆蹟とを示せとの注文若しそれが出來れば、ソッだとの御申越なれども御求には應じ難し、但し筆蹟は女史の許可を得遂て揭載すべし

高橋猛夫といふ人、著者眞に女ならば予は結婚を申込む云々とあり、虛喝とおもへば答へず。

甚だしきは本局郵便局の消印ある無名人より髯もぢや〳〵の井上秋劍を西施浴後の美人だなどゝ詐はりて廣告せる著者云々との投書ありたりこれに對しては我輩只啞然として言ふ處ろを知らざるのみ

其他「著者の本名を名乘れ」、「寫眞を見せ」、「化けの皮をヒン剝いてやらん」など暴言を以て充されたるもの數通あり、どうも飛んだ筆禍を買いたるものかな

重ねて言ふ、元祿姉さんは婦人です而かも都下にて最高等の教育を受けられた天才の一佳人なることは牡丹餠大の判を捺して保證します、この外に幾百通の質問が來てももう答へませぬ。



與謝野晶子選

（天）

ひとり居の夕ぐれ悲し山の家母あるそらに鐘ひびく時　美作　性全みね代

（地）

春の朝鐘つき終へて尼の君きざはし下りぬしら藤の花　伊賀　山村すみれ

（人）

あらし山さくらちりうく紫の水にさをさしくだりけるかな　播磨　森　かつ子

（佳作）

野も山もわが家も神のみやしろも霞こめけりうす紅に　周防　身弘すみ子

ひがし山紅にほふ朝雲の下にならびぬ塔と御堂と　信濃　松井澄子

打ち向ふおもひも消し白妙の雪の峯より日ののぼるなれ　熊本　大野君子

春風は比良より吹きてあふみのやさざ波白く湖あけぬ　越後　坪井わか子

佐保姫の織りし錦の上に居ぬ歌ふて来ます君まつ人は　紀伊　佐田柳子

水もなき空に波立つここちして八重ざくらちる夕ぐれの風　韓国　桑原てる子

京人の小琴きこえて東山さくらに春の月のぼりけり　尾張　清水みさを

遠い代も神代もおぼゆあけぼのに梅の花ちる水清き里　仁川　芥川ちよ

木蓮の一もと立ちていと白しくるるともなき桃の林に　肥後　安田文子

園の梅雪の中より花さきぬ二月はうれし日ごと琴ひく　出雲　しら菊

塔の澤湯の香よろしきおばしまの外面しづかに春の雨ふる　長崎　佐田秀子

羽衣の松美くしく影おちぬ雨ののちなる春の夜の月　駿河　喜代子

うらめしき夢見てさめし黒髪はいかが結ばむゆく春の人　青森　三浦愛子

木曾の山道ゆきなやむ老馬をむち打つ人をうとましう見ぬ　盛岡　芝内かをる

春姫の乗ります舟かしら雲は桃の林の上にただよふ　兵庫　大内八重子

しら梅の一もとまじる木立かな吹く風さむききさらぎの山　大阪　秀子

圓山の美くしき灯のかずかずをなかむる人に春の雨ふる　甲斐　中川安子

春風に黒髪なびけうたひける人をしのびぬ花ちる夕　陸前　大和田たか子

舞扇させば花ちる洛西のお室の寺のむらさきの幕　東京　いく子

たわたわともつれてなびく青柳に香油のごとくそそぐ春雨　岩代　菅野和子

四月きぬ鎌倉山のあや雲につつまれたまふ盧遮那佛かな　佐賀　松本ふゑ

いつとてもみ空にあれど春の月かすめば近きここちこそすれ　播磨　きぬ子

老松も小松の磯もかきくらし見かへりすれば春雨ぞふる　伊豆　山崎くま子

野や山や花にくらすとうたふ子は春の女神の愛子なるらめ　東京　しづ子

おもしろく岩にただよふさざ波の上にあるなり春の夜の月　備後　伊倉田鶴子

霞こめ神代に似たる野邊ながら赤裳たれひく少女子のなき　東京　菊地きよ子

君が家琴のしらべの床しさにそとあはせ見ぬ牧の草笛　伊勢・佐々木らく子

山かをる春のひと夜の夢に見ぬわがなつかしむ京の山々　北海道　杉山清子

春風や花にわかれて花にあふ旅うれしけれ伊勢路近江路　備後　立神峯子

ましろなる鳩の羽風に山ざくらみだれてちりぬ廣庭にして　兵庫　きん子

わが家や吉備の國なる片里は山吹さきぬ水のほとりに　岡山　田上濱子

春の雨隣の人の京語りきかむを袖をぬらしつつきぬ　京都　中西正子

わが軒の紫の藤ちりそめて夕ぐれさむし春の山かせ　筑前　木村富

旅にして都戀しき人の爲なくとなつかしうぐひすの聲　東京　村田しん子

春立し七里が濱はしづかなる波よる方に海士の子の居ぬ　相模　鎌倉の里女

わが宿の五もと柳いとたれぬやどりに來ずや春のもも鳥　東京　村田しん子

山の路雨にぬれ行くやせ馬のかげ見て泣きぬ秋の日にして　相模　森戸濱子

そほぬれて美くしき子はかへりきぬ桃の花ちる雨の夕ぐれ　丹後　佐々木さく子

衣がへ袂のたけをつめよとも一人の君のの給ふものか　美濃　傍島敏子

君とわれ云はず語らず相ゐみて相むかひ居ぬ春風の家　越前　島萬壽子

山のはの霞も雲とほのぼのと櫻いろしぬ夜あけなむとす　君代　遠藤郎子

神のごと眠れる兒の頬の上に春風きたり花ふらしけり　備後　重政久子

紅とうす紫の朝雲につづきて靑き春のうなはら　周防　佐々木いつ子

俯に口紅さしてうた聞かば君がみ歌をまなぶなるべし　和泉　中川かう子

春の晝たわたわとして黄金羽の小蝶まひより牡丹くづれぬ　佐賀　富岡よね子

われここに死なば死ぬべし深山路のかすみの中の花の一むら　岩代　岸野常子

弟ら麥笛ふきて遊ぶ野に遠山見つつ歌おもふかな　下野　森てるの

ほのぼのと春の日のぼる海原の遠にぞ神はありと思ひぬ　東京　村田しん子

くさぐさの花は咲けども春の家君いまさずて琴にちりおく　鳥取　橋本鈴子

琴とれば雨の名殘の風ふきて梅が香すなりわがかくれ家に　東京　井上きよ

山の路千尋の谷の底に見るふもとの里のしら梅の村　松山　佐伯友枝

野も山も川も綠の色さへぬ梅の木梢にうぐひすの來て　群馬　河村さかえ

おぼろ夜をあくがれいでし洛外の柳の間より京の鐘きく　常陸　三浦愛子

花はちり鶯いにぬ今かくていづち行くらむ春の姫神　東京　佐藤皓子

吉野川ながれに近き裾山に小雨ふりしきしら梅のちる　大和　森田まつゑ

いつく島潮みちくれば姫神の宮居は天にあるここちして　伊賀　泉たき子

春雨に梅の花がさおとしけむ亂聲すなり軒のうぐひす　伊勢　森田のぶ子

春と秋夏と冬とのをりをりに人の訪ひきぬ山の一つ家　美濃　西村久子

少女子は霞にくれてたたずみぬさくらちりしく川そひの里　姫路　町田英子

ほのぼのと櫻にほひて紫の横雲なびく山の上かな　群馬　宮入よし

山ざくらそよ風吹きてちりにけりなつかしけれどさびしき夕　東京　智惠子

きさらぎの片われ月のなつかしう軒にかをりぬしら梅の花　上野　宮内りき子

人おもふわが戶の外の花の香もうちしめりつつ春雨のふる
前橋　副島すゑ子

おぼろ夜に花の下道ゆきかひぬ雲に入りたるここちおぼえて
東京　重子

小雨なる春の夕の窓によりちる花見ればうちなげかる
和泉　水郡くの子

朝ぼらけしら梅咲けるわが家も紅梅の家も皆うつくしき
尾張　柴田しな子

春の晝わが織る機のしろたての絹の上にぞ蝶とびてくる
香川　吉田ます子

ふるさとの家のうしろの竹林くちし井筒に春雨ぞふる
京都　砂川澄子

わがならす琴のしらべにさそはれて今日めづらしく鶯の啼く
美濃　井川松枝子

少女子は昨日の雛の夢や見るともし灯おきぬ緋桃のまどに
兵庫　柳田白百合

知らねどもゑみてもの云ふ君を見ぬ菫花さく春の野にして
能登　栗倉董子

山ざくら樂の音につれ羅陵王立ち舞ふ袖を美くしと見き
岩代　齋藤巴子

しら梅を折らむとすれば花ちりぬ竹の林に鶯啼く日
東京　榛山きみ子

松をいでて見れば磯邊のしら砂につづきて霞む春の海づら
熊本　大野君子

世に出でむねがひまたなしわれたりぬ深山の里の春の夜の月
磐城　猪股よし子

ふる里の人におくらむ歌かきぬ一人ながむる五月雨の家
伊賀　山村りやう

年ふれば色うつろひぬ梅の花植えにし君をわれ忘れぬに
東京　羽田豊子

目とづればなつかし人の面かげはうかび來ぬれどさびしき夕
群馬　かな江

おぼろ夜の月と夜のまの春雨にはぐくまれけむ青柳の糸
上野　増田たみ

うぐひすのこゑおもしろきふしごとに濃染と白の梅のちるかな
東京　加藤溫子

上京の風は寒しや冬の宿加茂の川原に千鳥しばなく
東京　萩とき子

梅もなき竹の中なる家ながら三月こしと鶯啼きぬ
信濃　島池やす子

山ざくら白きが上にほのにほふ吉野の里の春の夜の月
下野　栗原くに子

野のかなた牛かふ子らの姉や織る桃さく家をもるる梭の音
美濃　片田美濃子

山ざくら地主權現のみやしろをほのにつつみぬ清水あたり
京都　幽子

いもうとの文の中なる封じ花いくひらちりぬ蝶のごとくに
紀伊　山口としゑ

ゆく春やわが古さとの野の川にやつれし戀の面うつすかな
東京　原やすの

少女子はつなぎて旅の子にやりぬ小蟹二つを赤き糸して
大阪　吉野ひさ子

遠つ親の御墓のさくらはらはらと少女にちりぬ春の夕ぐれ
東京　平塚白百合

まろうどと舟して居りぬきさらぎや汀の梅のちるを見つつも
東京　相良百合子

君きませ若草しきて花よそひうぐひす姫は野にぞ遊べる
武藏　青柳彌生子

ふるさとやわが祖母君は杖つきて迎へたまひぬ靑麥の路
長門　三宅良子

春の日を溪にたちます石佛とふ人なしにさくら花ちる
伊豫　渡邊梅子

東山まろく美くし加茂川の岸の柳の糸にかかりて
近江　藤野久子

牛に乘る童とともに笛ふきぬ梅咲く里の夕ぐれの道
兵庫　山村順子

花となり艸とかはりてさまざまに夢の輪めぐるおもかげの君
山口　佐々木綾子

文士

デモ文士悄然として友人に向ひ「死んだ阿爺が、文士にだけはなりて呉れるなと、賴むやうに云つたけが、噫、噫。」
友人「君寧う心配するには及ばんよ、君はまだ文士と云ふ者にはなりはしないのだから。」

短　文　◎印は入賞

◎第二の母樣

筑後　きち子

この母樣は私に智を下さいました同情も敎へて下さいました慈愛も植へて下さいました目的もさがして下さいました、これから私の報恩のばんでありますこの親切な第二の母樣は私が厩になつた先　生であります第一の母樣は私にからだを下さいました私には父樣がありません。

◎我が弟

島根　道子

今年六つの我が弟は小さな棺の内に安らかにさめぬ眠につきました。せめての心やりと持たせて送つたのは病中もそばを離さなかつた武者繪の凧。

今宵月明りに辿りきて未だ盛もかはかぬ本塔婆の下に瞑目した時何處よりか幽に聞ゆる凧のうなりの聲あゝ心の迷ひでせうか。

◎姿の生活

群馬　やよい

山の中の田舍だとておさげすみ遊ばすな此處にも平和の春はありまする村の敎師の妻だとてお笑ひ遊ばすな眞の慰安もありまするダイヤの指環はあらずとも黄金の響はあらずとも絨の着物に赤たすき棒持つ身に幸の光りはありまする朝には茅の軒端にかまどの煙たなびく時とびたつ雀の羽風にハラ〳〵とこぼれた南天の實を餌とや思ひてかけよる鶏のいじらしさ私はコト〳〵とこなたへよびて餌を與へまする夕べには紅梅薫る窓の邊に根組るミシンの音休めて姑君の枕元に時の茶屋の婆さんに借りた譯談物を讀んできかして上げますを無上の樂しみとして居られます斯くしてこゝに一年只の一度も姑君のいやなお顏遊ばした事なく時としては留守は私がする程に村の芝居に……と……あ・私は涙の出る程嬉しいので御座いまする。

◎斷腸

神戸　稻葉しげ子

時は如月の中旬人は觀梅杯とそはつくの樓妾には只一人の今年十四歳の妹が日々弱り行く病氣に心傷めつゝ幵が病床の枕邊に看護して居ると今迄眠つて居た妹は去年の觀梅の事でも夢見たのであらふ突然姉さんと呼んで而して今年の梅花は乍殘念得見ぬが其代り櫻花の頃には快くなつて倶々樂しく花見を仕樣と語り出でた……嗚呼悲しい哉此時は既に醫師より最早一週間とは保たぬと斷言して居たのであつた。

春の女神

新潟　古澤ふさ子

梅香る小島が磯の一つ家に暫し春宵の夢にふけりし我は軒下洗ふ東風に、驚き覺めて庭に出ぬ、見れば、其岡に、けぶる青柳の下に、小さき船繋れぬ、あゝ此詩的なる捨小船、春の女神の乘りて來ませしものか、時しも現れて一群の白蝶恰も翅ふが如くヒラ〳〵と、舞を奏しぬ、

妹

下野　野尻よし子

今日は丁度證書授與式で私の妹（今度尋三になる年は九歳名は春）は母

上に色々仕度のご厄介になつて朝早く學校へまゐりました、今年も何かお褒美を頂いて喜びを増すだらうと 母上と共に学種をこしらへながら今や遲しと待ちに待つてゐました 軈て妹が門の方より大聲をあげて泣き〳〵歸つて來たのには實に驚きました、私は近寄る妹を慰めんとて不圖重げなる左の袂を見やうとする刹那妹が泣き眞似なのですよと取り出す褒狀とお褒美、母の喜び、妹の喜び……

評、諧謔な少女。

◎短　文

小石川　廣守千能子

四十年來苦樂を倶にした婆に逝かれた作爺は流がにめそ〳〵泣きはしなかつたが、妙な淋しい顏して居た、婆さア、遂々永眠したゞとつぶやいてふと見上げた檐の梢には、鳥が一羽、弔ふかの樣に泣いた。蜜の樣な戀の甘言に醉ふた昔を思ひ出してか、かすかな笑が皺枯れた、口元に……俺も追付逝くだから……こづゑには一としきり、友よぶのか鳥が啼き立てた、

花見歸り

備後　立神峰子

花見せし一日の興に、笑ひ、さゞめき諸ひつゝ春月淡き夕の道に、瓢を買ふ者、花をかざす若者、酩酊たる影を家路にぞ運ぶ、衣袂のかほりを家苞にして。

屑糸織

愛知　小栗幸子

毎日一寸二寸の屑糸や拔糸を拾つては繋いで溜て居ました 今日で丁度

七年、驚きましたこと此大きな箱一ぱいになりましたので、小さいから僅かだとてあなどれぬことを感じました、そして私は之で常着な一枚縫ることにしました、あゝ塵も積れば山となります。

卒業

丹波　みどり子

月日の小車はめぐり〳〵て五とせの春秋もいつの間にやら過ぎ去りて寄宿舍の生活もはやこよいにて終らんとす。けふしも師の君より卒業のしるし文を給はりしかば 明日ははや遠く故郷に歸りてなつかしき父母にまみゆるなり、げに戀しくもしたはしきは古郷なり、なよやかなる柳は清き小川に影をうつし四方の山の端に花の雲かくろ櫻花若草もゆる野邊のすみれいかにやさしき 色香ならん偲へばなつかし古郷の空あすは此なつかしき古郷に歸り行かんとす、おもへばうれしきかなうれしきかな

褒美

岩代　池上喜和子

二度も落第した近所の腕白息子、或日、先生に懇々喩されてから非常の勉強家になり、今年の授與式に一等賞を貰つていそ〳〵と歸つて來ました。指折りかぞへて彼の成人を待つ、たつた、ひとりの母は、マアどんなに喜んだでせう。

昨夜の火事

埼玉　森野櫻子

枕にひゞく半鐘の音に、私は吃驚して皆々を起し、戸おし開けば、火は

西北の天に濁り折柄の強風に、火焔四方に蔓延がる、其凄じさ、火の子はどん〳〵とんでくる、消防夫の火事よ〳〵と呼ぶ聲、さあ宅でも大騒ぎ、下女はもう無中になつて水を汲む、爺やは其れをどん〳〵運ぶ、兄様は家根の上で火の子を消す、母様は見舞に來る人々に、一々挨拶して居なさる、弟はあまりあはてたので羽織りを、ひつくりかへしに着て駈け廻るやら、ころぶやらそれは大騒ぎ、私は何してよいか只無中、其中大火事に散らずして消止たのは何より嬉しかつた。

春雨

下野　橋本壽子

今朝より降りだした雨は未だ止みません、人は能く秋が悲しいと云へますが、私は又、この春雨が悲しいのです。今より五年前(私が十二の時)恰度今日の樣にシト〳〵と、降る雨の日でした、二月初旬不圖引きこみし風邪の、いよ〳〵重りて遂に私等姉妹を殘して阿母樣は……　ア、臺所で繼母樣の聲が……姉樣が叱られたのだろうか？日は黄昏れて雨はシャ〳〵と止みそうもない、噫、今夜も降るのだろうか？

二時から三時まで

丹波　ゆたか

もはや二時。長い〳〵冬の夜時計の音許り數へて、お歸りの遲い夫を待つ。書見の頭も重う、編物する手もいつしかやんで、あらぬ思ひは胸の中をゆきゝする。たまらなくなつて机の上にうつ臥した、有丈の涙しぼり、やがて頭もたげて顔ぬぐふと、同時に三時の音、とたんに暗をやぶる足音。それよと急ぎ出迎ふると共に、また新なる涙はとめどもなくわきいでゝ、はや堪へがたく、覺へず夫の胸にそゝいだ。あゝかゝる時の心中また誰か知るものぞ。

花の散る頃

丹波　岡島とし

都は花のまさかりでせう。上野の清水のあたり夕ぐれ心ありげに散るけしき私は大好きでございましたがこの花の散る頃はいつも〳〵悲い事が出來ます。一昨年は花と共に學業を終へて嬉しかつたもゆめの間、夜半の嵐に一月たゝぬ中母上は散る花と共に空しうなられました。昨年は親しい友と同じ嘆をいたしまして　同時に都をすてゝこの田舎に境遇も又變りました今年はどんな事があるのやら、處女時代と約婚時代と主婦時代とどんな樣に花の散り方がちがふでせうか。

貧しいために

栃木　玉野とし子

風もないのに庭の櫻がこぼれまして、春とはいひ何となく物思はるゝ日のことでございました、今年首席で尋常科を卒業いたしましたお隣のしげちやんが他家へ子守りに行くことになり、暇乞ひに來て呉れましたのは……。

可憐なる早蕨

伊勢　神田麗子

野山の若草漸く二寸ばかり芽を出しぬ、燒あとの黒土が新緑よりも目立て居る。愛らしき姿の蕨はすらりと立ち並んで居る。

何處から折り取ろうか折角生い立たこの罪のない然も可憐な優しい植物を。なゝ手を合して救を乞ふ樣な此の蕨なんでむざ〳〵折る事が出來よう。人はいざ妾は到底折るに忍びない。あゝ可憐なる早蕨よ！。

梅さく宿

陶　　子

爲替金を受取りに郵便局へと急ぐ途中、えならぬかほりのいぶかしとみまわせば、くずれかゝりし垣根より枝さし出せし梅の老木、今しも花はまつさかり鶯のなく音さへほのかにきこえる、あはれ住む人や誰と俗なる用事はしばしわすれて。

風前の燈火

山梨　望月すわの

花子は本年六歳で犬が大好きで先日もお隣りから二十日計前に生れた犬を一匹貰つて名をポチと呼んで每日貝ふたり抱いたりして遊んで居たが二三日前よりポチは乳も呑まず御飯も食はず只寢てばかり居るので花子は病氣と悟り大切にして居りますが今はもう「風前の燈火」同樣で花子の泣く時ももう近いでせう。

▲

中込　平塚白百合

雨がスッカリ上つて天地は甦つたやうな淸々し朝後園にゆくと何の影もないきらきら光る雫は蕊から蕊、蕊から葉、葉から葉と傳つてスルりと若草に消えた、葉洩の旭は金色をゆらめかし葉は青々とやはらかであるこんな朝育つたのであろう。

▲

芝區　新野琴枝子

今は昔白雲のたなびく様に咲きみちし花の木の間にほゝ笑めるに月に向かひて年間ひし月は昔の月、花も昔の花ながら變はる浮世のさてもうたてき母なき後の母として育まれし婦を去にし年花散る夕散り行く花に誘はれて不歸の客となり殘るは遺愛の琴一面、ありし昔の偲ばれて拙き調の一節も去りにし人を偲ぶらん悲しき色に音立つる、吁此の音の主は今何地に如何にこの糸の色を聞ますか嗚呼思ひ多き春の夜や。

野遊び

金澤　岡崎とら子

花曇りせる日のいと暖く山の端めぐる、霞の深くたれ込めて、遠の、景色の定かならず、霞ふかき彼方、雲雀の春の歌、長閑に聞ゆ、すみれ、たんぽゝ、れんげ、の咲く畔、菜の花麥の間を縫ひて一しきり摘草せる妾、可愛き妹の手を取りて、菜花咲き匂ふ、田の畔に、腰打ちかけぬ、何時しかつかれの覺えげん、妹の妾の膝に、すやすやと、罪なき眠りに入りぬ。吹く春風に温き呼吸かよはせて。

雨中の花

岩代　菅野ひろ子

海棠は化粧した芳ちやん（妹の名）が泣いた時のやう、山吹は母樣が此春病氣で臥つて居らした時のやう、牡丹は父樣が醉つて他愛なくなられた

時のやう、梨の花は姉さんが未亡人と呼ばれるやうになつて切髪の姿になられた時のやう、櫻は兄様が戰死されたやうに潔く散つて居る。

さくら蔭

石狩 初子

朧月のうつすりと匂ふ春の夕、老櫻の根本に身を寄せて何やら深き思ひに耽り給ふ姉上、突とより添て問て見ようかと思つたが何となく心の引かれて猶ほ椽の柱にもたれた儘、淡い月の光りにすかして熟と瞶た、折相誘ふ春風に盛りの櫻花惜く舞ひ散る、身動もせで振仰で被在た姉様は微に身慄ひ遊て、花にも似しお顔は長いお袖におほはれた。

春のたのしみ

名古屋 文子

春の夜名殘りなしくあけはなれて花の木末にさへずる百鳥の聲どことはなくきこへる庭の長閑なるにもよほされて意の胸のおのずから狂ひ出でつゝ里近き野邊にぞ立つに青麥の畑に風渡りて緑の波を起し菜の花の黄金を布きて人の目を奪ふ雲雀は空に入りて囀り蝶は花に迷うてたはむるなどあるは彼方此方のつゝみにはあまたの乙女等樂しげに若菜を摘みはやし春の日をも短しと思へる中に打ちまじりてあくがれ遊ぶは樂しとも樂しき限りにこそ。

花につけて

尾張 經子

今朝花壇の春雨をしよんぼり浴びてほゝ笑みし櫻のいと憐れにもまた懐かしう覺えしかば手折て花瓶に挿しぬ。

あはれ妾が亡き祖母君の居ませし頃は此美はしき花とともに〳〵愛でられしものを今は幽明所の異るを如何にせん、せめてはと花の雫を硯に得てありし昔を偲ぶ巳が心のたけを紙にうつして此花と共に手向ぬ。

玉(猫の名)

栃木 柴山武子

風なきに一ひら三ひら散る花を、蝶と思へてか玉は走り出で、上へ下へ右へ左へと飛びまわり、戯むるも暫時の間、疲れたる身は花を枕に睡りして、やがて眼の前に舞ふ眞の蝶を知らざりき。

▲

河内 陰山醒子

私は閑靜な所か大好きです、閑靜の中にも水の音なぞを聞きなり〳〵鳥の聲の聞え来る風通りのよい室、そして光線のいゝ山間ー云はゞ月が瀬のやうな所に一生を暮したら、どんなに氣持がいゝでせう？ア、毎日梅を友にして私は暮し度と思つて居ります!!!

我が家

京都 波多野松枝

父は區役所に兄さまは小學教師次の兄は郵便局妾は店員弟は美術學校妹は看護婦志願亡くなつた姉様は法學士の妻君だつた逝つた母さまは國語科で中等教師でしたけれど？



結婚道しるべ

▲本欄は便宜的に結婚の紹介をなす▲申込者は求婚の希望を詳記して博文館女學世界交信部宛送らるべし▲申込者は成るべく最近撮影の寫眞を添付するを例とす▲住所姓名番地職業を確實に記さゞるものは取扱はず▲照會者は通信料として三錢切手三枚を送らるべし▲寫眞を望む方は切手貳拾錢を送らるべし

(1)年廿三容貌普通勳八等を有する海軍々人にして、目下舞鶴軍港にあり、實家は農業、多少財產あり、(風給年六十圓)身元相當にして、離縁に逢したる淑女を求む、(但中年間文通交際の上)(舞鶴の求婚者)

(2)年廿四小學敎員血正身體將来中學敎員の目的確實の男あり同年輩の高等女學校出身の處女と結婚したし但し結婚後は月俸十六圓にて小學敎員に取立つべし(北海男子)

(3)年廿三血正容貌普通體格健全なる普通學卒業の淑女あり中尉以上の軍人にやりたし(田舍娘)

(4)地方資產家にて財產一萬五千圓ある家の娘(年廿七高等女學校卒業以上)軍人、官吏、實業家若くは銀行會社員の内にて確實なる人を養子に求む年齡卅才以上(播州廷未町)

(5)血正門閥家の娘年廿容貌並財產は田五町あり高等女學校卒業後目下諸藝修業中學士若くは相當の人と文通の上結婚したし(河内八尾)

(6)大阪の住人實業商(金鵄勳章を有する下士)町家の娘にて、十九歲以上女學校卒業程度の處女を求む但し文通交際の上(大阪住人)

(7)銀行員年三十血正體健の男あり相當の學問ある女にて共稼ぎを希望する人を求む、但し年の若きを望む(濱町の天國)

(8)年廿七大阪の技藝學校卒業、府立醫學校產婆部卒業の女あり、醫師又は會社員の方に行きたし、但し子なければ再婚も不苦、(大阪京町堀)

(9)年廿二女學校卒業藥局に經驗ある女、現今產婆開業中醫師の許に嫁きたし、但し子なければ再婚不苦(大阪京町堀)

(10)年廿一容貌並體健普通敎育あり看護學習得の女、醫師又は銀行會社員へやりたし、本人は目下從事中にあり、實家は醫者なり寫眞あり(彰化)

(11)布哇在住の人敎育に從事す(年廿八、月收六十圓)年廿五以下克己心ある女敎員の資格あるものを求む、(布哇生)

(12)在米農業家年廿三將來大農の希望あり普通敎育以上の人と約婚したし、(在米クルーゲル)

(18)年廿三目下專門學校に在り詩的生活を望む淑女と結婚したし、(京都香川生)

(14)在米年廿三農園の支配人にて將來有望なり英語の出來る十八才以下の淑女と約婚したし但一年間文通交際の上(在米國、M生)

(15)年廿三女學校卒業容貌並の初婚者、商工官吏會社員の内、將來有望の人と結婚したし、(九州光登)

(16)年廿血正、目下高等學校に在學中財產中等の男あり、女學校卒業の年十八の淑女を求む但し修業中なれば多少の補助をするもよし、(福岡井上)

(17)在米年三十六血統正無系累、元會社員二年前渡米成功す、官吏又は士族の家庭に育ちし二十歲位の體格健全品格ある淑女を求む但し結婚後補助として每月十五圓送る渡米の際は渡航費、仕度料を送る、(北米成功生)

(18)年廿四、生地九州高等商業學校二年修業後渡米し幾多辛苦を忍びて今や成功の途につけり、多少敎育ある女にて意志最も鞏固、將來夫の事業を助けんとする夏婦を求む、但し約婚成立後の渡米は海陸一等旅客として要する凡ての旅費を送遣す、(在米獨立生)

◎前號結婚道しるべ案内中貰ひ度き方の十七番目(芝の未婚者)の住所姓名内々にて直參交信所へ御報知を乞ふ

謎々

◎印は入賞五十銭

「信玄袋」、「田舎者の都見物」、「乞食の花見」、「権利株」とかけて、

▲田舎……亂世の英雄と解く、心は所々の名將（名所）を尋れて見る（奇抜） 大和 杉井千代子

▲信玄……秘密の話と解く、心は堅く口をしめて洩れぬようにする 千葉 倉知 芳枝

◎権利……ガスの拔けた風船と解く、心はだんだんに下る 東京 若尾 ふさ

◎乞食……かざり樽と解く、心は菰をかぶつて人目を引く 滋賀 藤野ひさ子

▲権利……百姓家の御馳走と解く、心は菜（名）ばかり 東京 立石 靜子

◎田舎……女學生の妊娠と解く、心は呆れるの外なし 駿河 大村 菊子

▲乞食……立派な廣告と解く、心は人が目をつける 上毛 田所きよし

▲権利……夏の果物屋と解く、心は瓜（賣）が多い 福島 村井 むら

▲権利……拍子木と解く、心は堅ければよい音（値）がする 岐阜 西村 久子

▲田舎……子供を愛する祖父母と解く、心はまご〱（孫々） 野邊地 中市 てる

評に曰大分疑義ですこと

▲信玄……女學生の困窮と解く、心は式部苦勞（四季袋） 大阪 河合 愛子

これもあまり上出來ぢやないが

▲権利……將棋の歩と解く、心は旨く行けば成金になる 岡山 林 かなる

▲田舎……駄馬と解く、心は馬子（まご）つく 北海道 黑澤すみ子

▲田舎……豊作と解く、心は實取れる（見とれる） 周防 星出 孝子

評 巧ならねど輕妙だ

▲乞食……歌人の宇宙觀と解く、心は天は菰でも地は菰 山梨 土屋美喜乃

評に曰くあまり考すぎました

▲田舎……八人乘合船と解く、心はあちらへ四人（よつたり）こちらへ四人（よつたり） 大阪 井上 政子

評に曰く隨分苦しいですな

▲権利……人魚の好餌と解く、心は代議士は釣れる 岡山 井口 竹子

▲乞食……酒屋の看板と解く、心は菰冠つて居る 神戸 稻葉しげ子

▲信玄……汽車旅行の荷物と解く、心は手荷物（手に持つ） 周防 星島 秀子

▲権利……生魚の行商と解く、心は朝買つて晝に賣る 東濃 丹羽 やす

評 まあ無難でせう

▲乞食……千代萩の若殿と解く、心は食はずに見て居る 大阪 田中やす子

▲田舎……呉服屋の女客と解く、心は眼のまはる程彼方此方を見る 越中 内田 新子

▲田舎……江の島の裏と解く、心は案内が付く 橫濱 齋藤いと子

▲乞食……植木屋の手入と解く、心は植（飢ゑ）ながら花を見る 武藏 戸田 やす

▲権利……醤油製造所と解く、心は菜（名）ばかりでもうける 小石川 山田千代子

◎乞食……親の死にぎわと解く、心は子も來て（菰着て）見る（妙） 大阪 公文 榮子

▲田舎……フートボールと解く、心は玉蹴る（たまげる）（輕調） 神戸 後藤 濱子

◎田舎……小野の道風の圖と解く、心は買はず（蛙）に見とれてゐる（絶妙） 栃木 長澤こう子

▲権利……花火の筒と解く、心はだん〱に下る 東京 平岩 外江

▲信玄……「小ハセ」と解く、心は足袋（旅）に必要 大阪 中西 琴枝

▲権利……將棋の歩と解く、心は成金になるの

謎　京都　波多野松枝

▲田舍……此頃の會社軍事と解く、心はこゝかしこに立つ　京都　笠岡茂登子

▲信玄……神樂と解く、心は笛も這入れば太鼓も這入る　東京　百合子

來月の課題

△流行衣裳とかけて

△蠶とかけて

△博覽會とかけて

ものはづくし　◎印は入賞三十錢

長くて短きもの

▲電話交換所　下野　遠江穣子

▲山陽道の海岸線　山口　中山秀子

▲どもりの一口噺　筑後　篠倉八重子

▲活動寫眞　小樽　久々津きん

◎朝の夢　麻布　池田ゆり子

▲月を落さんとて子供等が持出した竿　京都　藤田靜枝

▲戀の道中　神戸　松本まつ枝

▲年の暮の思ひ　羽前　谷山たに子

◎汽車で行く道　長崎　今村光子

◎語り明した冬の夜　大阪　落合はな子

▲花を待つ日と質する月　甲斐　土屋美喜乃

▲過ぎし一年　岐阜　酒井とみ子

▲朝日に寫る影　岐阜　中島清子

◎嫌人の訪問時間　紀伊　黒柳三千

▲人の一生　同案八十三名

親みがたきもの

▲うちまた膏藥の人　越前　赤井とり

▲無教育の人　筑後　野本辰子

▲水と油　麴町　黒川はまえ

▲口數多き女房　筑後　篠倉八重子

▲秘密を守らぬ人　下野　郷間やす子

▲新任官吏の奥様御機嫌　米澤　我彦及い子

▲新來の教師と在來の教師　神田　中村喜美子

▲陰險な目付の人　鳥取　榎本鈴子

◎他人の陰口をするもの　韓國　中尾つや

▲嚴格な人　備後　和田喜久子

▲とげのある花　磐城　しらうめ

▲意地惡き小姑　岐阜　高木庫

▲氣のあはぬ友　河内　岡本津や子

▲切口上の御客様　信濃　松井すみ子

▲人の惡評をする人　奈良　吉村八重子

▲威嚴ある美人　京都　砂川澄子

◎一家の主婦となりて後の親舊

▲二口目には金貸し給へと云ふ人　奈良　毛利きよの

◎旅館のともし火　伊豫　谷川末津子

▲素封家のお嬢さん　千葉　倉知芳枝

▲裁判官に犯罪人　本郷　松井ゆう子

▲心の合はぬ人　安藝　菅糸香

　　　　　　　　　尾張　氷室つれ子

きり〳〵したもの

▲車井戸で水汲む音　周防　中山秀子

◎案山子の持た風車　兵庫　高谷正賀

▲姑が嫁を責める時の言葉　長野　中野よし子

▲氣短き人のこゝろ　大阪　木村かれ子

▲鋸の目立　東京　ひめ白ゆり

▲螺旋形の階段　鳥取　中島よしな

▲花嫁の洗濯姿　山形　朝香せい

▲奥齒の痛み　河内　陰山れい子

▲腹痛　北海道　香村貞子

◎薄情の人の貸金請求　群馬　田所きよし

▲軍隊の紀律　仁川　掛橋鄰子

▲年末の金の催促　信州　田中さく子

▲遠足の出立姿　京都　廣澤滋子

▲目はしの利いた用達　神奈川　松尾あき子

▲口惜しき時の齒噛み　下總　石川きみ子

來月の課題

△二度見られぬもの
△氣の利かぬもの
△身にしみるもの

（是れは女學世界四月號の讀物中より撰む）

一口噺 ◎印入賞五十錢

◎毛生藥　名古屋　後藤かなえ

妹「毛生藥を指で附けたら指の先へ毛が生へて氣味が惡いでせうね、姉「そんなら竹の先で附ければ好い毛が生へて筆になるよ、（輕妙）

▲復習　越前　新保　静子

父「なぜ歸つて復習をしないのだ」、子「デモ修身書に復習は惡しき事なり」と書いてありました、

◎蓄音機　北海道　黒澤すみ子

田舍者初めて蓄音機を聞き「ナア小さな身體して大きな聲をする奴だなあ、も少し錢を出すから其の箱の中の人間を見せて吳れ、

▲奇聞　神戸　て　る　子

父「太郎ヤソンナに蟲を殺すと今度生れ變る時に蟲になるよ、太郎「そんなら人を殺したら人に生れますか、

▲空氣　本所　筒井よき子

先生「皆さんは空氣といふものを知つて居ますか、一生徒「私はまだ見た事がないから知りません、

▲金貸　下野　海老沼とよ子

金貸が來ると、子供「おつ母さん、お父さんがいつでも裏から逃げだす人が來たよ、

▲唖　丹波　みどり子

唖の眞似する乞食來た箸にてたゝきて食を乞ふ、御飯はないが餅ならあると云へば、唖なりし乞食、突然「餅でもよろしい」と云いしにはあきれたり。

▲桃の實　北海道　工藤すゑ子

姉「坊やそんなに桃の實をたべるとお腹の中に桃の木が生へますよ、坊「姉さんそんなになつたら取りに行かずとも食べられるから都合よくなりますよ、

▲上手　山口　吉田よれ子

先生「運動場で金棒やる生徒に向ひ、君等上手に成らうと思ふなら手の一本や二本折る位でなくつては、生徒「それでも二本も折つたらもう下手にでもやることが出來ますまい、

▲田舍の卒業　山口　實迫あい子

學校の事情に暗き母親に向ひ、娘「お母さん今年私一番になりましたわ」、母「それは何よりよい事れ、そして今年の卒業は何人なの、娘「私と加藤さんと只二人なの」とはづかし相、

▲　周防　進藤　清子

母此の豆腐を御上りよ、子「腐つては居なくつて、母「なぜ、子「デモ豆、腐と書いてあるんだもの、

▲二等と三等　河内　田中入須子

驛夫が田舍者に向ひ「コレ〳〵お前は三等の切符を持て二等の室に乗るとは横着千萬だと咎めた、すると田舍者は「私はそんな事は知らん、夫れならなぜお前さんが案内をして吳れんかと云へば驛夫は「そんな事を敎へずとも入口に書てあるではないかといへば田舍者は平氣な顔して「夫れが讀めるなら間違はない、

▲顔　大阪　み　れ　子

ヘイカラ嬢「ほんとに御母樣は昔の顔だからこまるわ」、母なる人變な顔して「同じじやないか丸髷だつたら」、

▲鼻汁　羽前　戸田　敏子

主人「これ〳〵小僧鼻汁がおわんの中にたれるよ」小僧すまして「これはおつとあまりさむいからあつい汁を食ふたらおなかの氷がとけてながれ出さてたのです

懸賞小說募集

本誌は左の規程により每回懸賞を以て弘く小說を募る

一 枚數二十枚乃至三十枚(二十行二十字を以て一枚とす)

一 原稿總振カナ付の事

一 賞金は掲載せるものに限り左の等級に應じて呈す

一等 貳拾圓

二等 拾　圓

一 原稿は博文館女學世界編輯局宛の事

一 〆切四月三十日限り

選外原稿は著者の希望により返却の求に應ず

但し郵税は自辨の事

第一回當選者

一等 丹波 加藤不二子

二等 大阪 渡邊たみ子

等外 靜　子

等外當選者靜子女史の住所姓名を至急御報知あれ

懸賞美文募集

本誌は左の規程により每回懸賞を以て普く美文を募る

一 美文の種類は廣く天然、人事の各方面に亘り、紀行文、寫生文、日記文、小品文、其他種類の何たるを問はず文章優美にして觀察の奇警なるものを採る

一 枚數は十枚以上二十枚まで(二十行二十字詰を一枚とす)

一 原稿はカナ付の事

一 賞金は掲載せるものに限り左の等級に分ちて呈す

一等 拾　圓

二等 五　圓

一 原稿は博文館女學世界宛の事

一 〆切四月三十日限り

女學世界成功紀念景品附紀念號發售

景品總價額金壹千圓

愛讀諸君へ謹告す

我か女學世界は、去る明治三十四年一月を以て第壹號を發行して以來爰に七星霜、號を重ぬること百回、而して發行部數は年と共に榮へ、以て今日の盛運を觀るに至りしは、偏に讀者諸君眷愛の致す所に外ならずと深く感謝する所なり、就ては聊か御禮の紀念として取敢へず第一回景品附紀念號を發行することゝせり

景品附紀念號には金千圓を以て千個の物品を調達したるものを添ふ其調達の方法其配布の方法並に景品の內容等は、來る四月十五日發行定期增刊「婦人博覽會」誌上並に五月五日發行の本誌に於て發表すべし

人事活斷

記者申す、先月までの活斷家天啓堂氏は滿韓地方漫遊の爲め一時其占を辭されたり、依て今回新に石龍子先生に依賴することに致候、同先生は日本支那の易學は更なり西洋の觀相法并に最近の學說に基ける骨相學、應用心理學等の蘊奧を究められたる方なれば諸子が煩悶の闇を照し悲觀の惑を解かるゝの天使たらんと信ず。

△岡山の修子へ――良人の內地に歸らるゝは今年の秋にして同時に昇進せらるゝの幸運見ゆ、而して貴女の受胎は來年の三月乃至四月、家內藹々として堂に滿つ

△在深婦人へ――卦は小鳥を捕へたる姿にて之を活すと殺すは、其人の心に在り、故に夫の目的を達するも、緣の長く續くも、悉く貴女の誠心如何に在り、子は滿一年の後ならでは無し、生家は倘一層零落して、然る後着々幸運に向ふ。

△午歲伺女へ――弓を持ちて矢を搜せる卦なり、弓は矢を待ちて用を爲し、矢は弓有りての器、されば父上の命令に從ひ幸運の時を待たる可し、到底獨立は不可能の事と諦められよ。

△埋れ木女へ――寶は處々に在るの卦なれども、先づ遠きを捨てゝ近きを取らる可し、故に家事を務めながらの御考至極善し。

△深山木女へ――彈丸四面より雨注せる戰場に臨める兵士の卦なり、一步も退かずに何處までも進んで奮鬪するを可とす、故に結婚は人の言を用ゐず、撰びに撰んで滿二年の後都なる學者の妻となられよ。弟は工業學校の方幸運見ゆ。

△くるしみ女へ――家の內外を清潔に掃除して活花抹茶の風流を樂しまれよ、夫の不品行は何時の間にか止んで貴女の心に適ふ可し。

△北海道浮島千鳥へ――體操或は音樂學校を卒業の上敎育に身を投せらる方誠に宜し、順風に帆を掛けたるが如くトン〳〵拍子に目的を遂せらるなり。

△志賀の小波女へ――陸に近づきて難船せんとするの卦なれば、船に止りて苦しまんよりは寧ろ泳ぎて早く陸につく可し、故に入營中の人と結婚するを辭し、渡

米の途に就かるゝ事兩手を擧げて賛成なり。

△櫻花開待女へ——縺れたる絲を解くの卦なり、急げば急ぐ程亂るゝは必然の理、されば心を靜めて處置せらるゝ可し、二三年の中母上と共に幸運來る。

△貧女へ——物に譬ふれば天然痘に感染して痘痕を除かんとするが如し、故に貴女は何事も諦めて、益々儉約夫の心を柔らぐ可し、時日を經るに從ひ、痘痕否難苦の境遇も薄らぎて、圓滿なる家庭を作らるゝこと疑ひなし。

△南海の老孃へ——親類の勸めらるゝ如く、東京に來り、母上と共に暮さるゝ方大いに善し、婚期の後るゝは心配するに及ばず、二年の中に必ず良偶あり、獨立は甚だ面白からず、何となれば貴女の心は婉曲にして何人も愛するの卦立てばなり。

△松山の親心女へ——本人は身體健全に暮し居れども不幸にして思ふ事齟齬し、遂に音信不通となれるなり然れども目上の人に取立てられて幸運に向ふ卦あれば三年の後自ら便り來ること疑無し。

△尾張の尾上峯子へ——金砂の流るゝ川を渉るの卦なり、仰ぎて歩めば顚き倒るゝ憂あるのみならず、寶を拾ふ能はず、故に己よりも寧ろ目下の分限なる三十歳前後の人と結婚せられたし、職業は商人最も賛成なり。

△迷ひ居る神經質的女へ——貴女は恰も室に咲ける梅の如し、時到らずして咲けるなり、然れども室より出して十分大氣光線に觸れしめ、然る後亦盆梅とせば眞に天色を全うせらる、故に良人と相談の上、姑く上京して別居勉強し、然る後再び琴瑟の交をせられんことを望む。

△木枯冬女へ——貴女の心を折衷すれば必ず幸運來るの卦有り、即ち小學教師を心懸けられ而して後良緣を待たれなば、寶は求めずして來る

△大瀬菊江女へ——貴女は品性高き夫に非れば從ひ兼ぬる卦あるが故に、養子の方との結婚は行末必ず全からず、又思ふ軍人との結婚尚面白からず、されば更に敎育家を撰んで婿君とせらるゝ方宜し。

△畿内願女へ——渡清せざるに先ち實業家と婚約を結

ばるゝ方贊成なり、何事も進んで取るよりは退いて守るを可とするの卦なり。

△十七女へ――これより一歩々々に幸運に向ふ瑞相あり、養子の方は今年暮頃に纏まる可し身體の如何は更に憂ふるに足らず。

△鳥取縣伺生へ――從兄との婚約は活斷上よりも寧ろ衞生上に於て宜しからざる事なれば何とかして辨せらるゝを可とす、然れども其外は何事も父母の言はるゝ儘に從ひ、平和の風に日を送らるれば幸運次第に來るの吉徴見ゆ。

△石田花子へ――之を譬ふれば雪地の筍にて雪の消え次第萌え出づると同じく、貴女も今の中は何事も唯々諾々負けて居られなば、明年中に結婚も調ひ、長へに目出度かる可し。

△心配女へ――河口に土積り水流れざるの卦あり、故に貴女は鬱々閑居即ち不運動ならずして宜しく戶外散歩、精神を愉快ならしむ可し、二三年の中に姙娠疑ひ無し。

△光子女へ――大風起つて塵埃砂石を飛ばすの象あり是を以て考ふるに家に留りて外に出でず、即ち兩親の命に從ひ商人の養子大に可なり。

△ふゆがれ女へ――猫が鼠を捕ふるや否や又他の大なる鼠を見て之を窺ふが如し、宜しく實業家の男子と早々婚約を結び今年の初冬に式を擧げらる可し、夫迄には貴女の身體も大に回復し末樂しき境遇となるゝなり。

△乙女へ――二十四五歲の頃に姙娠無れば三十一二歲に至りて必ず目出度くなる可し、何となれば七の卦あるが故なり。

△春野梅子へ――醫師との結婚早速約を結ぶ可し、此好期を逸すれば再び之に勝るの時來らざる象あり。

△駿河の白梅女へ――家庭見習に行きて、昔を忘れ小心翼々時を待たる可し、三年の中には良緣有りて幸運次第に向ふ

△百合枝女へ――今後四ヶ年の中に人の羨むが如き良緣來る可ければ、虛心平氣職務に熱心なる可し、愈が

ば必ず失敗來るの象あり。

△兵庫花百合女へ‖來年四五月頃に目出度兆あり、精神を愉快にして家庭の圓滿を計らる可し、生兒は二人あり。

△東北の子欲しき女へ━━南虎相闘ふの卦あり、故に貴女は大に柔順を旨とし、何事も背かず從ふやうに致されなば必ず受胎の見込あり、心配に及ばず。

△松江の花女へ━━此の緣組は相方の爲に宜しからず早く父母の許を得て取消さる可し、然れども一徹に事を爲さんとすれば末必ず災來る可し。

△長崎田枝子へ━━幸福は高き處に無くして却て低き處に在り、近々の結婚大に吉兆なり、必ず我身を愼み人を羨み玉ふ勿れ。

△富山縣雪女へ━━甲乙丙三人の中乙なる師範卒業生を迎へらるゝ方が末吉なり、改めて結婚申込まる可し

△遠州心配女へ‖上京の御考へ大に見込あり。然れども志堅固ならざれば、妨害來るの兆あり。

△麹町壽子へ━━如何なる點より年廻りが惡しと言はるゝか一向に分らず、余の占ふ所に依れば、大海に鯨躍るの卦あり、されば其人と結婚せられなば水魚の交り實に目出度かる可し、衛生顧問の糸左近氏の說にも男子年齡の差七年又は八年の相違最も可なりと、而して貴女と其人との差は七年五ヶ月ならずや吉兆此上なし。

△府下の心配次女へ━━今年の冬良緣來らざれば明後年の春になるなり。財產よりも心の品性高き人を撰まれなば年月を經るに從つて幸運頻々來るの兆見ゆ。

△行末のきよい女へ━━方角は敢て惡しきに非れども上京は面白からぬ卦なり、故鄉に止り、實着に家業を務めらるゝ的の方針を取らるゝこと肝要

△諏訪南生へ━━航海業になられたら病氣も大いに全快して幸福多し、凡て精神的の仕事よりも身體的の業を目的とせられよ。

△山田慶子へ‖卦象上にては病氣に非ず、然れども御尋の如く暖國へ移住の義は萬事吉兆見ゆ、御夫婦共に勢を附けて何事も悲觀なさらぬが肝要。

△北海道札幌の伺女へ‖今年の秋末に元通となり、先方幸福となる可し、而して貴女より進まるゝよりも萬事より歸るを尙一層可とす、

△片山里の迷女へ‖姉さんの言はるゝに從ひ、小學敎師希望の方最も適當なるの卦表はる、我意を通せば末面白からず。

五月號記事豫告

每月五日發行

定價表

一册(紙數二百八頁)	…金二十錢
四册(三ヶ月分)	……前金七十五錢
八册(半ヶ年分)	……前金一圓四十五錢
十六册(一ヶ年分)	……前金二圓八十錢
内	〔定刊數……十二册〕 〔増刊四回…一、四、七、十月價格同一〕
郵税	一册 二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	五十八錢	五十錢	四十二錢
半頁(卅二行)	二十圓	十七圓	十四圓五十錢	十二圓
一頁(六十四行)	割引 四十圓	割引 三十三圓	割引 二十八圓	割引 二十三圓

▲等級の位置ハ切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十年四月五日發行 第七卷第五號

編輯兼發行人 松原岩五郎
印刷人 山田英二
印刷所 博文館印刷所 東京市小石川區久堅町百八番地
發行所 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

電話 三百三番 千十八番
本局 二千六百二十番 三千二百二十九番

英語界

創刊以來空前の大好評を博し來りて、今や我が國英語雜誌中の覇を唱へつゝある本誌が、奈何に大に、實用的活用的英語の鼓吹に努力しつゝある乎を知らんと欲せば、請ふ他の滔々たる同種雜誌、又は講義錄類と、彼此對照比較し來つて之を見よ。

（中學四、五年級程度）

▲毎月一回一日發行▲一部郵稅共八錢五厘▲六部同四十九錢▲十二部同九十六錢▲郵劵代用一割增

第二卷第四號（四月一日發行）要目

▲時文註釋……記者
▲英文和譯の心得……高橋五郎
▲實用會話……蜂屋東京英學校長
▲和文英譯……佐久間高師敎授
▲英作文……岡村國民講師
▲英語尺牘……田村學習院講師
▲試驗問題解答……蜂屋可秀

▲發音の話……岡倉高師敎授
▲英文評釋……森一高講師
▲小說譯註……山口學習院敎授
▲雜句註釋……岡村國民講師
▲英語研究餘談……記者
▲「中外英字」を誨ゆ……記者
▲正則英語學校講師月旦……記者

英語之友

（中學二、三年級程度）

▲毎月一回十五日發行▲一部郵稅共五錢五厘▲六部同卅二錢▲十二部同六十二錢▲郵劵代用一割增

本誌は「英語界」主筆、下野新之助氏の執筆になる、初等英語の研究雜誌にして、收むる所

●記者通信●實用會話●手紙の書き方●英文和譯、和文英譯の心得●譯解の栞●世界文豪小傳●日記の書き方●綴りの心得●時文研究●英文法の話●英作文の栞●發音の話●質疑應答●松葉がき等の諸欄あり、皆な材料豐富、記事正確、說明懇切、註解丁寧。在校學生の好伴侶として、自宅獨習者の良師友として眞個、花も實もある東洋唯一の初等實用英語研究雜誌なりとの好評、海の內外を壓して嘖々たり!!!

（第二卷第二號）四月十五日發行、兩誌共、各號重版して既刊の分は何號よりにても取揃へ注文に應ずべし。若し取次店になければ、直接本社へ御注文あれ。）

英語界臨時增刊 **新綠** 五月十五日刊 一部金十七錢 ＝ 英語之友臨時增刊 **若みどり** 五月一日刊 一部十一錢

發行所 東京市牛込區牛込中町五 新綠社

本館發行の圖書雜誌は一切陳列有之候

（縱覽隨意）

博文館
圖書陳列所

東京日本橋區本町三丁目

御來館の方は本町角にて降車三層の洋館目當にて御出被下度候

女（後附の一）

口繪

●日光中禪寺のやしほ（みづゑ）……………丸山晩霞君畫
●眼鏡橋より見たるニコライ堂（鉛筆畫）和田三造君畫

寫眞版

●讀書の人●西行法師の筆蹟●原稿のさま〴〵（山路愛山、大町桂月）●農家（泰西名畫）●詩友諸君の小照●貴婦人の繰糸（泰西名畫）●米國紐育セントラルパーク

第貳巻第四號

文章世界増刊

詩と文

既刊

▲内容　青年文章家の中堅たる投書家諸氏の佳品傑作を紙上に掲載し、宛然百花爛熳たるの趣あり。題目は叙事文抒情文、書簡文、論文、小品文、はがき文、新體詩、漢詩、短歌、俳句、小説等にして、皆現代諸家の嚴密なる選擇と親切丁寧なる批評とを加へたるを以て最も習文の參考書たるに適すべし。

全一冊洋装大判

▲卷頭　文章を作るもの丶爲めに必要なる諸種の文話、解題、材料等を掲ぐ。『明治名作解題』は明治年間に於ける文學的作品に就いて、公平にして親切なる解題を試みて、明治文壇の内容を知るに便ならしめ、『現代文學者小傳』は現今作家數百名の經歷、出身、作品等に就いて詳細なる記述を爲し、まさに是好個の文學者人名辭書にして。文章一家寶庫たらんを期す。

正價廿錢　郵税二錢

本文

●小説……小栗風葉選
●懸賞小説の評……選者
●論文……長谷川天溪選
●叙事文……田山花袋選
●抒情文……西村渚山選
●書簡文……前田木城選
●小品文……長谷川天溪選
●はがき文……前田木城選
●新體詩……蒲原有明選
●和歌……窪田空穗選
●漢詩……岸上質軒選
●俳句……内藤鳴雪選
●課題答案……
●應募畫評……
●文界時報……橋本邦助

東京博文館本町

附録小説

●批評家……正宗白鳥
●母……窪田空穗
●白眼黨……小川未明
●復讐……村山鳥逕
●齲齒……西村渚山

女（後付の二）

醫學博士井上通泰先生監修

全部 完成

家庭衞生叢書

全部十二册洋裝菊判美本〇正價一册貳拾錢郵稅六錢宛

第壹編

口繪 北里、長與、金杉、土肥の四博士（肖像）

▲傳染病の話…北里博士
▲胃の攝生法…長與博士
▲眼科衞生談（第一）…井上博士
▲血族結婚と聾啞との關係…金杉博士
▲淋疾と家庭…土肥博士
雜錄 患者を生じたる時の注意（第一）

第貳編

口繪 宮本學士 木下博士（肖像）

▲腸窒扶斯に就て…宮本學士
▲婦人の衞生一般…木下博士
▲婦人及小兒の眼の衞生…桐淵博士
▲眼科衞生談…井上博士
雜錄…七項

第參編

口繪 三輪、井上、緒方、宮士川四博士（肖像）

▲室內空氣に就て…緒方博士
▲眼科衞生談…井上博士
▲小兒科一般…三輪博士
▲小兒の衞生に就て…弘田博士
▲遺尿症に就て…朝倉博士
雜錄…六項

第四編

口繪 朝倉博士 井上博士（肖像）

▲腸胃の話…井上博士
▲耳の攝生…岡田博士
▲乳兒の衞生に就て…緒方博士
▲狐憑とヒステリーとの關係…吳博士
▲眼鏡の話…井上博士
雜錄…六項

第五編

口繪 三輪博士 岡村博士（肖像）

▲創傷の話…三輪博士
▲神經の攝生に就て…吳博士
▲ヂフテリアの話…宮本學士
▲皮膚の衞生に就て…岡村博士
雜錄 肺結核豫防法…二件

第六編

口繪 大澤博士 三島博士（肖像）

▲ペストの話…宮本學士
●身心の養生…大澤博士
▲家庭に於て注意すべき二三の學校衞生…三島博士
▲產時の創傷傳染…木下博士
雜錄 肺結核雜話…十五件

第七編

口繪 遠山博士 筒井學士（肖像）

▲黴毒に關する家庭の注意…筒井學士
▲家庭と黴菌…遠山博士
▲姙娠中の攝生…緒方博士
▲便祕の話…井上博士
雜錄 花柳病の雜話…十八件

第八編

口繪 木村博士 緒方博士（肖像）

▲婦人姙孕力の話…伊庭博士
▲肝臟の話…木村博士
▲分娩時の攝生…緒方博士
▲色盲の話…井上博士
▲小兒の身體上の監視井
に感冒の話…瀨川博士
雜錄 人工滋養品の話

第九編

口繪 瀨川博士 伊庭博士（肖像）

▲肺癆の話…井上博士
▲婦人姙孕力の話（第二）…伊庭學士
▲小兒の蟲及疳の話…瀨川博士
▲產後の攝生…緒方博士
雜錄…五項

第十編

口繪 林博士（肖像）

▲飲酒血族の退化…林博士
▲不姙症の話…伊庭博士
▲生殖の話…大澤博士
▲消毒法の大意…遠山博士
雜錄…三項

第十一編

口繪 吳博士、楠田謙藏先生（肖像）

▲癲狂村の話（上）…吳博士
▲最適當なる日本婦人の結婚年齡…楠田先生
▲消毒法…遠山博士
▲葡萄酒の話…林博士
雜錄…八項

第十二編

口繪 陸軍々醫監賀古醫學士（肖像）

▲聾啞の話…賀古學士
▲癲狂院村の話（下）…吳博士
▲慢性銅中毒の話…林學士
▲口內衞生に就て二三の注意…石原學士
雜錄 食餌の話
終刊の辭

東京 博文館 本町

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著



家庭百科全書

全部五拾册——每月一回發行——第一巻四月創刊す

和裝頗美本 ◉紙數三百頁 ◉石版彩色口繪一葉、挿畫十數個

▲定價一册金四拾五錢——郵稅八錢

近時婦人敎育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過るか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に敎師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の良妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ことに家庭に敎師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は、最良なる家庭敎師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人敎育の缺點を補はんと欲するなり。

發兌元 東京

（後付の二）

婦女必讀の大全書發行

去れば本書は全部を五十卷と爲し、毎月一卷づゝ、左の諸大家に請ひ、編を逐ふて發刊す。著者は皆な現代婦人教育界に第一流の諸名家にして、各家皆な多年の經驗に徴し、最も實際に適切なる事物を選み、文章は平易流暢を旨とし、之れを讀で趣味多く、記事は明細精確に之を實地に施して遺憾なきを期せらる。幸ひに世上の女流にして、各一本を家庭に備へられんには、恰も常に家庭教師を自家に聘し、日々に起る所の事物に對して、一々指導を受くるに異ならざる裨益あるべきなり。

第一編

新家庭訓

三輪田高等女學校長　三輪田眞佐子女史著

紙數三百頁
石版極彩口繪挿入
挿畫十數個

續刊

四季料理　宮中臣民兩流料理師範　大日本割烹學會々長　石井泰次郎君著

和洋裁縫指南　女子高等師範學校教授　喜多見佐喜子女史著

家政要訣　女子高等師範學校教授　後閑菊野女史著

本町　博文館

(後付の五)

讀賣新聞記者 足立北鴎君序
文學士 大町桂月君序

讀賣新聞記者 田村逆水君著

成功と人格

（既刊）

全一册

洋裝菊判並製
紙數百八拾餘頁
正價參拾五錢
郵税八錢

成功とは何ぞ人格とは何ぞ是れ研究すべき疑問なり顧ふに人、生を天地の間に受く能く其人格の適する所に從ひ其人格を磨き上げ努力して人格の達し得る所まで人格を大たらしめ高からしむれば是れ眞の大成功なり今の世多くは成功を誤解し人格の努力を外にせり此書の記する所實に人格と成功を得るの羅針盤たり志士須らく精讀して飜然自得する所あるべし

京都帝國大學內 自彊會々員共編

學界之先蹤 青年修學指針

全一册

洋裝三六判總クロース
紙數約七百頁
正價金六拾錢
郵税八錢

▲大阪朝日新聞評

本書は京都大學內に組織せられたる自彊會三十有餘名の總掛りにて著はしたる青年學生の就學案內にして案內記と云ふよりは寧ろ三十有餘人の今日迄經由し來りたる學校の告白と見るべく其の書きぶり在來の就學案內風に異りて面白く理論的に書かれたれば讀者には一層興味深く讀過中不知不識益する所多大ならん、只に青年學生のみならず父兄にも一讀を促すべき書と云ふべし。

東京 博文館 本町

女（後付の六）

預言者宮崎虎之助君著 （既刊）



基督觀

全一册 菊判洋裝 紙數三百三十頁

正價四拾錢 郵稅八錢

英雄を知る者は英雄なり、ナポレオンにして始めてアレキサンダーを知ることを得べし、古へ孔夫子は春秋を著はして堯舜文武を知ること、己れの心事の如くに明かなる所以のもの、畢竟聖人の資性相通ずるあるを以てなり、基督耶蘇のバプテスマのヨハネを許するや、アブラハムよりも、モーゼにまさりて大なるものと爲す、ヨハネを知るものはそれ唯基督なるか、然らば則ち千古の偉人基督を知るものは果してそれ誰ぞや、基督教の建てられてより玆に二千年、基督の傳記を書くもの、これが評論を試むるもの幾千万を以て數ふと雖も、天の階して登る能はざる凡庸の蛙見に屬し井底の啣々、豈唯燕雀の鴻鵠に於けるのみならんや、今や時代の希求心に應じて豫言者は出現しぬ、その齎らせる崇高絶大の自覺に照らして基督の眞相を觀ず豫言者の基督觀は古來未だ曾て有らざるところ、その靈眼に映じたる果して如何なる基督なるか、請ふ之をこの書に質せ。

發兌元 東京日本橋本町三丁目 博文館

第二高等學校教授 岡澤鉦太郎先生著

新式 日本文典原理

一名 理論的日本文典

此の書は語想相關の原理を啓發して、言語學界未顯の眞理を發揚し、眞摯なる國語學研究の端を起さむとする空前の理論的日本文典にして、理致周密にして釐毫を忽にせず、秩序整然として大小悉く擧げ、空論に馳せずして學理の堂奥を盡す所、恐らくは廿世紀の劈頭に於ける語學界の奇書として、天下の公評を博すべきものならむ。

東京本町 博文館

全一册洋裝菊判上製金文字入六百頁

正價壹圓五十錢 小包料拾五錢

女（後付の七）


腦病
神經病全治良劑
健腦丸
本劑の赫々たる信認は
世既に定評あり
迷ふ勿れ腦病患者
▲一日早く本劑を服せば。一日早く不快なる病苦を脱して。爽快なる健康を得るのである
▲常に持藥として連服せば。逆上を引下げ。恐るべき腦充血を全治し。中風卒中を未發に防ぎ。記臆力を増進する特効あるは獨り健腦丸のみである
腦病藥の覇王
効能
腦充血
腦膜炎
頭痛
大便秘結
逆上症
中風
卒中
五週分 金貳円
郵稅 十戔
三週分 壹円廿戔
仝 十戔
二週分 八拾五戔
仝 六戔
一週分 四拾五戔
仝 四戔
三日分 貳拾戔
仝 貳戔
一日半 金拾戔
仝 貳戔
本舖 大阪市心齋橋 丹平商會藥房

女學世界
（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）第七巻第五號（明治四十年四月五日發行 毎月一回五日發行）



東京馬喰町
花王石鹸本舗
長瀬富郎製品

（定價金貳拾錢）